

# 鷹ノ巣Ⅲ

-第4次調査の成果-



2018

ひたちなか市  
公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

# 鷹ノ巣Ⅲ

- 第4次調査の成果 -

2018

ひたちなか市  
公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社





鷹ノ巣遺跡全景(北から)



第77号住居跡炭化材出土状況(西から)



## 序 文

ひたちなか市は、茨城県の中央部からやや北東に位置し、県都水戸市に接した那珂川河口部左岸の人口約16万人の街です。

当市は、東京から約110kmの距離にあり、観光スポットである国営ひたち海浜公園、建設中の重要港湾「茨城港常陸那珂港区」、生産量日本一である干しいも、県内有数の那珂湊漁港、電機・機械等の工場群など、農工商がバランスよくそろい将来性が見込まれる街であります。

市域には、太平洋を望む約13kmの海岸線が続き、内陸には那珂川をはじめとした河川が流れ、その流域は原始・古代から人々の生活の場として栄え、3百数十箇所の集落跡・古墳・城館跡などの遺跡が確認されています。

ひたちなか市では、鷹ノ巣遺跡が所在する部田野地区において市営たかのす霊園拡張事業を実施することになり、地区内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて関係諸機関で協議した結果、記録保存の処置が講じられることになりました。

発掘調査は、2005年度と2012年度にも実施し、弥生時代の住居跡から市内で同時期としては初の出土となる58点ものガラス玉や、古墳時代の住居跡から赤色顔料である「ベンガラ」が詰まった小型の壺が出土しました。また、奈良時代の住居跡からは「山田文マ子夜児」と刻まれた文字瓦も出土し、その成果は近隣にあります十五郎穴横穴墓群の解明にも期待されます。2016年度に実施しました発掘調査では、弥生時代や古墳時代、奈良・平安時代の住居跡を確認し、過去の調査とあわせて、鷹ノ巣遺跡の全容が明らかになりつつあります。

本報告書が、学術資料としてはもとより地域の歴史を解明する資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

最後になりますが、発掘調査から本報告書刊行に至るまで、多大な御協力をいただきましたひたちなか市環境保全課、御指導いただきましたひたちなか市教育委員会をはじめとする関係諸機関、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成30年1月

公益財団法人 ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社  
理事長 永盛 啓司

## 例　言

- 1 本書は、ひたちなか市の委託を受けて、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が実施した鷹ノ巣遺跡発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、ひたちなか市部田野地区の市営たかのす園地拡張工事予定地域内に存在する埋蔵文化財の事前調査を目的とする。
- 3 発掘調査および整理報告は、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社の文化課文化財調査事務所が実施したものであり、組織は次のとおりである（2017年9月現在）。

理 事 長	永盛 啓司
副 理 事 長	木下 正善
常 務 理 事 兼 局 長	鈴木 隆之　横須賀 重夫
事 務 局 次 長	大和田 幸治
理 事	杉山 和子　大和田 健　綱川 正　永井 喜隆　鈴木 一成　加藤 恵子　須藤 雅由
監 事	武藤 猛　安智範
文 化 課 文化財調査 事 務 所	参 事 兼 課 長　西野 均 副参事 兼所長　鈴木 素行 課 長 補 佐　佐々木 義則 係 長　稲田 健一 嘱 託　菊池 順子

- 4 発掘調査は、2016年5月18日から11月30日まで実施した。発掘調査の従事者は次のとおりである。

調査員：稲田健一

調査補助員：相田三郎、石川勉、石崎寿子、石崎洋子、榎澤由紀江、江橋和子、海老原四郎、岡野政雄、海後晴美、栗原芳子、小池清、助川諒、飛田とし子、坪内治良、中嶋順子、廣水一真、見越広幸、矢野徳也、渡辺恵子

- 5 整理作業及び本書の作成に従事したものは、次のとおりである。

稲田健一、榎澤由紀江、海後晴美、菊池順子、桐嶋美子、後藤みち子、佐々木義則、佐藤富美江、助川諒、鈴鹿八重子、鈴木素行、中嶋順子、西野陽子

- 6 本書は、稲田健一が編集した。

- 7 本書の執筆と分担は、以下のとおりである。

II・III：鈴木素行　V（遺物）：佐々木義則　I, IV, V（遺物以外）：VI：稲田健一

VII：パリノ・サーヴェイ株式会社

- 8 石器及び礫の石材の同定は、矢野徳也氏に御指導をいただいた。

- 9 炭化材の樹種及び炭化種子の同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

- 10 発掘調査の出土資料は、本報告書刊行後に、ひたちなか市教育委員会へ移管される。

- 11 本書の作成にあたっては、次の方々に御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（50音順・敬称略）

石井 篤・梅田由子、栗田昌幸、齊藤 新・住谷光男、蓼沼香未由、千葉美恵子、照沼沙保里・早川麗司、三井 猛・矢野広子

大洗町教育委員会

# 目 次

I 遺跡の概要	1	VII その他の遺構と遺物	114
1 遺跡の位置	1	1 溝状遺構	114
遺跡の位置 遺跡の周知と既往の調査 周辺の遺跡		2 性格不明遺構	114
2 調査の経緯と概要	4		
調査にいたる経緯 調査の経過 調査の概要			
II 縄文時代の遺物	7	VIII 自然科学的分析	116
III 弥生時代の遺構と遺物	10	鷺ノ巣遺跡から出土した炭化材の樹種および炭化種実	116
1 住居跡の調査	10	はじめに 炭化材の樹種同定 種実体の同定	
第68号住居跡			
2 調査区の遺物	16		
3 鷺ノ巣遺跡における弥生時代後期前半の土器群について	23		
IV 古墳時代の遺構と遺物	35	写真図版	
1 調査の概要	35		
住居跡の分布 住居跡の規模 住居跡の形態			
住居跡の主軸 廊廻穴			
2 住居跡の調査	38		
第69号住居跡 第71号住居跡 第73号住居跡			
第76号住居跡 第77号住居跡 第83号住居跡			
第85号住居跡 第86号住居跡			
3 遺構に伴わない古墳時代の遺物	72		
4 古墳時代後期の大型住居跡について	73		
5 古墳時代遺物観察表	81		
V 奈良・平安時代の遺構と遺物	89		
1 調査の概要	89		
住居跡の時期 住居跡の分布 住居跡の規模 電			
2 住居跡の調査	91		
第70号住居跡 第72号住居跡 第78号住居跡			
第80号住居跡 第81号住居跡 第82号住居跡			
第84号住居跡			
3 土坑・溝状遺構の調査	107		
第13号土坑 第3号溝状遺構			
4 奈良・平安時代遺物観察表	110		



## I 遺跡の概要

### 1 遺跡の位置

**遺跡の位置** ひたちなか市は、茨城県のほぼ中央の太平洋岸に位置する。東は太平洋に面し、西は那珂市、南は那珂川を境に水戸市・大洗町、北は東海村と接している。市域は、東西約13km・南北約11kmで、総面積は99.93km<sup>2</sup>、人口は約16万人である。

鷹ノ巣遺跡は、ひたちなか市のほぼ中央に位置し、字名では宇部田野（へたの）宮後（みやご）と西原に所在する。

ひたちなか市域の地形は、那珂台地、那珂川段丘、砂丘、沖積低地の4つの地形面に大別できる。鷹ノ巣遺跡は、沖積低地を望む標高25m前後の那珂台地上に立地する。沖積低地には中丸川が流れ、国道245号線湊大橋付近で市域の南端を流れる那珂川に合流する。遺跡の西側には、中丸川の支流の本郷川が流れ、その流れは狹小な支谷を縫うように北上する。本郷川の上流には、馬渡埴輪製作遺跡や製鉄遺跡の後谷津遺跡、原の寺瓦窯跡等が存在している。

遺跡の位置する台地には南側から2つの谷津があり、それらの谷津により舌状の地形を呈す。東側の谷津には湧き水が流れおり、西側の谷津付近には現在東水戸道路のインターチェンジがある。遺跡の現況は、ひたちなか市名産の干し芋の畑地となっていた。

**遺跡の周知と既往の調査** 茨城県内市町村の遺跡を集めた地名表及び地図の中に、鷹ノ巣遺跡が記載されたのは、1976年の『那珂湊市遺跡分布調査報告書』〔井上進1976〕が初出である。報告書の中には、「昭和42年頃、ごほう深耕中に堅穴式住居址が発見され、古墳時代前期の古式土師器の破片が出た」とある。

鷹ノ巣遺跡における調査は、3回実施されている。第1次調査は、1992年度に鷹ノ巣遺跡発掘調査会が実施している。この調査は市営たかのす霊園造成に伴うもので、調査期間は1992年11月4日から1993年3月17日である。調査対象面積は約3,300m<sup>2</sup>。調査では、住居跡28基（古墳～平安時代）、土坑3基、性格不明遺構1

基が確認されている。

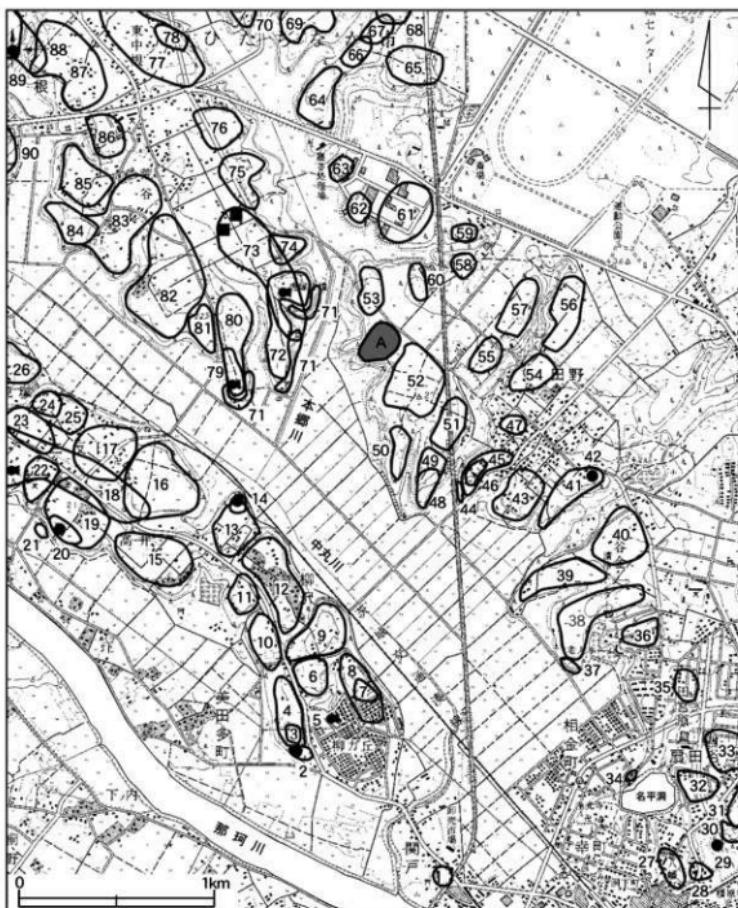
第2次調査は、2005年度に当公社が実施した。この調査は市営たかのす霊園の拡張に伴うもので、調査期間は2005年7月29日から2006年2月28日である。調査対象面積は7,363m<sup>2</sup>。調査では、住居跡43基、溝状遺構3条、土坑8基を確認したが、調査期間等の関係から東側の調査区の遺構と西側の遺構の一部のみを調査対象とし、西側の住居跡3基と溝状遺構2条は次年度以降とした。

第3次調査は、2012年度に当公社が実施した。この調査は市営たかのす霊園の拡張に伴うもので、第2次調査で遺構が確認したが調査を実施していなかった遺構の調査である。調査期間は2012年5月15日から7月11日である。調査対象面積は600m<sup>2</sup>。調査では、住居跡3基と溝状遺構2条を調査した。

**周辺の遺跡** 鷹ノ巣遺跡周辺には、旧石器時代から近世にかけて数多くの遺跡が存在している。第2図は、鷹ノ巣遺跡を中心として、約3km以内の範囲に分布する遺跡を25,000分の1の地図に記したもので、各遺跡の状況は第1表の通りである。



第1図 遺跡の位置



第2図 鷹ノ巣遺跡の位置(A:鷹ノ巣遺跡/1~90の遺跡番号は第1表に対応する/[茨城県2001]を一部修正・加筆)

各時代ごとの詳細については、2007年度の報告にすでに記載しているので、ここではその後に調査が実施された十五郎穴横穴墓群と宮後遺跡について記載する。

十五郎穴横穴墓群では、ひたちなか市教育委員会と当公社が2007年度から2014年度にかけて史跡指定に向けての調査を実施した[稲田他2016]。その結果、横穴墓が約1kmの範囲に274基あることが判明した。また、確認調査では、未開口の状態の横穴墓(館出支群I区第35号墓)を検出し、発掘調査を実施した。横穴墓の玄室からは、

人骨とともに、土器1点、大刀1口、刀子5口、鉄鎌19点、鉄釘181片、砥石1点、炭化物、漆片と思われるものが出土した。大刀は8世紀中葉で、土器は9世紀前半の時期と推定される。玄室の外の狭道部と墓前域からは、須恵器が57個体出土した。時期は8世紀後葉と推定される。出土した遺物の時期には、鷹ノ巣遺跡で同時期の住居跡が存在することから、当遺跡が十五郎穴横穴墓群の造営や被葬者と深い関わりがある可能性が推定できる。

宮後遺跡では、茨城県教育財团によって2010年に続い

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		P	J	Y	K	N	T			P	J	Y	K	N	T
A	鷹ノ巣遺跡	○	○	○	○	○	○	46	上ノ内貝塚		○				
1	新ノ山遺跡	○						47	宮前貝塚		○				
2	道祖山古墳群				○			48	尼ヶ塚館跡						○
3	道祖山貝塚		○					49	尼ヶ塚遺跡		○	○			
4	道祖山遺跡	○	○	○	○			50	釜神山遺跡		○	○			
5	寺前方後円墳				○			51	宮後遺跡		○	○	○		
6	寺脇遺跡	○	○	○				52	部田野西原遺跡	○					
7	大田房遺跡	○	○					53	差池遺跡	○	○	○			
8	柳沢井二所遺跡	○	○	○	○	○		54	中浦見遺跡	○		○			
9	御所内Ⅰ遺跡			○	○	○		55	石沢遺跡	○		○			
10	御所内Ⅱ遺跡			○	○	○		56	西浦見遺跡	○		○			
11	御谷屋遺跡				○	○		57	北西原遺跡	○		○			
12	前方遺跡			○	○	○		58	部田野猪Ⅰ遺跡	○					
13	坂ノ上遺跡	○	○	○	○			59	部田野猪Ⅱ遺跡	○					
14	宮前古墳群				○			60	部田野猪Ⅲ遺跡	○					
15	下高井遺跡	○	○	○	○			61	部田野山崎Ⅰ遺跡	○	○	○			
16	柳沢尻山遺跡	○	○	○	○			62	部田野山崎Ⅱ遺跡	○	○	○			
17	天王前遺跡	○	○	○	○			63	山崎遺跡	○					
18	三反田古墳群				○			64	前原A遺跡	○	○				
19	上高井遺跡	○		○	○			65	西並木下遺跡	○		○			
20	高井古墳群				○			66	前原B遺跡	○		○			
21	三反田上河原遺跡		○					67	馬渡古墳群						
22	三反田遺跡	○		○				68	前原C遺跡						
23	觀瀬原貝塚	○						69	本郷東遺跡						
24	三反田櫛塚貝塚	○						70	牛郷西遺跡						
25	三反田櫛塚遺跡		○	○	○			71	十五郎穴横穴墓群						
26	町遺跡			○	○	○		72	指浜遺跡	○		○			
27	八幡ノ上遺跡	○	○	○	○			73	虎塚古墳群						
28	大田坂砂利山遺跡	○						74	下原遺跡	○					
29	ほんぱり山遺跡	○	○	○	○			75	北谷遺跡		○	○			
30	船形遺跡	○	○	○	○			76	中根北谷北遺跡	○	○	○			
31	廻り日遺跡			○	○	○		77	君ヶ台遺跡	○	○	○			
32	鏡谷丘岸壁遺跡	○	○	○	○			78	君ヶ台貝塚						
33	神敷台遺跡			○	○	○		79	笠谷古墳群						
34	熊山横穴羣				○			80	船出遺跡	○	○	○			
35	田宮原Ⅱ遺跡		○	○				81	笠谷道路	○					
36	田宮原Ⅰ遺跡	○	○					82	大和田遺跡	○	○	○			
37	新堀横穴羣				○			83	東中根清水遺跡	○	○	○			
38	新堀遺跡	○	○					84	中根城跡						
39	小谷金遺跡	○	○	○	○			85	東中根堂山遺跡		○				
40	小谷金東遺跡	○	○	○	○			86	野沢前遺跡	○	○	○			
41	部田野笠士山遺跡	○	○	○	○			87	石光道路	○		○			
42	部田野古墳群				○			88	中根中区古墳群						
43	部田野西富士山遺跡	○	○	○	○			89	中根中区道路			○			
44	部田野横穴墓群				○			90	西中根遺跡	○	○				
45	土ノ内遺跡	○	○	○	○										

&lt;第1表例&gt;「時代」P:旧石器時代 J:縄文時代 Y:弥生時代 K:古墳時代 N:奈良・平安時代 T:中世

て2015年に調査が実施された[根本2017]。調査では、繩文時代の住居跡1基、古墳時代後期の住居跡3基、奈良・平安時代の住居跡6基などが検出された。これらの調査成果からは、2010年の調査成果と同様に、宮後遺跡が鷹ノ巣遺跡とはほぼ同時期の集落跡であることが確認された。また、6世紀後葉に比定された第18号住居跡は、一

辺が8.40mという大型住居跡であり、鷹ノ巣遺跡と比較しても最大規模となることが注目される。

## 2 調査の経緯と概要

**調査に至る経緯** 2015年度、ひたちなか市においては、ひたちなか市営墓地たかのす墓園拡張事業が計画され、約1万m<sup>2</sup>の範囲が対象とされた。

対象地内には、周知の遺跡として鷹ノ巣遺跡が所在することから、ひたちなか市民生活部環境保全課とひたちなか市教育委員会総務課文化財室、当公社の三者協議会がもたれた。その結果、2016年度に発掘調査が計画された。調査区は、第2次調査区の北東側に隣接する場所である（第3図）。

**調査の経過** **2016年5月** 鋼入式(18日)。調査は、まず重機を使ってトレーナーを設定し、遺構の分布状況を確認する作業から開始した。トレーナー掘削後、遺構を確認したトレーナーを拡張するように表土除去を行った。掘削で生じた表土の置き場は、調査区北側で遺構が確認できなかったのでその場所とした。また、調査区南側は、第2次調査で埋没谷が確認された部分の隣であるため、埋没谷があることを予想しトレーナーを設定し、結果として埋没谷が確認されたため、トレーナー調査で終了とした。

**6月** 重機による表土除去後、調査補助員による遺構確認を行い、住居跡16基と溝状遺構2条、土坑1基を確認した。遺構確認後、調査区西側の第68号住居跡から調査を開始した。

**7月** 調査区西側から東側に位置する住居跡を中心に調査を実施した。公社主催の小中学生を対象とした講座「ふるさと考古学」の受講生が第77号住居跡で発掘体験をした（30・31日）。

**8月** 調査区中央から東側に位置する住居跡を中心に調査を実施した。市内佐野中学校2年生が職場体験として発掘体験をした（25・26日）。

**9月** 調査区東側と南側に位置する住居跡等を中心に調査を実施した。市内枝川小学校5・6年生が来訪（15日）。当月は台風の影響で調査が中止となる日が多くなった。

**10月** 住居跡の覆土除去がほぼ終了し、住居跡の竪と溝状遺構の調査を実施した。

**11月** 遺構の覆土除去が終了し、竪面を中心に調査を実施した。22日には空中写真撮影を実施した。市内大島中学校2年生が職場体験として発掘体験をした（9

日）。30日に機材を撤去し、調査を終了した。

### 調査の概要

ローム層上において検出された遺構は、弥生時代後期の住居跡1基、古墳時代後期の住居跡8基、奈良・平安時代の住居跡7基と溝状遺構1条、土坑1基、時期不明の溝状遺構1条である（第4図）。

住居跡は他の住居跡と重複せず、点々と分布する。古墳時代後期の住居跡では、4基が一辺7mを越える大型の住居跡で、1遺跡の1時期に4基もの大型住居跡が確認されるのは市内で初めての事例となる。第3号溝状遺構は、第2次調査で確認されたものに接続する溝で、瓦片等が出土した。同じく第1号溝状遺構も第3次調査で確認されたものに接続する。

第4次調査の時代ごとの住居跡番号は以下の通りである。なお、住居跡等の遺構番号は、第1～3次調査で付された番号に統くものとし、遺構が確認された順に付けている。

弥生時代：68

古墳時代（後期）：69・71・73・76・77・83・85・86

奈良・平安時代：70・72・78・80・81・82・84、SD3、SK13

### 参考文献

- 井上義安他 1976 『郡河港市道路分布調査報告書』郡河港市教育委員会
- 井上義安 1994 『郡河港市鷹ノ巣道路』郡河港市鷹ノ巣道路発掘調査会
- 種田健一郎 2008 『鷹ノ巣－第2次調査の成果－』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 種田健一郎 2013 『鷹ノ巣Ⅱ－第2・3次調査の成果－』(財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査報告第37集 財团法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ振興公社
- 種田健一郎 2016 『十五郎大横穴墓群』(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査報告第41集 ひたちなか市教育委員会・公益財團法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社
- 根本康弘 2017 『宮後遺跡2－一般国道245号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財團文化財調査報告第422集 公益財團法人茨城県教育財團



第3図 鷹ノ巣遺跡調査区位置図

## I 道路の概要



第4図 第2・3・4次調査遺構分布図(SD:溝状遺構/SK:土坑/グリッドは1辺10m)

第2表 第2・3・4次調査住居跡一覧表

住居跡番号	グリッド	時期	住居跡番号	グリッド	時期
第28号住居跡	B・C-7・8	古墳(後期)	第55号住居跡	E・F-11	弥生
第29号住居跡	D-5・6	8世紀1	第56号住居跡	H-17	9世紀3
第30号住居跡	E-8・9	古墳(後期)	第57号住居跡	G-12	9世紀2
第31A号住居跡	H-17	8世紀後半?	第58号住居跡	H-14	9世紀中
第31B号住居跡	H-16・17	古墳(後期)	第59号住居跡	G・H-13・14	古墳(前期)
第32号住居跡	C・D-17・18	8世紀2	第60号住居跡	F-12・13	古墳(前期)
第33号住居跡	D・E-16・17	8世紀3	第61号住居跡	F-13・14	8世紀4
第34A号住居跡	D・E-15・16	8世紀2	第62号住居跡	E・F-13・14	古墳(前期)
第34B号住居跡	D-15・16	古墳(後期)	第63号住居跡	D・E-13・14	8世紀3
第35号住居跡	D・E-14・15	弥生	第64号住居跡	F・G-14・15	古墳(後期)
第36号住居跡	F・G-15・16	古墳(後期)	第65号住居跡	D-17・18	8世紀3
第37号住居跡	G・H-16・17	古墳(後期)	第66号住居跡	F-15・16	9世紀中
第38号住居跡	H-15・16	8世紀1	第67号住居跡	D-14	8世紀3
第39号住居跡	I-16・17	古墳(後期)	第68号住居跡	Z-12	弥生
第40A号住居跡	I-15	古墳(後期)	第69号住居跡	Y-2-11-12	古墳(後期)
第40B号住居跡	H-1-14・15	古墳(前期)	第70号住居跡	X-11-12	8世紀前
第41号住居跡	H-1-12・13	古墳(前期)	第71号住居跡	X・Y-13	古墳(後期)
第42号住居跡	H-11-12	古墳(後期)	第72号住居跡	X-14	8世紀中-後葉
第43号住居跡	F・G-11	古墳(前期)	第73号住居跡	X・Y-14-15	古墳(後期)
第44号住居跡	G-11	8世紀1	第76号住居跡	Z-14-15	古墳(後期)
第45号住居跡	F-11	古墳(後期)	第77号住居跡	Z・A-17-18	古墳(後期)
第46号住居跡	D・E-11	古墳(前期)	第78号住居跡	Z-18-19	8世紀4
第47号住居跡	C-11-12	弥生	第80号住居跡	A-19	8世紀4
第48号住居跡	B・C-10-11	古墳(後期)	第81号住居跡	A・B-18-19	8世紀4
第49号住居跡	H-1-13-14	古墳(後期)	第82号住居跡	A-20	9世紀前
第50号住居跡	C-D-12-13	古墳(後期)	第83号住居跡	W・X-15-16	古墳(後期)
第51号住居跡	D-12	古墳(後期)	第84号住居跡	Y-16	8世紀2
第52号住居跡	F・G-12	古墳(前期)	第85号住居跡	T・U-16	古墳(後期)
第53号住居跡	G・H-12-13	古墳(後期)	第86号住居跡	T-17-18	古墳(後期)
第54号住居跡	H-1-14-15	9世紀3	＊第74-75・29号住居跡は欠番		

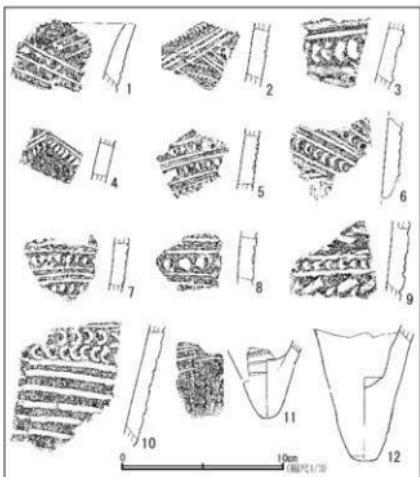
## II 繩文時代の遺物

縄文時代遺跡としての鷹ノ巣遺跡 1976(昭和51)

年の『那珂湊市遺跡分布調査報告書』には、鷹ノ巣遺跡が古墳時代の集落跡として解説されている(井上・宮田 1976)。縄文時代の遺跡の複合については、1985(昭和60)年、「縄文早期中葉」の遺跡として「鷹ノ巣遺跡(田戸下層期～)」が記載された(那珂湊市教育委員会 1985)。1992(平成4)年度に実施された第1次調査の報告書にも、この「田戸下層」についての記述がある。「墓地公園を造成する西原2854-1を中心とした畠地には、山林寄りに縄文時代早期の田戸下層式土器、…が散在していたところであった」、「かつて田戸下層式土器を採集した畠地は、その後3000mにわたって、表土下約40～50cmの深さまで削平されてしまい、前面にロームが露呈した状態となっている」(井上 1994)。事前の削平により、田戸下層式土器を出土する地点が発掘調査の対象とならなかったことから、当該期については、遺物が報告されないままになった。調査区から採集されていた田戸下層式土器が、第1次調査の出土遺物とともに保管されていたので、これを図化し掲載する(第5図)。

第1次調査(井上 1994)では、古墳時代の遺構に混在して縄文時代後期の土器片が1点、石器が1点報告されている。第2次調査(小松崎・窪田 2013)では、調査区内から出土した縄文時代の遺物をまとめて報告した。土器は、早期・中期・後期があり、中期後葉と後期前葉の破片が比較的多い。早期に田戸下層式土器が1点だけ含まれており、これは、第1次調査区「山林寄り」に形成された遺跡の周縁部として捉えられる。石器は、草創期の槍先形尖頭器、有茎尖頭器も検出された。第3次調査では、縄文時代の遺物は出土していない。第4次調査は、第2次調査に隣接した調査区であり、ここからも中期後葉と後期前葉の破片が比較的多く出土した。また、中期前葉の阿玉台式も数個体分が見られた。しかしながら、現在までの調査で、縄文時代の遺構は確認されていない。

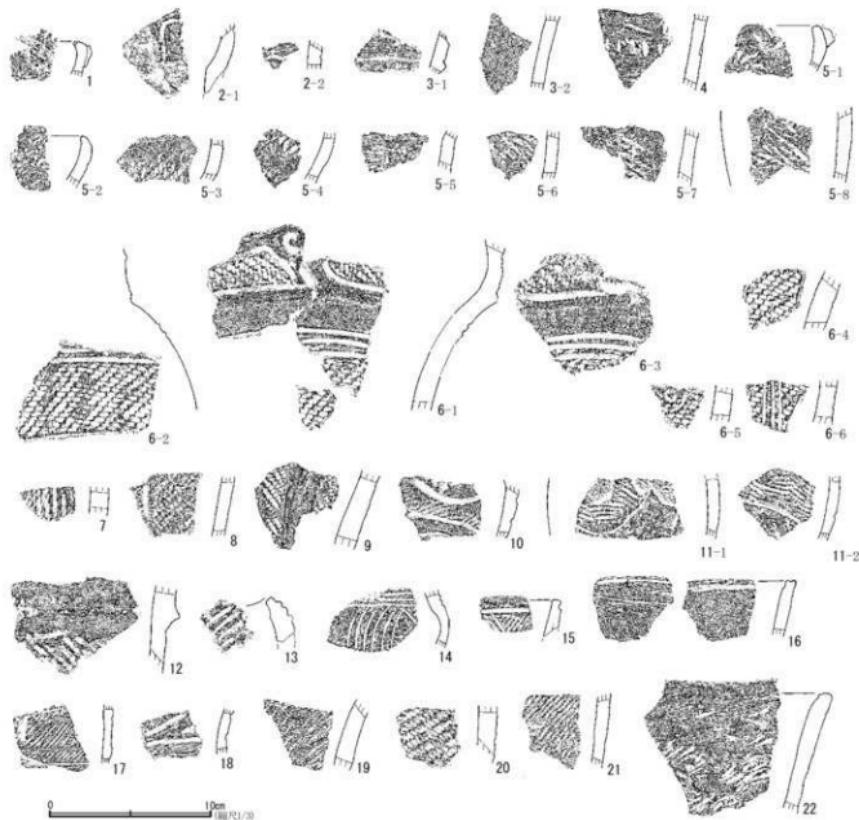
**土器** 第4次調査で出土した縄文時代の土器について、主要なものを第6図に示し、以下に観察を記述する。



第5図 第1次調査区採集の田戸下層式土器

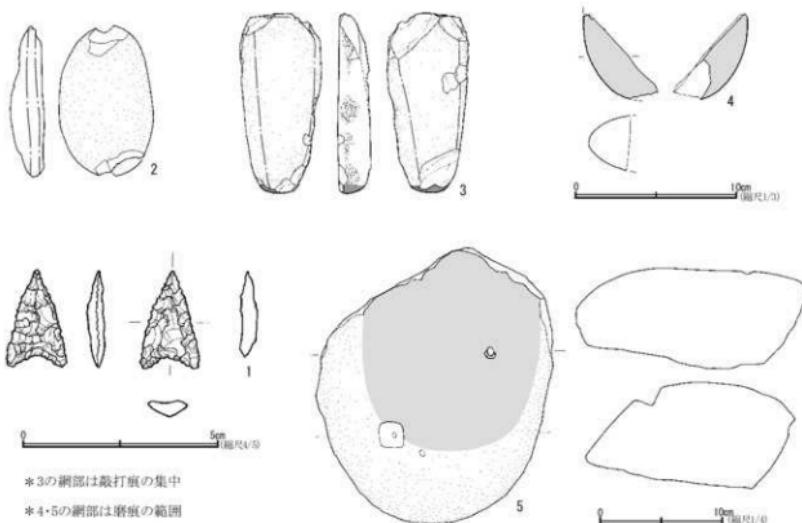
## 第6図

- 1 出土位置・注記: 73住No.2 時期: 中期(阿玉台I b式) 文様: 口唇部刻み(範), 口縁部貼付文
- 2 出土位置・注記: 69住No.4 SD3No.18 時期: 中期(阿玉台I b式) 文様: 押引文
- 3 出土位置・注記: 72住No.1 時期: 中期(阿玉台I b式) 文様: 押引文  
備考: 脱土に金雲母を含む
- 4 出土位置・注記: SD3No.21 時期: 中期(阿玉台式か) 文様: 刺突文
- 5 出土位置・注記: 71住No.4～6-10, 3トレNo.3 時期: 中期(中葉) 器種: 深鉢形土器 法量: 幅径80mm(残存率14%) 文様: 口縁部貼付文, 無鉢斜縁文(L), 口縁部は横回転, 脚部は縱回転  
備考: 他にも同一個体の破片4点あり
- 6 出土位置・注記: 71住No.3-5-6-11-14, SK13No.3 時期: 中期(加曾利E2式) 器種: 深鉢形土器 法量: 最大径230mm(残存率14%) 文様: 隆帯, 沈線文, 複節斜縫文(RLR, 口縁部は横回転, 脚部は縱回転)  
備考: 他にも同一個体の破片4点あり
- 7 出土位置・注記: SD3No.3 時期: 中期(加曾利E2式) 文様: 沈線文, 複節斜縫文(RLR, 脚部を巻いた格子条)
- 8 出土位置・注記: SD3No.21 時期: 中期(加曾利E23式) 文様: 沈線文, 複節斜縫文(RLR)



第6図 調査区出土の縄文式土器

- 9 出土位置・注記: 70住N3 時期: 中期(加曾利E 3式) 文様: 陰帶、單節斜繩文(LR)
- 10 出土位置・注記: SD3N21 時期: 後期(称名寺式) 文様: 沈線文、單節斜繩文(LR)
- 11 出土位置・注記: 80住N3 時期: 後期(称名寺式) 器種: 深鉢形土器  
法量: 腹径106mm(残存率21%) 文様: 沈線文、單節斜繩文(LR) 備考:  
瓶口縁を形成して再利用
- 12 出土位置・注記: SD3P57 時期: 後期 文様: 陰帶、單節斜繩文(RL)  
備考: 豆土に泥岩片を含む
- 13 出土位置・注記: 6トレN10 時期: 後期(縄之内1式) 文様: 沈線文  
備考: 把手部分か
- 14 出土位置・注記: 83住N6 時期: 後期(縄之内1式) 文様: 沈線文、  
單節斜繩文(LR) 備考: 豆土に金雲母を含む。器内面変色(黒化)
- 15 出土位置・注記: SD1N5 時期: 後期(縄之内1式) 文様: 沈線文、  
單節斜繩文(LR)
- 16 出土位置・注記: 83住N4 時期: 後期 文様: 沈線文
- 17 出土位置・注記: SD3N17 時期: 後期(安行1式) 文様: 沈線文、單  
節斜繩文(LR)
- 18 出土位置・注記: 71住N6 時期: 晩期か 文様: 沈線文、熱糸文(Rを  
巻いた絲条体)
- 19 出土位置・注記: 19トレN25 時期: 中期 文様: 単節斜繩文(RL)
- 20 出土位置・注記: SD3N21 時期: 中期 文様: 単節斜繩文(RL) 備



第7図 調査区出土の石器

考:粘土に金雲母を多量含む

21 出土位置・注記:72住No.1 時期:中期 文様:単節斜縄文(RL)

22 出土位置・注記:SD3P58 時期:後期か 文様:反捺り縄文(LL)

**石 器** 第4次調査で出土した石器について、他の時代と判断されたものを除き第7図に一括して示し、以下に計測と観察を記述する。このうち、礫石錐は、縄文時代中期後葉に伴うものと考えられる。

#### 第7図

1 出土位置・注記:SD3N18 器種:石錐 石材:メノウ 法量:長さ24 mm.

幅15 mm. 厚さ4 mm 重量:14 g

2 出土位置・注記:68住S3 器種:礫石錐 石材:花崗斑岩 法量:長さ

91 mm. 幅57 mm. 厚さ19 mm 重量:1189 g 備考:一部欠損する

3 出土位置・注記:SD3S1 器種:敲石 石材:砂岩 法量:長さ110 mm,

幅51 mm. 厚さ20 mm 重量:1585 g 備考:上下端部に敲打痕が集中,

側面の一部にも敲打痕が分布する。農耕具によるガジリと赤錆の付着

あり

4 出土位置・注記:SD3N20 器種:磨石 石材:デイサイト 法量:長さ

52 mm. 幅45 mm. 厚さ34 mm 重量:503 g 備考:農耕具による赤錆

の付着あり

5 出土位置・注記:SD3S6 器種:砥石・凹石 石材:砂岩 法量:長さ225 mm,

幅195 mm. 厚さ84 mm 重量:4210 g 備考:焼痕(赤化)あり、農耕具

によるガジリあり

#### 参考文献

井上義安 1994 「郡河添市鷹ノ巣遺跡」郡河添市鷹ノ巣遺跡発掘調査会

井上義安・宮田 積麻 1976 「郡河添市道路分布調査報告書」郡河添市文化財調査報告Ⅱ 郡河添市教育委員会

小松崎恵子・寢田恵一 2011 「縄文時代の遺物」「鷹ノ巣Ⅱ 一第2・3次

調査の成果―公社文化財調査報告第41集 ひたちなか市生活・文化

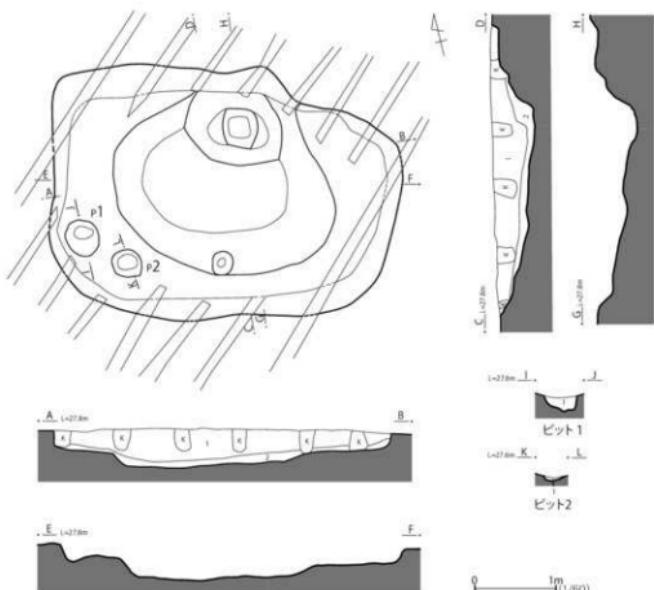
・スポーツ公社 15-22頁

郡河添市教育委員会編 1985 「私たちの郷土郡河添の歴史(稚成文化財

理解のために)〔考古編〕」郡河添市教育委員会

## III 弥生時代の遺構と遺物

## 1 住居跡の調査



第 68 号住居跡堆積覆土

第1層: 黒色土層(ローム粒少量、炭粒微量含む 繩まり有り)  
 第2層: 暗褐色土層(ローム粒多量、炭粒微量含む 繩まり有り)  
 第 68 号住居跡ビット1堆積覆土  
 第1層: 暗褐色土層(約1cmロームブロック少量、ローム粒多量含む  
 繩まりやや有り)

第 68 号住居跡ビット2堆積覆土

第1層: 暗褐色土層(ローム粒多量含む 繩まりやや有り)

第 8 図 第 68 号住居跡

## 第 68 号住居跡

**遺構** Z - 12 区に位置する。ゴボウ耕作による溝状の搅乱を受けており、一部は床面まで掘り込まれている。平面形は、歪な隅丸長方形を呈する。竪穴部の規模は 4.28 × 3.10m である。壁は垂直には立ち上がりらず、床面も平坦面がなく、すり鉢状を呈する。壁周溝はない。床面に硬化面はみられない。

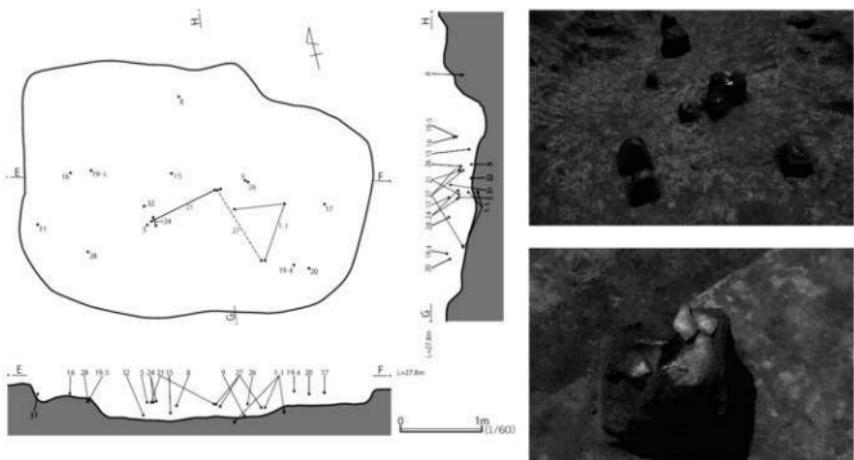
竪穴部覆土は、黒色土が主体で、下層に薄く暗褐色土が堆積する。

炉跡はみられない。

ビットは 4 基確認できるが、主柱穴ではない。

**遺物出土状況** 出土した遺物は全て破片資料で、一部接合関係がみられる。平面分布では、点々と散在する。垂直分布は覆土下層から床面で出土している。

**遺物** 遺構内から出土した遺物には、石器が 1 点含まれていたが、礫石錘であり、これは縄文時代の遺物の混在と判断して前章で報告した(第 7 図 1)。その他は、土器である。全て破片であり、接合により完全に近く復

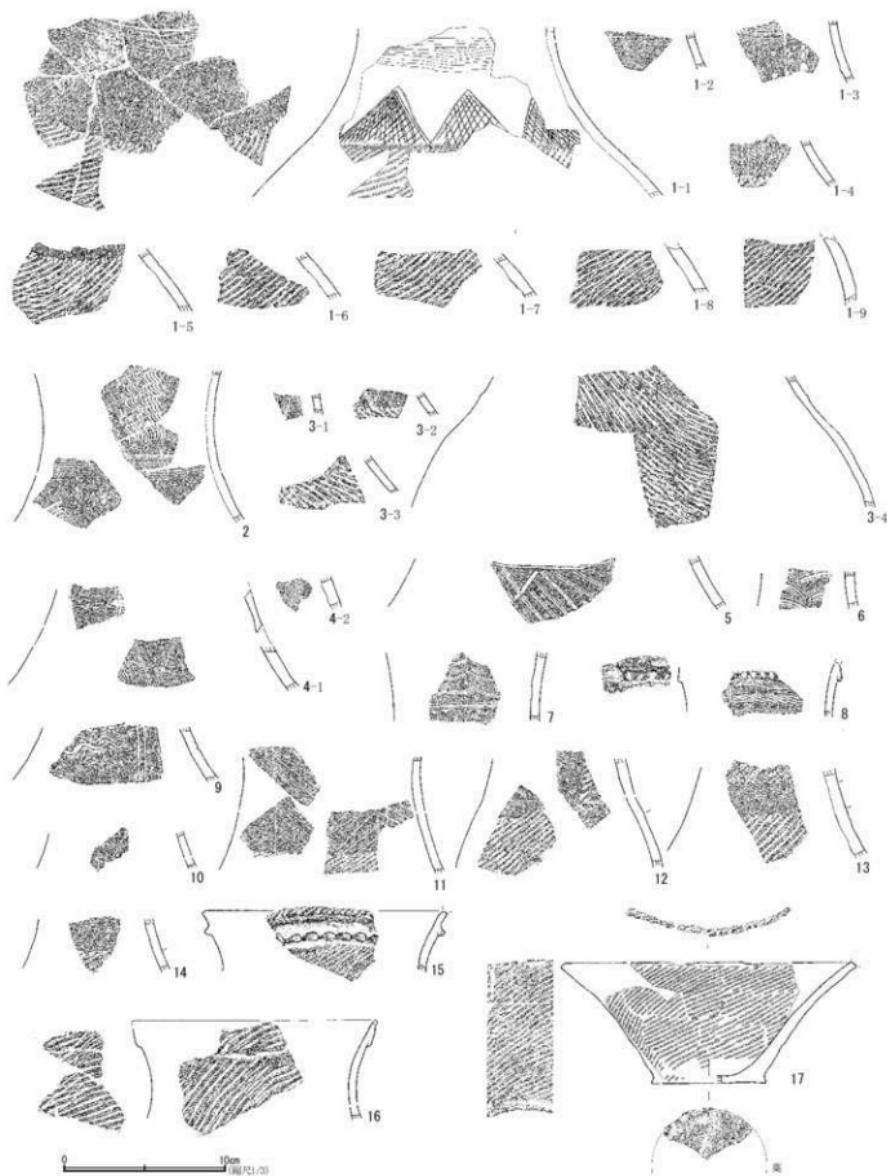


第9図 第68号住居跡遺物出土状況

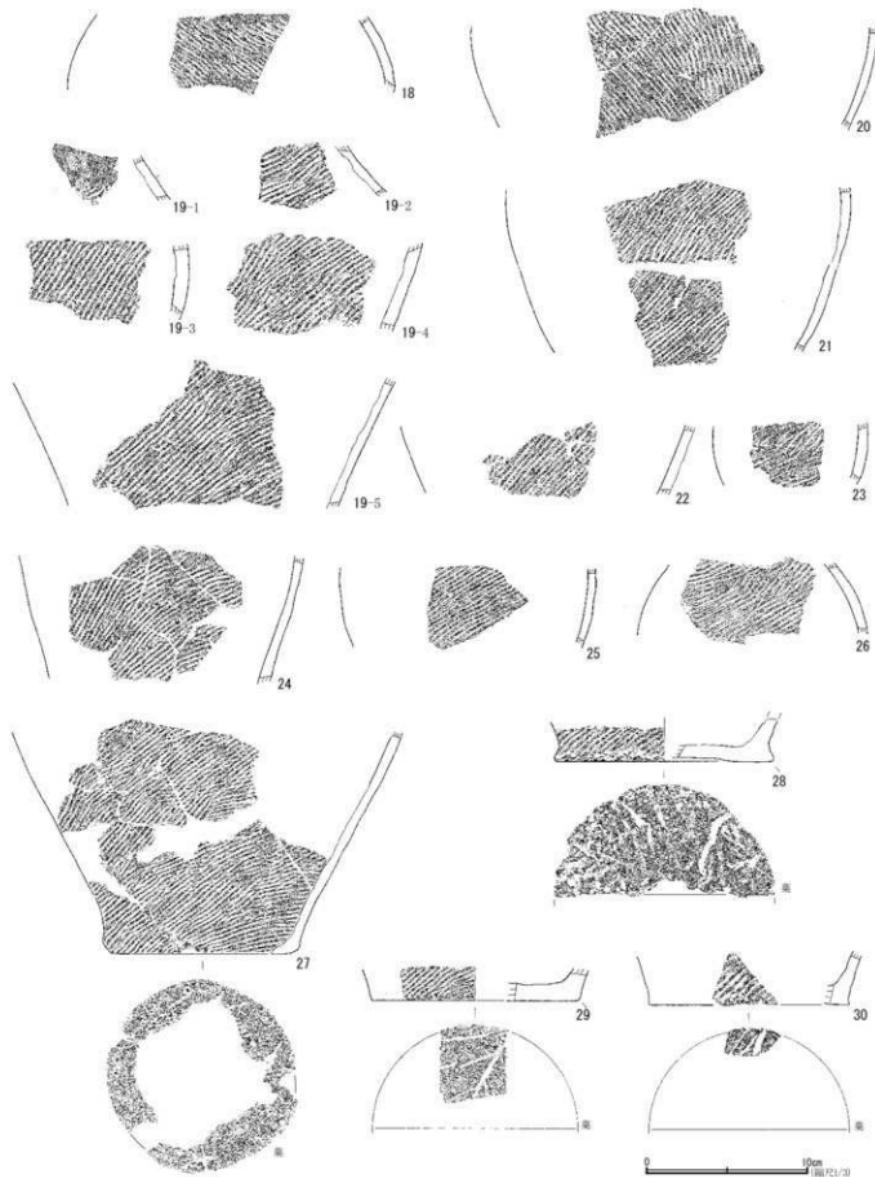
元されるものもなかった。口縁部、底部の部位を含む破片、無文部を含めて縄文以外の文様が施された破片については、ほぼ全てを報告する。縄文のみの胴部破片については、残存部位の法量が推定できるもの、縄文原体の種類が網羅できる破片を選択して報告した。これらを第10～12図に示し、以下に計測と観察を記述する。

## 第10～12図

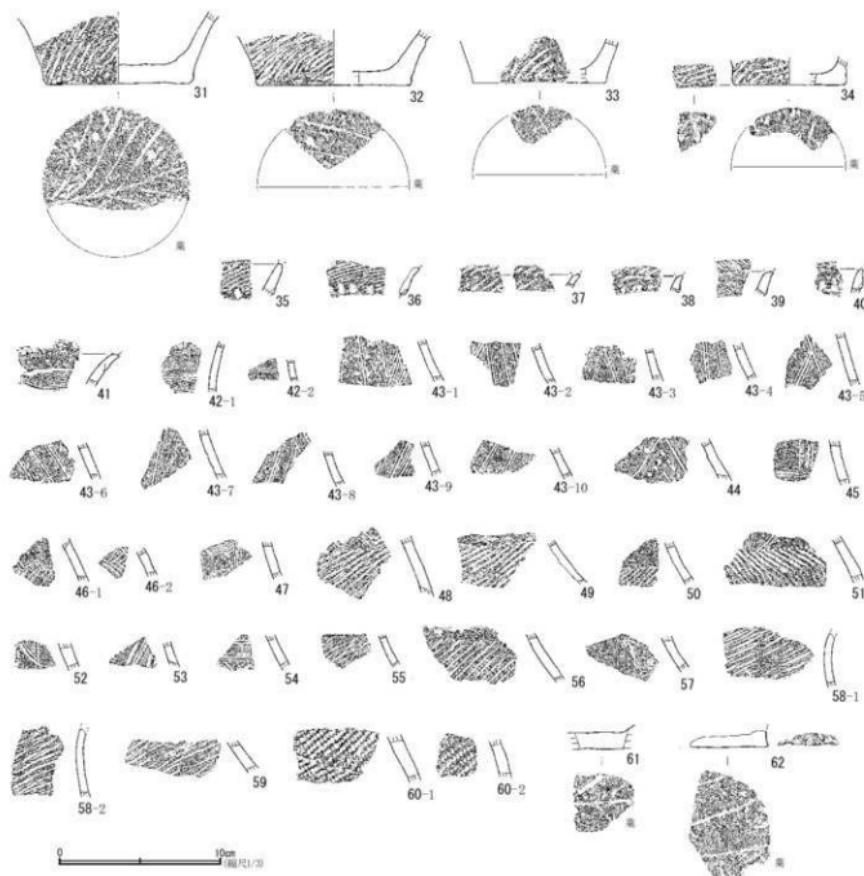
- 1 出土位置・注記: 68住P18-27-30～32, №3～5-7～9-12-14 器種: 壺形土器(大型縦彫形) 法量: 最大径250mm(残存率19%の部分より推定) 文様: 沈線文(乳状工具), 條描文(櫛歯4本, 不描い), 付加条縄文(LR+2R) 備考: 脱土に白雲母細片を多量含む。器内面剥落。第14図51は同一個体。図示した以外にも同一個体の破片あり
- 2 出土位置・注記: 68住№4-7 器種: 壺形土器(中型縦彫形) 法量: 最大径104mm(残存率14%の部分より推定) 文様: 條描文(櫛歯7本, 不描い) 備考: 脱土に白雲母細片を多量含む。器内面剥落
- 3 出土位置・注記: 68住№3-7 器種: 壺形土器(大型縦彫形) 法量: 最大径282mm(残存率12%の部分より推定) 文様: 條描文(櫛歯3本), 付加条縄文(RL+2L) 備考: 器内面剥落あり
- 4 出土位置・注記: 68住№4-7 器種: 壺形土器(中型縦彫形) 法量: 最大径178mm(残存率8%) 文様: 條描文(底波波状文は櫛歯9本。他は櫛歯3本), 條描文以外の器外表面赤彩 備考: 脱土に金雲母と骨針を含む。器内面剥落。第14図33は同一個体
- 5 出土位置・注記: 68住P18-27-30～32, №3～5-7～9-12-14 器種: 壺形土器(大型縦彫形) 法量: 最大径206mm(残存率13%の部分より推定) 文様: 平行沈線文(半截竹管) 備考: 3本櫛歯に見える部分は二度櫛と判断した
- 6 出土位置・注記: 68住№11 器種: 壺形土器(小型縦彫形) 法量: 最大径61mm(残存率13%) 文様: 條描文(櫛歯3本)
- 7 出土位置・注記: 68住№4 器種: 壺形土器(中・小型) 法量: 最大径98mm(残存率14%の部分より推定) 文様: 條描文(櫛歯3本) 備考: 脱土に泥岩片を含む
- 8 出土位置・注記: 68住P13, №4 器種: 壺形土器(小型) 法量: 最大径100mm(残存率17%) 文様: 划み(棒状工具), 條描文(櫛歯3本) 備考: 指印縄
- 9 出土位置・注記: 68住P23 器種: 壺形土器(中・小型) 法量: 最大径124mm(残存率19%) 文様: 平行沈線文(半截竹管) 備考: 脱土に金雲母と多量の骨針を含む。器外表面灰化物付着。第13図27は同一個体
- 10 出土位置・注記: 68住№5 器種: 壺形土器(中・小型, 縦彫形) 法量: 最大径98mm(残存率8%の部分より推定) 文様: 沈線文(乳状工具) 備考: 脱土に金雲母と骨針を含む
- 11 出土位置・注記: 68住№3-10 器種: 壺形土器(中・小型) 法量: 縦径108mm(残存率17%の部分より推定) 文様: 沈線文(乳状工具), 付加条縄文(LR+2R) 備考: 脱土に白雲母細片を含む。器外表面灰化物付着
- 12 出土位置・注記: 68住№12 器種: 壺形土器(中・小型) 法量: 最大径127mm(残存率9%の部分より推定) 文様: 沈線文原体压痕文



第10図 第68号住居跡出土遺物1



第 11 図 第 68 号住居跡出土遺物 2



第12図 第68号住居跡出土遺物3

- (LR+2R)、付加条縦文(LR+2R) 備考:胎土に白雲母細片を多量含む、器内面剥落。図示した以外にも同一個体の破片あり
- 13 出土位置・注記:68住No.35 器種:壺形土器(中・小型細頭形) 法量:最大径122mm(残存率14%の部分より推定) 文様:付加条縦文(LR+2R) 備考:胎土に骨針を含む、器内面剥落
- 14 出土位置・注記:68住No.3 器種:壺形土器(小型・細頭形) 法量:最大径90mm(残存率14%の部分より推定) 文様:付加条縦文(LR+2R) 備考:胎土に白雲母細片を多量含む、器内面剥落。図示した以外にも同一個体の破片あり
- 15 出土位置・注記:68住P12 器種:壺形土器(中・小型) 法量:口径150mm(残存率12%) 文様:口唇部縦文、隆帶上指頭押圧、付加条縦文(LR+2R) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む、器外表面化物付着
- 16 出土位置・注記:68住P3、No.11-14 器種:壺形土器(中・小型太頭形) 形態に近い) 法量:最大径148mm(残存率19%の部分より推定) Hは211mm 文様:付加条縦文(LR+2R) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む、器外表面化物付着
- 17 出土位置・注記:68住P17 器種:鉢形土器 法量:器高74mm、口径180mm(残存率18%)、底径70mm(残存率31%) 文様:口唇部縦文

- 付加条縦文(LR+2R)、底面木葉痕 備考:胎土に骨針を多量含む。  
第2次調査区第35号住居跡の報告(色川2008)第13図30は同一個体の可能性あり
- 18 出土位置・注記:68住No.10 器種:壺形土器(中・小型) 法量:最大径200mm(残存率13%の部分より推定) 文様:付加条縦文(RL+2L)
- 19 出土位置・注記:68住P14・19, No.3・11 器種:壺形土器(大型細頭形) 法量:最大径233mm(残存率18%の部分より推定) 文様:付加条縦文(LR+2R) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む。器内面剥落。図示した以外にも同一個体の破片あり
- 20 出土位置・注記:68住P20, No.3 器種:壺形土器 法量:最大径249mm(残存率13%の部分より推定) 文様:付加条縦文(RL+2L)
- 21 出土位置・注記:68住P10・14 器種:壺形土器(中型) 法量:胴径210mm(残存率13%) 文様:付加条縦文(LR+2R) 備考:胎土に骨針を含む。器内面剥落。図示した以外にも同一個体の破片あり
- 22 出土位置・注記:68住E4 器種:壺形土器(大型) 法量:最大径180mm(残存率12%の部分より推定) 文様:付加条縦文(LR+2R)
- 23 出土位置・注記:68住No.13 器種:壺形土器(小型) 法量:胴径94mm(残存率15%) 文様:付加条縦文(LR+2R) 備考:被熱により赤変。図示した以外にも同一個体の破片あり
- 24 出土位置・注記:68住P5・9, №3・4・8 器種:壺形土器(中型) 法量:胴径174mm(残存率21%の部分より推定) 文様:付加条縦文(LR+2R)
- 25 出土位置・注記:68住No.11 器種:壺形土器(小型, 細頭形) 法量:胴径156mm(残存率12%) 文様:付加条縦文(LR+2R)
- 26 出土位置・注記:68住P15 器種:壺形土器(小型) 法量:最大径140mm(残存率18%) 文様:付加条縦文(LR+2R) 備考:胎土に骨針を含む。器内外面灰化物付着
- 27 出土位置・注記:68住P14・22・24・25, №3・7 器種:壺形土器(大型) 法量:底径120mm(残存率92%) 文様:付加条縦文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:胎土に骨針を多量含む。器内面剥落。器外面上部褐色の付着物あり。底部穿孔なのか不明。図示した以外にも同一個体の破片あり
- 28 出土位置・注記:68住P1 器種:壺形土器(大型) 法量:底径123mm(残存率52%) 文様:付加条縦文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:胎土に金雲母と骨針を多量含む。器内面剥落
- 29 出土位置・注記:68住No.12 器種:壺形土器(大型) 法量:底径126mm(残存率12%) 文様:付加条縦文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:胎土に骨針を含む
- 31 出土位置・注記:68住P2 器種:壺形土器(中・小型) 法量:底径90mm(残存率63%) 文様:付加条縦文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:器内面に灰化物付着
- 32 出土位置・注記:68住P11 器種:壺形土器(中・小型) 法量:底径94mm(残存率23%) 文様:付加条縦文(LR+2R), 底面木葉痕
- 33 出土位置・注記:68住No.4 器種:壺形土器(中・小型) 法量:底径82mm(残存率15%) 文様:付加条縦文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:胎土に骨針とメノウ粒を含む
- 34 出土位置・注記:68住No.4・12 器種:壺形土器(中・小型) 法量:底径70mm(残存率40%) 文様:付加条縦文(LR+2R), 底面木葉痕
- 35 出土位置・注記:68住No.7 文様:口唇部縦文, 付加条縦文(LR+2R), 口縁部下端刺み(縫合部) 備考:胎土に白雲母細片を含む。器外面に灰化物付着
- 36 出土位置・注記:68住No.7 文様:付加条縦文(LR+2R), 口縁部下端刺み(縫合部) 備考:胎土に白雲母細片を含む。器外面に灰化物付着
- 37 出土位置・注記:68住No.4・8 文様:口唇部縦文, 付加条縦文(LR+2R)
- 38 出土位置・注記:68住No.4 文様:口唇部縦文(LR+2R), 口縁部下端刺み(縫合部原体) 備考:器外面に灰化物付着
- 39 出土位置・注記:68住No.7 文様:口唇部縦文(LR+2L), 口唇部直下に横描文か?
- 40 出土位置・注記:68住No.7 文様:口唇部縦文(LR+2R), 胸部に横描文 備考:器外面に灰化物付着
- 41 出土位置・注記:68住No.4 文様:口唇部縦文(LR+2L), 平行沈線文もしくは横描文
- 42 出土位置・注記:68住No.3・11 文様:横描文(横歛3本) 備考:胎土に金雲母を含む。器外面に灰化物付着
- 43 出土位置・注記:68住No.3・4・7・11・12・14 器種:壺形土器(大型) 文様:横描文(横歛3本), 付加条縦文(RL+2L) 備考:胎土に骨針を含む。図示した以外にも同一個体の破片あり
- 44 出土位置・注記:68住No.8 器種:壺形土器(大型か) 文様:横描文(横歛6本, 不編い), 刺突文(植物茎) 備考:胎土に骨針を含む。器内面剥落。第2次調査区遺物外の報告(色川2013)第19図57は同一個体
- 45 出土位置・注記:68住No.5 器種:壺形土器(細頭形) 文様:横描文(横歛7本以上, 不編い)
- 46 出土位置・注記:68住No.3 文様:横描文(横歛4本, 不編い), 付加条縦文(LR+2R, RL+2L) 備考:胸部羽状縦文
- 47 出土位置・注記:68住No.1 文様:横描文(横歛5本) 備考:胎土に金雲母と多量の骨針を含む
- 48 出土位置・注記:68住No.10 文様:横描文(横歛4本, 不編い), 付加条縦文(LR+2R)
- 49 出土位置・注記:68住No.10 器種:壺形土器(大型) 文様:横描文(不

### III 弥生時代の遺構と遺物

- 54 出土位置・注記:付加条縦文(LR+2R) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む  
55 出土位置・注記:68住N<sub>0</sub>10 文様:櫛描文、付加条縦文(LR+2R) 備  
考:器外間に炭化物付着  
56 出土位置・注記:68住N<sub>0</sub>4 器種:壺形土器(大型)文様:櫛描文(櫛齒  
3本)、付加条縦文(RL+2L)  
57 出土位置・注記:68住N<sub>0</sub>8 文様:平行沈縦文(半截竹管)  
58 出土位置・注記:68住N<sub>0</sub>11 文様:櫛描文(櫛齒5本、不揃い) 備考:  
胎土に白雲母細片を含む  
59 出土位置・注記:68住N<sub>0</sub>3 文様:櫛描文(櫛齒3本)、付加条縦文  
(RL+2Lか)  
60 出土位置・注記:68住N<sub>0</sub>3 文様:平行沈縦文もしくは櫛描文、付加条  
縦文(LR+2R)  
61 出土位置・注記:68住N<sub>0</sub>4 器種:壺形土器(大型) 文様:付加条縦文  
(LR+2R) 備考:胎土に骨針を多量含む  
62 出土位置・注記:68住N<sub>0</sub>11 備考:胎土に骨針を含む、無文  
63 出土位置・注記:68住N<sub>0</sub>3-7 器種:壺形土器か(大型) 文様:付加条  
縦文(LR+2R) 備考:胎土に金雲母と骨針、メノウ粒を含む、櫛口縁か  
64 出土位置・注記:68住N<sub>0</sub>3-7 器種:壺形土器(大型) 文様:付加条縦  
文(輪縁1段3状のLR+Rか)  
65 出土位置・注記:68住N<sub>0</sub>5-8 器種:壺形土器(大型) 文様:単節斜橫  
文(LR)  
66 出土位置・注記:68住N<sub>0</sub>4 文様:底面木葉痕 備考:胎土に金雲母を含む

- 67 出土位置・注記:68住N<sub>0</sub>13 器種:壺形土器(大型) 文様:付加条縦文  
(RL+2L), 底面木葉痕 備考:器内面剥落  
遺構内に「十王台式」は含まれておらず、全てが弥生時  
代後期前半の土器群で占められている。第68号住居跡  
は、第2次調査で検出された第35・47・55号住居跡(色川  
2008-2013)とともに当該期の集落を構成した遺構と捉え  
られる。

**註** 第68号住居跡は、福島県いわき市輪山道路(松本・山内1977)にお  
いて「土坑」の第1類として報告された遺構(第1号土坑)に規模や形  
態が似ている。常陸大宮市上ノ宿道路(大河・小川田2014)では、こ  
のような遺構を「梯形堅穴道構」と呼び、茨城県内の類例を集め検  
討して、「一人もしくは二人程度の少人数で行う作業場と考え、併  
せて貯蔵用途をも兼ね、常住としない簡易小屋」と想定している。

### 参考文献

- 舟井渡安 1994 「郡河湊市鷹ノ巣遺跡」郡河湊市鷹ノ巣遺跡発掘調査会  
色川順子 2008 「弥生-古墳時代前期の遺構と遺物」鷹ノ巣 第一-第二次  
調査の成果-公社文化財調査報告第37集 ひたちなか市文化・スポー  
ツ振興公社 962頁  
色川順子 2013 「弥生時代の遺物」鷹ノ巣Ⅱ 第一-2・3次調査の成果  
-公社文化財調査報告第41集 ひたちなか市生活・文化・スポーツ  
公社 23-27頁  
大河津志・小川田博也 2014 「上ノ宿遺跡Ⅱ」一帶携電話基地局建設に  
伴う埋蔵文化財発掘調査-茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書  
第17集 常陸大宮市教育委員会  
松本友之・山内幹夫 1972 「輪山遺跡」-先土器・弥生時代遺構の調査-  
いわき市埋蔵文化財調査報告第4番 いわき市教育委員会

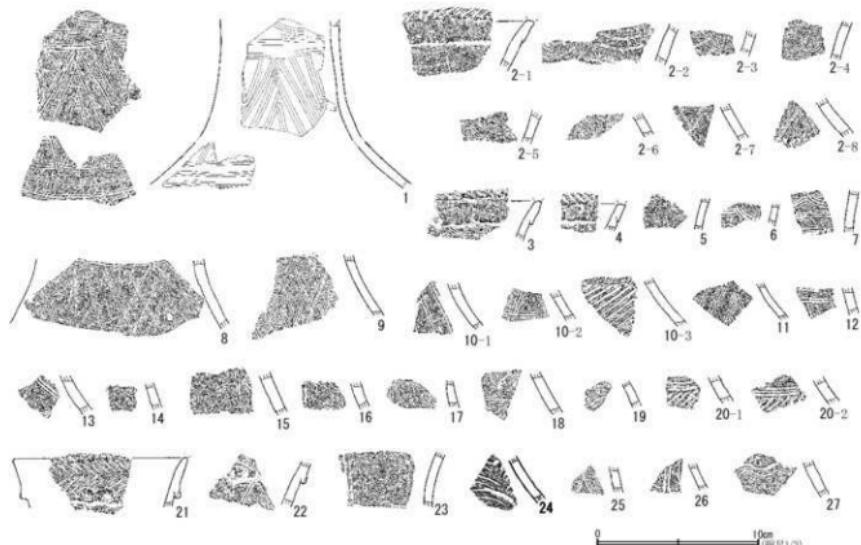
## 2 調査区の遺物

表土と後世の遺構内から出土した弥生時代の遺物を、  
調査区出土として一括した。土器には、弥生時代後期前  
半の土器群と、後期後半から古墳時代前期にかかる「十  
王台式」の土器群が含まれている。第68号住居跡で記述  
した資料の選択に準じながら、第13～16図に後期前半  
の土器群を、第17図に「十王台式」を示し、以下に計測  
と観察を記述する。

### 第13～16図

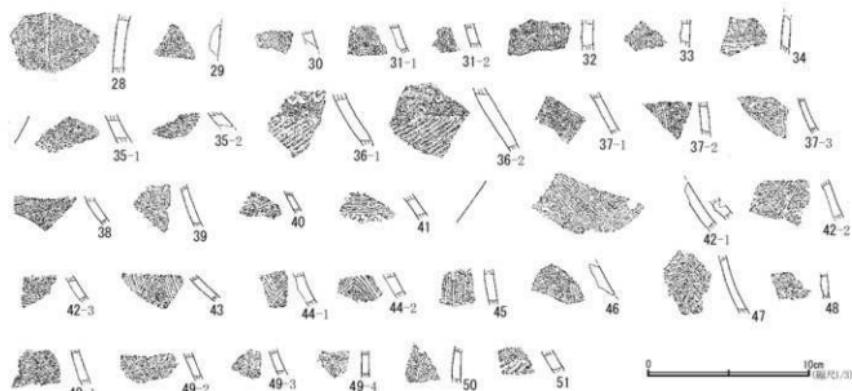
- 1 出土位置・注記:SD3N<sub>0</sub>18 器種:壺形土器(中型細頭形) 法量:頭径22mm  
(残存率23%) 文様:櫛描文(櫛齒3本)、付加条縦文(RL+2L), 赤彩  
2 出土位置・注記:SD3N<sub>0</sub>16-18・19 器種:壺形土器 文様:口唇部付加  
条縦文(LR+2R), 櫛描文(櫛齒3本), 脚部付加条縦文(RL+2L) 備考:  
破片2-2にキズミの割り痕あり  
3 出土位置・注記:SD3N<sub>0</sub>18 文様:口唇部付加条縦文(RL+2L), 櫛描文  
(櫛齒3本)

- 4 出土位置・注記:SD3N<sub>0</sub>18 文様:口唇部付加条縦文(RL+2L), 櫛描文  
(櫛齒3本)  
5 出土位置・注記:SD3N<sub>0</sub>18 文様:櫛描文(櫛齒3本) 備考:器内面変  
色  
6 出土位置・注記:SD3N<sub>0</sub>18 器種:壺形土器(小型細頭形か) 文様:櫛  
描文(櫛齒3本)  
7 出土位置・注記:SD3N<sub>0</sub>18 文様:櫛描文(櫛齒3本) 備考:胎土に骨  
針含む  
8 出土位置・注記:SD3P27 器種:壺形土器(中型細頭形か) 法量:最大  
径134mm(残存率18%) 文様:櫛描文(櫛齒3本) 備考:器外間に種  
子圧痕あり  
9 出土位置・注記:3トレス<sub>0</sub>3 文様:櫛描文(櫛齒3本)  
10 出土位置・注記:SD3N<sub>0</sub>18, SK13N<sub>0</sub>3 文様:櫛描文(櫛齒3本), 付  
加条縦文(LR+2R) 備考:胎土に骨針含む  
11 出土位置・注記:73住N<sub>0</sub>4 文様:櫛描文(櫛齒3本) 備考:胎土に骨  
針含む



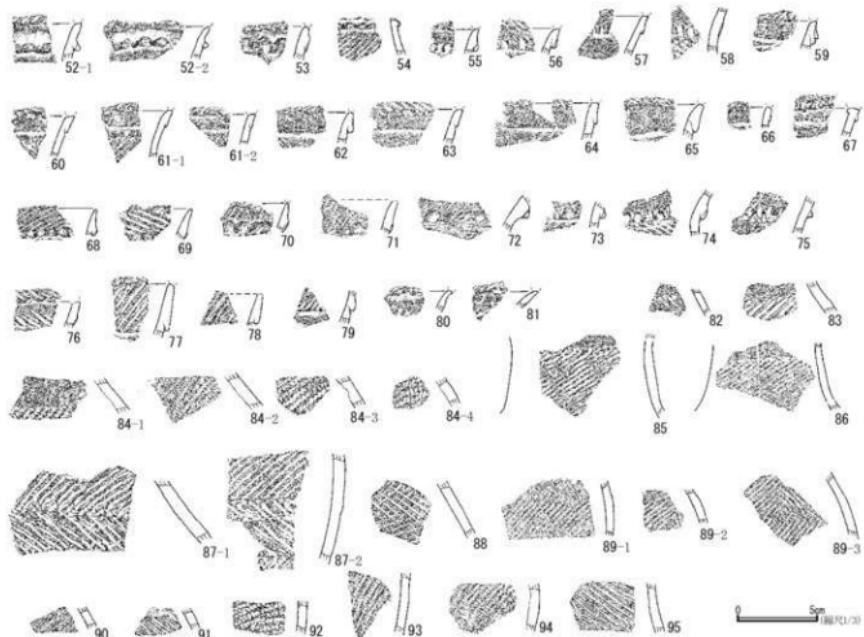
第13図 調査区出土の弥生式土器 1

- 12 出土位置・注記: SD3 №18 文様: 櫛縞文(櫛齒3本)
- 13 出土位置・注記: SD3 №19 文様: 櫛縞文(櫛齒3本)
- 14 出土位置・注記: SD3 №18 文様: 櫛縞文(櫛齒3本) 備考: 器内面発  
泡状に剥落
- 15 出土位置・注記: SD3 №18 文様: 櫛縞文(櫛齒3本) 備考: 器内面発  
泡状に剥落
- 16 出土位置・注記: SD3 №18 文様: 櫛縞文(櫛齒3本)
- 17 出土位置・注記: SD3 №18 文様: 櫛縞文(櫛齒3本か)
- 18 出土位置・注記: SD3 №19 文様: 櫛縞文(櫛齒3本), 付加条縞文  
(RS)
- 19 出土位置・注記: SD3 №18 文様: 櫛縞文(櫛齒3本), 付加条縞文  
(LR+2R)
- 20 出土位置・注記: 69住№7, 70住№1 文様: 櫛縞文(櫛齒3本). 付加  
条縞文(LR+2R) 備考: 脱土に白雲母細片を含む 器外面に炭化物  
付着
- 21 出土位置・注記: SD3 №18 器種: 織形土器(中・小型織錐形か)  
法量: 口径106 mm(残存率15%) 文様: 口唇・口縁部付加条縞文  
(RL+2L), 口縁部下端削み(指痕), 櫛縞文(櫛齒3本) 備考: 口縁  
部の羽状縞文は同一原体の複回転と横回転
- 22 出土位置・注記: SD3 №18 文様: 付加条縞文(RL+2L), 口縁部下端  
削み(棒状), 櫛縞文(櫛齒3本)
- 23 出土位置・注記: SD3 №18 文様: 口縁部下端削み(縞文原体), 櫛縞  
文(櫛齒3本, 不綱) 備考: 脱土に骨針含む, 器外面に炭化物付着
- 24 出土位置・注記: 80住№4 文様: 平行沈縞文(半截竹管) 備考: 密な  
弧文という文様からは、蓋形土器の可能性あり
- 25 出土位置・注記: SD3 №18 文様: 平行沈縞文(半截竹管) 備考: 脱土  
に骨針含む
- 26 出土位置・注記: SD3 №18 文様: 平行沈縞文(半截竹管) 備考: 脱土  
に骨針含む
- 27 出土位置・注記: 73住№19 文様: 平行沈縞文(半截竹管) 備考: 68  
住第10図9と同一個体. 脱土に骨針含む
- 28 出土位置・注記: SD3 №18 文様: 櫛縞文(櫛齒10本) 備考: 脱土に  
金雲母と骨針を含む, 大型の土器
- 29 出土位置・注記: SD3 №18 文様: 櫛縞文(櫛齒6本以上) 備考: 脱土  
に骨針含む
- 30 出土位置・注記: SD3 №18 文様: 櫛縞文(櫛齒6本) 備考: 脱土に金  
雲母と骨針を含む, 大型の土器
- 31 出土位置・注記: 80住№6, 83住№4 文様: 櫛縞文(櫛齒6本) 備考:  
脱土に骨針含む
- 32 出土位置・注記: SD3 №18 文様: 櫛縞文(櫛齒9本) 備考: 脱土に金  
雲母と骨針を含む, 大型の土器



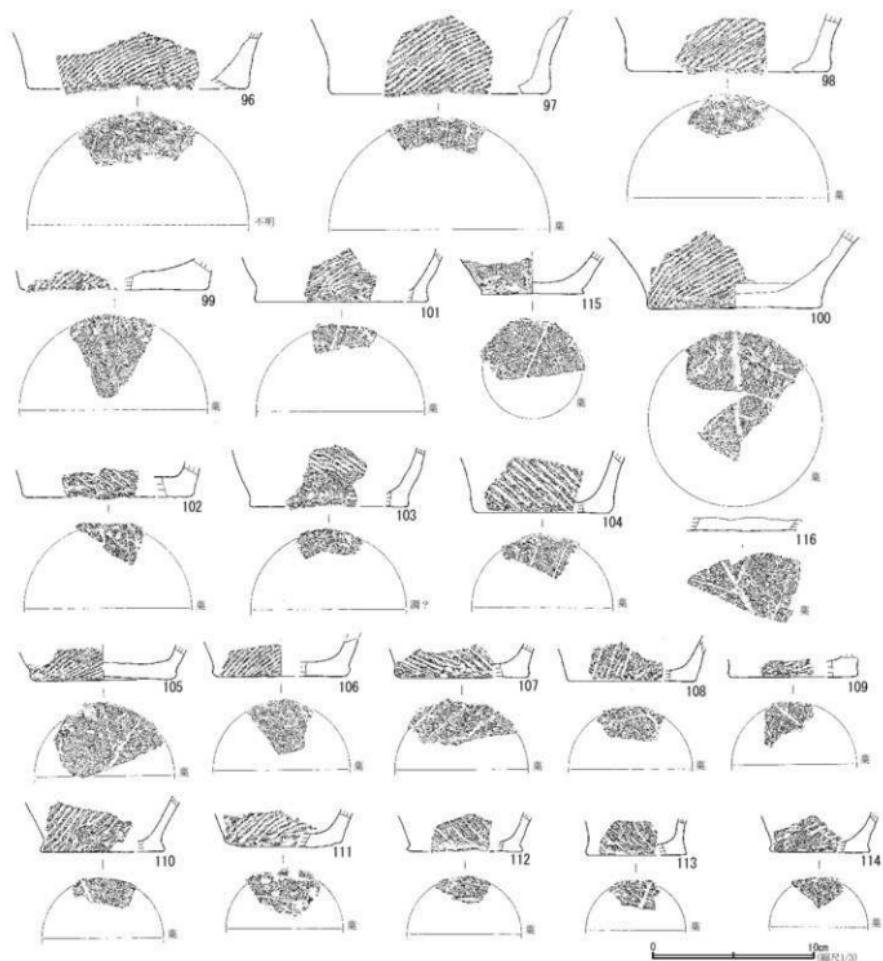
第14図 調査区出土の弥生式土器2

- 33 出土位置・注記:73住No.4 文様:櫛描文(櫛齒9本) 備考:68住第10  
図4と同一個体。胎土に金雲母と骨針を含む
- 34 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛齒6本か) 備考:胎土に  
骨針含む
- 35 出土位置・注記:SD3 No.18 器種:壺形土器(小型細頭形) 法量:最大  
径72mm(残存率13%) 文様:櫛描文(櫛齒8本以上) 備考:胎土に  
金雲母と骨針を含む
- 36 出土位置・注記:SD3 No.16・18 文様:櫛描文(櫛齒3本以上), 付加  
条繩文(LR+2R) 備考:胎土に白雲母細片を多量含む
- 37 出土位置・注記:70住No.2, SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛齒4本) 備考:  
胎土に骨針含む
- 38 出土位置・注記:SK13 No.3 文様:櫛描文(櫛齒7本) 備考:胎土に  
骨針含む
- 39 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛齒6本) 備考:胎土に金  
雲母と骨針を含む
- 40 出土位置・注記:71住No.2 文様:櫛描文(櫛齒4本) 備考:胎土に金  
雲母と骨針を含む
- 41 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛齒6本) 付加条繩文  
(LR+2R) 備考:大型土器
- 42 出土位置・注記:76住No.2 器種:壺形土器(大型) 法量:最大径160mm  
(残存率16%) 文様:櫛描文(櫛齒10本) 備考:胎土に金雲母と骨  
針を含む。器内面剥落、器外側に焼成後の穴あり
- 43 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛齒6本か) 備考:胎土に  
金雲母と骨針を含む
- 44 出土位置・注記:73住No.12, SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛齒5本) 備  
考:器内面剥落
- 45 出土位置・注記:73住No.5 文様:櫛描文(櫛齒4本) 備考:胎土に白  
雲母細片を多量含む
- 46 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛齒6本以上) 備考:胎土  
に金雲母と骨針を含む、器内面剥落。大型土器
- 47 出土位置・注記:69住No.3 文様:沈線文(範状工具) 備考:胎土に金  
雲母と骨針を含む
- 48 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:沈線文(範状工具) 備考:胎土に骨  
針含む。器内面剥落
- 49 出土位置・注記:76住No.4, SD3 No.18 文様:沈線文(範状工具) 備考:  
胎土に骨針含む
- 50 出土位置・注記: SD3 No.18 文様:沈線文(範状工具) 備考:器外側  
灰化物付着
- 51 出土位置・注記: SD1 No.4 文様:沈線文(範状工具), 付加条繩文  
(LR+2R) 備考:68住第10図1と同一個体。胎土に白雲母細片を多  
量含む
- 52 出土位置・注記:76住No.10, SK13 No.1 文様:口唇部付加条繩文  
(LR+2R), 隆帯刺み(指頭), 脚部繩文 備考:胎土に金雲母と骨針  
を含む
- 53 出土位置・注記: SD3 No.18 文様:口唇部付加条繩文(RL+2Lか), 隆  
帯刺み(指頭) 備考:胎土に金雲母含む
- 54 出土位置・注記: SD3 No.18 文様:隆帯刺み(指頭), 付加条繩文  
(LR+2R) 備考:胎土に骨針含む
- 55 出土位置・注記: SD3 No.18 文様:口唇部付加条繩文(RL+2R), 口縁  
部下端刺み(純文原体) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む



第15図 調査区出土の弥生式土器

- 56 出土位置・注記: SD3 № 18 文様: 口唇部付加条縦文(RL+2L), 口縁部下端削み(縦文原体)
- 57 出土位置・注記: SD3 № 18 文様: 口唇部付加条縦文(LR+2R), 口縁部下端削み(縦文原体), 脚部掲揚文か 備考: 器外面灰化物付着
- 58 出土位置・注記: SK13 № 1 文様: 口縁・脚部付加条縦文(RL+2L), 浅い施文, 口縁部下端削み(半截竹管状)
- 59 出土位置・注記: SD3 № 18 文様: 口唇・口縁部・脚部付加条縦文(LR+2R). 複合口縁は積上げが一層して余りを重ねた部分. その積上げは脚部施文後 備考: 脱土に金雲母含む
- 60 出土位置・注記: SD3 № 18 文様: 口唇・脚部付加条縦文(RL+2L)
- 61 出土位置・注記: SD3 № 18 文様: 口唇・脚部付加条縦文(LR+2R) 備考: 器外面灰化物付着
- 62 出土位置・注記: SD3 № 18 文様: 口唇部付加条縦文(LR+2R), 脚部縦文か 備考: 器外面灰化物付着
- 63 出土位置・注記: SK13 № 4 文様: 口唇部付加条縦文(RL+2L) 備考: 64と同一個体か
- 64 出土位置・注記: SD3 № 19 文様: 口唇部付加条縦文(RL+2L)
- 65 出土位置・注記: SD3 № 18 文様: 口唇部付加条縦文(RL+2L)
- 66 出土位置・注記: SD3 № 18 文様: 口唇部付加条縦文(LR+2R)
- 67 出土位置・注記: SD3 № 18 文様: 口唇部縦文(LRもしくはLR+2R) 備考: 脱土に石英粒を多量含む
- 68 出土位置・注記: 76 住 № 2 文様: 口唇部施文なし, 口縁部付加条縦文(LR+2R), 口縁部下端削み(指頭) 備考: 脱土に金雲母と骨針を含む
- 69 出土位置・注記: SD3 № 18 文様: 口唇部施文なし, 口縁部付加条縦文(RL+2L), 口縁部下端削み(指頭)
- 70 出土位置・注記: 69 住 № 2 文様: 口唇・口縁部付加条縦文(LR+2R), 口縁部下端削み(指頭) 備考: 脱土に金雲母と骨針を含む
- 71 出土位置・注記: SD3 № 18 文様: 口縁部付加条縦文(LR+2R), 口縁部下端削み(指頭) 備考: 口唇部施文不明
- 72 出土位置・注記: 76 住 № 3 文様: 口縁部付加条縦文(LR+2R), 口縁部下端削み(指頭) 備考: 脱土に石英粒を多量含む, 鉢形上器か
- 73 出土位置・注記: 76 住 № 2 文様: 口縁・脚部付加条縦文(LR+2R), 口縁部下端削み(指頭) 備考: 脱土に金雲母と骨針を含む
- 74 出土位置・注記: SK13 № 3 文様: 口縁部付加条縦文(RL+2L), 施文浅



第16図 調査区出土の弥生式土器4

- い)、口縁部下端削み(半截竹管状)、胴部付加条縄文(RL+2L) 備考:  
器外面炭化物付着
- 75 出土位置・注記:SD3 №18 文様:口唇・胴部付加条縄文(LR+2R)、口  
縁部下端削み(棒状) 備考:胎土に骨針含む
- 76 出土位置・注記:69 住№5 文様:口唇・口縁部付加条縄文(RL+2L)  
備考:器内面炭化物付着
- 77 出土位置・注記:69 住№2 文様:口唇・口縁部付加条縄文(LR+2R)
- 78 出土位置・注記:SD3 №18 文様:口縁部付加条縄文(LR+2R) 備考:  
口唇部施画不明
- 79 出土位置・注記:71 住№12 文様:口縁部付加条縄文(LR+2R)
- 80 出土位置・注記:SD3 №18 文様:口唇・胴部付加条縄文(LR+2R) 備  
考:胎土に骨針含む、単純口縁の鉢形土器か

- 81 出土位置・注記:SD3 № 18 文様:口唇・脣部付加条縄文(LR+2R) 備考:高环形土器と推定
- 82 出土位置・注記:SD3 № 18 文様:付加条縄文(RL+2L)
- 83 出土位置・注記:SD3 № 18 文様:付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む
- 84 出土位置・注記:69 住№ 4, SD3 № 18, 2 トレ № 16 文様:单節斜縄文(LR) 備考:大型土器
- 85 出土位置・注記:SD3 № 19 器種:壺形土器(小型) 法量:底径 87 mm(残存率 18%) 文様:付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に石英粒多量含む
- 86 出土位置・注記:SD3 № 18 器種:壺形土器(小型細頭形か) 法量:頭径 66 mm(残存率 27%) 文様:付加条縄文(LR+2R)
- 87 出土位置・注記:71 住№ 4-5, 73 住№ 5 器種:壺形土器(大型) 文様:付加条縄文(LR+2R, RL+2L) 備考:胎土に白雲母多量含む、羽状縄文、第 2 次調査区第 47 号住居跡の報告(色川 2008) 第 24 図 92 は、同一個体
- 88 出土位置・注記:SD3 № 18 器種:壺形土器(大型) 文様:付加条縄文(LR+2R, RL+2L) 備考:羽状縄文
- 89 出土位置・注記:SD3 № 18 器種:壺形土器(中・小型) 文様:付加条縄文(LR+2R) 備考:同一原体の腹回転と横回転による羽状縄文、器外側灰化物付着
- 90 出土位置・注記:SD3 № 18 文様:付加条縄文(LR+R か)
- 91 出土位置・注記:73 住№ 10 文様:付加条縄文(RL+L, 軸輪 1 段 3 条か)
- 92 出土位置・注記:SD3 № 20 文様:单節斜条縄文(RL)
- 93 出土位置・注記:SD3 № 18 文様:单節斜条縄文(LR)
- 94 出土位置・注記:SD3 № 18 文様:单節斜条縄文(LR) 備考:器内側剥落
- 95 出土位置・注記:SK13 № 2 器種:壺形土器か 文様:付加条縄文(RL+2L)
- 96 出土位置・注記:SD3P17 法量:底径 136 mm(残存率 18%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面不明 備考:胎土に白雲母細片を多量含む、器内側剥落
- 97 出土位置・注記:73 住№ 12 法量:底径 135 mm(残存率 15%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:器内側剥落
- 98 出土位置・注記:76 住№ 3 法量:底径 124 mm(残存率 12%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:胎土に金雲母含む、器内側剥落
- 99 出土位置・注記:SD3 № 18 法量:底径 116 mm(残存率 15%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:胎土に金雲母と骨針を含む
- 100 出土位置・注記:SD3P25 № 18 法量:底径 106 mm(残存率 25%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:胎土に白雲母細片を多量含む、器内側剥落
- 101 出土位置・注記:SD3 № 18 法量:底径 104 mm(残存率 13%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:器外側灰化物付着、器内側発泡状剥落
- 102 出土位置・注記:71 住№ 5 法量:底径 104 mm(残存率 13%) 文様:付加条縄文(RL+2L), 底面木葉痕
- 103 出土位置・注記:80 住№ 2 法量:底径 96 mm(残存率 14%) 文様:单節斜縄文(RL), 底面調整か
- 104 出土位置・注記:SD3 № 23 法量:底径 86 mm(残存率 19%) 文様:付加条縄文(RL+2L), 底面木葉痕 備考:器外側灰化物付着
- 105 出土位置・注記:SD3 № 19 法量:底径 86 mm(残存率 21%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:胎土に白雲母細片を多量含む、器内側灰化物付着及び変色
- 106 出土位置・注記:SD3 № 18 法量:底径 84 mm(残存率 17%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:器内側から破断面にかけて灰化物付着
- 107 出土位置・注記:SD3 № 18 法量:底径 82 mm(残存率 32%) 文様:付加条縄文(RL+2L), 底面木葉痕 備考:器外側灰化物付着、器内側変色
- 108 出土位置・注記:69 住№ 2 法量:底径 77 mm(残存率 17%) 文様:付加条縄文(RL+R), 底面木葉痕 備考:胎土に石英粒多量含む、器外側灰化物付着
- 109 出土位置・注記:SK13 № 1 法量:底径 77 mm(残存率 13%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕
- 110 出土位置・注記:SD3P28 法量:底径 75 mm(残存率 17%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕
- 111 出土位置・注記:69 住№ 2 法量:底径 70 mm(残存率 23%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕
- 112 出土位置・注記:SD3 № 18 法量:底径 70 mm(残存率 16%) 文様:付加条縄文(RL+L もししくは RL+2L), 底面木葉痕 備考:器外側灰化物付着、器内側変色
- 113 出土位置・注記:SD3 № 18 法量:底径 62 mm(残存率 17%) 文様:付加条縄文(RL+L か), 底面木葉痕
- 114 出土位置・注記:SD3 № 18 法量:底径 61 mm(残存率 15%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕
- 115 出土位置・注記:2 トレ № 17 法量:底径 62 mm(残存率 47%) 文様:底面木葉痕
- 116 出土位置・注記:69 住№ 2 文様:底面木葉痕 備考:胎土に金雲母と骨針を多量含む、器内側剥落、大型土器

### III 弥生時代の遺構と遺物

第17図

- 出土位置・注記:73住N3～5・13・28 時期:後期(十王台式) 器種:壺形土器(中・小型) 文様:撫描文(撫歎4本)、付加条縄文(L-Z, R-S), 隆帯3条(指頭押圧)
- 出土位置・注記:71住N6・5 時期:後期(十王台式) 器種:壺形土器(大型) 文様:撫描文(撫歎4本) 備考:胎土に金雲母を含む
- 出土位置・注記:表採N3 時期:後期(十王台式) 器種:壺形土器 文様:撫描文(多条か) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む
- 出土位置・注記:SD3・N18 時期:後期(十王台式) 器種:壺形土器(中・小型) 文様:撫描文(撫歎4本) 備考:胎土に金雲母を含む
- 出土位置・注記:73住N3 時期:後期(十王台式) 器種:壺形土器(中・小型) 文様:付加条縄文(R×R)
- 出土位置・注記:5トレス9 時期:後期(十王台式) 器種:壺形土器(中・小型) 文様:付加条縄文(R×R), 底面布目痕

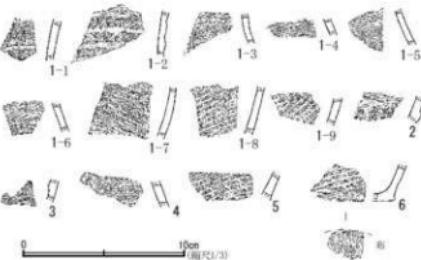
土器の他には、炉石と判断される焼けた礫が出土している。第2次調査(色川2008)で検出された後期前半の住居跡には炉石の付属がなく、「十王台式」を伴う43・59・60号住居跡には炉石が付属する。第1次調査(井上1994)の第5・7・11・16・18・21号住居址など古墳時代前期の住居跡にも、付属が認められる。「十王台式」を伴う古墳時代前期の住居に付属した炉石が抜去されたものと考えられる。

第18図

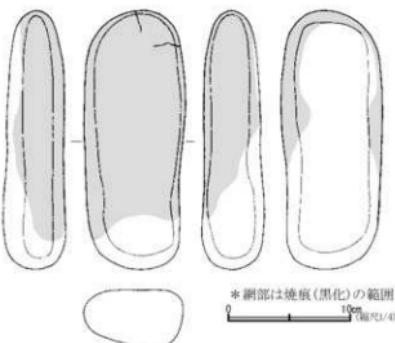
- 出土位置・注記:SD387 器種:炉石 石材:砂岩 法量:長さ212mm, 幅83mm, 厚さ50mm 重量:1211.1g 備考:焼痕(黒化, 龜裂)あり, その分布から裏面を掲げて燃焼されたことが推定される

### 参考文献

- 井上義安 1994 「郡河添市鷹ノ巣道路」郡河添市鷹ノ巣道路発掘調査会  
色川順子 2008 「弥生・古墳時代前期の遺構と遺物」「鷹ノ巣」 第2次  
調査の成果—[公]文化財満意報告第37集 ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 9-62頁



第17図 調査区出土の弥生式土器



第18図 調査区出土の石器

### 3 鷹ノ巣遺跡における弥生時代後期前半の土器群について -「鷹ノ巣式土器」の設定-

#### 1 はじめに

鷹ノ巣遺跡の発掘調査で出土した弥生式土器のうち、第35・47・55・68号住居跡(第19図)を形成した後期前半の土器群について、属性を分析する。その対象は、報告書に掲載された資料に限定し、同一個体を1点と数えた<sup>註1</sup>448点である。内訳は、住居跡の第35号が29点、第47号が121点、第55号が46点、第68号が62点、遺構外の190点となる。方法は、武田遺跡群及び船塚遺跡群において実践した「十王台式」の分析(鈴木2001)に準じる。

#### 2 胎土の分類

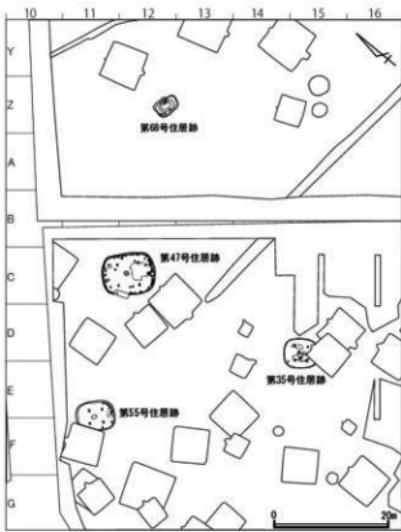
土器群の胎土を観察すると、一部に明瞭な特徴として金雲母(鉱物名称としては「黒雲母」)、骨針(海绵動物の骨格の化石)、銀雲母(鉱物名称としては「白雲母」)の含有が認められた。このうち金雲母と骨針は同一の胎土に観察されることが多く、銀雲母と骨針がともに観察されることはない。金雲母と骨針にはそれぞれの含有量に多寡があるのに対して、銀雲母は細片が多量に含まれている。破片の大きさや、表面だけの観察で、金雲母あるいは骨針の一方もしくは両方が観察されないことにも注意が必要である。含有物には、粘土や混和材の由来する地質的な環境が異なることを想定し、胎土を大きく3つに分類する。

胎土A 胎土に金雲母、骨針を含有する。

胎土B 胎土に銀雲母を含有する。

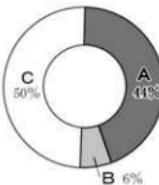
胎土C 胎土に以上の含有物が認められない。

土器群の全体(448点)に占める胎土A～Cの比率は、胎土Aが44% (198点)、胎土Bが6% (25点)、胎土Cが50% (225点)である(第20図1)。底部(88点)のみでも、胎土Aが49% (43点)、胎土Bが6% (5点)、胎土Cが40点(45%)となる(第20図2)。胎土Aが44～49%、胎土Cが45～50%とほぼ等しく、胎土Bは6%を占めると捉えられる。鷹ノ巣遺跡の近在で獲得される材料で土器が製作されたとすれば、それは胎土Cに相当するはずであり、胎土A・Bは、他所で製作された土器が持ち込まれたことを考えなければならない。

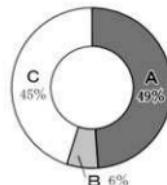


第19図 鷹ノ巣遺跡における弥生時代後期前半の遺構分布

1. 全部 (n=448)



2. 底部 (n=88)

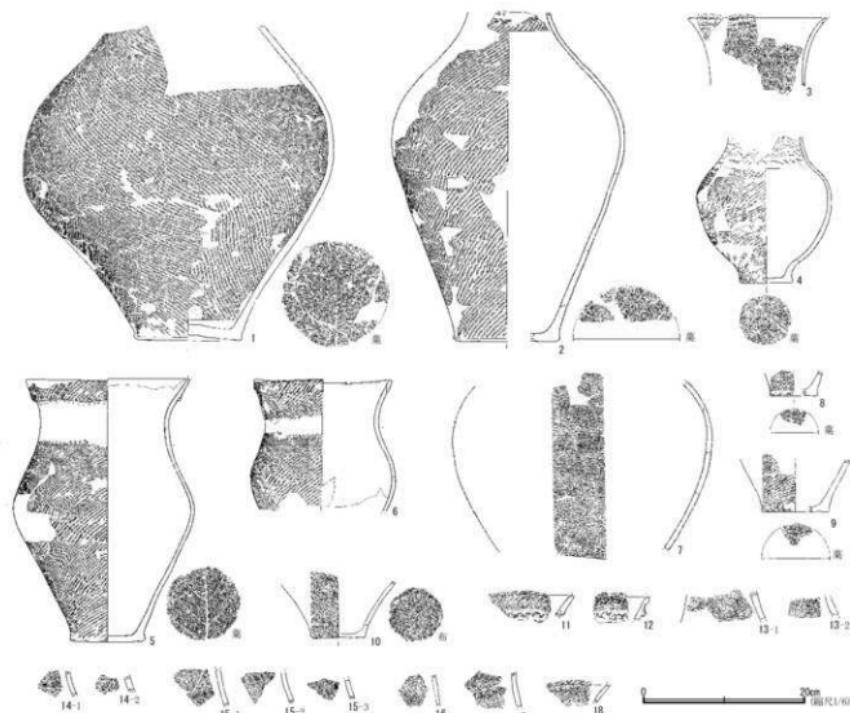


(凡例) A 胎土A B 胎土B C 胎土C

第20図 胎土A～Cの組成

#### 3 鉢形・高環形土器の抽出

鉢形として抽出された土器は5点(第21図18、第22図50、第25図23、第27図25)、高環形として抽出された土器も5点(第22図23、第27図26～28)であった。数量は、4基という住居跡数にはほぼ相応している。これらは、胎土A及び胎土Cであり、胎土Bは見られない。鉢形は、第68号住居跡に全形が復元された土器(第25図23)がある。単純口縁が特徴的で、体部は繩文。これと同じ構成の口縁部破片3点が鉢形と推定された。また、



第21図 鷹ノ巣遺跡第35号住居跡出土土器抄録(色川2008より引用)

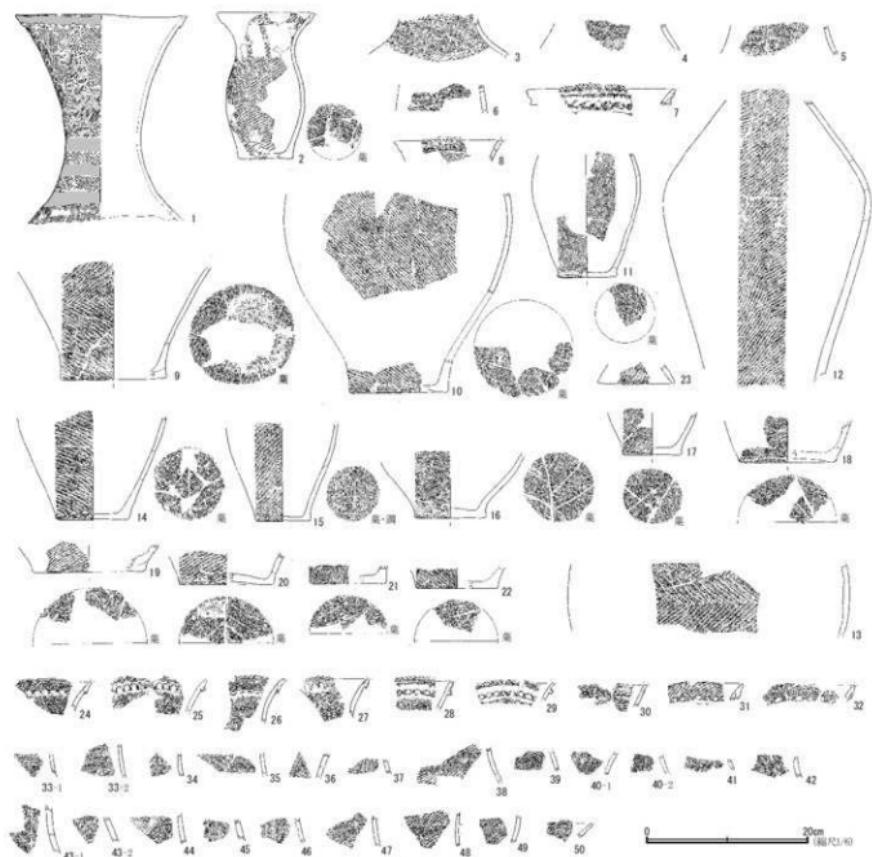
複合口縁で、体部が無文という構成(第27図25)もある。高坏形は、4点が口縁部、1点が脚部の破片であり、坏と脚との接合部を欠く。複合口縁(口縁部成形技法II)の下端を指頭で押圧し、器内面の口唇部直下に櫛描波状文が施された土器(第27図26)が1点。他は最上段の積上げ形を複合口縁(口縁部成形技法I)として、体部外面はいずれも繩文である。

これらを抽出した残りの大部分が、壺形あるいは甕形土器ということになる。なお、鉢形及び高坏形については、土製蓋として使用されたものがあることについて指摘(鈴木2017)してあり、この視点からは、下向きの弧状文が密に施された破片(第27図29)にも土製蓋の可能性があることを付記しておく。

#### 4 壺形・甕形土器の法量と形態

壺形と甕形を分離して分析できないのは、いずれであるのかを判断できない破片が多いことによる。「十王台式」の分析では、壺形と甕形を一括して壺形土器と呼び、形態を「細頸形・中頸形・太頸形」に分類した。その基準は、「細頸形 頸部直径が胴部直径の約2分の1かそれ以下。中頸形 頸部直径が胴部直径の約3分の2。太頸形 頸部直径が胴部直径の約4分の3かそれ以上。」というもの。細頸形は非煮沸具の壺形、太頸形は煮沸具の甕形に相当する形態ではあるが、「十王台式」の煮沸具は、これらの中間形態を典型とし、形態どうしが漸移的であった。鷹ノ巣遺跡の土器群のうち、頭部と胴部の直径が計測された資料は、細頸形寄りの比率を示す一群と、太頸形寄りの比率を示す一群に分離されることから、これが明らかなものについては、壺形、甕形とそれぞれ表記する。

壺形と甕形の土器は、器高により、大型・中型・小型の



第22図 鷹ノ巣遺跡第47号住居跡出土土器抄録(色川2008より引用)

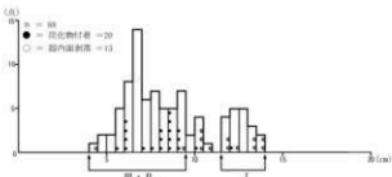
3つの法量に大きく分類される。但し、器高が明らかな資料が少ないため、区分は大略的である。

**大型(I)** 器高が50cm以上のもの。完形はないが、第21図1(残存高386mm)・2(残存高405mm)、第24図1(残存高480mm)などは全て、残存部位の計測値から、器高50cmを超えることが確実である。

**中型(II)** 器高が30cm前後のもの。第21図5(器高322mm)、第24図2(器高261mm)が相当する。

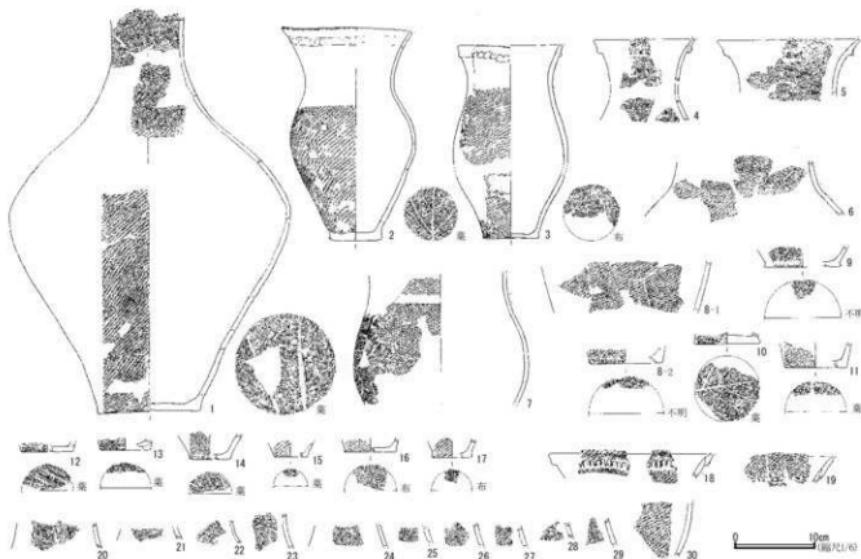
**小型(III)** 器高が20cm前後のもの。第22図2(器高180mm)、第24図3(器高236mm)が相当する。

大型のほとんどは壺形であるが、頭部の括れが弱く壺



第23図 壺形・甕形土器の底径分布

形と推定される土器(第25図39)も少数が見られる。中・小型のほとんどは甕形であるが、頭部の括れが強く壺形と推定される土器(第21図4)も少数が見られる。器高が明らかでないものについても、器高と部位直径



第24図 鷹ノ巣遺跡第55号住居跡出土土器抄録(色川2008より引用)

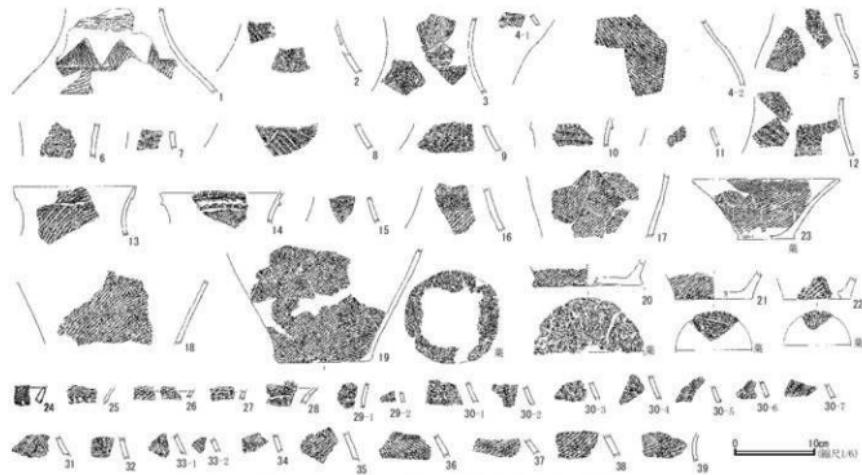
の対応関係から、法量が推定される。特に、大型と中・小型とでは、底部直径を指標として分別される。底部直径を推定し得た個体数は88点であった。これらの底部直径の分布は、6.6～7.0cmを頂上としてほぼ正規分布を示す(第23図)。11.0cmで分布が断絶することから、4.1～11.0cmの範囲の69点を中・小型、11.6～14.0cmの範囲の19点を大型と見ることができる。この場合、大型の比率は22%となる。但し、中・小型のほとんどが煮沸具の壺形であることから、その使用痕跡である炭化物の付着を勘案すれば、9.5cmまでが中・小型の確実な範囲と見られる。逆に、大型の壺形に特徴的な器内面の剥落を勘案しても、ほぼ同様な範囲が想定されてくる。したがって、中・小型の比率は70～78%、大型の比率は22～30%と幅をもたせて捉えておきたい。大型の底部に炭化物の付着が認められたことは、頭部破片から推定した大型の壺形の存在を裏付ける。ただ、その個体数は少なく、大型はほぼ壺形と見做してよい。一方、中・小型の底部に炭化物の付着が認められないことは、中・小型に壺形も含まれるが、部分的な破片からは判断できないことが大きく関与している。

大・中・小型という法量の組合せは、胎土A～Cのいずれにもあり、煮沸具と非煮沸具が組成する。大型壺形の形態には、球胴形と長胴形の2つがあり、胎土Aには球胴形(第24図1)と長胴形(第21図2、第22図12)が、胎土Bには球胴形(第21図1)が確認された。第35号住居跡の球胴形(第21図1)には、「被籠土器」と呼ばれる痕跡が残されている。

## 5 口縁部の成形と文様

壺形・壺形土器の口縁部は、全て複合口縁である。その成形の技法には大きく2つがあり、これを口縁部成形技法I・IIと呼ぶ。さらに、鷹ノ巣遺跡では、特殊な事例<sup>33</sup>が見られたので、これを口縁部成形技法IIIとして付け加えておきたい。

**口縁部成形技法I 積上げ成形の最上段をそのまま複合口縁とする(第26図1)。**器外面の継ぎ目が残され、これが沈線として口縁部を区画する。成形は、頭部から連続しており、頭部を施した縄文の一部が無文の口縁部にかかることがある。複段は2段のものが1点(第24図2)あり、積上げ2段分の継ぎ目が残される。



第25図 鷹ノ巣遺跡第68号住居跡出土土器抄録

**口縁部成形技法II** 積上げ成形の最上部と重複するように口縁部を貼付し有段の複合口縁とする。口縁部幅の半分ほどが重複するもの(第26図2)から、大部分が重複するもの(第26図3)まである。一周させた口縁部の端部どうしが重ねて残されたものも見られた(第26図6)。横位の撫で調整は、重複部分の接着のために、押圧が加えられて窪みが生じる。この窪みにより、口縁部の縄文に施文の浅いものがある。成形は、頭部と不連続で、頭部の施文が完了した後であり、複合口縁の有段部に頭部文様の一部が入り込んでいる。複段は2段のものが2点(第27図13・14)あり、下段の施文の後に上段が成形されている。下段の一部に上段が重複するため、下段の幅は狭くなる。

**口縁部成形技法III** 積上げ成形の最上部が口唇部であり、これに重複しない貼付で有段の複合口縁が作出される(第26図4・5)。幅2cmほどの隆帯の下端を有段部として1段(4)の、上下の両端を有段部として2段(5)の複合口縁を模倣したという印象である。3個体分が確認されており、そのうち2個体は、胎土・焼成・色調、口縁部下端の刻み方ともよく似ている。

口縁部成形技法I・IIは、「十王台式」の成形技法I・IIのうち。「成形技法II」接合部の断面が内削ぎ状を呈しており、外側から内側に押し当てるようにして胎土を接

合したことが考えられる(鈴木2001)に相当し、これは全体の成形技法を反映したものと考えられる。「成形技法I」接合部の断面が内削ぎ状を呈しており、内側から外側に押し当てるようにして胎土を接合したことが考えられる(鈴木2001)は認められない。

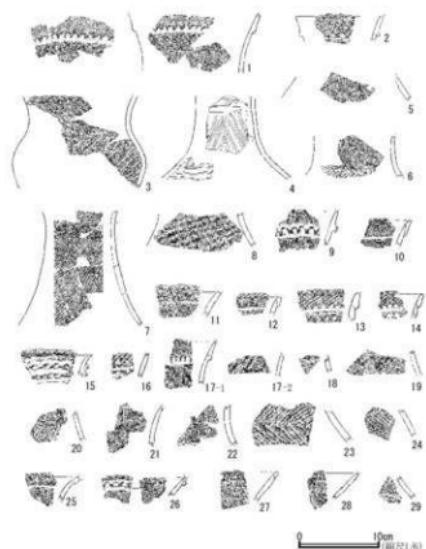
複合口縁は1段のものが圧倒的に多く、複段は2段が口縁部成形技法Iに1点、口縁部成形技法IIに2点、口縁部成形技法IIIに1点があるに過ぎない。1段の口縁部幅は、15~20cmに集中する。25~30cmの幅広の複合口縁はごく僅かであり、口縁部が縄文に限られている。

口縁部の文様は、無文か縄文のいずれかである。これが判断できる口縁部破片は144点であり、無文が83点、縄文が61点であった。胎土A・Cには無文と縄文があるが、胎土Bには縄文のみで無文が見られない。

口縁部の上端すなわち口唇部が残存する破片は120点であり、口唇部に縄文が施文されたものが102点で85



第26図 複合口縁の成形



第27図 豊ノ巣遺跡遺構外出土器抄録

(色川 2008・2013より一部引用)

%を占め圧倒的に多い。他は、施文がないものが12点で10%、不明が6点で5%である。縄文は全て回転施文されており、縄文原体や、竪・棒状の工具による刻みは見られない。

口縁部の下端が残存する破片は138点であり、ここに刻みが施されたものがある。刻みがあるのは、92点の67%。46点の33%には刻みがないが、これには口縁部成形技法Iの口縁部が含まれており、口縁部成形技法IIの口縁部は、刻みが施されることを典型としている。刻み(92点)は、指頭によるものが60点で64%を占める。そのうちの2点(第22図26、第27図16)は、口縁部の下端付近を沈線で区画し、その区画内に刻みが施されている。口縁部無文(第22図26)が胎土A、口縁部縄文(第27図16)が胎土Bである。これは、「梯子状刻み隆帯」(鈴木2016)からの変化として注意すべき資料であろう。口縁部無文には、指頭で複合口縁の下端をめくり上げるような刻み方が特徴的であり、爪痕が残るもの(第26図3)もある。これは胎土A・Cに特有な刻み方ということになる。指頭以外では、縄文原体による刻みが10点で11%、竪・半截竹管・棒状の工具による刻みが32点で35%

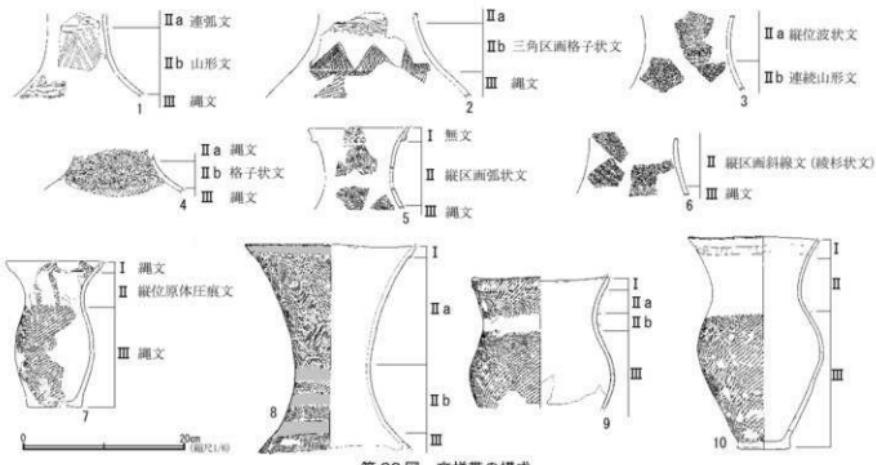
を占める。これら原体・工具による刻みは胎土A・Cのみで、胎土Bには見られない。胎土Bには専ら指頭による刻みが施されている。

## 6 頭部の文様

壺形・甕形土器の器外面を横位に分割して構成される文様帯については、その位置から口縁部を文様帯I、頭部を文様帯II、胴部を文様帯IIIと記号化する。文様帯IIは、さらに分割されて二段に構成されるものがあり、その上位を文様帯IIa、下位を文様帯IIbと呼ぶ。描文等の文様が施文された土器のうち文様帯IIa・IIbの構成が推定されたのは、いずれも大型の壺形(第28図1~4)である。第55号住居跡の第24図1も、上位には縦位の波状文、下位には横位の波状文が施文されている。一方、分割されない文様帯IIの構成は、中・小型の甕形(5~7)に推定された。縄文のみが施文された土器にも、大型の壺形に文様帯IIa・IIb(8)、中・小型の甕形に文様帯II(10)に相当する無文帯の構成が見られる。中・小型の甕形には、頭部に幅狭の無文帯を介在させた文様帯IIa・IIbの構成(9)もある。区画文については、区画内の充填文との相関が認められたことから、充填文の記述を先行させる。

**範描沈線文** 先端の鋭利な範状工具で施文された單線により文様が構成される(第28図2・4・6)。文様の形象には、右傾と左傾の集合沈線を重複させた格子状文(第21図14、第22図3・38~42、第24図26・27、第25図11)と、右傾と左傾の斜線文を交互に配置した綾杉状文(第22図4、第24図29、第25図12)とがある。格子状文は、縦区画の有無があり、縦区画により無文部が組み込まれる(第22図40~42、第24図26)。また、三角区画に充填されることもある(第25図1)。綾杉状文は、右傾と左傾が縦区画で区分されている。格子状文の1点(第22図3)のみが胎土B、他は全て胎土A・Cである。

**平行沈線文** 2本の沈線が同時に施文された平行沈線文により文様が構成される。沈線間の断面がD字状を呈することから半截竹管状の工具と判断されるものがほとんどであるが、2本の範描沈線のよう印象の平行沈線文(第25図9)が1点のみ見られた。文様の形象には、連弧文(第22図6・29)、山形文(第21図15)、波状文(第25図9、第27図3)と、山形文の変異であろうか、三



第28図 文様帯の構成

角区画に斜線を充填した構成(第25図8)もある。連弧文は、上向き(弦の位置が上にくる)の弧のみ。波状文は、縦区画を伴い、波形が大振りである。胎土Bは認められず、全て胎土A・Cである。

**櫛描文** 3本以上の沈線が同時に施された櫛描文により文様が構成される(第28図1・3・5)。櫛歯数には、3~14本前後までの変異がある。櫛歯数6本以上を多条櫛として一括し、3本櫛歯、4・5本櫛歯、多条櫛歯の3つに分けて文様の形象を比較する。

3本櫛歯による櫛描文の形象には、連弧文(第21図3・4、第22図28-33、第25図6・7・29、第27図4・10~12)、山形文(第22図36・37、第24図24・25、第25図30、第27図4)が多い。文様帶IIa・IIbの構成では、文様帶IIaが連弧文、文様帶IIbが山形文という組合せが確認される(第28図1)。波状文(第25図10、第27図21)と、山形文の変異であろうか。三角区画に斜線を充填した構成(第27図8)もあり、これらは、平行沈線文による文様の形象に共通する。但し、波状文には、三角区画に斜位で充填された構成(第25図2)が見られる。他には、縦位直状文(第22図5)、縦区画弧状文(第24図4)がある。連弧文には、上向きと下向き(弦の位置が下にくる)の弧があり、上向きの弧が多いのに対して、縦区画弧状文は、下向きの弧に限られている。

4・5本櫛歯による櫛描文の形象には、波状文(第21

図16、第25図33~35)、連続山形文(第27図19)、縦区画弧状文(第22図43)があり、波状文には、縦位波状文が2点含まれている。部分的な破片ながら、縦位直状文もあるらしい。縦区画弧状文はこれも下向きの弧である。

多条櫛歯による櫛描文の形象には、波状文(第21図13~16、第22図24~27、第24図1・5・6、第25図2・3・32、第27図1)、連続山形文(第22図44、第25図3・31、第27図5・6・19)、縦位直状文(第22図45・46、第24図20~23)があり、縦位波状文(第21図13、第22図24、第25図2・3・32)が横位の波状文とはほぼ同等に含まれている。波状文に縦区画が伴わないこと、波形が大振りでないことも、3本及び4・5本櫛歯とは異なる。なお、植物の茎断面が施工具と推定される刺突文が3点に認められ、うち2点は同一個体である(第24図20、第25図31、第27図20)。刺突文のみで文様が構成されることなく、多条櫛歯による櫛描文のみに付加されている。いずれも大型の壺形が推定され、胎土Bは認められず、胎土Aと胎土Cが1点ずつである。

以上のことから、4・5本櫛歯という中間領域を挟みながら、3本櫛歯と多条櫛歯による櫛描文には、文様の形象に異なりを認める。3本櫛歯は、上向きの連弧文、山形文、縦区画を伴う横位の波状文を、多条櫛歯は、縦区画を伴わない横位の波状文、縦位波状文、連続山形文、

縦位直状文を典型とする。さらに、下向きの弧に限られる縦区画弧状文、三角区画への充填は、3本櫛歯にのみ出現している。また、3本櫛歯と多条櫛歯には、歯数だけでなく工具の構造が異なることも想定される。3本櫛歯は、3本とも同じ太さの沈線が等間隔に並ぶのを典型とするが、多条櫛歯は、沈線の太さと間隔が不揃いで、櫛歯の先削れが細かい擦痕として出現し条数の決定が困難なものも少なくない。3本櫛歯は、ほとんどが胎土A・Cであり、これも平行沈線文に共通する。

**縄文原体压痕文** 縄文原体を押圧した压痕文により文様が構成される(第28図7)。压痕文は、縦位直状(第22図2・47、第25図5、第27図17)であり、間隔が均等ではないが、1条を単位とするように窺える。横位の压痕文が1点(第27図18)のみあり、これは、胴部との区画文に相当する。胎土Aは認められず、胎土Bが1点、他は胎土Cである。

いずれにも、充填と同じ工具で、頭部の縦区画及び横区画、三角区画が施文されることを認める。範描沈線文の格子状文と綾杉状文は、縦区画も範描沈線文であり、文様帶II a・II bの構成が推定される破片(第24図26)では、横区画も範描沈線文で施文されている。平行沈線文についても櫛描文についても、これは同じである。縦区画は、範描沈線の綾杉状文が1条区画に限られるのに対して、平行沈線文及び3本櫛歯の櫛描文には、1条区画とともに間隔を空けた2条区画が見られる。横区画も、範描沈線文が1条区画に限られるのに対して、平行沈線文及び3本櫛歯の櫛描文には、1条区画とともに間隔を空けた2条区画が見られる。4・5本櫛歯と多条櫛歯の横区画は、密集した施文で櫛描の太い横帶(第25図1・3)を構成することに特徴がある。

頭部と胴部の区画は、櫛描文のうち3本櫛歯の連弧文・山形文(第27図4)、縦区画弧状文(第24図4)の土器が、頭部の下端に横位直状の2条、3条区画を付属する。これに対して、範描沈線文、平行沈線文、多条櫛歯による櫛描文、縄文原体压痕文は、ほとんどが区画文を欠き、無文と縄文の境界をそのまま頭部と胴部の区画としている。

## 7 胴部の縄文

縄文は、口唇部、口縁部、胴部に施文される。それぞ

れが異なる原体で施文されることはなく、胴部を施文した原体で、口唇部、さらには口縁部が施文されることが普通である。その縄文原体を観察した306点は、付加条縄文が297点で97%、単節斜縄文が7点で2%、不明が2点で1%であった。付加条縄文には、第2種及び第3種と認められるものは含まれておらず、ほぼ全てが第1種と見られる。そのうち、付加条第1種付加2条と判断されたものは282点であるのに對して、付加条第1種付加1条は、確実に判断されたものが5点、可能性のあるものが5点に過ぎなかった。つまり、付加条第1種付加2条が縄文の典型であり、これに付加条第1種付加1条と単節斜縄文が伴う。なお、これらの縄文に結節文は見られない。

施文の構成は、斜行が典型ではあるが、羽状が僅かに認められた。羽状を構成する施文には2つの方法がある。1つは、同一の縄文原体で横位と縦位に回転方向を変えたもの(第25図33、第27図24)で、口縁部(第27図2)の羽状もこの方法による。もう1つは、最終段の然りの方向が異なる2つの縄文原体を交互に施文したもの(第22図13、第27図23)で、第47号住居跡と遺構外から1個体分が検出されている。「十王台式」の羽状縄文と同じ方法であり、これは胎土Bで大型の巻形に出現している。

## 8 底面痕跡

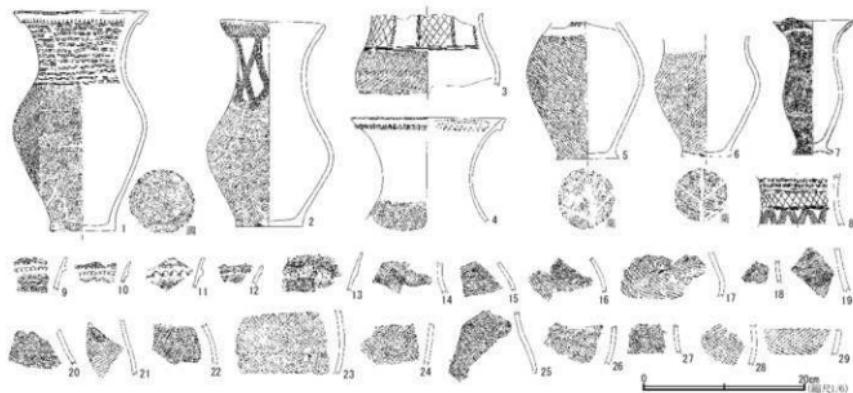
底部の底面痕跡には、木葉痕と布目痕があり、これに調整の痕跡が加わることもある。「十王台式」に特徴的な砂痕は認められなかった。底部88点のうち、不明とした4点を除く84点の底面痕跡は次の通り。

**木葉痕** 78点あり、そのうち1点は調整痕が複合する。胎土A・C、大型・中型・小型のいずれにも認められる。

**布目痕** 4点ある。胎土Aの中・小型にのみ認められる。

**調整痕** 3点あり、そのうち1点は木葉痕が複合する。胎土A・Cの中・小型に認められる。

底面痕跡の比率は、木葉痕92%、布目痕5%、調整痕3%であり、木葉痕が圧倒的に多い。胎土Aにはごく少数ながら布目痕と調整痕が組成するが、胎土Bは全て木葉痕である。なお、鉢形土器(第25図23)の底面痕跡も木葉痕である。



第29図 鷹ノ巣遺跡第11号住居跡出土土器抄録(井上和1980より引用)

#### 9 「鷹ノ巣式土器」

鷹ノ巣遺跡の土器群について、属性を分析した結果を簡略書きで概説する。胎土はA～Cに分けられるが、以下は総体としての属性である。

1. 器種組成 ほとんどが壺形と壺形であり、他に鉢形、高环形が組成する。

2. 壺形・壺形の法量 壺形と壺形には、大型・中型・小型があり、大型はほとんどが壺形、中・小型はほとんどが壺形で占められる。中・小型の壺形が70～78%に対して、大型の壺形は22～30%を示す。

3. 文様帶の構成 大型の壺形は、頭部の文様帶が横位に分割される文様帶II a・II bの構成であるに対して、中・小型の壺形は分割されない文様帶IIの構成を典型とする。縄文のみが施文された土器には、頭部全体を無文帶とするものと、頭部の下位に無文帶が設定されるものがある。

4. 口縁部 壺形と壺形の口縁部は、複合口縁で、縄文と無文がある。口縁部下端は、指頭による刻みを典型とする。

5. 頭部の区画文 頭部文様帶内の横区画及び縦区画は、充填文と同じ工具で施文される。

6. 頭部の文様 頭部の文様は、範描沈線文、平行沈線文、縄描文、縄文原体圧痕文のいずれかで構成される。

7. 文様の形象 範描沈線文に格子状文・綾状文、平行沈線文及び3本縄の縄描文に連弧文・山形文・縦区画波状文・縦区画弧状文、多条縄の縄描文に波状文・連続

山形文・縦位直状文が対応する。連弧文は上向きが主体であり、多条縄の縄描文では、縦位の波状文が特徴的である。3本縄の縄描文が施文された大型の壺形は、文様帶II aが連弧文、文様帶II bが山形文という構成を典型とする。

8. 横位区画文 頭部と胴部の境界の区画文は、3本縄の縄描文にのみ認められる。

9. 縄文 縄文は、付加条第1種付加2条が典型であり、付加条第1種付加1条と単節斜縄文がわずかに伴う。斜行縄文が典型であるが、羽状縄文が極わずかに含まれている。同一の縄文原体の回転方向を変える施文と、異なる縄文原体の交互施文がある。

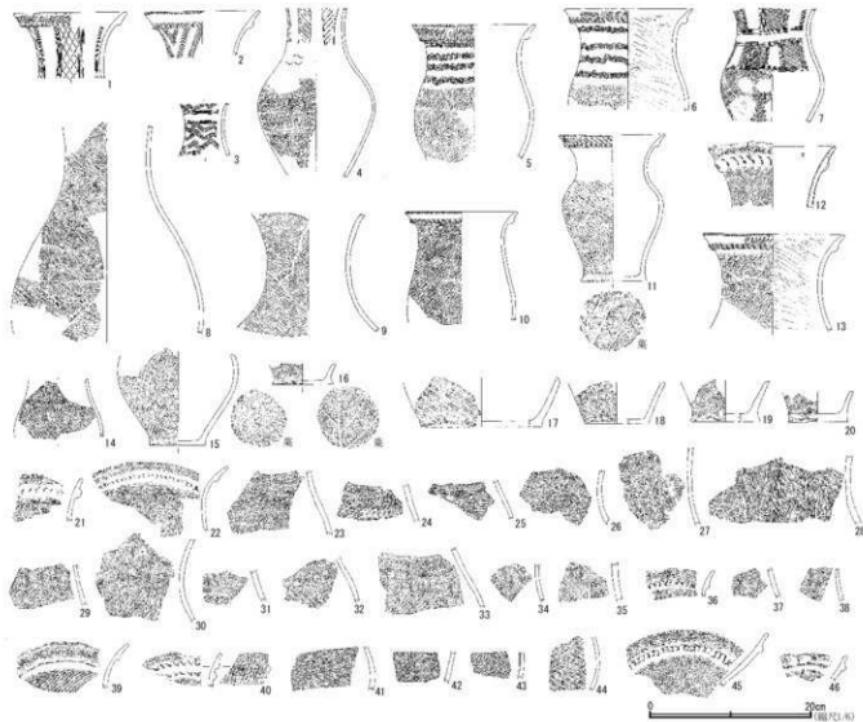
10. 底面痕跡 底面痕跡は、木葉痕が典型であり、わずかに布目痕と調整痕が認められた。

現在まで、これらの属性を充たす土器型式は設定されておらず、鷹ノ巣遺跡の土器群を「鷹ノ巣式」と呼んで検討に備えたい。

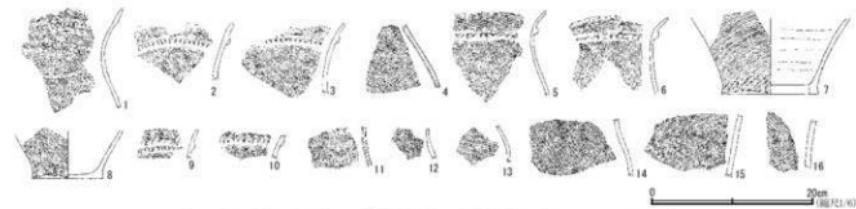
#### 10 「鷹ノ巣式」と「鷹釜式」

「鷹ノ巣式」の属性を多分に共有する土器型式に「鷹釜式」がある。「鷹釜式」は、鈴木正博により1982年に設定された(鈴木正1982)。大洗町鷹釜遺跡(井上和1980)第11・30・40号住居跡の土器群を基準として、土器群の属性の特徴は、次のようにまとめられている。

「H-1: 多条縄目文土器の定着……東中根式・長岡式の縄歯数を越える原体によって描かれている。文様は格子



第30図 鮎釜遺跡第30号住居跡出土土器抄録(井上義1980より引用)



第31図 鮎釜遺跡第40号住居跡出土土器抄録(井上義1980より引用)

目文・横走波状文が主となるらしい。連續山形文の例もある。多条でない一般的な歯齒数は3~4本である。

H-2:頭部文様帶は多段化せず、充填の例が多い。

H-3:縦区画充填格子文及び縦区画斜線文の定着……縦区画文と内部充填文との間に原体が使いわけられる場合が屢々ある。

H-4:櫛描述弧文土器の僅少性

H-5:頭部無文帶土器の定着……頭部を無文帶とする繩紋施文には2種の定着がみられる。1つは口縁部下より無文帶とするものであり、他は、口縁部下に繩紋帶を配し、更にその下を無文帶として胴部の繩紋帶に至るものである。

H-6: 縄紋のみの土器に於ける羽状手法の定着……特徴的な羽状手法である。即ち、一般に十王台式の羽状手法というと、体部に羽状縄文を施すのであるが、「鷂釜式」では体部は斜行縄文となっている。斜行の向きを違えるのは、口縁部と体部に於いてである。

H-7: 縄紋は附加条第1種の斜行縄文を主体とする。」

第11・30・40号住居址の土器群(第29～31図)には、遺跡に重複する「十王台式」までの破片も含まれており、全ての破片を「鷂釜式」と見做すことはできない。また、報告が実測・拓影図のみで観察の記載が欠落することから、例えば櫛歯数について正確に判断できないものもあるが、「H-1～7」の指摘も含め、「鷹ノ巣式」と「鷂釜式」の異同について、前項1～11の属性を検討する。

1. 器種組成 鷂釜遺跡にも高环形(第30図45)、鉢形(46)と見られる破片があり、組成は共通すると考えられる。但し、鷂釜遺跡の壺形・壺形には、中頭形(第29図1・2、第30図11)の形態が見出せる。

2. 壺形・壺形の法量 大型の壺形が確認できないものの、鷂釜遺跡でも大型のほとんどが壺形、中・小型のほとんどが壺形で占められる。

3. 文様帶の構成 鷂釜遺跡でも大型の壺形は文様帶Ⅱa・Ⅱbの構成(第29図8・20、第30図26～28)、中・小型の壺形は文様帶Ⅱ(第29図1・2、第30図5・6・22、第31図1)の構成を典型とする。「H-2」の指摘は、壺形についてのものなのであろう。但し、壺形にも文様帶Ⅱa・Ⅱbの構成(第30図7)は見出せる。「H-5」の指摘の通り、頭部全体を無文帶とするもの(第29図4、第30図11)と、頭部の下位に無文帶が設定されるもの(第29図21、第30図14)がある。なお、鷂釜遺跡では、体部全体に縄文が施文された土器も確認できる。

4. 口縁部 鷂釜遺跡も複合口縁で、縄文と無文がある。口縁部下端は、指頭による刻みを典型とする。

5. 頭部の区画文 「H-3」の指摘の通り、鷂釜遺跡では、範描沈線文の充填に、範描沈線文ではなく櫛歯文の縦区画文(第29図3、第30図1・7)が採用されている。但し、全てではなく、範描沈線文による縦区画文(第30図4)もある。

6. 頭部の文様 鷂釜遺跡はほとんどが、範描沈線文、櫛歯文のいずれか、あるいは組み合せで構成される。平行沈線文は1点のみで、縄文原体圧痕文は認められない。

7. 文様の形象 鷂釜遺跡の範描沈線文には格子状文(第29図3、第30図1・7)と、中間に無文帯を挟んだ斜線文(第30図4・7)がある。平行沈線文は、波状文が1点のみ(第29図1)。櫛歯文は、3～5本櫛歯の櫛歯文に連弧文(第29図12・19、第30図36～38)・山形文(第29図8、第30図28・30～33、第31図4・11)・波状文(第29図8～11・20、第30図26～28、第31図1・9・12)と、格子状文(第30図34)・斜線文(第31図3)・菱形文(第29図18、第30図29)、多条櫛歯の櫛歯文に波状文(第30図5・6・21～25)・連続山形文(第29図14～17)が対応する。連弧文は下向きが主体であり、縦帯の波状文は認められない。大型の壺形は、文様帶Ⅱaが波状文、文様帶Ⅱbが山形文という構成を典型とする(第29図8、第30図26)。これが「H-4」の指摘に関係する。

8. 横位区画文 頭部と胴部の境界の区画文は、3本櫛歯の櫛歯文(第30図30～33)のみでなく、多条櫛歯の櫛歯文(第29図15～17、第30図24・25)や範描沈線文(第29図3、第30図7)にも認められ、横位区画文は全て櫛歯文である。3本櫛歯の櫛歯文には、直状文の他に波状文の横位区画が見られる(第30図31・32)。

9. 縄文 縄文は、付加条第1種付加2条が典型であり、付加条第1種付加1条と単節斜縄文が伴う。付加条第1種付加1条には、「東中根式」に特徴的な1段3条を軸縄とした原体によるもの(第30図8、第31図7)、条が密に絡げられて撚糸文のような印象のもの(第29図22、第30図40・41、第31図14)も含まれている。単節縄文は、直前段の捻りが緩い原体によると思われる(第30図42・43)。斜行縄文が典型であるが、羽状縄文が極わずかに含まれている。「H-6」の指摘は、同一の縄文原体の回転方向を変えた施文であり、他には異なる縄文原体で交互施文された胴部の破片がある。結節文が施文された破片(第30図29・38)も見られる。

10. 底面痕跡 全ての底面痕跡が図示されているわけではないが、木葉痕が典型であることは確実と見られる。

以上、多くの項目で属性を共有しながらも、特に頭部の文様の相異から、「鷹ノ巣式」と「鷂釜式」は分別される。表徴の1つは、「鷂釜式」における櫛歯区画文の成立であり、これは、縦区画文とともに、胴部との横位区画文が全ての充填文について採用されるようになる。充填文の相異は、「鷹ノ巣式」から「鷂釜式」への変遷において

て、消失、派生、置換により生成されたものと理解される。平行沈線文、縋文原体压痕文は消失に向い、菱形文は山形文から、格子状文・斜線文は範描から擃描が派生し、上向き連弧文の多くは波状文に置換されることになった。指浜遺跡(第32図)、柳沢遺跡(第33図)、佐々木(2017)の土器群を「向井原式」(色川2006)の一部と捉えることにより、「鷹ノ巣式」は、「向井原式」に後続し、「鉢釜式」に先行する土器群として位置付けられる。

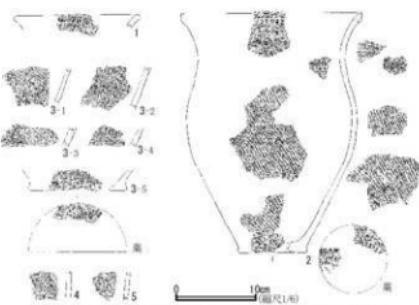
## 11 おわりに

「鷹ノ巣式」が「向井原式」から単一の系統で変遷したとは考え難い。胎土Aとして抽出された44~49%の土器は、在地で製作されたものではなく、「十王台式」の胎土の観察を援用するならば、久慈川流域以北、特に多賀山地の太平洋岸の地域に特徴的な胎土である。平行沈線文による上向きの連弧文、山形文という文様から「伊勢林前式」(馬日編1972)の系統の南下を推定しておきたい。一方、胎土Bとして抽出された土器は、筑波山周辺の地域に特徴的な胎土である。土浦市下郷遺跡(平石2000、岡口2001)には、これに共通する属性が多分に認められ、「原出口式」(海老澤2013)の系統の北上を推定しておきたい。「向井原式」「伊勢林前式」「原出口式」が複合することにより、「鷹ノ巣式」は成立した。鷹ノ巣遺跡から出土したアメリカ式石錐(鈴木2013)やメノウ石器石材は北から、ガラス玉や石英石器製作(鈴木・窪田2013)は南からもたらされることになったものと考えられよう。

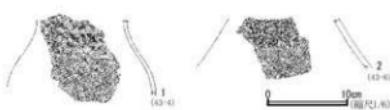
**註1** 第2次調査出土土器の属性については、原報告(色川2008)と観察の所見を異なる部分がある。

**註2** 胎土Aについて、金雲母と骨針の内訳を記しておく。破片全部では、金雲母と骨針の両方の含有が94点、金雲母のみの含有が20点、骨針のみの含有が84点である。底部では、金雲母と骨針の両方の含有が16点、金雲母のみの含有が8点、骨針のみの含有が19点である。

**註3** 福島県伊勢林前遺跡(馬日編1972)第4号住居址図版25-1、東海田岡遺跡(早川・井上1972)第16図3は、実測図を見る限り、口縁部成形技法と思われるが、実見していない。



第32図 指浜遺跡出土土器(鈴木2016より引用)



\*括弧内は原報告(藤本1983)の挿図番号

第33図 柳沢遺跡出土土器

## 参考文献

- 井上義安編 1980 「鉢釜 一茨城県建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」『大洗地区遺跡発掘調査会』
- 色川順子 2006 「郡河川下流域における弥生時代後期初頭の土器群——「向井原式土器」の設定——」[茨城県考古学協会誌]第18号 61-80頁
- 色川順子 2008 「弥生～古墳時代前期の遺構と遺物」『鷹ノ巣 ～第2次調査の成果～』(第37集)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 942頁
- 色川順子 2013 「弥生時代の遺物」『鷹ノ巣Ⅱ』第2・3次調査の成果』(第41集)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 23-27頁
- 海老澤洋 2013 「茨城県南部における弥生時代後期前半の土器類相—新治台地における原出口式・2式・松延1式・2式の設定—」[茨城県史研究]第97号 1-10頁
- 佐々木義則編 2017 「平成28年度ひたちなか市内道路発掘調査報告書」ひたちなか市教育委員会
- 鈴木正博 1982 「「鉢釜」研究序」『要良鉢考古』第4号 15-26頁
- 鈴木素行 2001 「武田西堀遺跡における十王台式土器の分析—「小祝式土器」と「武田式土器」の誕生—」[武田西堀遺跡 古石器・縄文・弥生時代編] (第21集)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 406-433頁
- 鈴木素行 2013 「鷹ノ巣遺跡のアメリカ式石錐—茨城県域の資料から見る威信財としての変化—」[ひたちなか理文だより]第39号 11-14頁
- 鈴木素行 2016 「旧石器・縄文・弥生時代の遺物」十五歩穴横穴墓群—東日本最大級の横穴墓群の調査—(第42集)ひたちなか市教育委員会 93-96頁
- 鈴木素行 2017 「天かわ地か—茨城県域における弥生時代の土器蓋—」[茨城県考古学協会誌]第29号 37-58頁
- 鈴木素行 2013 「鷹ノ巣道路第47号住居跡における石英を素材とした石器について」『鷹ノ巣Ⅱ』第2・3次調査の成果』(第41集)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 28-40頁
- 岡口 潤也 2001 「下郷道路・下郷古墳群 佐々木建設株式会社土砂採取工事に伴う埋蔵文化財調査報告書」土浦市教育委員会
- 早川章次・井上義安 1972 「磐船山式土器の新資料」[郡河川の先史遺跡]第1集(改訂増補版) 28-30頁
- 平石尚和 2000 「一般国道354号道路改善事業地内埋蔵文化財調査報告書」下郷古墳群 (第16集) 茨城県教育財團
- 藤本弥城 1983 「常陸郡河川下流域の弥生土器群」(私家版)
- 馬日順一編 1972 「伊勢林前遺跡 一古代集落址の調査—」(市第1番) いわき市教育委員会

## IV 古墳時代の遺構と遺物

### 1 調査の概要

鷹ノ巣遺跡では、第1～4次調査で古墳時代前期の住居跡22基、中期の住居跡4基、後期の住居跡30基を検出した。

**住居跡の分布** 古墳時代前期の住居跡は第2次調査区の中央から西側に、後期の住居跡は第1～4次調査区全体に分布する。後期で一辺が7m以上の住居跡は、第2～4次調査区の住居が密集しない台地平坦部に位置する。前期の住居跡同士および後期の住居跡同士の重複はみられない。

**住居跡の規模** 住居跡を長軸長で比較すると、最大が前期は第52号住居跡の798mで、後期は第28号住居跡の8.00m、最小が前期は第12号住居跡の2.9mで、後期は第23号住居跡の3.2mである。

長軸長の数値で分類すると、前期は5m未満の住居跡が6基、5.5～5.80mの住居跡が7基、6.00～6.55mの住居跡が6基、7.51～7.98mの規模の住居跡が2基となり、5.5～6.55mの住居跡が半数以上を占める。中期はすべて6m台の住居跡である。後期は5m未満の住居跡が7基、5.09～5.86mの住居跡が4基、6.08～6.89mの住居跡が13基、7.00～7.54の住居跡が4基、7.82～8.00mの住居跡が2基となり、6m台の住居跡が半数以上を占める。

**住居跡の形態** ほとんどの住居跡が正方形に近い方形を呈する。第28・34B・50・69・71・73・77・83・85号住居跡は、南壁中央部の出入り口と思われる部分が住居壁外へ突出する。

**住居跡の主軸** 前期の主軸は、N-4°～51°-Wが12基、N-3°～67°-Eが7基、真北のものが2基ある。主軸の集中する方向は、N-20°-W～N-14°-Eで、主軸は北からやや西を向いたものが多い。

後期の主軸は、N-1°～105°-Wが21基、N-1°～61°-Eが7基、真北のものが2基ある。主軸の集中する方向は、N-17°-W～N-6°-Eで、主軸はほぼ北を向いたものが多い。

**竈** 竈は、ほとんどの住居跡が北壁に構築されている。第31B号住居跡は壁の手前に構築された初期竈である。第49号住居跡は東壁の中央よりやや南に寄った場所にあり、すぐ近くには貯蔵穴と出入り口ピットがあるため、古い形態の竈の構築状況を呈する。

竈の構築材には、灰白色や黄白色の粘土が使用されている。竈の構造では、住居構築の際にローム土を土手状に残し袖部とするものが主体的にみられた。

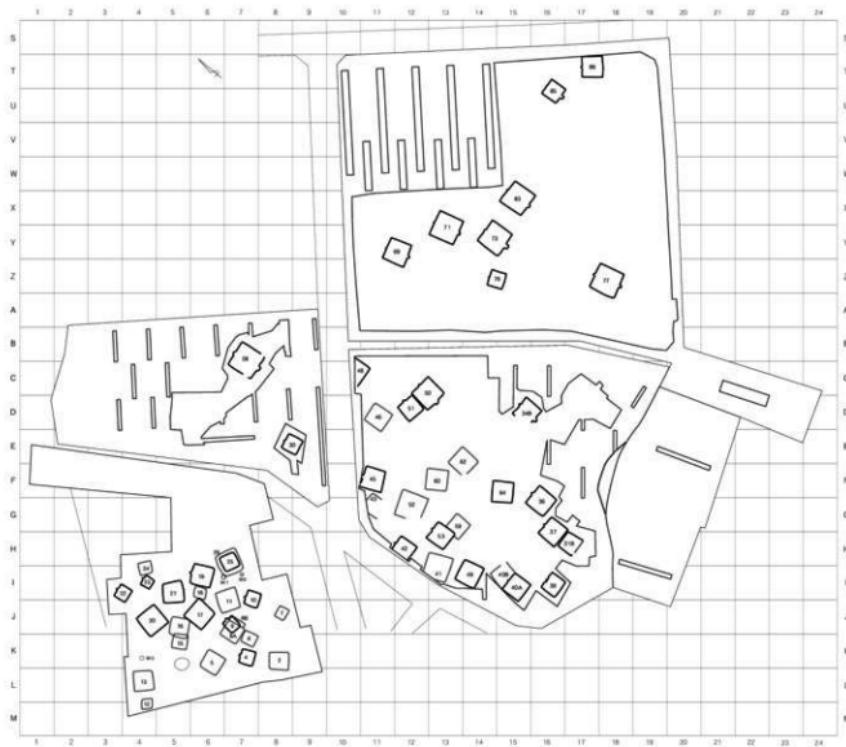
**貯蔵穴** 「貯蔵穴」と思われるピットを有する住居跡は、第4・5・10・11・13・16・17・21・22・24・26・28・34B・36・37・42・48・49・50・51・64・69・71・73・77・83・85・86号住居跡の28基である。

竈のある住居跡の「貯蔵穴」と思われるピットの位置をみると、竈の造られた壁に面する壁側に掘られたもので壁の中央より左側(第4・51号住居跡)、右側(第22号住居跡)、中央(第36・37・48・64号住居跡)、中央で外側に突出(第28・34B・50・69・71・73・77・83・85号住居跡)、竈の造られた壁側に掘られたもので竈の右側(第10・42号住居跡)、左側(第49・86号住居跡)の6つに分類できる。

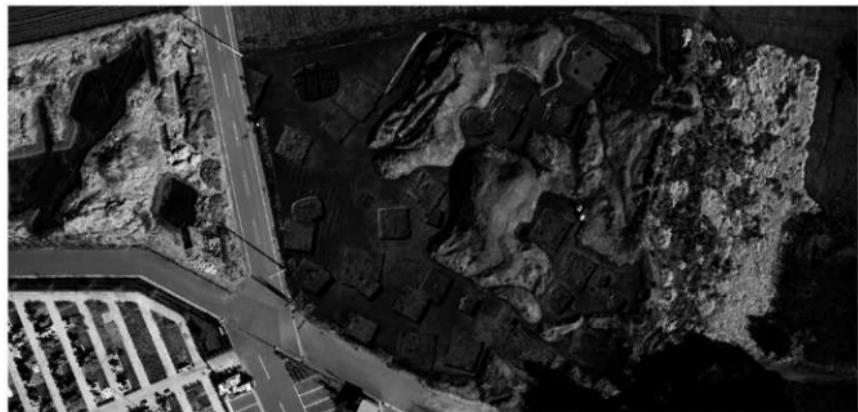


大型住居跡(第77号住居跡)

IV 古墳時代の遺構と遺物



第34図 鷹ノ巣遺跡古墳時代住居跡分布図(グリッドは1辺10 m, 薄線:前期, 濃線:中・後期)



鷹ノ巣遺跡第2・3次調査区

第3表 鷺ノ巣遺跡古墳時代住居跡一覧表

前期

住居跡番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	主軸	備考
2	K・L-8	5.5	(5.3)	N-67°-E	第1次調査
5	K・L-6	5.7	5.4	N-10°-W	第1次調査
6	J・K-6	3.8	3.7	N-7°-W	第1次調査
7	J-8	3.7	3.2	N-10°-W	第1次調査
8A	J・K-6・7	5.5	5.45	N-3°-E	第1次調査
8B	J-7	-	-	-	第1次調査
11	L・J-6・7	6.2	6.2	N-51°-W	第1次調査
12	L・M-4	2.9	2.9	N-27°-W	第1次調査
13	L-4	5.8	5.65	N-33°-E	第1次調査
15	K-5	4.4 ~ 3.9	4.3	N-22°-W	第1次調査
16	J・K-5	5.5	5.5	N-15°-W	第1次調査
18	I-6	3.7	3.65	N-14°-W	第1次調査
24	H・I-4	4.05	3.9	N-46°-W	第1次調査
26	H・I-6・7	6.55	6.5	N-31°-E	第1次調査
40B	H・I-14・15	6.00	5.76	N-14°-E	第2次調査
41	H-12・13	7.51	7.44	N-20°-W	第2次調査
43	F・G-11	5.80	(5.70以上)	N	第2次調査
46	D・E-11	6.30	6.15	N-4°-W	第2次調査
52	F・G-12	7.98	7.73	N-20°-W	第2次調査
59	G・H-13・14	5.72	5.22	N	第2次調査
60	F-12・13	6.25	6.19	N-57°-E	第2次調査
62	E・F-13・14	6.37	6.37	N-4°-E	第2次調査

中期

住居跡番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	主軸	備考
17	J-5・6	6.6 ~ 6.3	6.3	N-7°-E	第1次調査
20	J・K-4・5	6.55	6.5	N-12°-E	第1次調査
21	I・J-5	6.85	6.1	N-23°-W	第1次調査
25	I・J-5	6.5	6.45	N-31°-E	第1次調査

後期

住居跡番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	主軸	備考
4	K-7	4.2	4.0	N-13°-W	第1次調査
9	J-6・7	4.1	3.8	N-12°-E	第1次調査
10	I・J-7・8	4.7	4.2	N-14°-W	第1次調査
19	H・I-6	6.15	5.95	N-15°-W	第1次調査
22	I・J-3・4	4.05	3.9	N-1°-W	第1次調査
23	I-4	3.2	3.1	N	第1次調査
28	B・C-7・8	8.00	7.97	N-8°-W	第3次調査
30	E-8・9	4.83	4.74	N-10°-W	第3次調査
31B	H-16・17	(6.89)	5.67	N-9°-W	第2次調査
34B	D-15・16	6.30	6.15	N-1°-E	第2次調査
36	F・G-15・16	6.64	6.30	N	第2次調査
37	G・H-16・17	6.43 ~ 6.26	6.22	N-2°-E	第2次調査
39	I-16・17	5.45 ~ 5.25	(5.00)	N-1°-W	第2次調査
40A	I-15	6.08	5.99	N-4°-W	第2次調査
42	H-11・12	5.86	(4.90以上)	N-3°-W	第2次調査
45	F-11	6.30	6.16	N-24°-W	第2次調査
48	B・C-10・11	(6.45)	(5.34)	N-4°-W	第2次調査
49	H・I-13・14	6.50	6.33	N-105°-W	第2次調査
50	C・D-12・13	7.00	6.90	N-6°-E	第2次調査
51	D-12	5.65	5.56	N-10°-E	第2次調査
53	G・H-12・13	6.20	6.17	N-1°-W	第2次調査
64	F・G-14・15	6.20	6.08	N-61°-E	第2次調査
69	Y・Z-11・12	6.54	6.50	N-17°-W	第4次調査
71	X・Y-13	7.54	7.52	N-16°-W	第4次調査
73	X・Y-14・15	7.52	7.38	N-1°-E	第4次調査
76	Z-14・15	4.57	4.55	N-20°-W	第4次調査
77	Z・A-17・18	7.82	7.72	N-8°-W	第4次調査
83	W・X-15・16	7.50	7.22	N-8°-W	第4次調査
85	T・U-16	5.09	5.05	N-3°-W	第4次調査
86	T-17・18	6.09	6.02	N-39°-W	第4次調査

## 2 住居跡の調査

### 第 69 号住居跡

**遺構** Y・Z-11・12 区に位置する。ゴボウ耕作による溝状の搅乱を受けているが、床面までは掘り込まれていない。平面形は、方形を呈するが、南壁が約 44 cm 張り出す。堅穴部の規模は 6.50 × 6.54 m。壁高は東壁と西壁 35 cm、南壁 52 cm、北壁 31 cm。主軸方向は N-17°-W を指す。壁周溝は確認できない。床面は、東壁周辺と西壁南側周辺、ピット 5 周辺以外に硬化面がみられる。

堅穴部覆土は、壁側にローム土を主体とした褐色土、中央部に黒色土が堆積する。

竈は、堅穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部は崩れているが、両袖部と燃焼部は比較的よく残っている。燃焼部には、土製の支脚が残存していた。袖部は粘土等を芯として構築したものではなく、堅穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残して、その上に灰白色粘土を貼って袖部としている。火床面は竈断面の第 4・5 層部分で、焼土が約 10 cm の厚さで堆積していた。煙道部は一部が残存しており、直径は約 10 cm を測る。

ピットは 6 基検出された。ピット 1~4 は主柱穴、ピット 5 は「貯蔵穴」と思われる。床面からの深さは、ピット 1 と 2 が 76 cm、ピット 3 が 82 cm、ピット 4 が 59 cm、ピット 5 が 35 cm、ピット 6 が 6 cm である。主柱穴は、床面の確認状況から張床する前に柱を立てており、住居廃絶時にピットから引き抜いていない状況が確認できた。

**遺物の出土状況** 遺物は破片化したものが多い。完形品で出土したものは第 38 図 6 の甕形土器のみである。平面分布では竈周辺とピット 5 周辺から出土した。竈周辺で出土した土器片は、接合関係を持つものが多い。垂直分布では、床面直上もしくは覆土下層に位置する。18 の石製品は床面直上から出土している。

**遺物** 甕形土器は胴部が球制状ではなく、胴長の形を呈する。9 は大型の高杯形土器の杯部で、内外面とも赤彩されている。杯形土器は、口縁部が体部との境に稜をもって長く直立するものや短く直立するもの、外反するものがみられる。12・13 の体部内面の調整には、放射状のヘラミガキがみられる。また、10・11・14・15 に

は赤彩、12 には黒色処理がされている。16 はやや大型の杯形土器で、内面が赤彩されている。18 は石炭に孔がみられるものである。19 には両面に敲打痕がみられ、20 には研磨痕がみられる。

甕形土器 6 内の土を水洗したが、検出物はなかった。

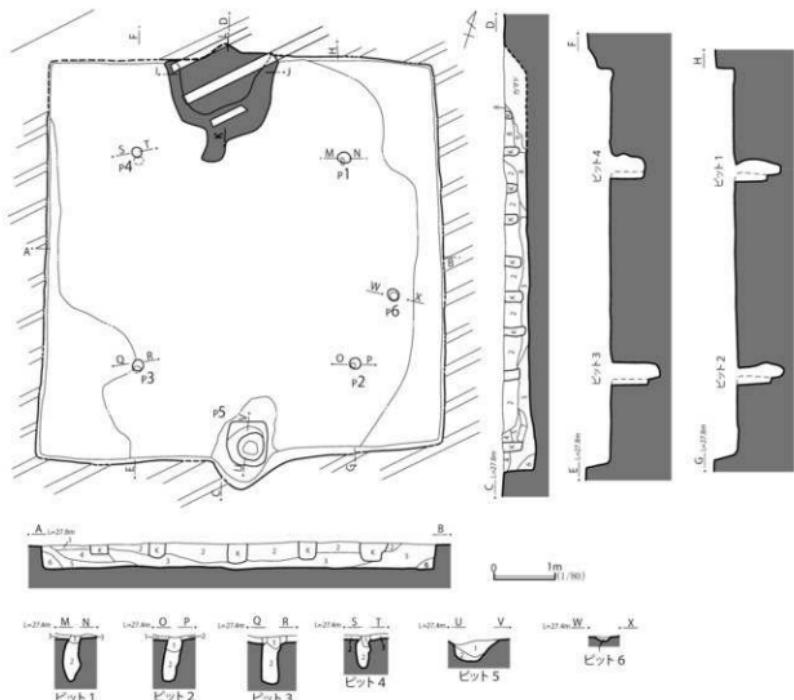
### 第 71 号住居跡

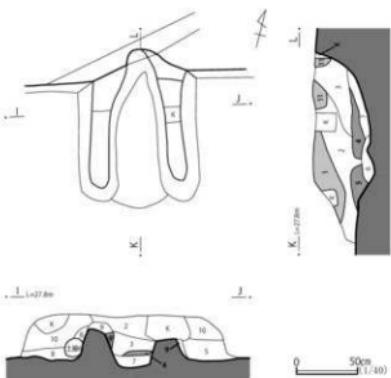
**遺構** X・Y-13 区に位置する。北東隅は、第 1 号溝状遺構に掘り込まれており、ゴボウ耕作による溝状の搅乱を受けているが、いずれも床面までは掘り込まれていない。平面形は、方形を呈するが、南壁が約 50 cm 張り出す。堅穴部の規模は 7.52 × 7.54 m。壁高は東壁 39 cm、西壁 42 cm、南壁 47 cm、北壁 35 cm。主軸方向は N-16°-W を指す。壁周溝は確認できないが、東壁及び西壁では堅穴部中央に向かって間仕切り状の溝が 3 条存在する。床面からの深さは 1~4 cm を測る。床面は、竈前から南壁中央部にかけて帯状に硬化している。

炭化材は、131 点を図化し、サンプルとして一部分のみ取り上げを行った。炭化材の検出状況は、住居跡中央に「コ」の字状に大型の部材があり、そこから輻輳に向かって放射状に部材がみられる。この検出状況は、上屋構造における配置を表すものと思われる。炭化材は、形状の観察から丸材が多い。材の上にはカヤ状の屋根材が被った状態で出土した例もみられた。炭化材で形状の残りのよいもの 10 点を樹種同定した結果、コナラ属コナラ亜属クヌギ節(4 点)とアカメガシワ(6 点)と同定された[パリノ報告]。ちなみに、クヌギ節と同定された部材は、「コ」の字状の大型の部材 3 点と北東隅から中央部に延びる放射状の部材 1 点である。焼土は、炭化材の周囲にみられる。

堅穴部覆土は、壁側にローム土を主体とした褐色土、中央部に直径 3~5 cm ほどのロームブロックを含む黒褐色土が堆積する。床面には、焼土や炭化物がみられる。覆土の観察と炭化材との関係から、当住居跡は燃焼中もしくは鎮火後に人为的に埋め戻されたと考えられる。

竈は、堅穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部は一部が残存し、両袖部と燃焼部が比較的よく残っている。燃焼部からは、土製の支脚と粘土製

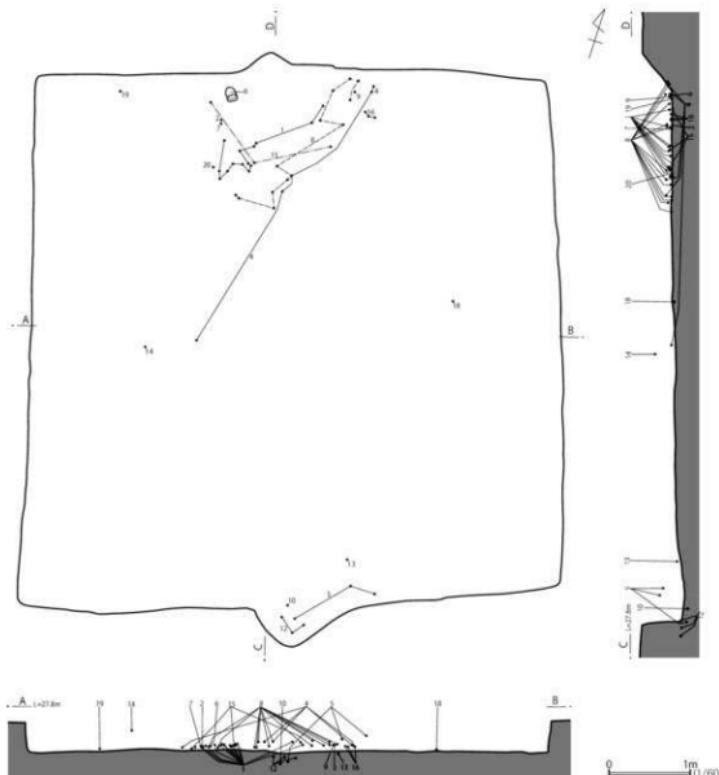




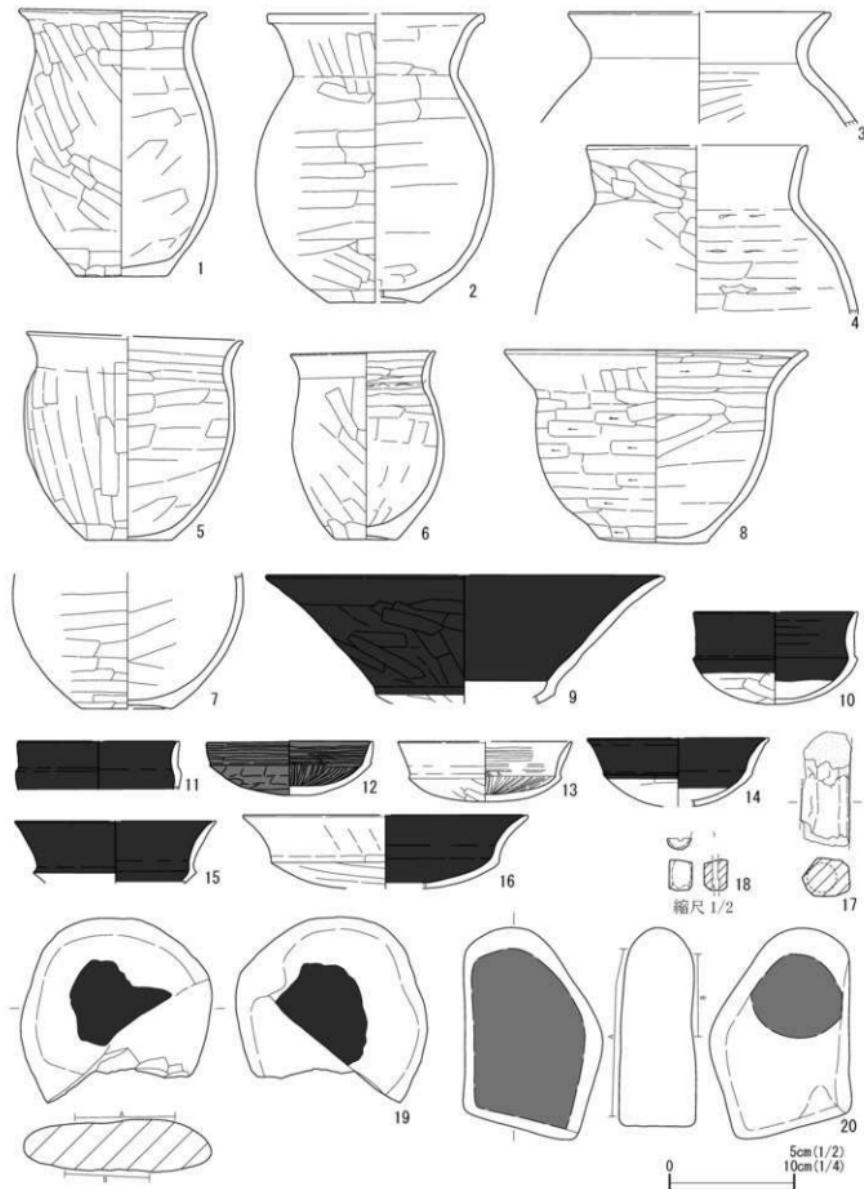
第 69 号住居跡竪坑堆積層土

- 第1層 塗褐色土層(白色粘土多量含む 塗土粒微量含む 織まりやや有り)  
 第2層 塗褐色土層(塗土粒多量含む 白色粘土粒少量含む 織まりやや有り)  
 第3層 灰褐色土層(白色粘土・塗土粒・灰多量含む 灰化粧微量含む 径3cm砾若干含む 織まりやや有り)  
 第4層 赤褐色土層(火床面 塗土粒多量含む 白色粘土粒少量含む 径1cm塗土ブロック微量含む 織まりやや無し)  
 第5層 赤褐色土層(火床面 塗土粒多量含む 径1cm塗土ブロック微量含む 織まりやや無し)  
 第6層 黒色土層(掘形 塗土粒少量含む 織まりやや有り)  
 第7層 黑褐色土層(掘形 塗土粒少量含む 織まりやや有り)  
 第8層 塗褐色土層(白色粘土少量含む 灰化粧微量含む 織まりやや有り)  
 第9層 灰白色粘土層(袖部に張った粘土 織まり有り)  
 第10層 塗褐色土層(被熟した第9層の粘土 織まり有り)  
 第11層 灰白色粘土層(天井部粘土 織まり有り)

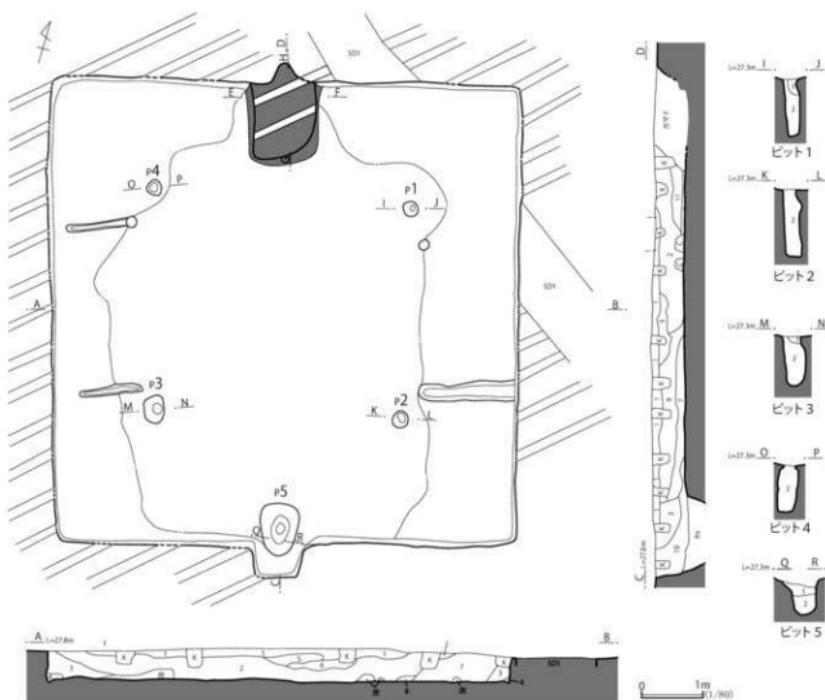
第 36 図 第 69 号住居跡竪坑



第 37 図 第 69 号住居跡遺物出土状況



第38図 第69号住居跡出土遺物（土器：濃網・赤彩、淡網・黑色処理／石器：濃網・敲打による凹み、淡網・砥面）



## 第71号住居跡堆積覆土

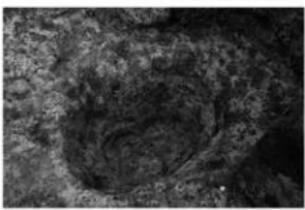
- 第1層 黒色土層(ローム粒微量含む 繕まり有り)
- 第2層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 径3~5cmロームブロック・炭化粒少量含む 繖まり有り)
- 第3層 噴褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック・炭化粒少量含む 繖まり有り)
- 第4層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 繖まりやや有り)
- 第5層 黒色土とロームブロックの混合層(繖まり有り)
- 第6層 黒色土層(ローム粒少量含む 径1cmロームブロック微量含む 繖まり有り)
- 第7層 褐色土層(ローム土主体 繖まり有り)
- 第8層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 燃土粒少量含む 繖まりやや有り)
- 第9層 褐色土層(ローム粒多量含む 炭化粒少量含む 炭化粒少量含む 繖まり有り)

第10層 噴褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック・焼土粒少量含む 繖まりやや有り)

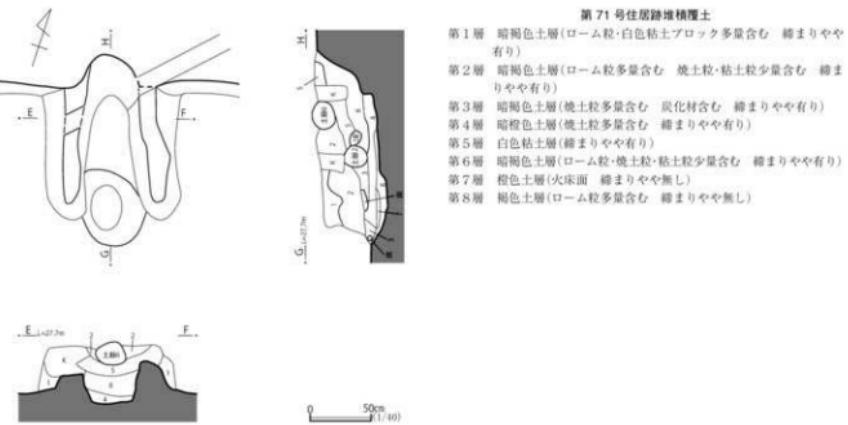
- 第11層 噴褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック・炭化粒・白褐色土粒・焼土粒少量含む 繖まり有り)
- 第12層 黒色土層(炭化粒多量含む ローム粒少量含む 繖まりやや有り)

## 第71号住居跡ピット1~4堆積覆土

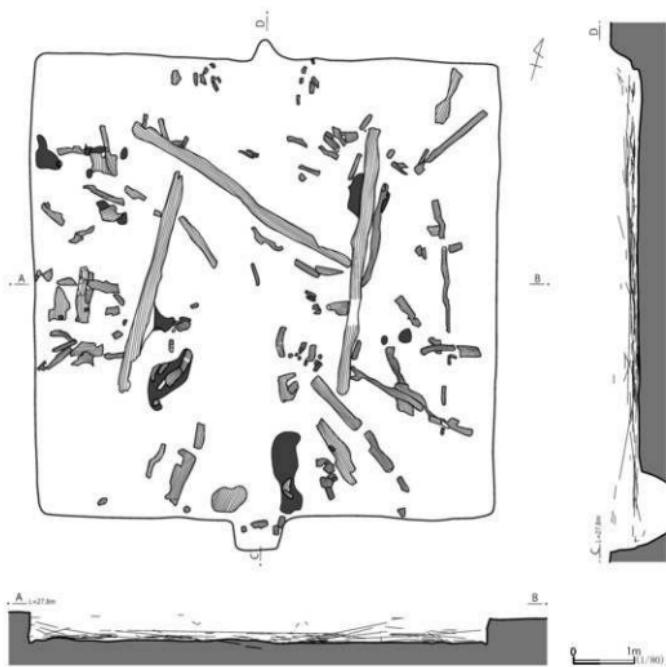
- 第1層 噴褐色土層(ローム粒多量含む 烧土粒微量含む 繖まりやや有り)
- 第2層 褐色土層(ローム粒多量含む 繖まり無し)
- 第3層 噴褐色土層(ローム粒多量含む 繖まりやや有り)
- 第4層 黑褐色土層(ローム粒多量含む 繖まり有り)



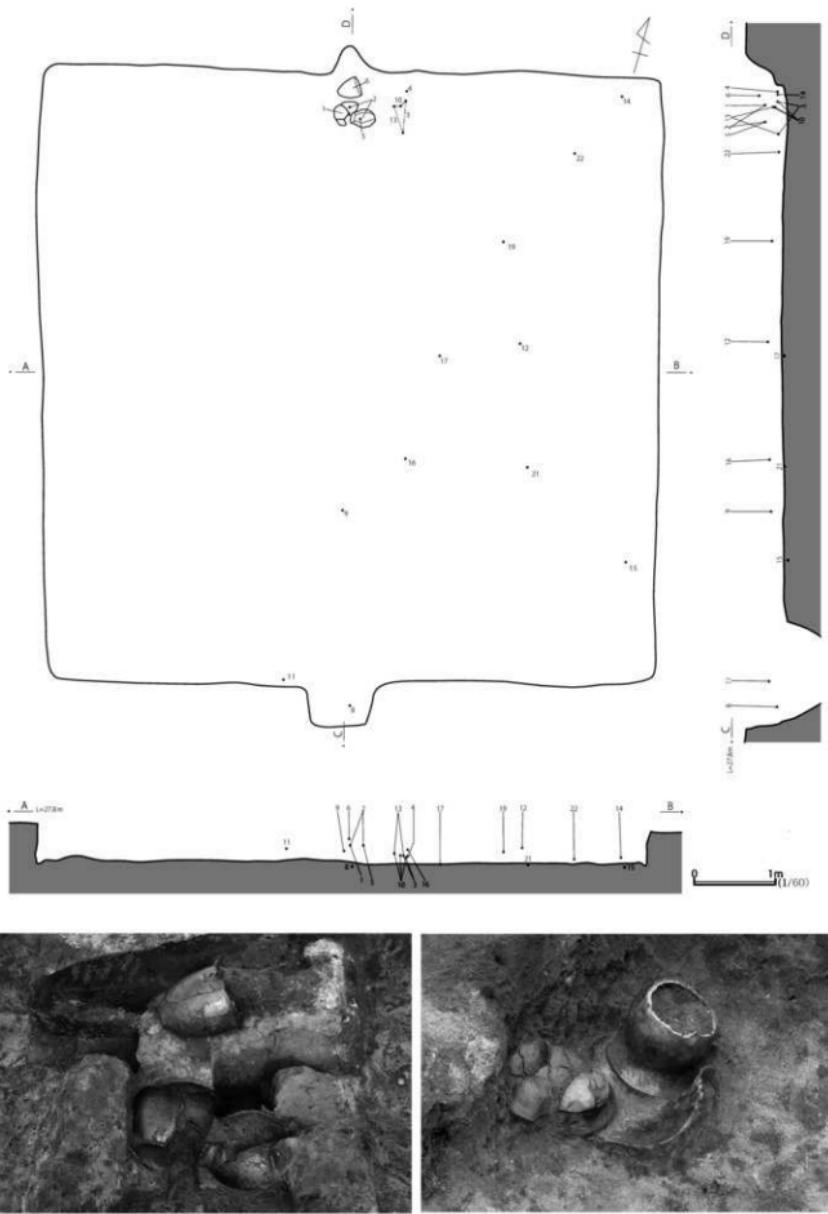
第39図 第71号住居跡(淡網:粘土)



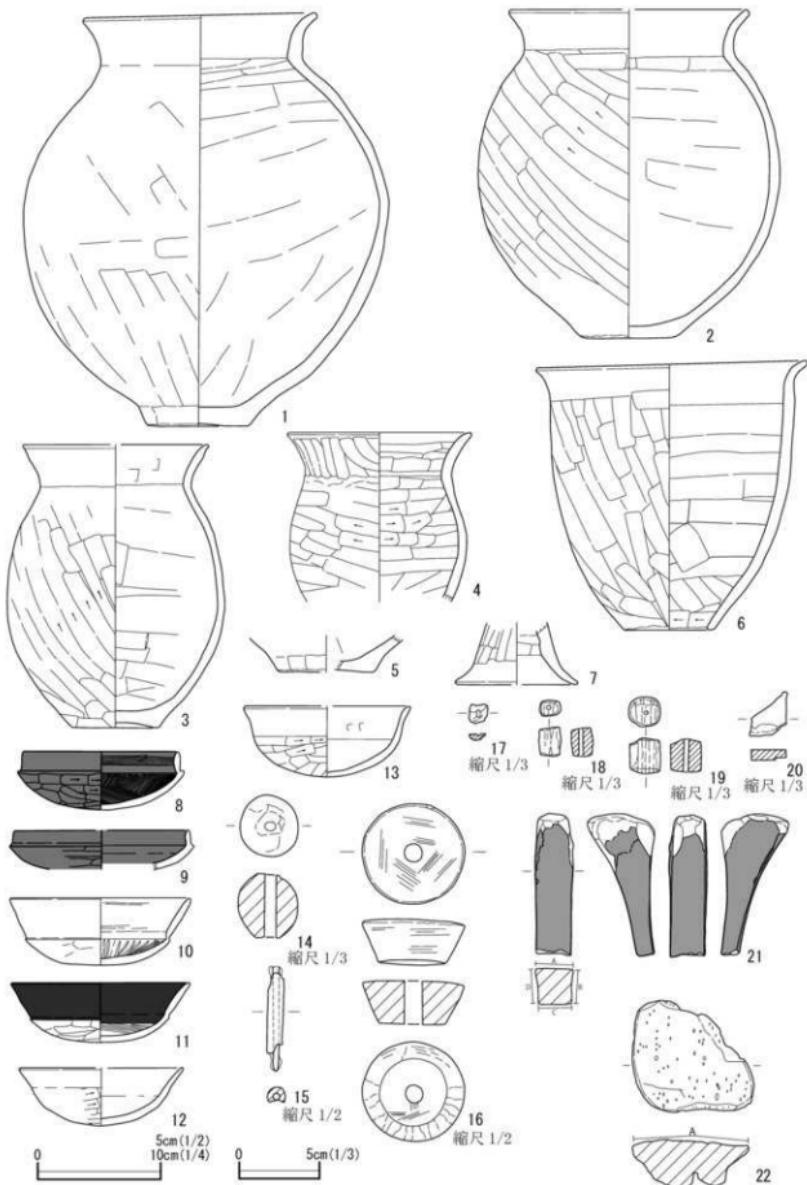
第40図 第71号住居跡電



第41図 第71号住居跡炭化材出土状況(漁網:焼土範囲)



第42図 第71号住居跡遺物出土状況



第43図 第71号住居跡出土遺物(土器:濁網・赤彩、淡網・黑色処理/石器:濁網・砥面)

の支脚が使用時の位置に残存していた。土製の支脚の下部は白色粘土で固定されている。2つの支脚の上には、甕形土器がそれぞれ置かれており、さらに天井部の上からは瓶形土器1点が出土した。土製の支脚は、正位の状態の甕形土器を貫いていた。支脚や甕形土器の出土状態から、当竈は甕形土器を2つ掛けた竈と思われる。袖部は粘土等を芯として構築したものではなく、竪穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残して、その上に白色粘土を貼って袖部としている。火床面は竈断面の第7層部分で、焼土が約4cmの厚さで堆積していた。

ピットは5基検出された。ピット1~4は主柱穴、ピット5は「貯蔵穴」と思われる。床面からの深さは、ピット1が100cm、ピット2が110cm、ピット3が80cm、ピット4が76cm、ピット5が60cmである。主柱穴は、床面の確認状況から張床する前に柱を立てており、住居廃絶時にピットから引き抜いていない状況が確認できた。

**遺物の出土状況** 遺物は少ない。平面分布では土器が竈内とその周辺、及び南壁の出入り口で出土し、鉄製品や石製品は竪穴部中央から東側で出土した。垂直分布では、第43図3・4・10・14・15・17・21が床面直上、1・2・6が竈内で、団化した杯形土器は覆土中～下層で出土したものが多い。1と2の甕形土器と6の瓶形土器は竈で使用されたもので、1は正位、2・6は倒位の状態で出土した。3の甕形土器は、床面直上で口縁部から胴部中位は倒位、胴部下位から底部は逆位の状態で出土した。4の甕形土器は床面直上で逆位の状態で出土し、底部は搅乱により欠失している。杯形土器は8が正位、11が倒位、10・13が逆位で出土した。10と13は、10の上に13が重なる状態で出土した。16の石製鋸鍤車は覆土中層で倒位の状態で出土していることから、軸が装着された状態で置かれたものと推測される。

**遺物** 甕形土器の胴部は、第43図1の大型品が球胴状で、2~4の中・小型品が胴長の形を呈する。6の瓶形土器はほぼ完形品で、内面にミガキ調整はみられない。杯形土器は、口縁部が体部との境に稜をもって短く直立するものと外反するものがみられる。8・10の体部内面の調整には、放射状のヘラミガキがみられる。また、8・9には黒色処理、11には赤彩が施されている。15は鉄鎌の茎部か。16は滑石製の鋸鍤車である。17は

琥珀の玉。18・19は石炭の玉と思われる。21の砥石には4面に研磨痕がみられる。22も砥石と思われる。

甕形土器1・2・4・6内の土を水洗し、1・2より炭化種子が検出されたが、同定の結果は混入の可能性が指摘されている[パリノ報告]。

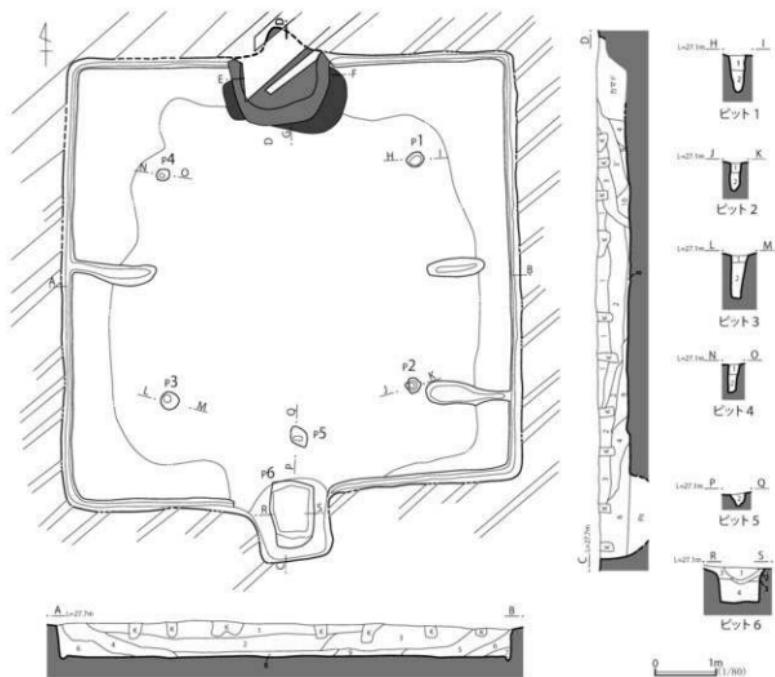
### 第73号住居跡

**遺構** X・Y-14・15区に位置する。ゴボウ耕作による溝状の搅乱を受けているが、床面までは掘り込まれていない。平面形は、方形を呈するが、南壁が約110cm張り出る。竪穴部の規模は7.38×7.52m。壁高は東壁53cm、西壁56cm、南壁52cm、北壁65cm。主軸方向はN-1°-Eを指す。壁周溝は、竈と南壁の張り出し部以外にみられる。幅約10cm、床面からの深さ2~7cmを測る。また、東壁及び西壁では竪穴部中央に向かって間仕切り状の溝が3条存在する。床面からの深さは約4cmを測る。床面は、壁周辺以外は硬化している。

炭化材は、68点を团化し、サンプルとして一部分のみ取り上げを行った。炭化材の検出状況は、住居跡中央から東側に部材がみられる。この検出状況からは、上屋構造における配置は判らない。炭化材は、形状の観察から丸材が多い。炭化材で大型のもの、もしくは形状の残りのよいもの3点を樹種同定した結果、コナラ属アカガシ亜属と同定された[パリノ報告]。炭化材の周間に焼土はあまりみられない。

竪穴部覆土は、壁側にローム土を主体とした褐色土、中央部に直径1~5cmほどのロームブロックを含む黒褐色土が堆積し、これらは人為的に埋め戻されたものと考えられる。床面には、焼土や炭化物がみられる。覆土の観察と炭化材との関係から、当住居跡は燃焼中もしくは鎮火後に人為的に埋め戻されたと考えられる。西壁の南側には、竪穴部外側から竪穴部中央に向かってスロープ状に表面が硬化した覆土が確認された。このスロープがある竪穴部西側では炭化材が出土していないことから、部材などの運び出しなどに利用されたスロープとも考えられる(第46図)。

竈は、竪穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部と西側の袖部が搅乱を受けているが、東側の袖部と燃焼部は比較的よく残っている。燃焼部から土製の支脚が出土したが、使用時の位置ではない。袖部



第73号住居跡堆積覆土

- 第1層 黒褐色土層(ローム粒少量含む 緋まりやや有り)
- 第2層 黒褐色土層(ローム粒少量含む 径1～5cmロームブロック微量含む 緋まりやや有り)
- 第3層 暗褐色土層(径1～5cmロームブロック・ローム粒・バー・ドロームブロック多量含む 緋まり有り)
- 第3'層 暗褐色土層(第3層に焼土を多量に含む土層 緋まり有り)
- 第4層 褐色土層(径1～5cmロームブロック・ローム粒多量含む 緋まり有り)
- 第5層 明褐色土層(ローム土主体 緋まりやや有り)
- 第6層 褐色土層(ローム土主体 緋まりやや有り)
- 第7層 褐色土層(ローム粒多量含む 第6層よりやや暗い色調 緋まりやや有り)

第8層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 炭化粒微量含む 緋まり強く有り)

第9層 暗褐色土層(ローム粒・炭化粒多量含む 径1～3cmロームブロック少量含む 緋まり有り)

第10層 暗褐色土層(ローム粒少量含む 緋まりやや有り)

第73号住居跡ピット1～5堆積覆土

第1層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 緋まりやや有り)

第2層 褐色土層(ローム粒多量含む 緋まり無し 粘性やや有り)

第73号住居跡ピット6堆積覆土

第1層 褐色土層(径1～3cmロームブロック多量含む 緋まり有り)

第2層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 緋まりやや有り)

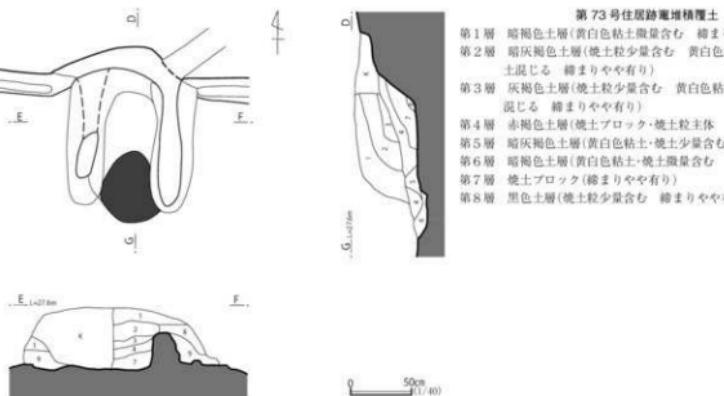
第3層 黒色土層(ローム粒少量含む 緋まり無し)

第4層 褐色土層(ローム土主体 緋まり有り)

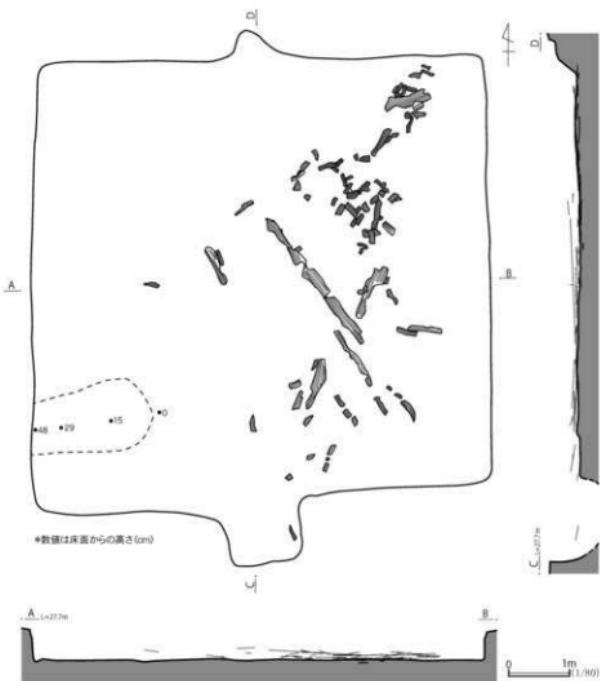


第44図 第73号住居跡(濃網:焼土・淡網:粘土)

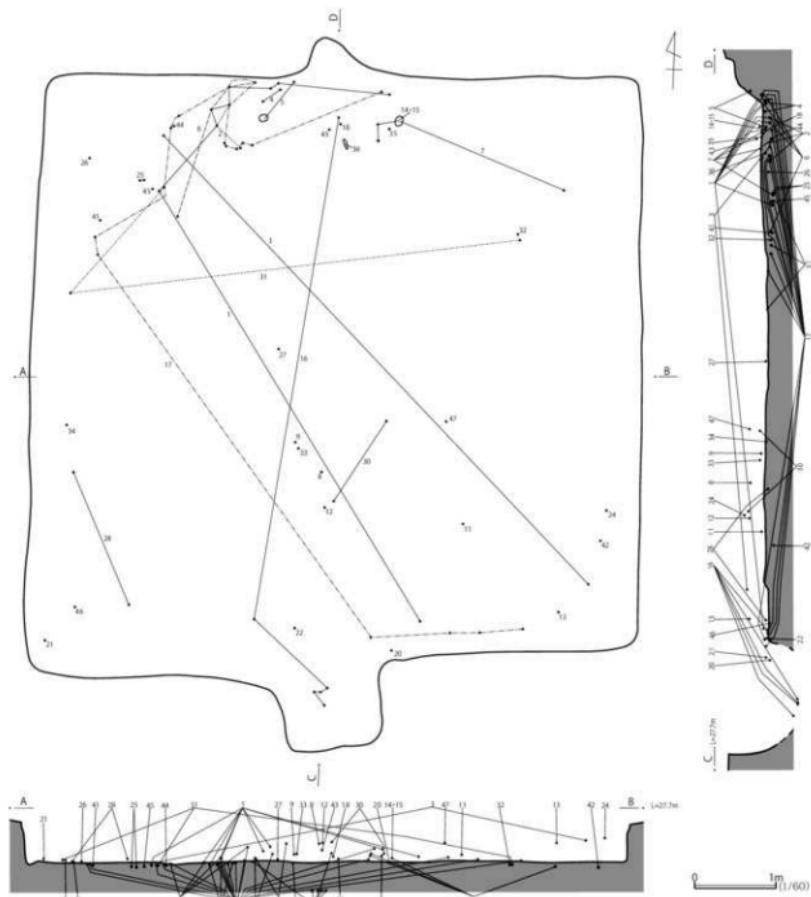




第45図 第73号住居跡竪(濃網:焼土範囲)



第46図 第73号住居跡炭化材出土状況

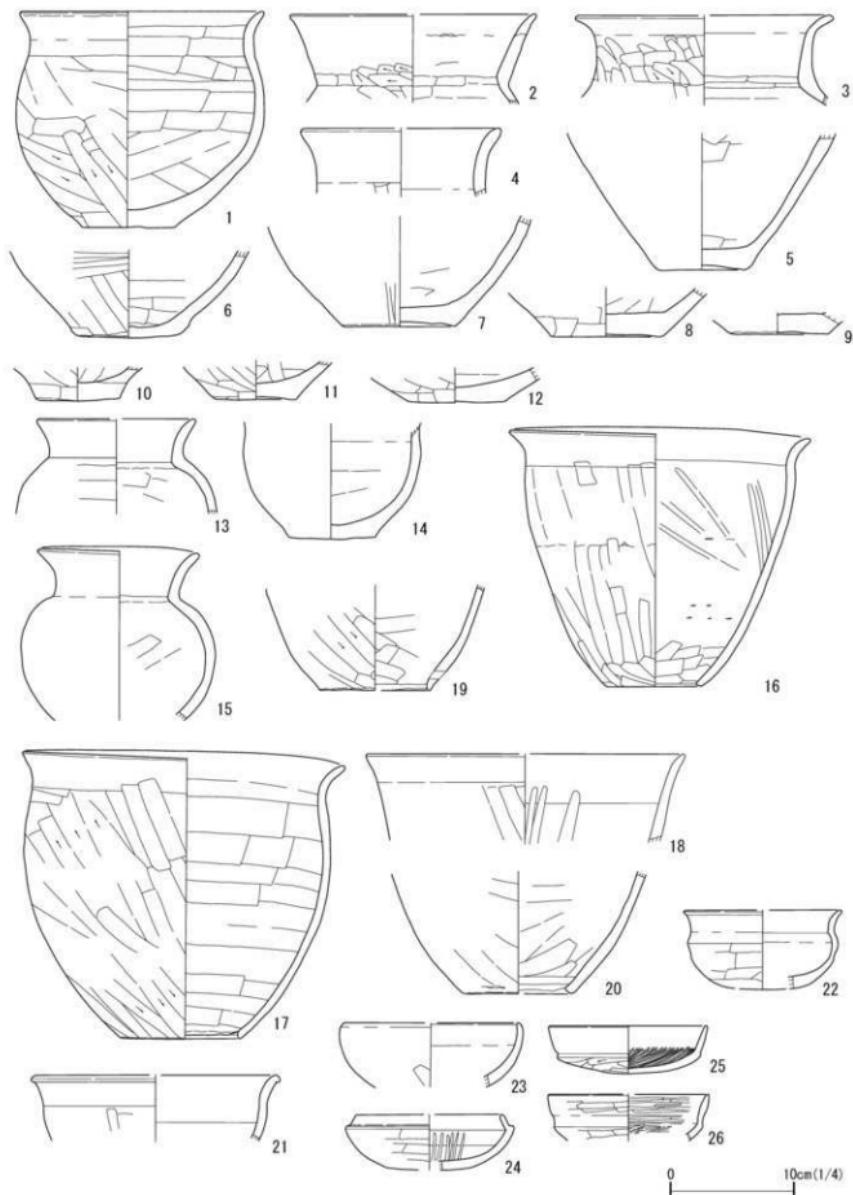


第47図 第73号住居跡遺物出土状況

は粘土等を芯として構築したものではなく、竪穴部構築時に竪の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残して、その上に黄白色粘土を貼って袖部としている。袖部の燃焼部側は被熱し赤化している。火床面は竪断面の第4層部分で、焼土が約10cmの厚さで堆積していた。

ピットは6基検出された。ピット1～4は主柱穴、ピット5は出入り口施設に伴うもの。ピット6は「貯藏穴」と思われる。床面からの深さは、ピット1が61cm、ピット2が46cm、ピット3が72cm、ピット4が46cm、ピット5が14cm、ピット6が56cmである。主柱穴は、床面の確認状況から張床する前に柱を立てており、住居廃絶時にピットから引き抜いていない状況が確認できた。

**遺物の出土状況** 遺物は破片化したものが多く、土器で完形品の状態で出土したものはない。平面分布では、竪穴部全体から出土しているが、特に竪とピット6周辺から多くみられる。第48図1や3、17は、広範囲で接合関係がみられる。垂直分布では、覆土上層から中層のものと床面直上もしくは覆土下層に位置するものが



第48図 第73号住居跡出土遺物1



第49図 第73号住居跡出土遺物2(土器:淡網・黒色処理/石器:濃網・敲打による凹み、淡網・砥面)

あり、1や3のように覆土上層と床面直上のものとの接合もみられる。当住居跡は覆土が人為的に埋め戻されたと考えられるため、遺物もその際に遺棄されたものと思われる。16の瓶形土器はピット6内から出土した。第49図35と36の支脚、43の石製品は窓内から出土した。石製品の41・42・44・45は床面直上から出土した。

**遺物** 遺物に完形品は少なく、破損品が多い。瓶形土器は、底部片から4個体存在し、19にはブリッジ用の孔が2ヶ所みられる。杯形土器は、口縁部が内湾するもの、体部との境に稜をもって短く内湾するものと外反するものがみられる。32には黒色処理が施されている。37は刀子の関節周辺。39・40は石炭製の玉と思われる。41～45は石炭片で、この他に固化していないもののが約90g出土している。

#### 第76号住居跡

**遺構** Z-14・15区に位置する。ゴボウ耕作による溝状の擾乱を受けており、その一部は床面まで掘り込んでいる。平面形は、方形を呈する。竪穴部の規模は、4.57×4.55m。壁高は東壁38cm、西壁32cm、南壁30cm、北壁37cm。主軸方向はN-20°-Wを指す。壁周溝は確認できない。床面は、竪前から南壁中央部にかけて帶

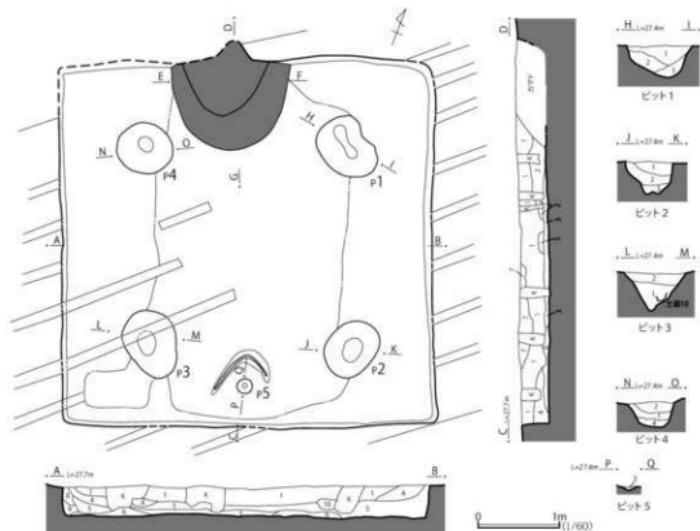
状に硬化している。ピット5の周囲には、床面から約2cmの土手状の高まりがある。

竪穴部覆土は、黒褐色土と暗褐色土が主体である。自然堆積と思われる。

竪は、竪穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部は崩れているが、両袖部と燃焼部は比較的よく残っている。袖部は粘土等を芯として構築したものではなく、竪穴部構築時に竪の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残し、その上に黄色粘土を貼って袖部としている。袖部の燃焼部側は被熱し赤化している。小型の壺形土器が逆位で燃焼部から出土しているが、土器の器面が被熱していないことから支脚として使用されたものではなく、竪廐絶時に置いたものだろう。

ピットは5基検出された。ピット1～4は主柱穴、ピット5は出入り口施設に伴うものと思われる。床面からの深さは、ピット1が35cm、ピット2が41cm、ピット3が48cm、ピット4が42cm、ピット5が4cmである。主柱穴は、平面形状と層位から住居廐絶時にピットから引き抜いていると推定される。

**遺物の出土状況** 出土した遺物は少ないが、完形で床面直上から出土した遺物が多い。平面分布では、竪周辺と南側壁近くから出土している。第53図5は窓内で



第 76 号住居跡堆積層土

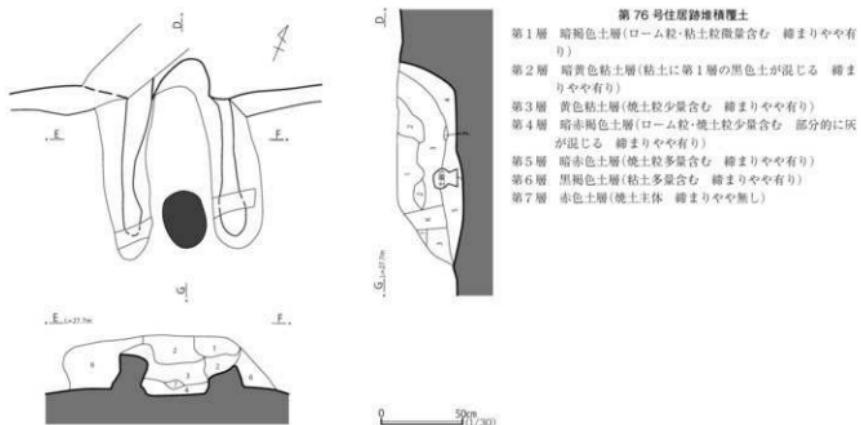
- 第1層 黒褐色土層(ローム粒少量含む 繩まり有り)
- 第2層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック・焼土粒少量含む 繩まりやや有り)
- 第3層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 烧土粒微量含む 繩まりやや有り)
- 第4層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 径1～2cmロームブロック少量含む 繩まりやや有り)
- 第5層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 繩まりやや有り)
- 第6層 暗褐色土層(ローム土主体 壁穴部下層に堆積しているローム土 繩まり有り)
- 第7層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 径1～5cmロームブロック少量含む 繩まりやや有り)

第 5 層 黒褐色土層(ローム粒少量含む 繩まりやや有り)

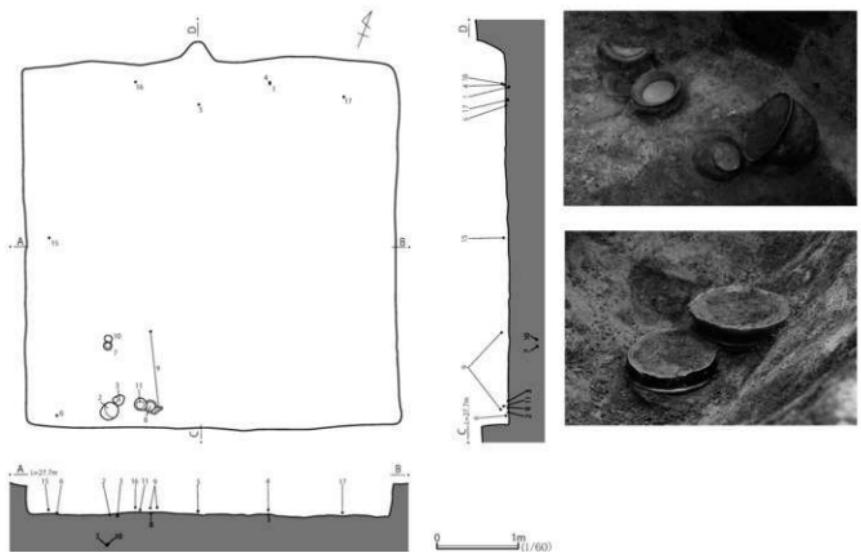
- 第9層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック微量含む 繩まりやや有り)
  - 第10層 暗褐色土とローム土の混合層(繩まりやや有り)
- 第 68 号住居跡ピット 1～5 堆積層土**
- 第1層 暗褐色土層(ローム粒少量含む 繩まりやや有り)
  - 第2層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 径1～3cmロームブロック少量含む 繩まりやや有り)
  - 第3層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 繩まりやや有り)
  - 第4層 暗褐色土層(ローム粒多量含む(第1層より明るい) 繩まりやや有り)



第 50 図 第 76 号住居跡(淡網:粘土)



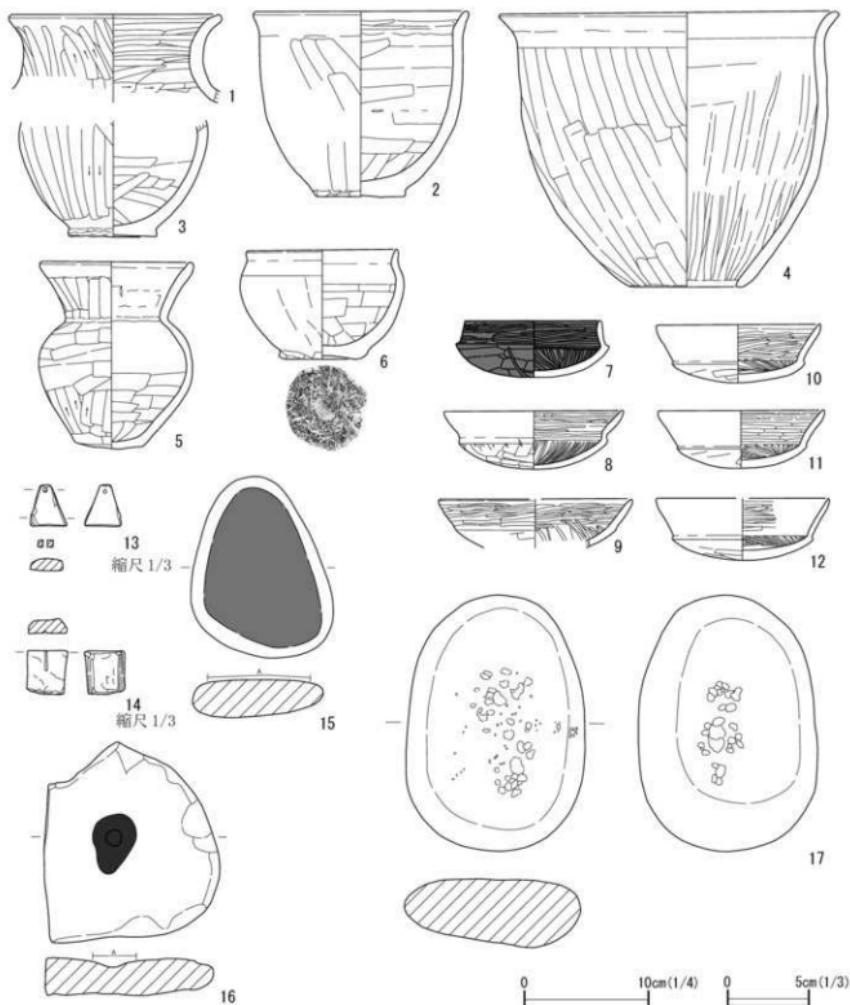
第 51 図 第 76 号住居跡電(濃網:焼土範囲)



第 52 図 第 76 号住居跡遺物出土状況

逆位の状態で出土した。1は床面直上で正位の状態で、その上に4が正位で重なった状態だった。2・3・6・8・11は、南側壁に沿って並んだ状態で出土した。2・6・8・11は正位の状態で、3は逆位の状態で出土した。7・10は、ピット3の底面に正位の状態で出土した。

**遺 物** 变形土器は、大型品が口縁部のみで、中型のもの(第53図2・3)が出土している。4の瓶形土器は、内面にミガキ調整がみられる。杯形土器は、口縁部が体部との境に稜をもって短く内湾するものと外反するものがみられる。10～12の杯形土器の体部内面の調整には、



第53図 第76号住居跡出土遺物(土器:淡網・黒色処理/石器:濃網・敲打による凹み。淡網・底面)

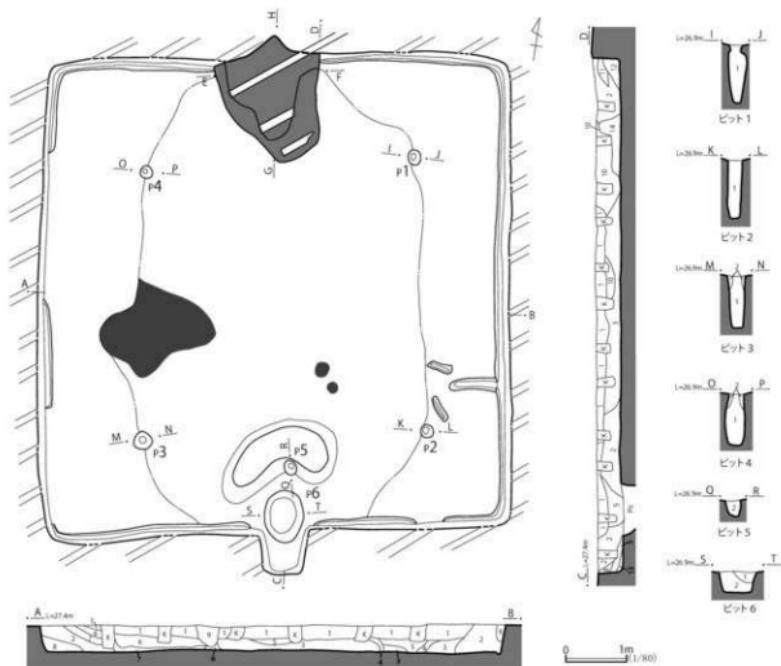
渦巻き状のヘラミガキがみられ、中央部はヘラミガキがない。この3点の杯形土器は法量や調整、色調が非常に似ている。7には黒色処理が施されている。13-14は石炭製の玉と思われる。

変形土器2・3、直筒形土器4、壺形土器5、鉢形土器6、杯形土器7・8・10-11内の土を水洗した結果、6の土器

内から炭化種子1点が検出され、同定の結果「モモ」の種子と判明した[パリノ報告]。

#### 第77号住居跡

遺構 Z・A-17・18区に位置する。ゴボウ耕作による溝状の搅乱を受けているが、床面までは掘り込ま



第 77 号住居跡堆積覆土

- 第1層 黒褐色土層(ローム粒少量含む 織まり有り)  
 第2層 褐色土層(ローム粒多量含む 織まり有り)  
 第3層 褐色土層(黒色土層が斑状に混じる ローム粒多量含む 織含む  
 織土粒少量含む 織まり有り)  
 第4層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 織土粒主体 織まり有り)  
 第5層 黒色土層(径1cmロームブロック少量含む 織まり有り)  
 第6層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 織まり有り)  
 第7層 暗褐色土層(焼土粒主体 ローム粒多量含む 織まり有り)  
 第8層 褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック少量含む  
 織まり有り)  
 第9層 黒褐色土層(ローム粒微量含む 別のピットか 織まり有り)

第 10 層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 白色粘土少量含む 織まり有り)

第 11 層 暗褐色土層(焼土主体 白色粘土少量含む 織まり有り)

第 12 層 暗褐色土層(ローム粒・炭粒少量含む 織まり有り)

第 13 層 明褐色土層(ローム主体 織まり強く有り)

第 14 層 白色粘土ブロック土層

第 77 号住居跡ピット 1 ~ 5 堆積覆土

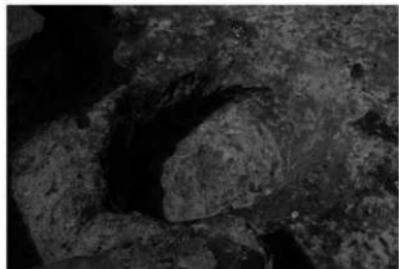
1. 褐色土層(ローム粒多量含む 織まり無し)

2. 暗褐色土層(ローム粒多量含む 織まりやや有り)

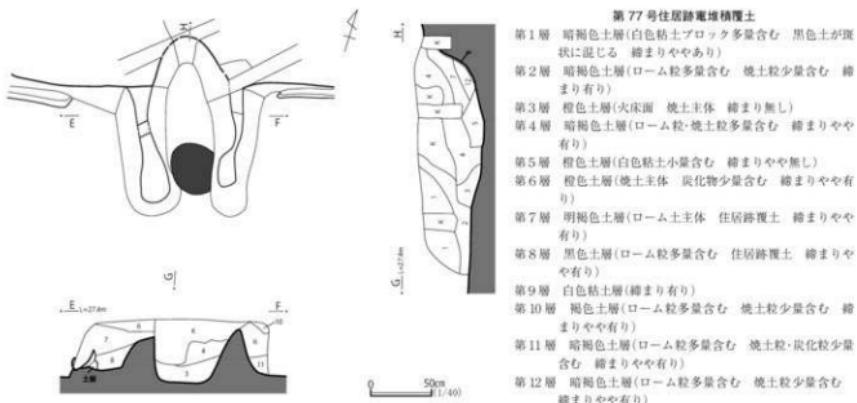
第 77 号住居跡ピット 6 堆積土層

1. 黑褐色土層(径1~3cmロームブロック・ローム粒多量含む 織まりや  
 や有り)

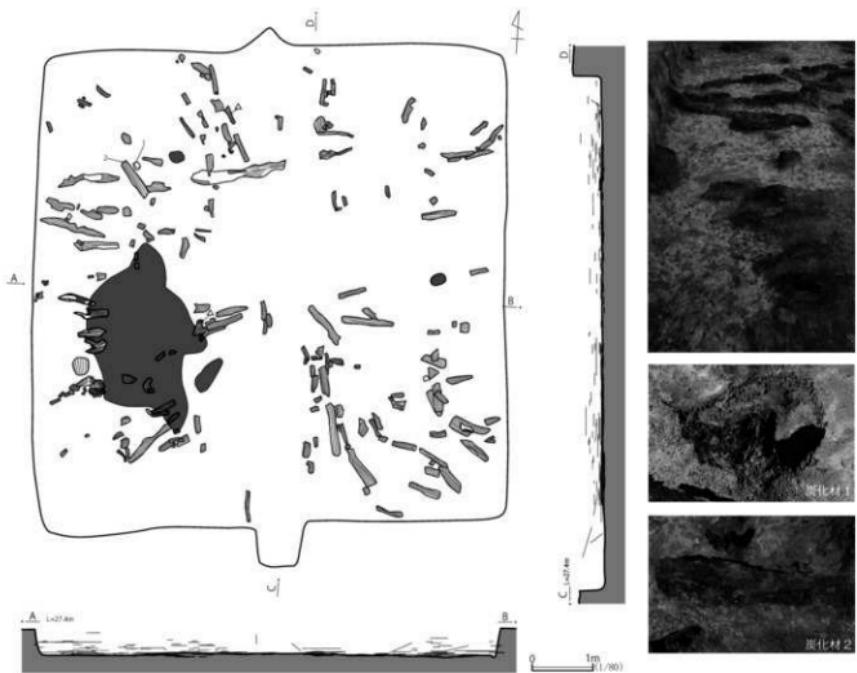
2. 黑褐色土層(ローム粒多量含む 炭化粒少量含む 織まりやや有り)



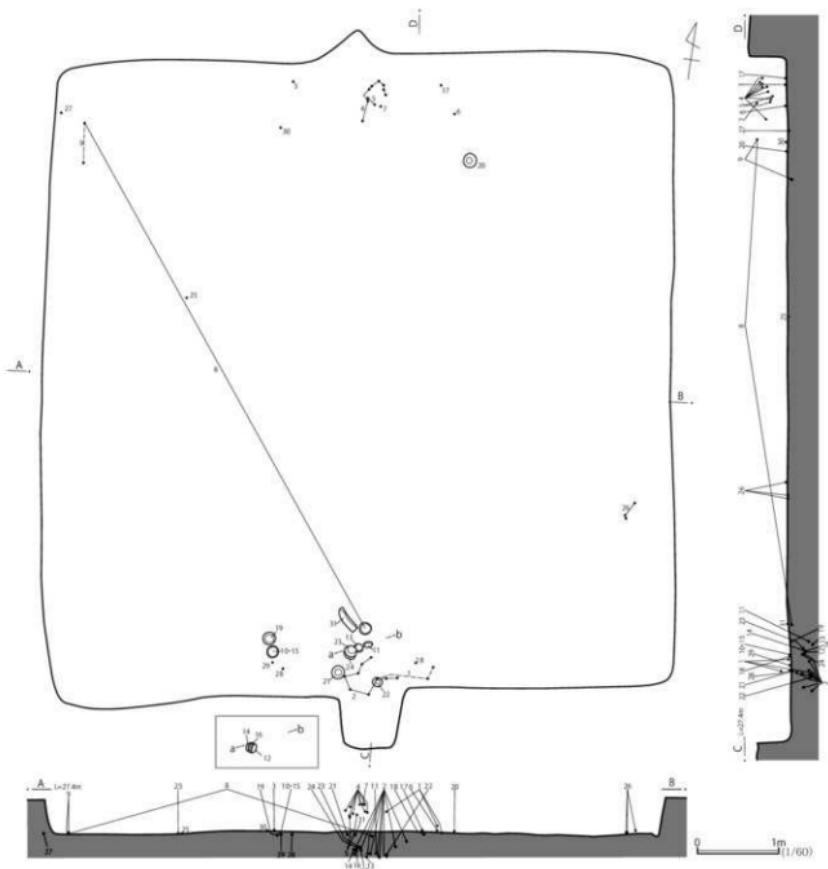
第 54 図 第 77 号住居跡(濃網:焼土範囲・淡網:粘土)



第 55 図 第 77 号住居跡竪(濃網:焼土範囲)



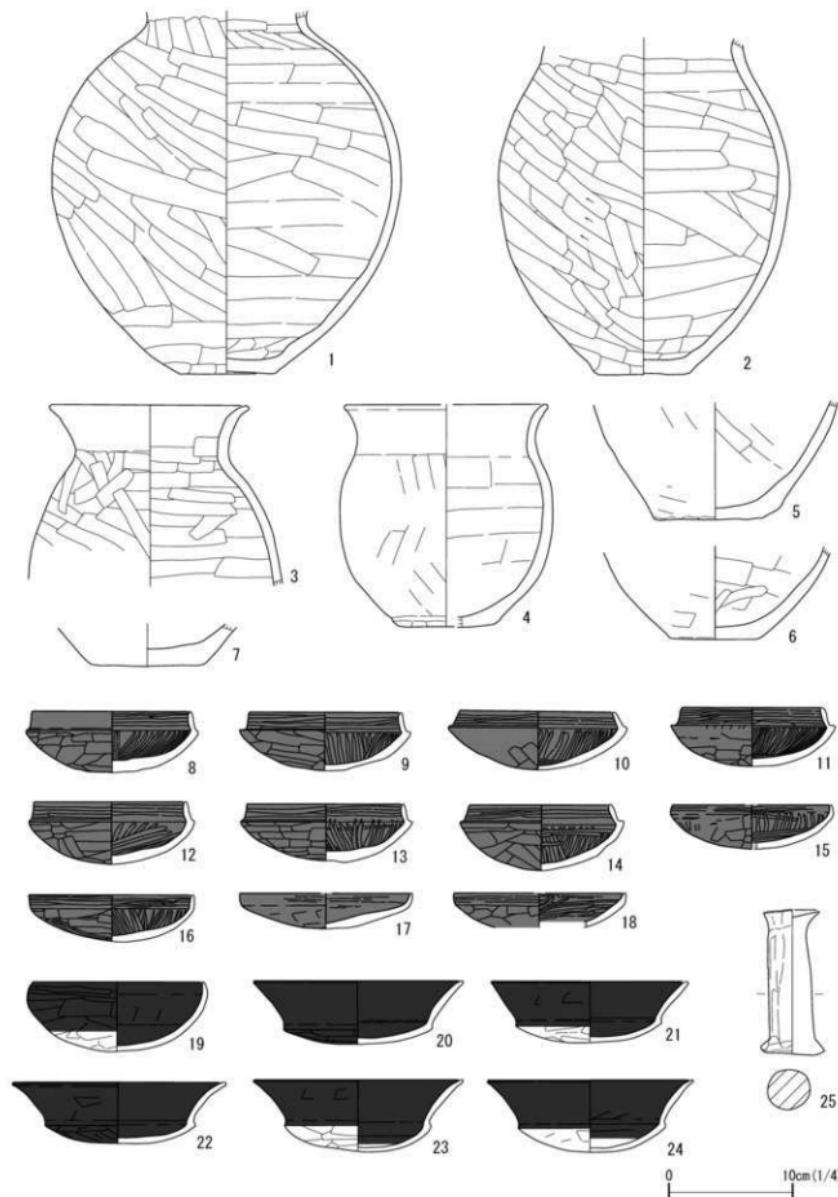
第 56 図 第 77 号住居跡炭化材出土状況(濃網:焼土範囲)



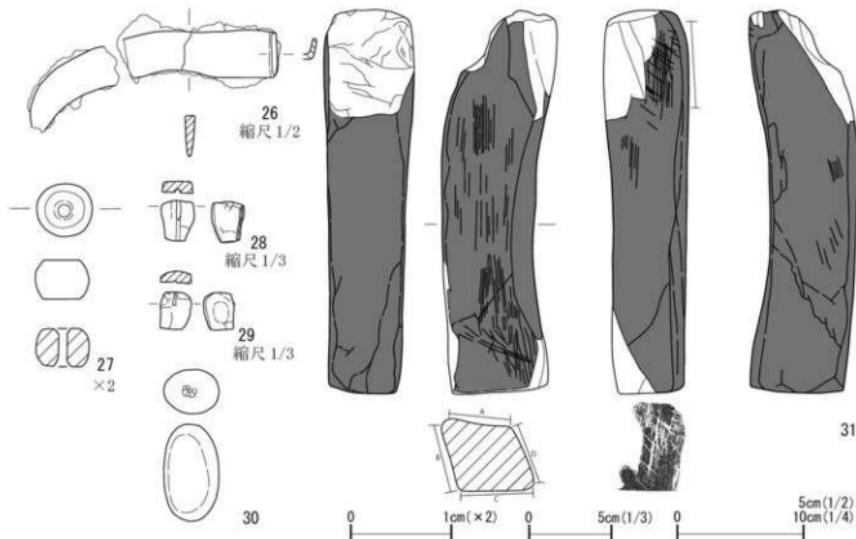
第 57 図 第 77 号住居跡遺物出土状況

れていない。平面形は、方形を呈するが、南壁が約 64 cm 張り出す。竪穴部の規模は  $7.82 \times 7.72$  m。壁高は東壁 45 cm、西壁 41 cm、南壁 35 cm、北壁 42 cm。主軸方向は N-8° - W を指す。壁周溝は、竪と南壁の張り出し部、西壁の一部以外にみられる。幅約 10 cm、床面からの深さ 2 ~ 5 cm を測る。また、東壁では竪穴部中央に向かって間仕切り状の溝が 1 条存在する。床面からの深さは約 3 cm を測る。床面は、竪前から南壁中央部にかけて帯状に硬化している。ピット 5 の周囲には、床面から約 3 cm の土手状の高まりがある。

炭化材は、202 点を図化し、サンプルとして一部分のみ取り上げを行った。炭化材の検出状況は、住居跡中央から外側に向かって放射状に部材がみられる。この検出状況は、上屋構造における配置を表すものと思われる。また、第 56 図の炭化材 1 は、主柱穴のピット 4 に木目の状態から立った状態で出土しており、床面近くで切られた主柱の可能性がある。炭化材は、形状の観察から丸材が多いが、炭化材 2 は幅 15 cm、長さ 60 cm の板状を呈していた。材の上にはカヤ状の根筋が継続した状態で出土した例もみられた。炭化材で形状の残りのよいもの



第58図 第77号住居跡出土遺物1(濃網:赤彩、淡網:黒色処理)



第59図 第77号住居跡出土遺物2(淡網:砥面)

20点を樹種同定した結果、コナラ属コナラ亜属クヌギ節(12点)とコナラ属コナラ亜属コナラ節(8点)と同定された[パリノ報告]。焼土は、炭化材の周縁にみられる。また、住居跡西側では、床面が被熱し赤化しているところがある。

竪穴部覆土は、壁側にローム土を主体とした褐色土、中央部に黒褐色土が堆積する。床面には、焼土や炭化物がみられる。覆土の観察と炭化材との関係から、当住居跡は燃焼中もしくは鎮火後に人为的に埋め戻されたと考えられる。

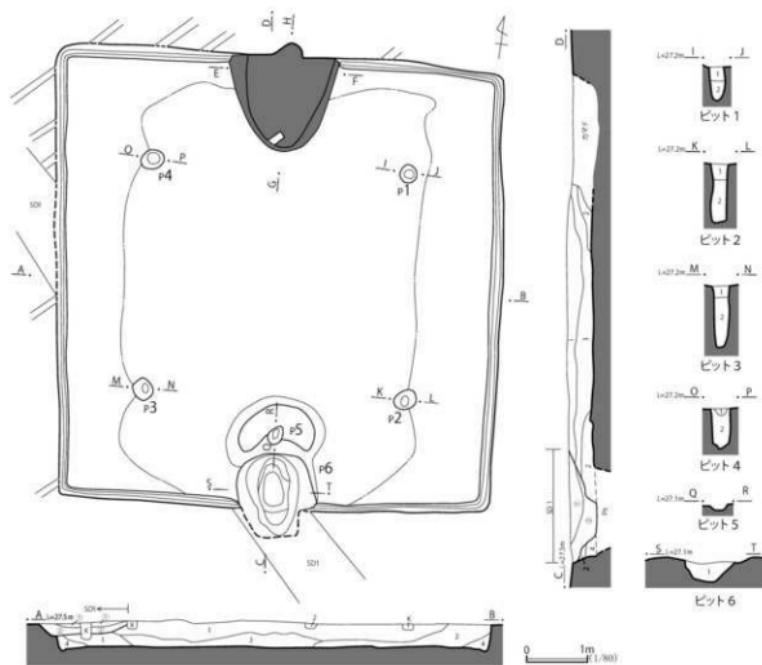
竪は、竪穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部は崩れているが、両袖部と燃焼部は比較的よく残っている。袖部は粘土等を芯として構築したものではなく、竪穴部構築時に竪の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残して、その上に白色粘土を貼って袖部としている。

ピットは6基検出された。ピット1~4は主柱穴、ピット5は出入り口施設に伴うもの、ピット6は「貯藏穴」と思われる。床面からの深さは、ピット1が105cm、ピット2が95cm、ピット3と4が85cm、ピット5が25cm、

ピット6が34cmである。主柱穴は、床面の確認状況から張床する前に柱を立てており、住居廃絶時にピットから引き抜いていない状況が確認できた。

**遺物の出土状況** 出土した遺物は、完形で床面上から出土した遺物が多い。平面分布では、竪周辺と南側壁のピット6近くから出土している。第58図1・2の甕形土器は、ピット6東側で壊れた状態で出土し、接合関係ではピット6内の破片と接合している。杯形土器は完形品が多く、床面上またはピット6内から出土した。8~10・15~19・22は正位の状態で、11~14・16は倒位の状態で、23~24は逆位の状態で出土した。12~14・16~23~24はまとまって出土し、12~14・16が倒位の状態で重なり、その上に23~24が逆位の状態で載せてあった。第59図26の鉄製品は、住居跡東壁側の床面上から出土した。27のガラス小玉は住居跡北西隅の壁周溝内から出土した。28~31の石製品はすべて床面上より出土し、31の砥石はピット6の土器が集中する場所から出土している。

**遺物** 甕形土器には大型品が2点あり、第58図1は球胴で、2は長胴を呈する。甕形土器はない。杯形

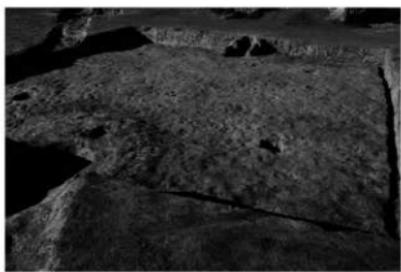


第 83 号住居跡堆積覆土

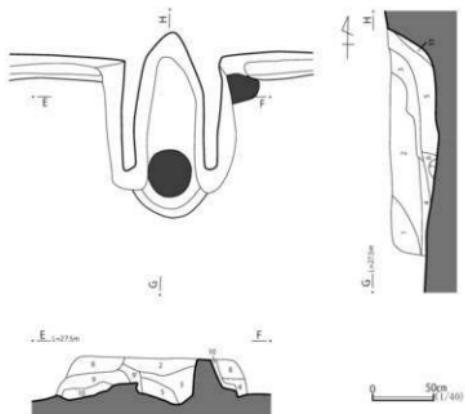
- 第1層 暗褐色土層(ローム粒少量含む 織まりやや有り)
- 第2層 褐色土層(人為的理土 ローム土主体 織まりやや有り)
- 第3層 褐色土層(径1~3cmロームブロック・ローム粒多量含む 灰化材含む 織まりやや有り)
- 第4層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 壁際の三角堆積 織まりやや有り)
- 第①層 暗褐色土層(SD1 覆土 黒ボク多量含む ローム粒少量含む)

織まりやや有り)

- 第②層 暗褐色土層(SD1 覆土 ローム粒少量含む 織まりやや有り)
- 第 83 号住居跡ビット 1 ~ 4 堆積覆土
- 第1層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 織まりやや有り)
- 第2層 褐色土層(ローム粒多量含む 織まりやや無し 黏性有り)
- 第 83 号住居跡ビット 6 堆積覆土
- 第1層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 織まりやや有り)



第 60 図 第 83 号住居跡(淡網:粘土)



第 61 図 第 83 号住居跡電(濃網: 燃土範囲)

土器は、口縁部が体部との境に後をもって短く内傾するものと直立するもの、大きく外反するもの、口縁部と体部との境に後をもたずに短く直立するものがみられる。8・10 の体部内面の調整には、放射状のヘラミガキがみられる。また、8~18 には黒色処理、19~24 には赤彩が施されている。23 と 24 では、内面体部中央部は円形に赤彩が塗られない部分がみられる。第 59 図 26 は鉄製の鎌で刃先が欠失している。27 はガラス小玉で色はコバルト色である。孔周辺には平坦面をもつ。28・29 は石炭の玉片と思われる。28 の孔は両側穿孔で、29 の孔は貫通していない。31 の砥石は大型品で、4 面に研磨痕と刃を研いだと思われる細い溝が数条確認できた。

杯形土器 8・10 ~ 14・16・19 ~ 21・24 内の土を水洗したところ 21 の土器内から炭化種子 13 点が検出され、同定の結果「オナモミ属」と同定された[パリノ報告]。

### 第 83 号住居跡

**遺構** W・X - 15・16 区に位置する。西壁中央から南壁中央にかけて第 1 号溝状遺構に掘り込まれており、ゴボウ耕作による溝状の搅乱を受けているが、いずれも床面までは掘り込まれていない。平面形は、方形を呈するが、南壁が約 50 cm 張り出す。堅穴部の規模は 7.50 × 7.22 m。壁高は東壁 50 cm、西壁 40 cm、南壁 44 cm、北壁 50 cm。主軸方向は N - 8° - W を指す。壁周溝は、

### 第 83 号住居跡電堆積覆土

- |        |  |
|--------|--|
| 第 1 層  | 暗褐色土層(白色粘土多量含む 織まりやや有り)                    |
| 第 2 層  | 暗褐色土層(ローム粒多量含む 粘土を含まない) 織まりやや有り            |
| 第 3 層  | 暗褐色土層(天井部 ローム粒・白色粘土多量含む 燃土粒少量含む 織まりやや有り)   |
| 第 4 層  | 暗褐色土層(燃土ブロック・燃土粒少量含む 織まりやや有り)              |
| 第 5 層  | 暗褐色土層(燃土ブロック・燃土粒少量含む 織まりやや有り)              |
| 第 6 層  | 褐色土層(ローム粒・燃土粒多量含む 織まりやや有り)                 |
| 第 7 層  | 橙色土層(燃土粒多量含む 織まりやや有り)                      |
| 第 8 層  | 暗褐色土層(ローム粒多量含む 黒色土若干混じる 織まりやや有り)           |
| 第 9 層  | 褐色土層(ローム粒多量含む 燃土ブロック・燃土粒・白色粘土少量含む 織まりやや有り) |
| 第 9' 層 | 第 9 層の土層が少ないので土層(織まりやや有り)                  |
| 第 10 層 | ローム土と白色粘土の混合層(袖部上の粘土か)                     |
| 第 11 層 | 暗褐色土層(表面に張った粘土か ローム粒・白色粘土多量含む 織まりや有り)      |

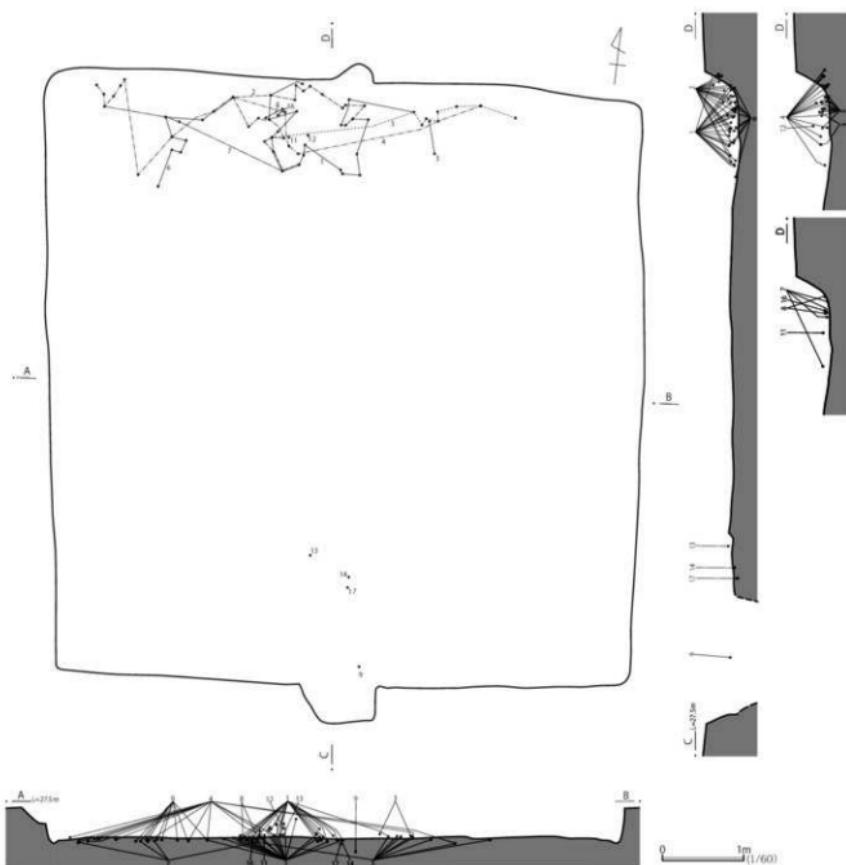
竈と南壁の張り出し部以外にみられる。幅約 10 cm、床面からの深さ 2~4 cm を測る。床面は、竈前から南壁中央部にかけて帯状に硬化している。ピット 5 の周囲には、床面から約 3 cm の土手状の高まりがある。

堅穴部覆土は、下層にローム土を主体とした褐色土、上層に直径 1~3 cm ほどのロームブロックを含む暗褐色土が堆積する。床面には、若干の焼土や炭化物がみられる。下層は人為的に埋め戻された土層と思われる。

竈は、堅穴部北壁のはば中央に構築されている。残存状況は、天井部が崩れているが、袖部と燃焼部は比較的よく残っている。袖部は粘土等を芯として構築したものではなく、堅穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残して、その上に白色粘土を貼って袖部としている。袖部の燃焼部側は被熱し赤化している。

ピットは 6 基検出された。ピット 1~4 は主柱穴、ピット 5 は出入り口施設に伴うもの、ピット 6 は「貯蔵穴」と思われる。床面からの深さは、ピット 1 が 55 cm、ピット 2 が 97 cm、ピット 3 が 105 cm、ピット 4 が 65 cm、ピット 5 が 11 cm、ピット 6 が 28 cm である。主柱穴は、床面の確認状況から張床する前に柱を立てておらず、住居廃絶時にピットから引き抜いていない状況が確認できた。

**遺物の出土状況** 遺物は破片化したものが多く、土器で完形品の状態で出土したものはない。図化出来た遺物の平面分布は、その大半が竈周辺から出土しており、

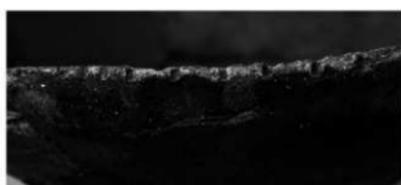


第 62 図 第 83 号住居跡遺物出土状況

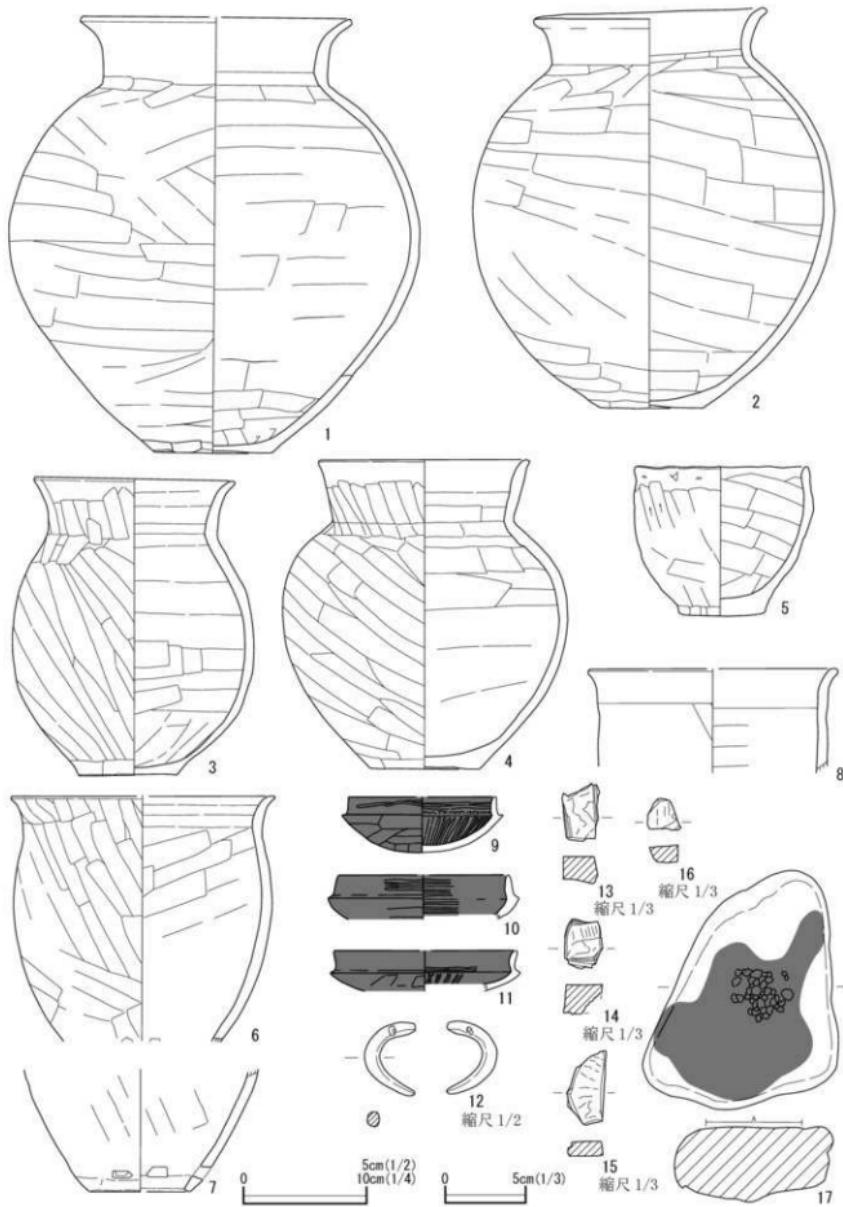
第 63 図 9 の杯形土器はピット 6 の覆土中から出土した。1~7 の甕形土器や瓶形土器は、竈周辺で複雑な接合関係がみられる。垂直分布では、床面直上に位置するものが多い。12 の土製品は竈袖部西側の覆土下層から出土した。

**遺物** 甕形土器は、大型品 2 点と中型品 2 点がある。第 63 図 1 の甕形土器には、接合の際の鋸歯状の断面がみられる。6・7 の瓶形土器は同一のものと思われ、底部近くに焼成前穿孔の孔が対角線上に 4 つみられる。杯形土器は 3 点で全て破片資料である。10 の杯形土器

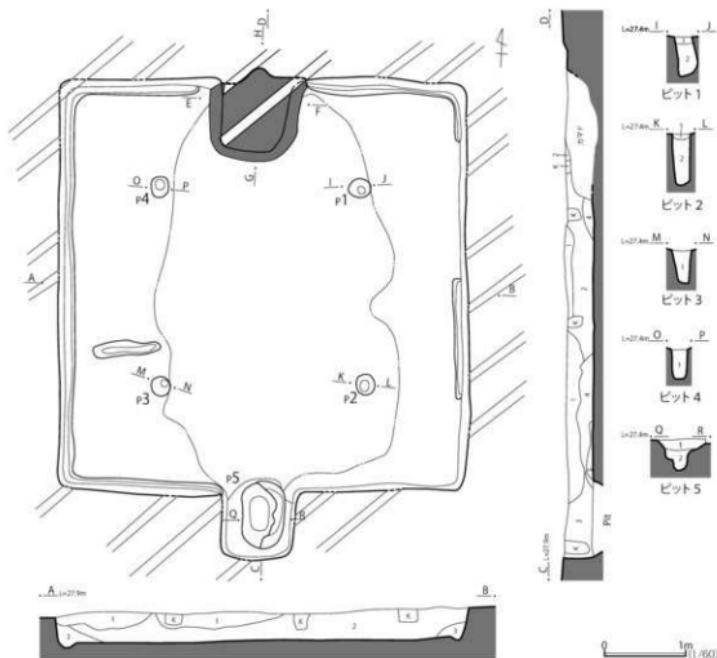
は西隣に位置する第 73 号住居跡から出土した遺物と接合した。12 は土製の勾玉と思われる。13~16 は石炭片で、



第 83 号住居跡第 63 図 1 にみられる接合痕



第 63 図 第 83 号住居跡出土遺物(土器: 淡網・黒色処理 / 石器: 淡網・砥面)



第 85 号住居跡堆積土

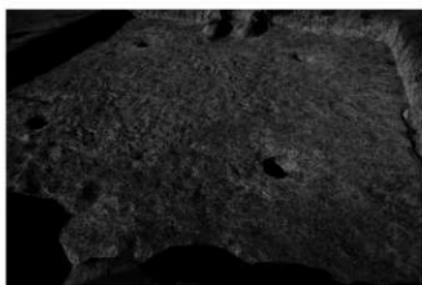
- 第1層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 径 1cmロームブロック少量含む  
締まりやや有り)  
第2層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 径 1cmロームブロック・灰少量含む  
締まりやや有り)  
第3層 褐色土層(ローム粒多量含む 径 1cmロームブロック少量含む  
締まりやや有り)  
第4層 暗褐色土層(燒土粒・炭粒多量含む ローム粒多量含む 締まり  
やや有り)  
第5層 燃土と炭の混合層(締まり無し)

第 85 号住居跡ピット 1 ~ 4 堆積覆土

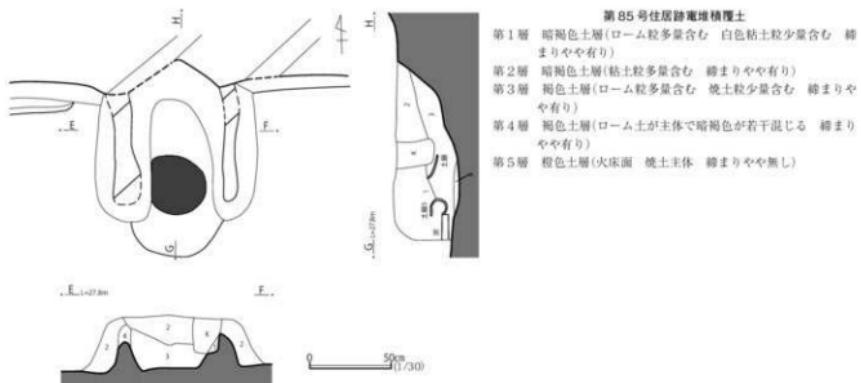
- 第1層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)  
第2層 褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)

第 85 号住居跡ピット 5 堆積覆土

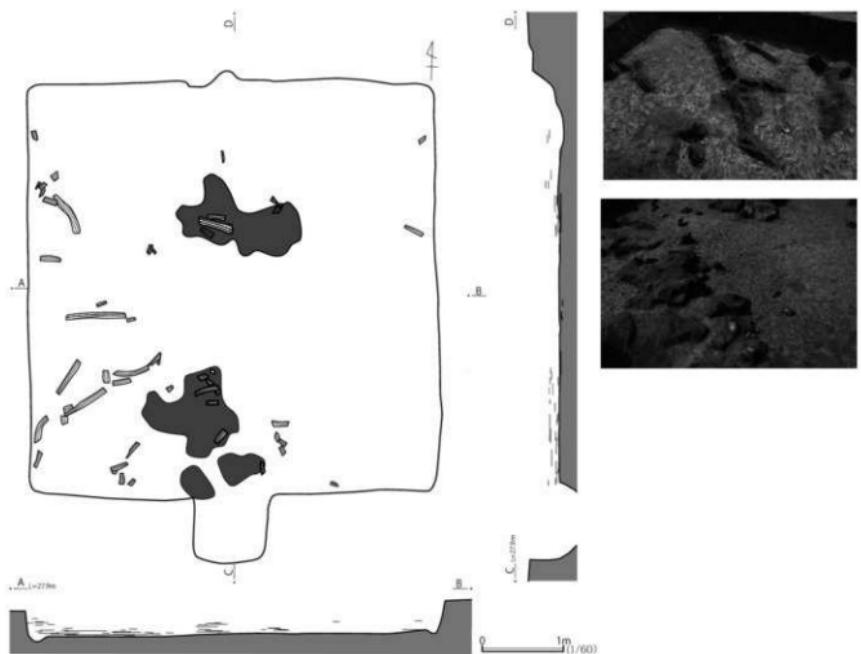
- 第1層 暗褐色土層(径 3cmロームブロック少量含む 締まりやや有り)  
第2層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まり無し)



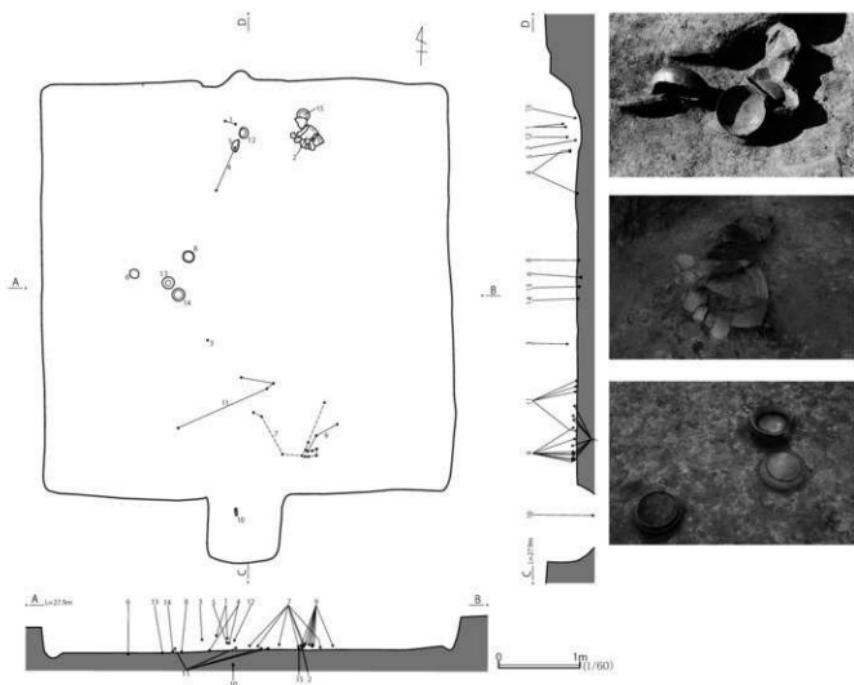
第 64 図 第 85 号住居跡(淡網:粘土)



第 65 図 第 85 号住居跡竪坑横断面(濃網:焼土範囲)



第 66 図 第 85 号住居跡炭化材出土状況(濃網:焼土範囲)



第 67 図 第 85 号住居跡遺物出土状況

この他に固化していないものが約 34 g 出土している。

変形土器 3・4 の土器内の土を水洗したが、検出物はなかった。

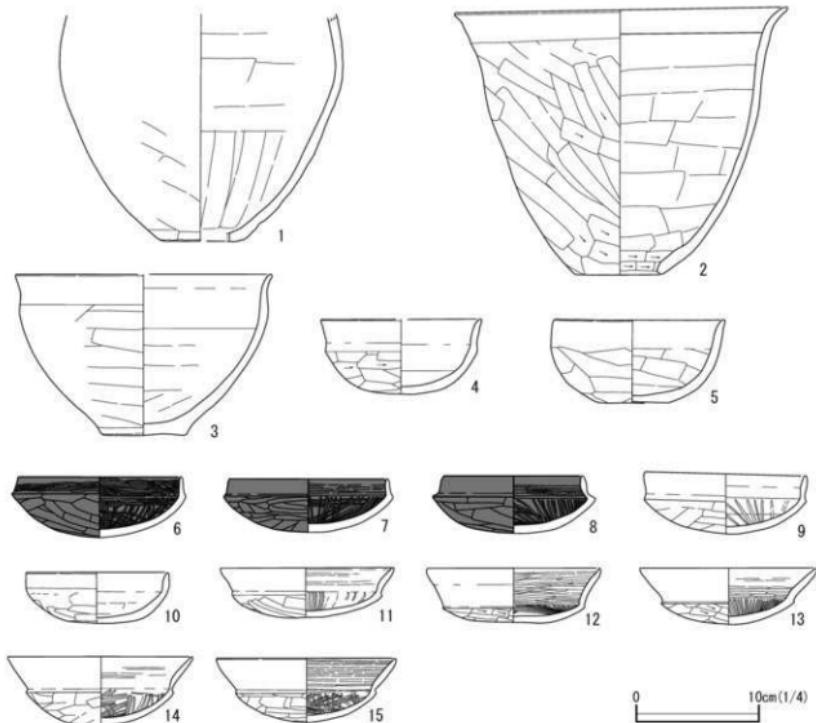
#### 第 85 号住居跡

**遺構** T・U-16 区に位置する。ゴボウ耕作による溝状の搅乱を受けているが、床面までは掘り込まれていない。平面形は、方形を呈するが、南壁が約 82 cm 張り出す。竪穴部の規模は 5.09 × 5.05 m。壁高は東壁 42 cm、西壁 35 cm、南壁 32 cm、北壁 35 cm。主軸方向は N-3°-W を指す。壁周溝は竪から西壁沿いに南壁中央までと北壁東側、東壁の一部にみられる。幅約 5-10 cm、床面からの深さ約 4 cm を測る。また、西壁では竪穴部中央に向かって間仕切り状の溝が 1 条存在する。床面からの深さは 3-5 cm を測る。床面は、竪前から南壁中央部にかけて帯状に硬化している。

炭化材は、90 点を固化し、サンプルとして一部分のみ取り上げを行った。炭化材の検出状況は、住居跡西壁付近から南壁中央にかけて部材がみられる。比較的大きな部材は住居跡中央から外側に向かって放射状に出土している。炭化材は、形状の観察から丸材が多い。炭化材で形状の残りのよいもの 2 点を樹種同定した結果、コナラ属コナラ亜属クヌギ節とコナラ属コナラ亜属コナラ節と同定された【パリノ報告】。焼土は、住居跡中央から南壁中央にかけて多くみられる。

竪穴部覆土は、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積する。床面には、焼土や炭化物がみられる。

竪は、竪穴部北壁のはば中央に構築されている。残存状況は、天井部は崩れているが、両袖部と燃焼部は比較的よく残っている。袖部は粘土等を芯として構築したものではなく、竪穴部構築時に竪の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残して、その上に白色粘土を貼って袖



第68図 第85号住居跡出土遺物(淡網:黒色処理)

部としている。火床面は竈断面の第5層部分で、焼土が約4cmの厚さで堆積していた。

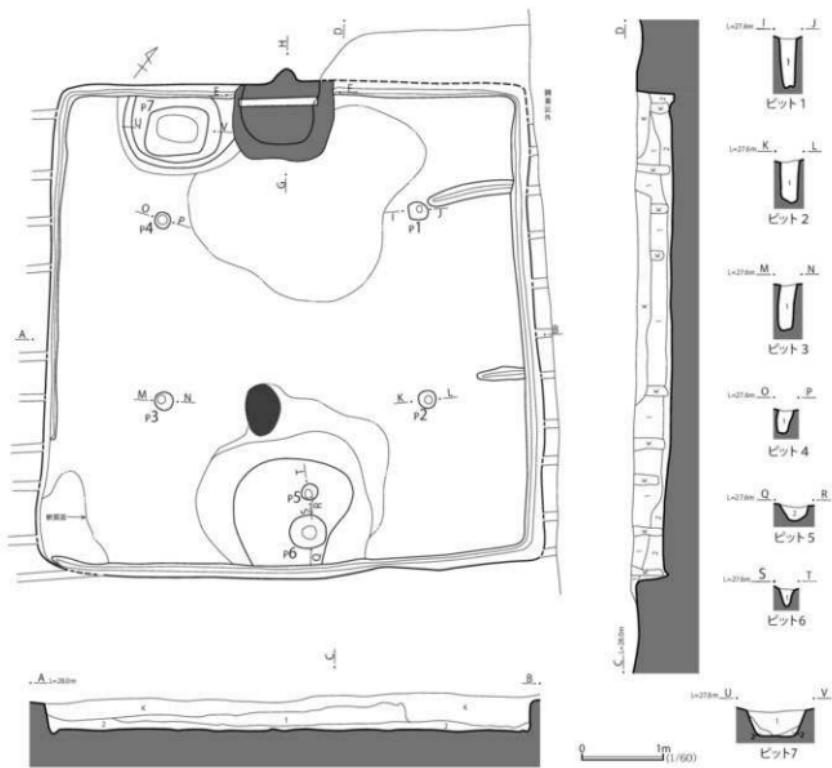
ピットは5基検出された。ピット1~4は主柱穴、ピット5は「貯藏穴」と思われる。床面からの深さは、ピット1が48cm、ピット2が63cm、ピット3が50cm、ピット4が37cm、ピット5が35cmである。主柱穴は、床面の確認状況から張床する前に柱を立てており、住居廃絶時にピットから引き抜いていない状況が確認できた。

**遺物の出土状況** 遺物は少ないが、完形品が多い。平面分布では竈周辺から南壁の出入り口付近にかけて帶状に出土している。垂直分布では、竈穴部中央から竈周辺で出土した遺物は床面直上で、南壁中央付近は覆土下層に位置する。第68図2の壺形土器は竈東側でつぶれ

た状態で床面から出土した。5の椀形土器は竈内で倒位の状態であった。完形の杯形土器は6・8・13・14・15が床面直上で、10がピット内、12が竈内から出土した。出土した状態は、8・12・14が正位、6・13が逆位、10が倒位である。

**遺物** 壺形土器は、破片しかない(第68図1)。壺形土器は1点あり、ほぼ完形品である。4・5は椀形土器で、5は平底である。杯形土器は、口縁部が体部との境に稜をもって短く内傾するものと直立するもの、大きく外反するものがみられる。10以外の体部内面の調整には、ヘラミガキがみられる。また、6~8には黒色処理が施されている。

椀形土器5と杯形土器6・8・10・13・15内の土を水洗



第 86 号住居跡堆積覆土

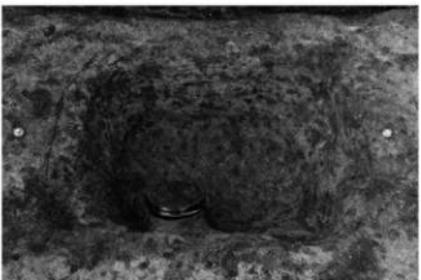
第1層 黒色土層(ローム粒多量含む 線まりやや有り)  
第2層 褐色土層(ローム粒多量含む 烧土粒・炭化粒少量含む 線まりやや有り)

第 86 号住居跡ピット 1～6 堆積覆土

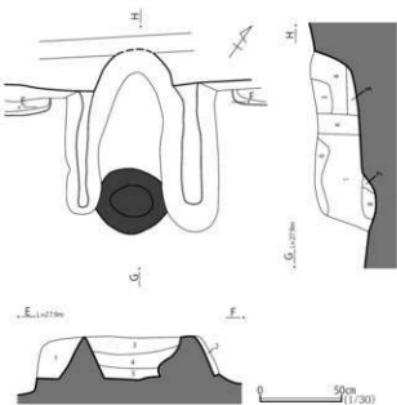
第1層 褐色土層(ローム粒多量含む 線まりやや有り)

第 2 層 明褐色土層(ローム粒多量含む 線まりやや有り)

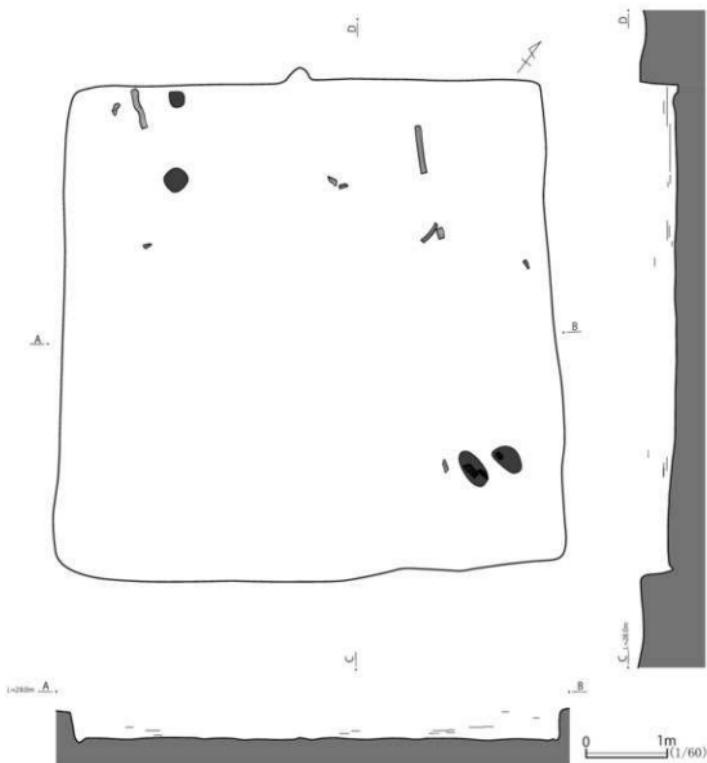
第 86 号住居跡ピット 7 堆積覆土  
第1層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 線まりやや有り)  
第2層 褐色土層(ローム粒多量含む 線まりやや有り)



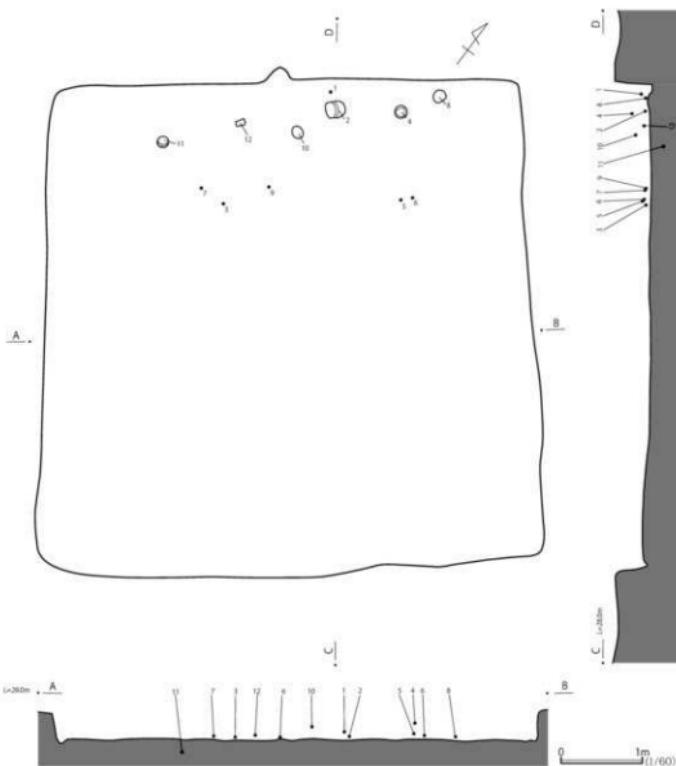
第 69 図 第 86 号住居跡(濃網:焼土範囲、淡網:粘土)



第70図 第86号住居跡竪(濃網:焼土範囲)



第71図 第86号住居跡炭化材出土状況(濃網:焼土範囲)



第72図 第86号住居跡遺物出土状況

したところ5の土器内から炭化種子1数点が検出されたが、同定できなかった。[パリノ報告]。

#### 第86号住居跡

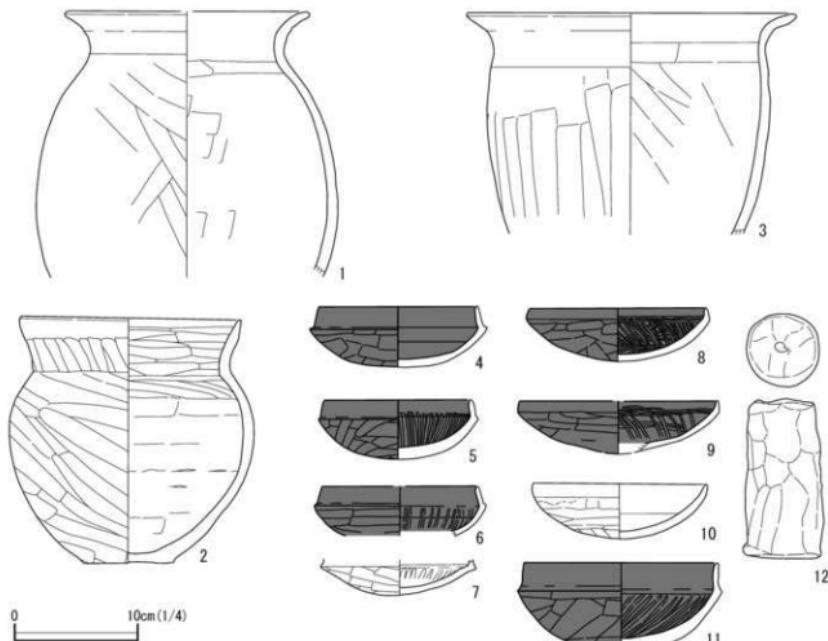
**遺構** T-17-18区に位置する。耕作による土坑状の搅乱とそれ以前のゴボウ耕作による溝状の搅乱を受けているが、床面までは掘り込まれていない。平面形は、方形を呈する。堅穴部の規模は $6.09 \times 6.02\text{ m}$ 。壁高は東壁 $41\text{ cm}$ 、西壁 $32\text{ cm}$ 、南壁 $42\text{ cm}$ 、北壁 $44\text{ cm}$ 。主軸方向はN-39°-Wを指す。壁周溝は竈周辺と南隅以外にみられる。また、東壁では堅穴部中央に向かって間仕切り状の溝が2条存在する。床面からの深さは $2\sim 5\text{ cm}$ を測る。床面は、竈周辺と出入り口周辺のみ硬化面がみら

れる。また、堅穴部南隅は張床がなく軟質である。ピット5・6の周囲には床面から約 $2\sim 5\text{ cm}$ の、ピット7の周囲には $1\sim 4\text{ cm}$ の土手状の高まりがある。

炭化材は、13点を図化し、サンプルとして一部分のみ取り上げを行った。炭化材の検出状況は、住居跡内に点在し、残りもよくない。炭化材は、形状の観察から丸材である。焼土は、炭化材の周辺にみられ、また、ピット6の東側の床面は被熱し赤化している。

堅穴部覆土は、主体が黒色土で、床面近くに褐色土が堆積する。

竈は、堅穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部は崩れているが、両袖部と燃焼部は比較的よく残っている。袖部は粘土等を芯として構築したも



第73図 第86号住居跡出土遺物(淡網:黒色処理)

のではなく、竪穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残して、その上に白色砂質粘土を貼つて袖部としている。火床面は竈断面の第8層部分で、焼土が約8cmの厚さで堆積していた。

ピットは7基検出された。ピット1~4は主柱穴、ピット5・6は出入り口施設に伴うもの、ピット7は「貯蔵穴」と思われる。床面からの深さは、ピット1が68cm、2が49cm、ピット3が63cm、ピット4が30cm、ピット5が20cm、ピット6が21cm、ピット7が35cmである。

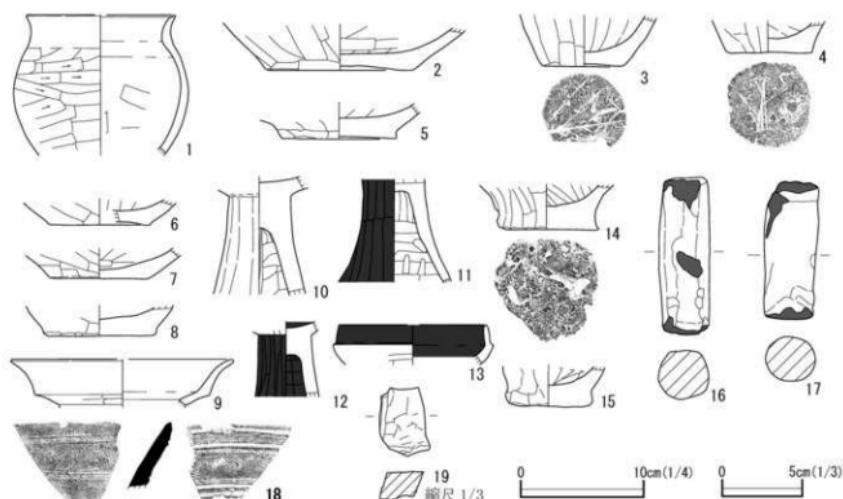
**遺物の出土状況** 遺物は少ないが、完形品が多い。平面分布では竈周辺の北壁の付近に多い。垂直分布では、第73図1~3・5~9・12が床面上、10が竈内、11がピット7上層、4が覆土中層から出土した。1と2の変形土器は正位で竈東側袖部に寄りかかる状態で出土し、1は搅乱により破壊されている。杯形土器は4・8・11が正位、5・6・10が逆位で出土した。

**遺物** 変形土器には、大型品と中型品がある(第

73図1・2)。瓶形土器にとおもわれるものは1点あるが、破片資料である。杯形土器は、口縁部が体部との境に稜をもって短く内傾するものと、口縁部と体部との境に稜をもたずに短く直立するものがみられる。内面の調整には、ヘラミガキがあるものとないものがある。また、4~6・8・9・11には黒色処理が施されている。11は大型品である。12は土製の支脚で、孔がある。

変形土器2と杯形土器4・8・10・11内の土を水洗したが、検出物はなかった。

## 3 遺構に伴わない古墳時代の遺物



第74図 遺構に伴わない古墳時代の遺物(第3号溝状遺構／濃網:赤彩・淡網:欠損)

遺構に伴わない古墳時代の遺物は、奈良時代の遺構と推定される第3号溝状遺構より出土している。

図化できたのは、変形土器片8点、高杯形土器片4点、杯形土器1点、手づくね土器片2点、土製支脚2点、須恵器1点、石炭片1点である。いずれも古墳時代後期と推定される遺物である。石炭片は、溝状遺構周辺の住居跡から多数出土しており、土器の時期からもこれらの住居跡に伴う遺物と考えられる。

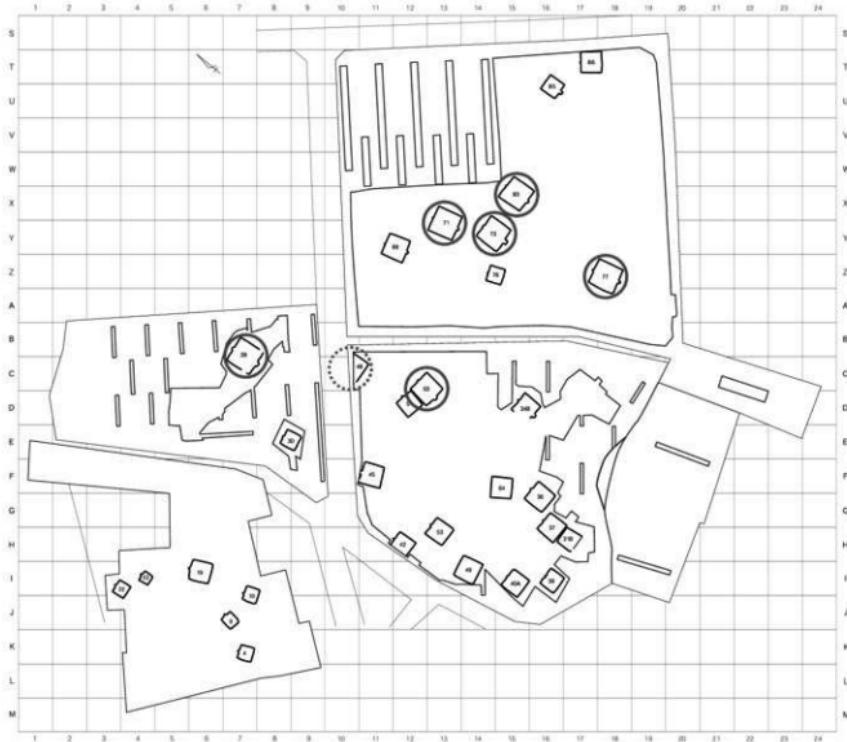
## 4 古墳時代後期の大型住居跡について

**鷹ノ巣遺跡及び近隣遺跡の大型住居跡** 鷹ノ巣遺跡では、古墳時代後期の住居跡30基を検出した。これらのは住居跡を長軸長の数値で分類すると、5m未満の住居跡が7基、5.09～5.86mの住居跡が4基、6.08～6.89mの住居跡が13基、7.00～8.00mの住居跡が6基となり、6m台の住居跡が半数以上を占める。住居跡の分布では、第1～4次調査区全体に分布しているが、長軸長が7m以上の大型住居跡は、台地中央部の住居跡が密集していない台地平坦部に位置する傾向がみられる(第75図)。

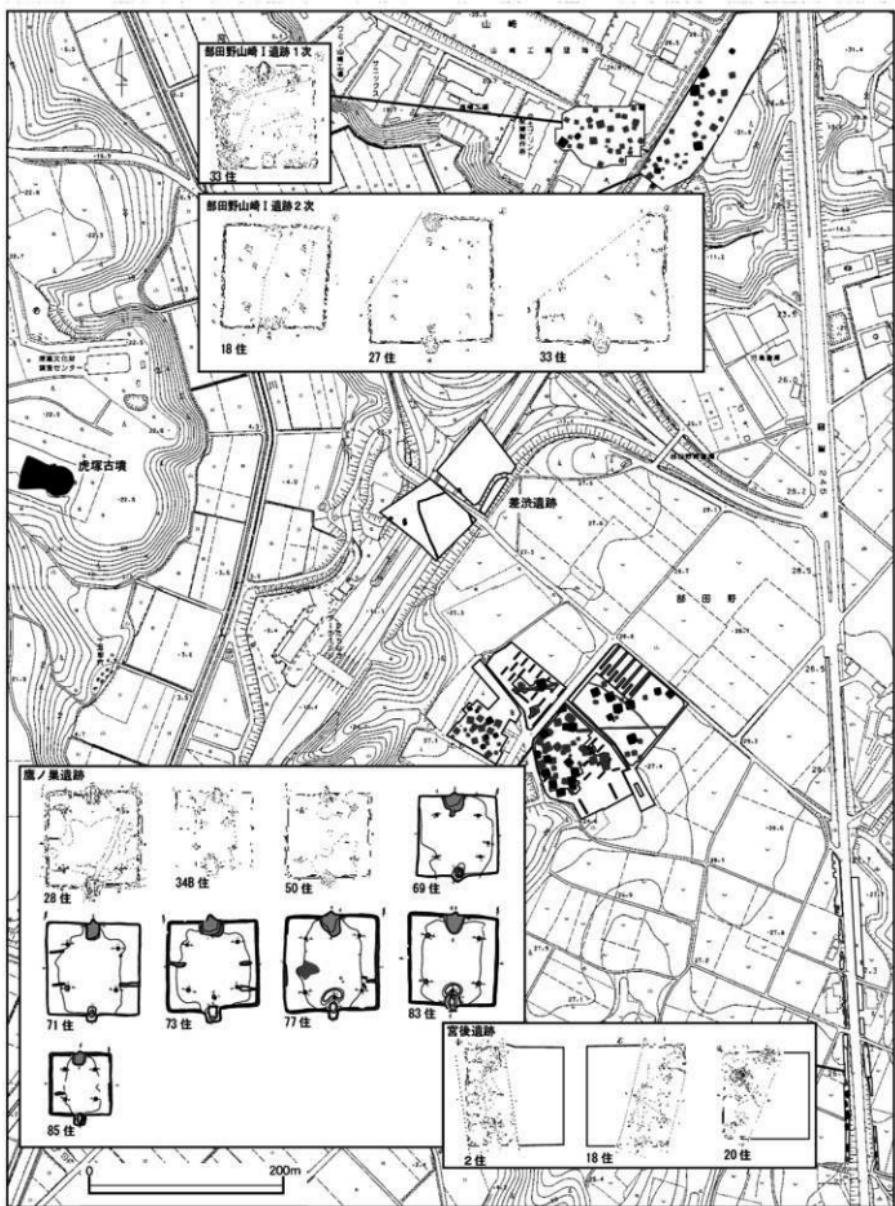
ここで、長軸長が7m以上の大型住居跡について注目すると、住居構造で1つの共通点が見られる。それは堅

穴部南壁にピットが張り出しいわゆる「張り出し貯蔵穴」を付設していることである。鷹ノ巣遺跡で「張り出し貯蔵穴」を付設する住居跡は9基あり、すべて古墳時代後期前半の時期に比定される。9基中6基が大型住居跡で、その他は長軸長5.09m(85住)と6.30m(34B住)、6.54m(69住)の規模の住居跡である(第77図)。分布では、7m未満の3基についても、大型住居跡同様に台地中央部に位置する。

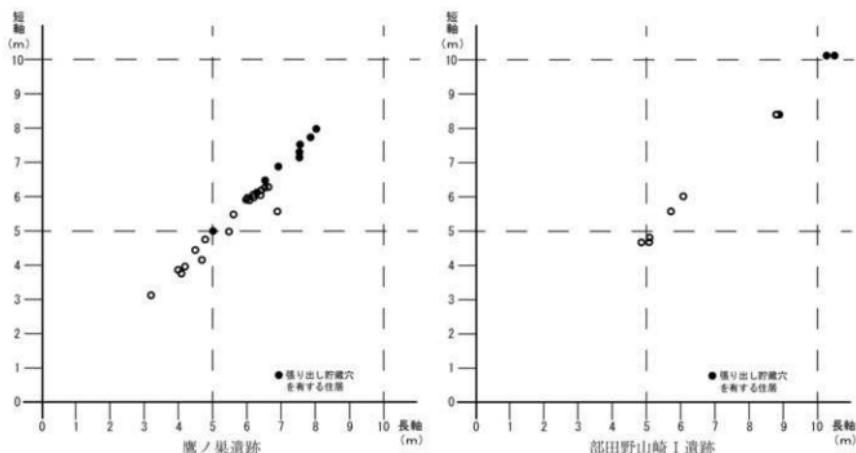
次に、鷹ノ巣遺跡の近隣遺跡の大型住居跡を確認する。近隣遺跡で調査例がある遺跡には、当遺跡北側に部田野<sup>セトノヒラ</sup>山崎I遺跡<sup>ヤマツキイ</sup>、東側に宮後遺跡<sup>ミヤヒタ</sup>がある(第76図)。



第75図 古墳時代後期住居跡分布図(○:大型住居跡)



第76図 鷹ノ巣遺跡と近隣遺跡の大型住居跡(住居跡の縮尺は1/400)



第77図 鷹ノ巣遺跡と部田野山崎I遺跡の古墳時代後期住居跡規模比較

第4表 部田野山崎I遺跡と宮後遺跡の古墳時代後期住居跡一覧

遺跡名	住居跡番号	長軸(m)	短軸(m)	主軸	時期	張り出し貯蔵穴
部田野山崎I遺跡	2次第33号住居跡	10.4	10.1	N-21°-W	後期前半	あり
	2次第27号住居跡	10.2	10.1	N	後期前半	あり
	1次第33号住居跡	8.7	8.4	N-40°-E	後期前半	-
	2次第18号住居跡	8.7	8.4	N-18°-W	後期前半	あり
	2次第3号住居跡	6.0	6.0	N	後期前半	-
	1次第27号住居跡	5.6	5.6	N-45°-E	後期前半	-
	1次第7号住居跡	5.0	4.7	N-5°-E	後期前半	-
	2次第35号住居跡	5.0	4.8	N-52°-W	後期前半	-
	2次第7号住居跡	4.8	4.7	N-14°-W	後期前半	-
宮後遺跡	第18号住居跡	8.4	-	N-13°-W	後期後葉	なし
	第2号住居跡	8.2	-	N-5°-E	後期後葉	不明
	第20号住居跡	7.08	-	N-20°-W	後期後葉	不明
	第3号住居跡	6.61	-	N-14°-W	後期後葉	-
	第19A号住居跡	6.47	-	N-16°-W	後期後葉	-
	第10号住居跡	-	-	-	後期後葉	-

第5表 三反田下高井遺跡の古墳時代後期大型住居跡と

## 「張り出し貯蔵穴」を付設する住居跡

住居跡番号	長軸(m)	短軸(m)	主軸	時期	張り出し貯蔵穴
第26号住居跡	9.0	8.2	N-46°-W	後期前半	あり
第136A号住居跡	8.5	8.2	N-5°-W	後期前半	あり
第173号住居跡	8.4	8.1	N-25°-W	後期前半	あり
第118A号住居跡	7.7	7.7	N-36°-W	後期前半	あり
第79号住居跡	7.6	7.6	N-53°-E	後期前半	あり
第132A号住居跡	7.3	6.8	N-51°-W	後期前半	-
第120B号住居跡	7.1	6.8	N-16°-W	後期前半	あり
第131号住居跡	5.1	5.1	N-5°-W	後期前半	あり

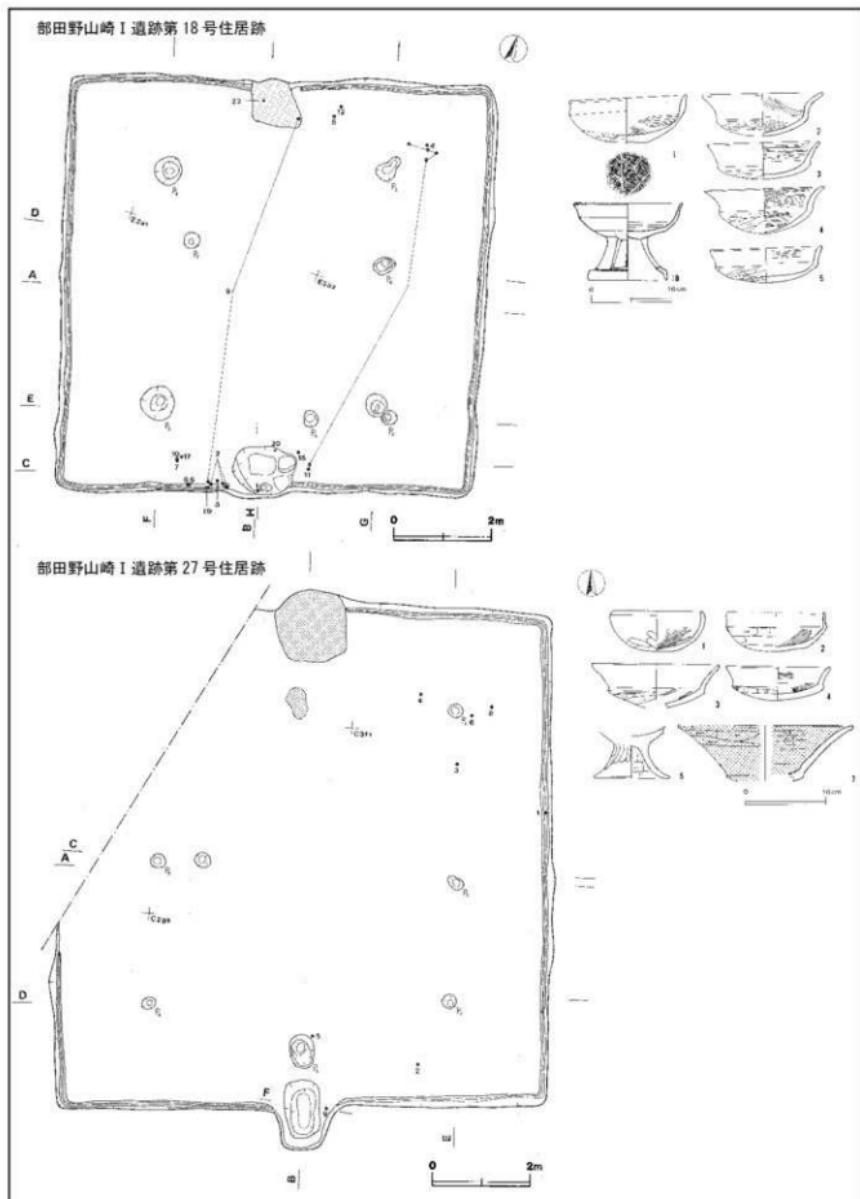
部田野山崎I遺跡では、古墳時代後期の住居跡が9基確認されている〔井上1990〕〔宮崎1995〕(第4表)。うち4基が長軸8mを越える大型住居跡で、2次調査の第33号住居跡は10.4m、同第27号住居跡は10.2mを測る。時期は古墳時代後期前半と推定される。住居跡構造では、9基中大型住居跡の3基に「張り出し貯蔵穴」が付設される。

宮後遺跡では、古墳時代後期の住居跡が6基確認されている〔大久保2012〕〔根本2017〕(第4表)。うち3基が長軸長7m以上の大型住居跡で、第2号住居跡は8.2m、第18号住居跡は8.4mを測る。時期は古墳時代後期後葉と推定される。住居構造では、3基の

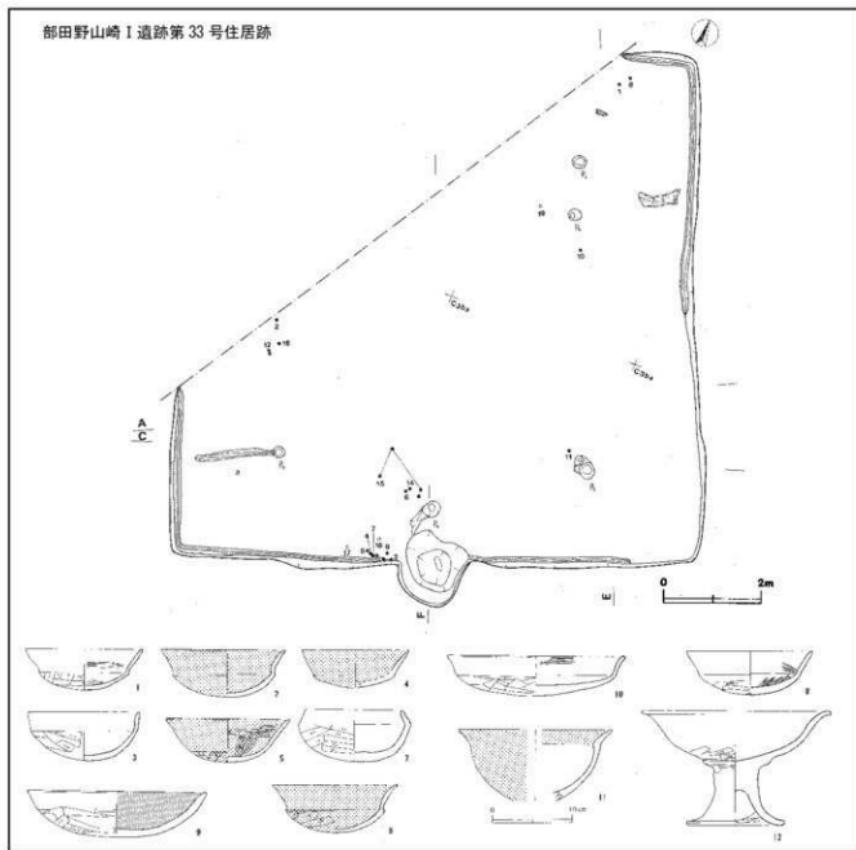
住居跡とも「張り出し貯蔵穴」は確認されていないが、調査区の関係から堅穴部の一部しか調査が実施されていないため、南壁中央部が調査されていない第20号住居跡では存在の有無を判断できない。

以上のように、鷹ノ巣遺跡の近隣の集落でも大型住居跡が存在しており、2遺跡とも鷹ノ巣遺跡よりも規模が大きな住居跡であることがわかる。また、鷹ノ巣遺跡とほぼ同時期の古墳時代後期前半の部田野山崎I遺跡の大型住居跡には「張り出し貯蔵穴」が付設され、後期後葉の宮後遺跡では付設されないといった違いがみられる。

「張り出し貯蔵穴」の住居跡 「張り出し貯蔵穴」の住居跡については、鶴間正昭が集成と検討を行っている〔鶴



第78図 部田野山崎I遺跡の大型住居跡と主な出土遺物 1(住居跡の縮尺は1/100、土器は1/6)



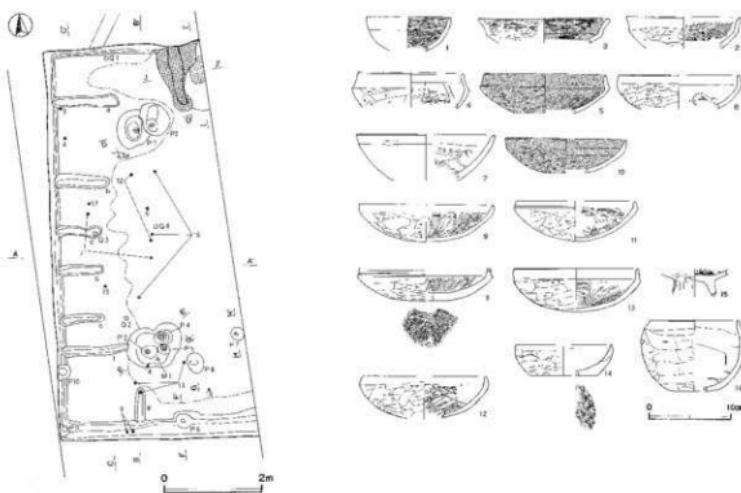
第79図 部田野山崎I遺跡の大型住居跡と主な出土遺物2(住居跡の縮尺は1/100、土器は1/6)

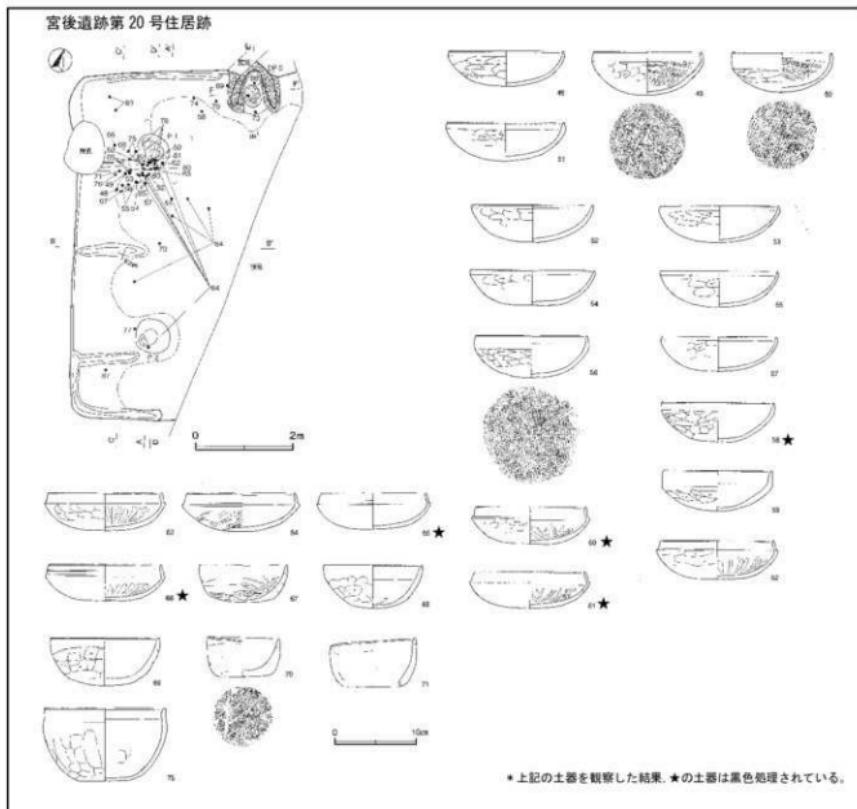
間2011]。それによると、大型の堅穴住居跡に付設される傾向が強いが、中型の堅穴住居跡にも認められること、6世紀代の堅穴住居跡に構築され、7世紀前半以降は検出例が減少すること、「集落内の張り出し貯蔵穴を持つ堅穴住居の出現や分布の特徴には、一時期に集中して構築されることではなく、各時期に1～数軒が、他の堅穴住居と併存するあり方が一般的であること、近接する堅穴住居は主軸方向を揃えることも多く、集落の中心的地区に構築されるケースが目立つこと、そして、集落の初現段階や集落の大規模化が図られる段階に顕在化すること、他を凌駕する規模の張り出し貯蔵穴を伴う堅穴住居

が、集落の中で1軒だけ検出される例が各地に認められることなど」を挙げている。

また、「張り出し部を伴う独特の形態や集落内の分布状況などからすれば、張り出し貯蔵穴を有する堅穴住居は、集落の有力者層の居住施設の可能性は高く、少なくとも集落内で中心的役割を担った集団の居住施設であったことは確実視される。また、中心的な分布地域を有し、特徴的な住居構造を共有するこからすれば、集落の中で強い筋帯で結ばれた集団の居住施設で、集団を象徴する居住施設であった可能性も考慮される。そして、その構造的特徴や集落内の特定の堅穴住居への付設などから

## 宮後遺跡第2号住居跡



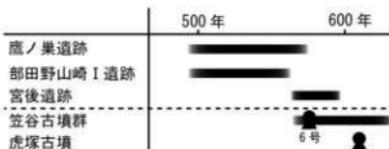


に集落が構成されている。この点については、「集落の初現段階や集落の大規模化が図られる段階に顕在化すること」に合致する。

また、「張り出し貯蔵穴」を付設する住居跡に大型住居跡と中型住居跡があり、そのことについて「出自や系統を共有する強固な軸帯で結ばれた集団を象徴するような居住施設」とすれば「規模の違う堅穴住居に付設されることもスムーズに理解できる」としているが、鷹ノ巣遺跡でも大型住居跡と中型住居跡があり、それらの主軸方位を見ると、大型と中型ではほぼ同じ方位をとることは鶴間の説を裏付けるものと言えよう。これと同じようなことが鷹ノ巣遺跡の南側の台地上に位置する三反田下高井遺跡<sup>註1</sup>でも確認できた(第5表)。

さらに、部田野山崎I遺跡では、同時期に大型住居跡で「張り出し貯蔵穴」を付設しないものもあるが、このことについては、付設するものと主軸方位も違うことから、「他の堅穴住居の集団とも共存する形」を示しているとも考えられる。同じように宮後遺跡についても大型住居跡に付設しないことから、「他の堅穴住居の集団」の存在が考えられる。宮後遺跡については大型住居跡の時期が6世紀後葉となることから、この時期に新たな集団が出現したとも推測される。そうなると、鷹ノ巣遺跡で唯一古墳時代後期後葉の時期に比定できる第86号住居跡の主軸方位だけが、他の住居跡と違う理由も理解できる。

**古墳との関係** 最後に、集落と古墳との関係について触れると、鷹ノ巣遺跡から西に約500mの場所に虎塚古墳、約800mの場所に笠谷古墳群が存在する(第2図)。虎塚古墳は全長約56mの前方後円墳で時期は7世紀前葉、笠谷古墳群は6世紀後葉から7世紀前半にかけて築造されたと考えられる古墳群で、前方後円墳の第6号墳<sup>註2</sup>は全長43mで時期は6世紀後葉とされる。2015-2016年度の試掘調査[佐々木<sup>註3</sup>2017]では、虎塚古墳周辺で古墳時代後期と考えられる住居跡が2基、笠谷古墳群周辺では全く確認できることから、古墳周辺には集落が存在せず、この地域が墓域だったことが確認された。よって、これらの古墳に最も近い集落として鷹ノ巣遺跡や宮後遺跡、部田野山崎I遺跡が該当することになる。時期的には、鷹ノ巣遺跡と部田野山崎I遺跡は、笠谷古墳群築造直前の時期に集落が終わり、宮後遺跡はほぼ同時期となる。そして、虎塚古墳築造直前に宮後遺跡も終わり



第82図 鷹ノ巣遺跡周辺の集落と古墳の時期

を告げる。このことについて、先述の住居形態による集団の違いを重ね合わせると、鷹ノ巣遺跡や部田野山崎I遺跡とは違う集団が新たに宮後遺跡を形成する時期に、笠谷古墳群が出現することになる。さらに宮後遺跡の集落が終わるのと入れ替わるように、笠谷古墳群とは別の新たな場所に装飾古墳という他地域との関係が深い虎塚古墳が出現する(第82図)。このように、笠谷古墳群出現期の鷹ノ巣遺跡周辺の集落変遷と、虎塚古墳出現期に近隣の集落が消滅していることは、これらの古墳の出現を考える上で興味深い事象といえよう。

**註1** 三反田下高井遺跡では、古墳時代後期と思われる住居跡が68基確認されている。うち長軸長が7m以上の大型住居跡は7基ある(ただし銅鏡遺構は除く)。7基の時期は古墳時代後期前半と推定され、「張り出し貯蔵穴」は6基に付設される。また、「張り出し貯蔵穴」を付設する住居跡は大型住居跡の他に5m台の第131号住居跡があり、主軸方位が大型住居跡の第136号住居跡と一致する。

**註2** 2016年度の調査については2018年3月に刊行予定。

#### 引用文献

- 舟上義安 1990 『那珂湊市部田野山崎道路・山崎工業団地地区面整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘記録』那珂湊市山崎遺跡群発掘調査会 大久保隆史 2012 『宮後遺跡・部田野西原遺跡 一般国道245号道路拡幅事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財团文化財調査報告第354集 財團法人茨城県教育財团
- 佐々木義則<sup>註3</sup> 2017 『平成28年度ひたちなか市内道路発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会・公益財團法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社
- 鶴間正昭 2011 『堅穴住居にみられる張り出し貯蔵穴』『東京考古』29 東京考古談話会 83-133頁
- 根本康弘 2017 『宮後遺跡2 一般国道245号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財团文化財調査報告第422集 公益財團法人茨城県教育財团
- 宮崎修士 1995 『常陸郡河有料道路事業地内埋蔵文化財調査報告書』山崎遺跡』茨城県教育財团文化財調査報告第105集 財團法人茨城県教育財团

## 5 古墳時代遺物觀察表

凡例:法量に記載した部位の計測値の単位は「cm」である。括弧内の数値は、復元された口径や底径、最大径、または残存高を示す。

## 第 69 号住居跡

1 台帳:P34 ~ 39・52・55-57・63 ~ 65・70・71, №4・7-9 ~ 12 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部 90%, 脇部~底部 50% 法量:口径 14.8, 脇径 16.1, 器高 21.6, 底径 7.3 色調:外面黃褐色~黃灰~暗褐色, 内面浅黃褐色 膜土:礫(白微), 砂(白多, 透多, 黑少) 烧成:良好 技法等:外面へラ削り。内面へラナダ。使用痕:一 備考:外面脇部器面にスヌ状物付着。

2 台帳:P66, №9 材質:土師器 器種:甕 残存:40% 法量:口径 (17.3), 脇径 (19.1), 器高 (22.9), 底径 (7.4) 色調:外面明赤褐色~橙~黑色 膜土:砂(白多, 透多) 烧成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナナ後、脇部へラナダ。脇部下位~底部へラ削り。内面へラナダ。 使用痕:一 備考:一

3 台帳:№3-7・10 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部 20%, 脇部上位 10% 法量:口径 (21.0), 器高 (9.0) 色調:内外面とも橙~黒色 膜土:砂(白多, 透多, 黑少) 烧成:良好 技法等:内外面とも口縁部ヨコナダ。脇部へラナダ。 使用痕:一 備考:一

4 台帳:P11-25 ~ 29, №4-5・7-10-11-14 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁~脇部上位 20% 法量:口径 (17.6), 器高 (13.5) 色調:内外面とも橙~暗褐色 膜土:礫(白微), 砂(白多, 透多, 黑少) 烧成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナダ後へラ削り。脇部へラ削り後へラナダ。内面口縁部ヨコナダ。脇部へラナダ。 使用痕:一 備考:一

5 台帳:P4-8・9, №3-7 材質:土師器 器種:甕 残存:70% 法量:口径 17.4, 脇径 16.9, 器高 16.7, 底径 6.8 色調:外面褐色~黒褐色。内面橙~にぶい橙色 膜土:砂(白多, 透多, 黑少) 烧成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナダ。脇部へラ削り後へラナダ。底部へラ削り。内面へラナダ。 使用痕:一 備考:一

6 台帳:P68 材質:土師器 器種:甕 残存:ほぼ 100% 法量:口径 11.5, 脇径 12.2, 器高 15.1, 底径 5.0 色調:内外面橙~褐色~黒褐色 膜土:砂(白多, 透多, 黑少) 烧成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナダ。脇部へラ削り後へラナダ。底部へラ削り。内面へラナダ。 使用痕:一 備考:一

7 台帳:P66 材質:土師器 器種:甕 残存:胴部中位~底部 20% 法量: (11.0), 底径 (7.2) 色調:外面赤褐色~橙~黒色。内面橙色 膜土:砂(白多, 透多, 黑少) 烧成:良好 技法等:外面へラ削り。内面へラナダ。 使用痕:内面器面の一部が剥離している。 備考:一

8 台帳:P21-23・24-27, №30-43・46-50・51-58-62, №5-6・8 ~ 12 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁~脇部 80%, 底径 100% 法量:口径 24.2, 器高 15.5, 底径 8.7 色調:外面橙~浅黃褐色。内面にぶい橙~灰~暗褐色 膜土:小石(白微), 砂(白少, 透多, 黑微) 烧成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナダ後へラナダ。脇部横方向へラ削り、底部へラ削り。内面口縁部へラ削り。脇部へラナダ。 使用痕:外面ととも器面が摩滅している。 備考:一

9 台帳:P22 材質:土師器 器種:高杯 残存:杯部 30% 法量:口径 (32.4), 器高 (10.3) 色調:外面赤褐色~暗褐色。内面赤褐色~にぶい橙~黒褐色 膜土:礫(白微), 砂(白多, 透多, 黑少, 赤少) 烧成:良好 技法等:外面口縁部上位ヨコナダ。中位~脇部へラ削り。内面へラナダ。 内面口縁部に赤彩。 使用痕:一 備考:一

10 台帳:P3 材質:土師器 器種:甕 残存:30% 法量:口径 (13.2), 器高 7.5 色調:内外面とも赤褐色 膜土:砂(白多, 透多, 黑少) 烧成:良好 技法等:外面口縁~脇部ヨコナダ。中~下位へラ削り後へラナダ。内面口縁部ヨコナダ。 脇部へラナダ。外面口縁~脇部上位と内面口縁~脇部中位に赤彩。 使用痕:一 備考:一

11 台帳:№4-14 材質:土師器 器種:杯 残存:10% 法量:口径 (12.8), 器高 (3.9) 色調:内外面とも赤褐色 膜土:砂(白多, 透多, 黑少) 烧成:良好 技法等:外面に口縁部ヨコナダ。体部へラナダ。内面ヨコナダ。内外面とも赤彩。 使用痕:一 備考:外面器面がやや摩滅している。

12 台帳:P2-5・44 材質:土師器 器種:杯 残存:100% 法量:口径 13.3, 器高 4.4 色調:内外面とも黄灰~黒色 膜土:砂(白少, 透少) 烧成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナダ後へラミガキ。体部へラ削り後へラミガキ。 内面口縁部横方向へラミガキ。体部放射状にヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕:口縁端部が摩滅している。 備考:一

13 台帳:P7, №7 材質:土師器 器種:杯 残存:20% 法量:口径 (14.0), 器高 4.9 色調:内外面とも橙色 膜土:砂(白少, 透少, 黑微) 烧成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナダ。体部へラ削り。内面口縁部ヨコナダ後へラミガキ。体部放射状にヘラミガキ。 使用痕:一 備考:一

14 台帳:P10, №2 材質:土師器 器種:杯 残存:30% 法量:口径 (14.6), 器高 (5.5) 色調:外面赤褐色~橙色。内面赤褐色~にぶい橙色。 膜土:砂(白多, 透多, 黑微) 烧成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナダ。体部へラ削り後へラナダ。 内面口縁部ヨコナダ。体部へラナダ。 外面口縁~脇部上位と内面口縁~体部中位に赤彩。 使用痕:一 備考:外面体部器面が摩滅している。

15 台帳:P60-67・69 材質:土師器 器種:杯 残存:口縁部 40% 法量:口径 (16.2), 器高 (5.1) 色調:内外面とも赤色 膜土:砂(白多, 透多) 烧成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナダ。体部?。内面口縁部ヨコナダ。体部へラナダ?。 外面口縁部と内面に赤彩。 使用痕:一 備考:外面体部器面が摩滅している。

16 台帳:P14 ~ 17, №1-4・6-7 材質:土師器 器種:杯 残存:20% 法量:口径 (23.0), 器高 (6.0) 色調:内外面とも赤褐色~暗赤褐色 膜土:砂(白多, 透多) 烧成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナダ。体部へラ削り。内面口縁部ヨコナダ。体部へラナダ。 内面全体に赤彩。 使用痕:一 備考:外面体部の一部にスヌ状物付着。

17 台帳:№15 材質:土師器 器種:支脚 残存:一 法量:長 (9.2), 幅 3.9, 厚 3.0 色調:橙色 膜土:砂(白多, 透多, 黑少) 技法等:へラナダ。円柱状の粘土棒に粘土貼り付け。面を作りだしている。 使用痕:二次焼成をうけている。 備考:一

18 台帳:P6 材質:石炭 種類:玉? 法量:長 13, 幅 10, 厚 0.5, 重量 059g 備考:孔は両側から穿孔。

19 台帳:S2 材質:砂岩 種類:砾石 法量:長 15.0, 幅 15.5, 厚 4.2, 重量 1304.19g 備考:敲打による凹み A-B の 2 所。

20 台帳:S2 材質:砂岩 種類:台石 法量:長 17.0, 幅 11.1, 厚 6.3, 重量 1931.50g 備考:底面 A-B の 2 面。

## 第 71 号住居跡

1 台帳:P18 材質:土師器 器種:甕 残存:90% 法量:口径 18.6, 脇径 29.7, 器高 33.7, 底径 8.2 色調:外面橙~にぶい橙~暗褐色~黒褐色。内面赤褐色~暗褐色 膜土:礫(白微), 砂(白多, 透多) 烧成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナダ?。脇部へラ削り後丁寧なへラナダ。底部へラ削り?。 内面口縁部ヨコナダ。 脇部へラナダ。 使用痕:外面脇部下位~底部と内面口縁部の器面が摩滅している(カマドでの使用痕)。 備考:一

2 台帳:P17-18, №14 材質:土師器 器種:甕 残存:20% 法量:口径 (19.3), 器高 26.9, 底径 7.3 色調:外面橙~黃褐色~暗褐色~黒色。内面橙~暗褐色 膜土:礫(白微), 砂(白多, 透多) 烧成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナダ。 脇部~底部へラ削り。内面口縁部ヨコナダ。 脇部へラナダ。 使用痕:口縁端部は 90% 欠失。内外面とも脇部下位が摩滅している。 備考:器形のゆがみ大きい。

## IV 古墳時代の遺構と遺物

- 3 台帳:P10・14・No.12 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁~胴部20%、底部100% 法量:口径(14.8)、器高23.1、底径7.0 色調:外面橙~黒褐色。内面黒褐色。 脇土:繩(白微)、砂(白多、透多) 烧成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。 使用痕:一 備考:内面器面の一部が剥離している。
- 4 台帳:P12、No.12-13・14 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁~胴部中位80% 法量:口径14.8、器高(13.8) 色調:内外面とも橙~にぶい橙~暗褐~黒褐色。 脇土:小石(白微、灰微)、繩(白少)、砂(白多、透多) 烧成:良好 技法等:外側面へ削り。内面口縁部ヨコナデ、その他のヘラ削り。 使用痕:一 備考:器面剥離が見らる。
- 5 台帳:P17 材質:土師器 器種:甕 残存:底部20% 法量:器高(3.0)、底径(7.6) 色調:内外面とも赤~暗褐色 脇土:繩(白微)、砂(白多、透多) 烧成:良好 技法等:外側面へ削り。内面口縁部ヨコナデ、その他のヘラ削り。 使用痕:一 備考:
- 6 台帳:P16 材質:土師器 器種:瓶 残存:口縁端70%、他100% 法量:口径21.8、器高22.0、孔径2.0、孔深7.0 色調:外面ともも橙色 脇土:小石(白微)、繩(白微、灰微、赤微)、砂(白多、透多、黒少、赤微) 烧成:良好 技法等:外側面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ、胴部上~中位ヘラナデ、下位ヘラ削り。 使用痕:あまり見られない。 備考:
- 7 台帳:No.11 材質:土師器 器種:高杯 残存:脚部10% 法量:器高(5.0)、根径(1.0) 色調:外面黄橙~暗褐色、内面黄橙色 脇土:繩(白微)、砂(白多、透多) 烧成:良好 技法等:外側面位へ削り。下位ヨコナデ。内面土位へラナデ、下位ヨコナデ。 使用痕:一 備考:一
- 8 台帳:P1 材質:土師器 器種:杯 残存:80% 法量:口径12.6、器高4.8 色調:外面ともも黒褐色 脇土:砂(白多、透多) 烧成:良好 技法等:外側面口縁部ヨコナデ。体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、体部放射状にヘラミガキ。中央のみ一方に向へラミガキ。外側面とも黒色処理。 使用痕:口縁部全体が摩滅して。 備考:一
- 9 台帳:P5 材質:土師器 器種:杯 残存:10% 法量:口径(14.2)、器高(3.2) 色調:内外面とも黒褐色 脇土:良好 技法等:外側面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り。内面口縁部~体部上位ヨコナデ、中位~下位へラナデ。内外面とも黒色処理。 使用痕:一 備考:一
- 10 台帳:P11-13-14 材質:土師器 器種:杯 残存:ほぼ100% 法量:口径14.6、器高5.6 色調:外面橙~黄橙~褐~暗褐色~黒色。内面黄橙~褐~黒褐色。 脇土:砂(白多、透多) 烧成:良好 技法等:外側面口縁部ヨコナデ。体部ヘラ削り。内面口縁~体部上位ヨコナデ、中~下位へラナデ後若干のヘラミガキ。外側面口縁部と内面口縁~体部上位に赤彩。 使用痕:一 備考:一
- 12 台帳:P7、No.3-4-9 材質:土師器 器種:杯 残存:10% 法量:口径(13.3)、器高4.8 色調:外面ともに赤~褐~暗褐色 脇土:砂(白少、透多、黒少) 烧成:良好 技法等:外側面口縁部ヨコナデ。体部ヘラ削り。内面ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。体部へラナデ。 使用痕:一 備考:内面体部器面の一部が剥離している。
- 13 台帳:P10-11 材質:土師器 器種:杯 残存:30% 法量:口径(13.4)、器高5.8 色調:外面とも暗赤褐~暗褐色 脇土:砂(白少、透多) 烧成:良好 技法等:外側面口縁部ヨコナデ。体部ヘラ削り。内面ヨコナデ。使用痕:口縁端部が摩滅している。内面体部の器面の一部が剥離している。 備考:一
- 14 台帳:P9 材質:土師器 器種:土罐 法量:長3.9、最大径3.5、孔径0.7、重量52.38g 備考:一
- 15 台帳:II 材質:鐵 錫類:鉄鑄? 法量:長4.3、幅0.7 備考:本質あり。茎部少。
- 16 台帳:S1 材質:滑石 錫類:鈎錫牽 法量:上径4.2、下径2.7、孔径0.7、厚1.8 厚重45.45g 色調:暗青灰色 備考:一
- 17 台帳:S9 材質:コハク 錫類:玉? 法量:長13、幅1.1、厚0.4、重量0.32g 備考:孔があるが貫通はしていない。
- 18 台帳:No.3 材質:石炭 錫類:玉? 法量:長18、幅1.3、厚1.0、孔径0.2、重量1.80g 備考:一
- 19 台帳:S8 材質:石炭 錫類:玉? 法量:長2.2、幅1.9、厚1.8、孔径0.2、重量5.29g 備考:一
- 20 台帳:No.3 材質:石炭 錫類:一 法量:長2.6、幅2.1、厚0.6、重量2.358g 備考:一
- 21 台帳:S2 材質:珪質片岩 錫類:砾石 法量:長11.6、幅3.0、厚5.5、重量213.44g 備考:底面A・B・C・Dの四面。
- 22 台帳:S7 材質:蛭石 錫類:砾石? 法量:長9.1、幅10.0、厚4.0、重量77.87g 備考:底面A的一面か?

### 第73号住居跡

- 1 台帳: P 34-49 ~ 52-66-83-84-102, No.6-13-15-18-26 ~ 28-30 材質: 土師器 器種:甕 残存:口縁~胴部上位20%、中~下位80% 法量:口径(19.5)、器高17.6、底径7.5 色調:外面橙~にぶい黄橙~暗褐色。内面に赤~黄橙~黒褐色。 脇土:繩(白微)、砂(白多、透多、黒少) 烧成:良好 技法等:外側面口縁部ヨコナデ、胴部上位へ削り後ヘラナデ、下位~底面へ削り。内面へラナデ。 使用痕:外側面脇部器面が摩滅し、二次焼成をうけている。 備考:器形が歪んでいる。
- 2 台帳: P 47-49-51, No.26 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部30% 法量:口径(20.0)、器高(7.3) 色調:内外面ともに赤~黄橙色 脇土:小石(白微)、繩(白少)、砂(白多、透多、灰少) 烧成:良好 技法等:外側面口縁部ヨコナデ、下位のみヨコナデ後へ削り。胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ、胴部へラナデ。 使用痕:一 備考:一
- 3 台帳: P 2-42, No.3-27 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20% 法量:口径(21.0)、器高(7.4) 色調:内外面赤褐色 脇土:砂(白多、透多、黒少) 烧成:良好 技法等:外側面口縁部上位ヨコナデ。下位ヨコナデ後へ削り。内面口縁部ヨコナデ、胴部へラナデ。 使用痕:内面口縁部器面が摩滅している。 備考:一
- 4 台帳: P 5-55 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20% 法量:口径(16.4)、器高(5.6) 色調:内外面橙~褐~暗褐色 脇土:小石(白微、灰微)、砂(白多、透多、黒少) 烧成:良好 技法等:外側面口縁部ヨコナデ、胴部へラ削り後ヘラナデ。 使用痕:一 備考:二次焼成をうけている。
- 5 台帳: P 79-92, No.30 材質:土師器 器種:甕 残存:胴部10%、底部100% 法量:器高(11.2)、底径7.0 色調:外面橙~にぶい赤褐色。内面橙色 脇土:繩(白少)、砂(白多、透多) 烧成:良好 技法等:外側面不明。内面へラナデ。 使用痕:外側面が非常に摩滅している。 備考:一
- 6 台帳: P 40-50-52-53, No.13-15-26-30 材質:土師器 器種:甕 残存:胴部10%、底部100% 法量:器高(7.1)、底径8.6 ~ 9.2 色調:外面橙~暗褐色。内面暗褐色 脇土:小石(白微)、繩(白少)、砂(白多、透多) 烧成:良好 技法等:外側面脇部へ削り後ヘラナデ。内面へラナデ。 外側底部に棒状のものがめり込んだ痕がみられる。 使用痕:外側が二次焼成をうけている。 備考:一
- 7 台帳: P 65-97-98-100, No.10 材質:土師器 器種:甕 残存:底部100% 法量:器高(9.0)、底径9.0 色調:外面橙~にぶい橙色。内面黄橙~暗褐色。 脇土:小石(灰微)、繩(白少)、砂(白多、透多) 烧成:良好 技法等:外側へラナデ。 内面へラナデ 使用痕:外側面が非常に摩滅している。 備考:一
- 8 台帳: P 10, No.19 材質:土師器 器種:甕 残存:底部100% 法量:器高(3.9)、底径9.0 色調:外面黒褐色。内面橙色 脇土:繩(白少)、砂(白多、透多) 烧成:良好 技法等:外側へ削り。内面へラナデ。 使用痕:外側が二次焼成をうけている。 備考:一
- 9 台帳: P 15, No.4 材質:土師器 器種:甕 残存:底部60% 法量:器

- 高(1.8), 底径 7.8 色調: 外面赤褐色。 内面橙色。 脱土: 砂(白少), 砂(白多, 透多, 黒微)。 燃成: 良好 技法等: 外面ヘラ削り。 内面ヘラナダ。 使用痕: 内面痕とも器面が摩滅している。 備考: -
- 10 台帳: № 3-4 材質: 土師器 器種: 壺 残存: 底部 60% 法量: 器高(2.8), 底径 6.8 色調: 外面暗赤褐色~黒色。 内面暗赤褐色。 脱土: 砂(白少, 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面ヘラ削り。 内面ヘラナダ。 使用痕: - 備考: -
- 11 台帳: P 67, № 9 材質: 土師器 器種: 壺 残存: 底部 100% 法量: 器高(3.2), 底径 6.5 色調: 内外面暗褐色 脱土: 砂(白微), 砂(白微, 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面ヘラ削り。 内面ヘラナダ。 使用痕: - 備考: -
- 12 台帳: P 6 材質: 土師器 器種: 壺 残存: 底部 60% 法量: 器高(2.8), 底径 7.8 色調: 外面橙~黒色。 内面赤褐色 脱土: 小石(白微), 砂(白微, 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面ヘラ削り。 内面ヘラナダ。 使用痕: - 備考: -
- 13 台帳: P 3, № 1-3 材質: 土師器 器種: 壺 残存: 口縁部 20% 法量: 口径(12.5), 器高(7.7) 色調: 内外面暗褐色~黒褐色 脱土: 砂(白多, 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 脚部ヘラ削り後ヘラナダ。 内面ヘラナダ。 使用痕: - 備考: -
- 14 台帳: P 100, № 30 材質: 土師器 器種: 壺 残存: 脚部 20%, 底部 100% 法量: 器高(9.4), 底径 7.0 色調: 外面橙~にい黄橙~暗褐色~黒色。 内面にい黄橙~黒褐色。 脱土: 砂(白少), 砂(白多, 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面ヘラ削り。 使用痕: 外面器面が非常に摩滅している。 備考: -
- 15 台帳: P 104, № 3-6・15-30 材質: 土師器 器種: 壺 残存: 口縁部 90%, 脚部上~中位 60% 法量: 口径 126, 器高(14) 色調: 内外面橙~暗褐色 脱土: 砂(白少, 砂(白多, 透多)) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 脚部不明。 内面口縁部ヨコナデ, 脚部ヘラナダ。 使用痕: 内外とも器面が非常に摩滅している。 備考: 二次燃成をうけている。
- 16 台帳: P 25-94-106-107-108-109, № 10-21-28-32 材質: 土師器 器種: 壺 残存: 底部 10% 法量: 口径 24.5, 器高 21.0, 孔径 7.5 色調: 外面橙~黒色。 内面橙色 脱土: 砂(白少, 透多, 黒少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 脚部上~中位ヘラナダ, 下位ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ, 脚部上~中位ヘラナダヘラミガキ。 下位ヘラ削り。 使用痕: 内面脚部器面がマダラに剥離している。 備考: -
- 17 台帳: P 17 ~ 19-32-33-41-43-44-46-48-49-51 ~ 53-59 ~ 61-76-103, № 3-6-8 ~ 10-13-17-18-24 ~ 26-28-30-32 材質: 土師器 器種: 壺 残存: 70% 法量: 口径 26.5, 器高 22.7 ~ 23.3, 孔径 9.5 色調: 外面赤褐色~黄褐色~黒色。 内面橙色。 脱土: 砂(白少, 透少), 砂(白多, 透多, 底少, 赤少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 脚部ヘラ削り後ヘラナダ。 内面口縁部ヨコナデ, 脚部ヘラナダ。 使用痕: 内面脚部器面がマダラに剥離している。 備考: -
- 18 台帳: P 96 材質: 土師器 器種: 壺 残存: 口縁部 10% 法量: 口径(26.0), 器高(4.0) 色調: 内外面橙~暗褐色 脱土: 砂(白多, 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 脚部ヘラ削り後ヘラナダ。 内面口縁部ヨコナデ, 脚部ヘラナダ。 使用痕: - 備考: -
- 19 台帳: № 4-10-20 材質: 土師器 器種: 壺 残存: 底部 20% 法量: 器高(8.6), 孔径(9.0) 色調: 外面にい黄橙色 脱土: 小石(白微), 砂(白少, 底少, 透少) 燃成: 良好 技法等: 外面ヘラ削り後ヘラナダ。 内面ヘラナダ。 直径 6mm のプリッヂ用の孔が 2 カ所ある。 使用痕: - 備考: -
- 20 台帳: P77, № 13-28 材質: 土師器 器種: 壺 残存: 10% 法量: 器高(10.0), 水蹊(8.5) 色調: 内外面橙色 脱土: 砂(白微), 砂(白多, 透多, 赤少) 燃成: 良好 技法等: 外面ヘラ削り後ヘラナダ。 内面ヘラナダ~ヘラミガキ。 使用痕: - 備考: -
- 21 台帳: P26 材質: 土師器 器種: 壺 残存: 口縁部 10% 法量: 口径(20.2), 器高(5.4) 色調: 外面橙色。 内面にい黄橙色~黒色 脱土: 砂(白多, 黒少) 燃成: 良好 技法等: 外面ヘラ削り。 内面ヘラナダ。 使用痕: - 備考: -
- 22 台帳: № 6-21-25-28-31 材質: 土師器 器種: 鉢 残存: 40% 法量: 口径(12.6), 器高 6.5 色調: 内外面にい黄橙~黒色 脱土: 砂(白多, 透多, 黒少) 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部~体部上位ヨコナデ, 中~下位ヘラナダ。 使用痕: - 備考: -
- 23 台帳: № 6-21-25-28-31 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 20% 法量: 口径(14.0), 器高(5.2) 色調: 内外面橙色 脱土: 砂(白多, 透多, 黒少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り?。 内面口縁部ヨコナデ, 对部ヘラミガキ? 使用痕: 内外面とも器面が摩滅している。 備考: -
- 24 台帳: P1, № 1-3-5 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 20% 法量: 口径(11.8), 器高 4.5 色調: 内外面橙~にい黄橙色 脱土: 砂(白微), 砂(白多, 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部~体部上位ヨコナデ, 体部放射状にヘラミガキ。 使用痕: - 備考: -
- 25 台帳: P37-38, № 13 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 口縁部 60%, 体部 100% 法量: 口径 126, 器高 39 色調: 内外面橙色 脱土: 小石(白微), 砂(白少, 透少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ後ヘラ削り。 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラミガキ。 使用痕: - 備考: -
- 26 台帳: P35 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 20% 法量: 口径(12.9), 器高(3.8) 色調: 内外面赤橙色 脱土: 砂(白少, 透少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ後ヘラ削り。 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ後若干のヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。 使用痕: - 備考: -
- 27 台帳: P71 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 30% 法量: 口径(14.0), 器高(4.9) 色調: 内外面橙色 脱土: 砂(白微, 赤微), 砂(白少, 透多, 黒少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ後若干のヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。 使用痕: - 備考: -
- 28 台帳: P28-29, № 10-13 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 40% 法量: 口径(14.2), 器高 4.5 色調: 内外面橙色 脱土: 砂(白少, 透多, 黑少, 赤微) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラミガキ。 使用痕: - 備考: 内外面とも器面の一部が剥離している。
- 29 台帳: № 32 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 30% 法量: 口径(14.7), 器高(5.5) 色調: 内外面黄橙~黒褐色 脱土: 砂(白少, 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラミガキ。 使用痕: 二次燃成をうけている。 備考: -
- 30 台帳: P7-12 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 30% 法量: 口径(14.8), 器高(4.0) 色調: 内外面橙色 脱土: 砂(白少, 透多, 黑少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り?。 内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナダ?。 使用痕: 内外面とも器面が摩滅している。 備考: -
- 31 台帳: P31-41-69 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 30% 法量: 口径(14.0), 器高(4.5) 色調: 内外面浅黄色 脱土: 砂(白少, 透多, 黑少, 赤少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部不明。 内面口縁部ヨコナデ?, 体部ヘラミガキ。 使用痕: 内外面とも器面が摩滅している。 備考: -
- 32 台帳: P70, № 3-4-6-9 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 20% 法量: 口径(12.7), 器高(3.7) 色調: 内外面灰褐色, 内面にい黄橙色~灰褐色 脱土: 砂(白多, 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。 内外面とも黒色處理。 使用痕: - 備考: -
- 33 台帳: P14-21, № 17-21, 孔径 22.0 色調: 内外面にい黄橙色 脱土: 砂(白少, 透少) 技法等: 内外面ともユビナデ。 使用痕: - 備考: -
- 34 台帳: P30 材質: 土師器 器種: 土瓶 法量: 長 39, 最大径(3.7), 孔径 0.7, 重量 25.95 g 備考: 残存 50%
- 35 台帳: P 99 材質: 土師器 器種: - 法量: 長 59, 径 11 備考: -

#### IV 古墳時代の遺構と遺物

- 36 台帳:P 93 材質:土師器 器種:支脚 法量:長 120. 幅 4.2. 厚 4.7  
色調:橙～にぶい黄褐色 脱土:砂(白少、透多) 技法等:ユビナデ 使用  
痕:二次焼成をうでている。 備考:一
- 37 台帳:N 15 材質:鉄 器種:刀子 法量:長 4.1. 刃部幅 1.0. 刃部厚  
0.3 備考:柄部の木質が残存している。
- 38 台帳:N 20 材質:軽石 種類:砥石? 法量:長 4.1. 幅 3.4. 厚 1.7.  
重量 54.1 g 備考:被熱している。
- 39 台帳:N 15 材質:石炭 種類:玉? 法量:長 19. 幅 1.6. 厚 0.6.  
孔径 0.2. 重量 186 g 備考:孔は貫通していない。
- 40 台帳:N 32 材質:石炭 種類:玉? 法量:長 20. 幅 1.5. 厚 0.7.  
孔径 0.2. 重量 202 g 備考:孔は貫通していない。
- 41 台帳:S 9 材質:石炭 種類:一 法量:長 35. 幅 2.7. 厚 0.9. 重量  
56.7 g 備考:一
- 42 台帳:S 6 材質:石炭 種類:一 法量:長 4.0. 幅 3.3. 厚 1.8. 重量  
138.1 g 備考:一
- 43 台帳:S 8 材質:石炭 種類:一 法量:長 3.6. 幅 1.8. 厚 0.9. 重量  
43.6 g 備考:一
- 44 台帳:S 5 材質:石炭 種類:一 法量:長 2.9. 幅 2.0. 厚 1.3. 重量  
62.4 g 備考:一
- 45 台帳:S 7 材質:石炭 種類:一 法量:長 2.5. 幅 1.2. 厚 0.6. 重量  
125.5 g 備考:一
- 46 台帳:S 4 材質:砂岩 種類:磁石 法量:長 11.8. 幅 7.2. 厚 4.8.  
重量 523.88 g 備考:敲打による凹み A・B の二ヶ所。
- 47 台帳:S 1 材質:砂岩 種類:敲打 法量:長 9.1. 幅 6.5. 厚 3.4. 重  
量 342.24 g 備考:敲打による凹み A の 1ヶ所。被熱している。
- 48 台帳:N 32 材質:砂岩 種類:磁石/白石 法量:長 2.2. 幅 4.8. 厚  
5.0. 重量 222.83 g 備考:敲打による凹み A の 1ヶ所と紙面 B の一面。  
紙面には既サビが付着する。

#### 第 76 号住居跡

- 1 台帳:P 10 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部 90% 法量:口径  
16.8. 高厚(7.2) 色調:内外面橙色 脱土:小石(白微、灰微). 砂(白少、  
透多、黒少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラ削り。内面ヨコナ  
デ後ヘラミガキ。下位ヘラ削り。 使用痕:一 備考:一
- 2 台帳:P 2 材質:土師器 器種:甕 残存:100% 法量:口径 17.0 ～  
19.0. 高厚 15.0. 底径 7.2 色調:外面赤～橙～にぶい橙～暗褐～黒褐色。  
内面橙～にぶい橙～黒褐色 脱土:小石(白微). 砂(白微), 砂(白少、透多、  
灰少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラ削り。内面  
口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。胴部ヘラナダ。 使用痕:外面部の器  
面が摩滅し。二次焼成をうでている。 備考:器形が歪んでいる。
- 3 台帳:P 3 材質:土師器 器種:甕 残存:胴部中位～底部 100% 法  
量:高(9.4). 底径 7.0 色調:内外面にぶい黄橙～暗褐～黒褐色 脱土:  
裡(白微). 砂(白少、透多、黒少) 焼成:良好 技法等:外面部ヘラ削り。  
内面ヘラナダ。 使用痕:外面部とも二次焼成をうでている。 備考:一
- 4 台帳:P 9. N 4 材質:土師器 器種:甕 残存:50% (底部のみ 90%)  
法量:口径 27.0. 高厚 21.8 ～ 22.3. 底径 8.0 色調:外面部～黒色。 内面橙  
色。 脱土:裡(白微). 砂(
- 白多、透多) 焼成:良好 技法等:外面部ヨコナデ、胴部ヘラ削り。  
内面ヨコナデヨコナデ、胴部ヘラナダ。 ヘラミガキ。 使用痕:外面部胴部器  
面がやや摩滅している。 備考:一
- 5 台帳:P 13 材質:土師器 器種:甕 残存:100% 法量:口径 12.0. 高  
厚 0.5 ～ 15.3. 底径 5.5 色調:外面赤橙～暗褐～黒褐色。 内面赤橙  
脱土:裡(白少). 砂(白多、透多) 焼成:良好 技法等:外面部ヨコナ  
デヨコナデ。 中～下位ヘラ削り。 脱部上～中位ヘラ削り後ヘラナダ。 下位～  
底面のヘラ削り。 内面ヨコナデヨコナデ、胴部ヘラナダ。 使用痕:一 備  
考:一
- 6 台帳:P 1 材質:土師器 器種:鉢 残存:口縁～胴部上位 70%. 中位  
～底部 100% 法量:口径 11.8. 高厚 8.8. 底径 7.0 色調:内外面橙～黑

褐色 脱土:小石(白微、灰微). 砂(白少、透多、黒少) 技法  
等:外面部ヨコナデ。 脱部ヘラナデ・ナダ。 底面木葉痕。 内面部ヨコナ  
デ。 脱部ヘラナダ。 使用痕:外面部底位が被熱している。 備  
考:一

- 7 台帳:P 15 材質:土師器 器種:杯 残存:90% 法量:口径 10.8. 器  
高 4.6 色調:内外面赤橙～黒褐色 脱土:裡(灰微). 砂(白多、透微) 焼成:  
良好 技法等:外面部ヨコナデ後ヘラミガキ。 体部ヘラ削り後ヘラナ  
デ・ヘラミガキ。 内面部ヨコナデ後ヘラミガキ。 体部ヘラミガキ。 内  
外面とも黒色処理。 使用痕:口縁端部が非常に摩滅している。 備考:  
一

- 8 台帳:P 6 材質:土師器 器種:杯 残存:100% 法量:口径 14.4. 器  
高 4.8 色調:内外面赤橙色 脱土:砂(白少、透多、赤微) 焼成:良好  
技法等:外面部ヨコナデ、体部ヘラ削り。 内面部ヨコナデ後ヘラ  
ミガキ。 体部放射状にヘラミガキ。 使用痕:一 備考:一

- 9 台帳:P 5-7. N 4 材質:土師器 器種:杯 残存:口縁部 60%。 体部  
20% 法量:口径 15.4. 器高(4.0) 色調:内外面赤橙～黒褐色 脱土:小  
石(赤微). 砂(白少、透多、赤微) 焼成:良好 技法等:外面部ヨコナ  
デ後ヘラミガキ。 体部ナダ。 内面ヘラミガキ。 使用痕:一 備考:一

- 10 台帳:P 14 材質:土師器 器種:杯 残存:90% 法量:口径 13.2. 器  
高 4.8 色調:内外面赤～黒褐色 脱土:裡(白微). 砂(白少、透多、赤微)  
焼成:良好 技法等:外面部ヨコナデ。 体部ヘラ削り。 内面部ヨ  
コナデ。 体部うず巻き状にヘラミガキ。 中心はヘラミガキなし。 使  
用痕:外面部とも器面が摩滅しており、口縁端部が欠損している。 備考:  
11 と非常に似た土器。

- 11 台帳:P 4 材質:土師器 器種:杯 残存:90% 法量:口径 13.2. 器

- 高 4.8 色調:内外面赤～黒褐色 脱土:砂(白少、透多、赤微) 焼成:良好  
技法等:外面部ヨコナデ。 体部ヘラ削り？ 内面部ヨコナデヘラミガ  
キ。 体部うず巻き状にヘラミガキ。 中心はヘラミガキなし。 使  
用痕:外面部とも器面が摩滅している。 口縁端部が欠損している。 備考:10 と非  
常に似た土器。

- 12 台帳:N 2-7 材質:土師器 器種:甕 残存:20% 法量:口径 13.8.  
高厚 5.0 色調:内外面橙色 脱土:砂(白少、透多、黒少) 焼成:良好  
技法等:外面部ヨコナデ。 体部ヘラ削り？ 内面部ヨコナデヘラミガ  
キ。 体部うず巻き状にヘラミガキ。 中心はヘラミガキなし。 使  
用痕:外面部とも器面が摩滅している。 備考:一

- 13 台帳:N 1 材質:石炭 種類:？ 法量:長 2.5. 幅 2.2. 厚 0.7. 孔径  
0.3. 重量 26.9 g 備考:完形品。 砂は肉側から穿孔している。

- 14 台帳:N 2 材質:石炭 種類:玉? 法量:長 2.6. 幅 2.3. 厚 0.9. 孔  
径 0.1. 重量 5.06 g 備考:孔は貫通していない。

- 15 台帳:S 1 材質:砂岩 種類:砥石 法量:長 14.7. 幅 11.5. 厚 3.0. 重  
量 2228.8 g 備考:紙面 A の一面。

- 16 台帳:S 3 材質:砂岩 種類:凹石 法量:長 15.7. 幅 14.2. 厚 3.0. 重  
量 1148.20 g 備考:敲打による凹み A の 1ヶ所。

- 17 台帳:S 2 材質:砂岩 種類:白石 法量:長 20.7. 幅 14.4. 厚 5.4. 重  
量 2268.25 g 備考:敲打痕が二面にみられる。

#### 第 77 号住居跡

- 1 P 14-15.7. N 6 材質:土師器 器種:甕 残存:胴部 40%. 器高  
(29.5). 底径 7.7 色調:内外面にぶい黄橙～暗褐色～黒色 脱土:裡(白  
微). 砂(白多、透多) 焼成:良好 技法等:外面部ヘラ削り。 内面ヘラナデ。  
使用痕:外面部下位の器面が摩滅し、スヌット状物が付着している。

- 2 台帳:P 20-28 ～ 30-36. N 11 材質:土師器 器種:甕 残存:胴  
部 50%. 底部 100% 法量:口径(23.6). 高厚(27.4) 底径 7.5 色調:  
外面暗褐～黒褐色。 内面黄橙～暗褐色 脱土:小石(白微). 砂(白微、  
透多) 焼成:良好外面部ヘラ削り。 内面ヘラナデ。 使用痕:外面部が二  
次焼成をうけ、スヌット状物が付着している。 備考:一

- 3 台帳:P 75. N 12 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁～胴部上位 90%  
法量:口径 16.0. 高厚(14.8) 色調:内外面赤橙～橙～にぶい橙～暗

褐色 脱土: 磁(白微)、砂(白多、透多) 燃成: 良好 技法等: 外面部口縫部ヨコナデ、胴部ヘラ削り。内面部口縫部ヨコナデ、胴部ヘラナダ。 使用痕: 内外部とも二次焼成をうけている。 備考: 一

4 台帳:P38-41・45-48 ~ 51-53-56, №13 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 40% 法量: 口径(16.2), 器高 18.0, 底径(8.0) 色調: 内外面橙~暗褐色 脱土: 磁(白微)、砂(白少、透多) 燃成: 良好 技法等: 外面部口縫部ヨコナデ、胴部ヘラ削り。内面部口縫部ヨコナデ、胴部ヘラナダ。 使用痕: 内外面とも器面が摩減している。 備考: 一

5 台帳:P54-55 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 脊部下位~底部 60% 法量: 器高(9.5), 底径 9.2 色調: 内外面橙~にいし橙~暗褐色 脱土: 小石(白微)、砂(白多、灰少)、砂(白多、透多) 燃成: 良好 技法等: 外面部口縫部ヨコナデ、内面部ヘラナダ。 使用痕: 外面部面が非常に摩減しており、一部剥離している。 備考: 一

6 台帳:P1 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 脊部下位~底部 100% 法量: 器高(7.5), 底径 7.0 色調: 内外面橙~にいし橙~暗褐色 脱土: 磁(白微)、砂(白多、透多、黑少) 燃成: 良好 技法等: 外面部ヘラ削り? 内面部ヘラナダ。 使用痕: 外面部面が摩減し、二次焼成をうけている。 備考: 一

7 台帳:P47, №13 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 底部 60% 法量: 器高(3.4), 底径 9.0 色調: 内外面にいし橙~暗褐色 脱土: 磁(白多、灰少)、砂(白多、透多) 燃成: 良好 技法等: 外面部面不明、底部木業板か。内面部 不明。 使用痕: 内外面とも器面が非常に摩減している。 備考: 一

8 台帳:P17 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 100% 法量: 口径 12.8, 器高 5.0 色調: 内外面にいし黄橙~黒褐色 脱土: 砂(白少、透多) 燃成: 良好 技法等: 外面部口縫部ヨコナデ、体部ヘラ削り。内面部口縫部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部放射状にヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕: 口縫部が摩減している。 備考: 一

9 台帳:P7-8 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 90% 法量: 口径 12.2, 器高 4.8 色調: 内外面にいし黄橙~暗褐色~黒褐色 脱土: 磁(白多、透多、灰少、白雲母) 燃成: 良好 技法等: 外面部口縫部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部ヘラ削り。前頭部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕: 口縫部が摩減している。 備考: 一

10 台帳:P12 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 90% 法量: 口径 12.4, 器高 4.8 色調: 内外面赤~橙~にいし黄橙~暗褐色~黒褐色 脱土: 磁(白少、透多) 燃成: 良好 技法等: 外面部口縫部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部ヘラ削り。内面部口縫部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部放射状にヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕: 口縫部が摩減している。 備考: 内外面とも器面が摩減している。

11 台帳:P21 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 90% 法量: 口径 11.2, 器高 4.8 色調: 内外面にいし黄橙~黒褐色。内面部黒褐色 脱土: 磁(白少、透多) 燃成: 良好 技法等: 外面部口縫部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部ヘラ削り。内面部口縫部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部放射状にヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕: 口縫部が摩減している。 備考: 一

12 台帳:P24 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 100% 法量: 口径 12.2, 器高 5.0 色調: 内外面黑色処理 脱土: 磁(白微)、砂(白少、透多) 燃成: 良好 技法等: 口縫部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部ヘラ削り。内面部口縫部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕: 一 備考: 一

13 台帳:P27 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 100% 法量: 口径 12.6, 器高 4.6 色調: 内外面暗褐色~黒褐色 脱土: 磁(白少、透多) 燃成: 良好 技法等: 外面部口縫部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部ヘラ削り。内面部口縫部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕: 一 備考: 一

14 台帳:P26 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 100% 法量: 口径 11.3, 器高 5.4 色調: 内外面暗褐色~黒褐色 脱土: 磁(白少、透多) 燃成: 良好 技法等: 外面部口縫部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部ヘラ削り。内面部口縫部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕:

### 一 備考: 一

15 台帳:P12 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 30% 法量: 口径(12.8), 器高 3.6 色調: 外面部にいし黄橙~黒褐色。内面部暗褐色~黒褐色 脱土: 磁(白少、透多) 燃成: 良好 技法等: 外面部口縫部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部一部にヘラ削り。内面部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕: 一 備考: 一

16 台帳:P25 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 100% 法量: 口径 13.2, 器高 3.8 色調: 外面部暗褐色~黒褐色。内面部黒褐色。 脱土: 磁(白少、透多) 燃成: 良好 技法等: 外面部口縫部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部ヘラ削り後ヘラミガキ。 内面部口縫部ヨコナデ後ヘラミガキ。 内外面とも黒色処理。 使用痕: 一 備考: 一

17 台帳:P3, №9 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 20% 法量: 口径(13.8), 器高 2.9 色調: 内外面暗褐色~暗褐色 脱土: 磁(白少、透多) 燃成: 良好 技法等: 外面部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部ヘラ削り後ヘラミガキ。 内面部ヘラミガキ。 内外面とも黒色処理。 使用痕: 一 備考: 一

18 台帳:P19, №6-9-11 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 30% 法量: 口径(13.8), 器高 2.8 色調: 内外面暗褐色~黒褐色 脱土: 磁(白少、透多) 燃成: 良好 技法等: 外面部口縫部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部ヘラ削り。 内面部ヘラミガキ。 内外面とも黒色処理。 使用痕: 口縫部が摩減している。 備考: 一

19 台帳:P11 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 100% 法量: 口径 13.8, 器高 5.6 色調: 外面部赤~橙~暗褐色~黒色。内面部赤~暗褐色。 脱土: 磁(白多、透多) 燃成: 良好 技法等: 外面部ヘラ削り後ヘラナダ。 内面部ヨコナデ。 外面部ヨコナデ後ヘラナダ。 外面部ヨコナデ~体部中位と内面部に赤彩。 使用痕: 口縫部が摩減している。 備考: 一

20 台帳:P20 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 100% 法量: 口径 16.4, 器高 5.2 色調: 内外面赤~暗赤褐色~にいし橙~黒色。内面部赤~暗褐色。 脱土: 磁(白微)、砂(白多、透多) 燃成: 良好 技法等: 外面部口縫部ヨコナデ。 体部ヘラ削り。 内面部ヨコナデ。 体部ヘラナダ。 内外面とも赤彩。 使用痕: 一 備考: 内外面ともやや器面が荒れている。

21 台帳:P18 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 90% 法量: 口径 15.7, 器高 5.0 色調: 外面部赤~橙~黒色。内面部赤~黒褐色 脱土: 磁(白微)、砂(白多、透多) 燃成: 良好 技法等: 外面部口縫部ヨコナデ。 体部上位ヘラ削り。 内面部ヨコナデ後ヘラミガキ。 体部ヘラミガキ。 内外面とも黒色処理。 使用痕: 口縫部が摩減している。 備考: 一

22 台帳:P31 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 90% 法量: 口径 17.2, 器高 5.0 色調: 内外面赤~黒褐色 脱土: 磁(白少、透多) 燃成: 良好 技法等: 外面部口縫部ヨコナデ~一部ヘラ削り。 体部ヘラ削り。 内面部ヨコナデ。 体部ヘラナダ。 内外面とも赤彩。 使用痕: 二 備考: 二 次焼成を受けている。

23 台帳:P22 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 100% 法量: 口径 16.8, 器高 5.8 色調: 外面部赤~橙~にいし橙~黒色。内面部赤~にいし橙~ 脱土: 磁(白少、透多) 燃成: 良好 技法等: 外面部口縫部ヘラ削り後ヘラナダ。 体部ヘラ削り。 内面部ヨコナデ。 体部ヘラナダ。 内外面とも赤彩。 使用痕: 一 備考: 一 外面部ヨコナデと内面部に赤彩。 使用痕: 口縫部が摩減し、所々が欠けている。

24 台帳:P23 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 100% 法量: 口径 16.5, 器高 5.9 色調: 外面部赤~にいし橙~黒色。内面部赤~にいし橙~ 脱土: 磁(白微)、砂(白多、透多) 燃成: 良好 技法等: 外面部口縫部ヨコナデ。 体部ヘラ削り後ヘラナダ。 体部ヘラナダ。 内面部ヨコナデ~体部中位に赤彩。 使用痕: 一 備考: 一

25 台帳:P10 材質: 土器部 器種: 梗 残存: 90% 法量: 長 11.8, 幅 5.2, 厚 5.2 色調: にいし黄橙~黒色 脱土: 磁(白多、透多) 技法等: ヘラナダ~ナダ 使用痕: 一 備考: 一

26 台帳:II-3 材質: 鉄 器種: 鎌 残存: 9.7, 最大幅 18, 最大厚 0.3, 重量 21.2g 備考: 一

#### IV 古墳時代の遺構と遺物

- 27 台帳:玉 材質:ガラス 種類:小玉 法量:最大径0.6、最大厚0.4、孔径0.1、重量0.23 g 色調:紺 備考:—  
28 台帳:S5 材質:石炭 種類:玉? 法量:長24、幅18、厚0.6、孔径0.2、重量2.78g 備考:孔は両側穿孔。  
29 台帳:S4 材質:石炭 種類:玉? 法量:長22、幅18、厚0.7、孔径0.1、重量2.48 g 備考:孔は貫通していない。  
30 台帳:S3 材質:砂岩 種類:敲石 法量:長7.7、幅4.4、厚3.5、重量172.13 g 備考:敲打による凹み1ヶ所。  
31 台帳:S1 材質:珪質片岩 種類:砥石 法量:長30.2、幅8.0、厚0.6、重量2685.35 g 備考:明綠灰色。砥面はA-Dの四面。刃物を研いだ溝がみられる。

#### 第 83 号住居跡

- 1 台帳:P 49-62・63-66・68-70-72-75-83-87-91 ~ 99-102-104-107、№4-9-10-13-14 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁~胴部上位70%、胴部中位50%、下位~底部100% 法量:口径(21.8)、器高35.5、底径9.5 色調:内外面とも赤褐色~橙に赤褐色~暗褐色~黒褐色。胎土:小石(白微)、礫(白少)、砂(白多、透多、灰少)。焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、体部收射状にヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕:口縁部が摩滅している。 備考:—  
2 台帳:P 29-62-66 ~ 69-72-74 ~ 76-84 ~ 86-88-89-91-101-106-109、№4-9-10-13 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部80%、胴部上~中位60%、下位~底部100% 法量:口径18.7、器高32.7、底径8.5 色調:外面赤褐色~橙に赤褐色~黒褐色。胎土:小石(白微)、礫(白少)、砂(白多、透多)。焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナダ。 使用痕:外面胴部が二回焼成をうけており、器面が荒れている。 備考:—  
3 台帳:P 41-44-56-58 ~ 60、№9 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁~胴部中位~底部100%、胴部下位70% 法量:口径16.2、器高24.3、底径8.0 色調:外面橙~黒色。内面に赤褐色。胎土:礫(白少)、砂(白多、透多)。焼成:良好 技法等:外面胴部ヘラ削り。内面ヘラナダ。 使用痕:— 備考:—  
4 台帳:P 10-15-16-18 ~ 21-29-30-34-45-61-64-65-71、№2-3-10 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁~胴部上位~底部100%、胴部中~下位60% 法量:口径16.8、器高25.2、底径9.0 色調:外面赤褐色~暗褐色~黒褐色。内面橙に赤褐色。胎土:紺(白少)、砂(白多、透多)。焼成:良好 技法等:外面口縁部上位ヨコナデ~下位~胴部上位ヘラ削り後ヘラナダ、中位~底部へ削り。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナダ。 使用痕:外面器面が二次焼成を受けている。 備考:—  
5 台帳:P42-45 ~ 50-61、№1-2-9-13 材質:土師器 器種:甕 残存:80% 法量:口径13.8、器高12.2、底径7.0 色調:内外面とも橙に赤褐色。胎土:礫(白少)、砂(白多、透多)。焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラ削り。丁寧ではない。 使用痕:— 備考:—  
6 台帳:P9-27 ~ 31-33-34-36-37-54、№4-9 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁~胴部中位50% 法量:口径(21.3)、器高(20.0) 色調:外面に赤褐色~黒色。内面に赤褐色。胎土:礫(白少)、砂(白多、透多、黑少)。技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナダ。 使用痕:— 備考:1ヶ所小孔あり。7と同一か。  
7 台帳:P35-54-55-62、№9 材質:土師器 器種:甕 残存:底径30% 法量:器高(10.0)、孔径(8.0) 色調:内外面ともに赤褐色。胎土:礫(白少)、砂(白多、透多)。焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナダ。 使用痕:内外面とも器面が減っている。 備考:小孔が2つあり。その位置から直して4方向に孔があると考えられる。6と同一か。  
8 台帳:P77-82 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁~胴部上位10% 法量:口径(20.0)、器高(8.5) 色調:外面に赤褐色。胎土:礫(白微)、砂(白多、透多)。焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラ削り。

内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナダ。 使用痕:内外面とも器面が摩滅している。 備考:—

- 9 台帳:P10、№2-14 材質:土師器 器種:甕 残存:30% 法量:口径(12.0)、器高4.5 色調:内外面ともに赤褐色~暗褐色。胎土:紺(白少、透多)。焼成:良好 技法等:外面口縁部 ヨコナデ後ヘラミガキ、体部收射状にヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕:口縁部が摩滅している。 備考:—

- 10 台帳:№2、73 №6-9 材質:土師器 器種:甕 残存:10% 法量:口径(14.0)、器高(36) 色調:外面浅黄~黑色。内面黑色。胎土:紺(白少、透少)。焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、体部上位ナダ、中位へ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕:— 備考:73住出土の土器片と接合した。

- 11 台帳:P80 材質:土師器 器種:甕 残存:10% 法量:口径(15.0)、器高(3.3) 色調:内外面とも橙~黒褐色。胎土:紺(白少)、砂(白少、透多)。骨針削:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕:— 備考:—

- 12 台帳:P90 材質:土師器 器種:甕 残存:10% 法量:口径(15.0)、器高(0.1) ~ 0.3、重量1.73 g 色調:橙に赤褐色。 備考:孔は片側穿孔。

- 13 台帳:S3 材質:石炭 種類:不明 法量:長3.5、幅22、厚1.7、重量10.44 g 備考:—

- 14 台帳:S5 材質:石炭 種類:不明 法量:長3.0、幅24、厚1.8、重量7.18 g 備考:—

- 15 台帳:№3 材質:石炭 種類:不明 法量:長4.5、幅22、厚0.9、重量7.47 g 備考:—

- 16 台帳:S4 材質:石炭 種類:不明 法量:長2.0、幅20、厚1.1、重量2.81 g 備考:—

- 17 台帳:S1 製材:砂岩 種類:台石 法量:長19.5、幅15.4、厚6.0、重量2414.22 g 備考:多数の敲打痕と砥面の一面。

#### 第 85 号住居跡

- 1 台帳:P45-46、№6-9 材質:土師器 器種:甕 残存:胴部中位~底部20% 法量:口径(23.2)、器高(18.6)、底径(6.4) 色調:外露赤褐色~黒褐色。内面に赤褐色。胎土:小石(白少)、紺(白少)、砂(白多、透多)。焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナダ。 技法等:外面器面は被熱し、器面の一部が剥離している。 備考:—  
2 台帳:P13、№6 材質:土師器 器種:甕 残存:80% 法量:口径27.0、器高22.0、底径7.0 色調:外露赤褐色~暗褐色~黒褐色。胎土:小石(白微)、紺(白少)、砂(白多、透多)。焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナダ。 孔周辺のみヘラ削り。 使用痕:— 備考:—  
3 台帳:P11、№2 ~ 5 材質:土師器 器種:甕 残存:20% 法量:口径(27.0)、器高13.2、底径(6.8) 色調:外露赤褐色。内面黒褐色。胎土:小石(白微)、紺(白少)、砂(白多、透多)。焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナダ。 使用痕:— 備考:—  
4 台帳:P12-44、№6-9 材質:土師器 器種:甕 残存:40% 法量:口径(13.0)、器高6.1 色調:内外面ともに赤褐色~黒褐色。胎土:紺(白多、透多)。焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り。内面口縁部~胴部中位ヨコナデ、下位ヘラナダ。 使用痕:— 備考:—  
5 台帳:P44 材質:土師器 器種:甕 残存:90% 法量:口径12.0 ~ 13.7、器高6.8 色調:内外面ともに赤褐色~黒褐色。胎土:小石(白微)、紺(白微)、砂(白多、透多)。焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナダ。 使用痕:内面口縁部に斯状付物。 備考:器形は口縁部を上から見ると円形。  
6 台帳:P1 材質:土師器 器種:甕 残存:100% 法量:口径13.2、器高5.0 色調:外面に赤褐色。内面黒色。胎土:紺(白微)、砂(白少、透多)。焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラ削り。

- 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。 体部ヘラ削り後ヘラナダ。 内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。 体部ヘラミガキ。 内外面とも黒色處理。 使用瓶: 口縁端部が部分的に欠失している。 備考: -
- 7 台帳:P19-20・26-28・35-42-43, №3-6-9 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 70% 法量: 口径 12.9, 器高 4.4 色調: 内外面ともにぶい桜~暗褐色。 脱土: 砂(白少, 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。 体部ヘラミガキ。 内外面とも黒色處理。 使用瓶: 口縁端部が部分的に欠失している。 備考: -
- 8 台帳:P1, №4 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 100% 法量: 口径 11.2, 器高 4.7 色調: 内外面とも赤褐色~ぶい赤褐色。 脱土: 砂(白多, 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。 体部ヘラミガキ。 内外面とも黒色處理。 使用瓶: 一備考: -
- 9 台帳:P25-27・29 ~ 31-41 ~ 43 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 60% 法量: 口径 13.2, 器高 5.0 色調: 外面赤桜~桜~黒褐色。 内面にぶい黄橙色。 脱土: 砂(灰黒), 砂(白多, 透多, 黑少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ, 体部上位ヨコナデ後ヘラミガキ。 下位ヘラミガキ。 使用瓶: 口縁端部が壊滅している。 備考: -
- 10 台帳:P48 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 80% 法量: 口径 11.4, 器高 4.2 色調: 外面にぶい黄橙~黒色。 内面橙色。 脱土: 砂(白少, 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ。 体部上位ナダ。 下位ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナダ。 使用瓶: 内外面とも器面がやや壊滅している。 備考: -
- 11 台帳:P15 ~ 17-39, №4-5-7 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 70% 法量: 口径 14.5, 器高 4.0 色調: 内外面とも赤橙色。 脱土: 砂(白少, 透多, 赤微) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ。 体部ヘラナダ。 下位ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。 体部收斎状にヘラミガキ。 使用瓶: 内外面器面の一部が剥離している。 備考: -
- 12 台帳:P47 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 100% 法量: 口径 14.0, 器高 4.4 色調: 内外面とも桜~ぶい桜色。 脱土: 砂(白少, 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヘラミガキ。 体部うず巻状にヘラミガキ。 中央部はヘラミガキなし。 使用瓶: 口縁端部が部分的に欠失している。 備考: -
- 13 台帳:P2 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 90% 法量: 口径 14.5, 器高 4.6 色調: 内外面とも橙色。 脱土: 砂(白多, 透多, 黑少, 赤微) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。 体部收斎状にヘラミガキ。 使用瓶: 口縁端部が部分的に欠失している。 備考: -
- 14 台帳:P3 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 口縁部 80%, 体部 100% 法量: 口径 15.0, 器高 5.5 色調: 外面赤桜~桜~ぶい桜色。 内面黄橙~ぶい桜色。 脱土: 砂(白), 砂(白少, 透多, 黑少, 赤微) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り後ヘラナダ。 内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。 使用瓶: 一備考: -
- 15 台帳:P38 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 80% 法量: 口径 14.5, 器高 5.3 色調: 外面桜~黒色。 内面桜~暗褐色。 脱土: 砂(灰黒), 砂(白多, 透多, 黑少, 赤少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。 使用瓶: 口縁端部が部分的に欠失している。 備考: -
- 16 台帳:P1 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 100% 法量: 口径 14.0, 器高 4.5 色調: 外面桜~ぶい黄橙~暗褐色。 内面にぶい黄橙~暗褐色。 脱土: 砂(白多, 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り後ヘラナダ。 内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラミガキ。 内外面とも黒色處理。 使用瓶: 一備考: -
- 17 台帳:P1 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 100% 法量: 口径 12.0, 器高 4.9 色調: 内外面とも暗褐色~黒褐色。 脱土: 砂(白少, 透多, 赤少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ, 体部收斎状にヘラミガキ。 内外面とも黒色處理。 使用瓶: 一備考: -
- 18 台帳:P5 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 20% 法量: 口径 12.7, 器高 4.2 色調: 内外面とも暗褐色~黒褐色。 脱土: 砂(白多, 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ, 体部上位ヨコナデ後若干のヘラミガキ。 内外面とも黒色處理。 使用瓶: 一備考: -
- 19 台帳:P1 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 60% 法量: 口径 12.0, 器高 4.9 色調: 内外面とも暗褐色~黒褐色。 脱土: 砂(白少, 透多, 赤少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ, 体部收斎状にヘラミガキ。 内外面とも黒色處理。 使用瓶: 一備考: -
- 20 台帳:P12 材質: 土師器 器種: 杯 残存: 100% 法量: 口径 14.0, 器高 4.4 色調: 外面桜~黄桜~暗褐色~黒色。 内面にぶい黄橙~黄橙色。 脱土: 小石(白微), 砂(白少), 砂(白多, 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部上位ヨコナデ, 下位~底部ヘラ削り。 内面ヘラナダ。 使用瓶: 外面が二次焼成をうけている。 備考: -
- 21 台帳:P2・No4 材質: 土師器 器種: 潟 残存: 口縁~胴部中位 60% 法量: 口径 26.8, 器高 18.1 色調: 外面にぶい黄橙~暗褐色~黒褐色。 内面桜~黄橙色。 脱土: 砂(白多, 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 脊部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ。 脊部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ, 脊部ヘラナダ。 使用瓶: 外面が二次焼成をうけている。 備考: -
- 22 台帳:P8・No9 材質: 土師器 器種: 潟 残存: 100% 法量: 口径 12.8, 器高 4.9 色調: 内外面とも赤褐色~ぶい赤褐色~黒褐色。 脱土: 砂(白少, 透少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り後ヘラナダ。 内面口縁部上位ヨコナデ。 中一下位ナダ。 内外面とも黒色處理。 使用瓶: 一備考: -
- 23 台帳:P10・No10 材質: 土師器 器種: 潟 残存: 60% 法量: 口径 12.0, 器高 4.9 色調: 内外面とも暗褐色~黒褐色。 脱土: 砂(白少, 透多, 赤少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ, 体部收斎状にヘラミガキ。 内外面とも黒色處理。 使用瓶: 一備考: -
- 24 台帳:P11・No11 材質: 土師器 器種: 潟 残存: 100% 法量: 口径 12.8, 器高 4.9 色調: 内外面とも暗褐色~黒褐色。 脱土: 砂(白少, 透少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ, 体部收斎状にヘラミガキ。 内外面とも黒色處理。 使用瓶: 一備考: -
- 25 台帳:P12・No12 材質: 土師器 器種: 潟 残存: 60% 法量: 口径 12.0, 器高 4.9 色調: 内外面とも暗褐色~黒褐色。 脱土: 砂(白少, 透多, 赤少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ, 体部收斎状にヘラミガキ。 内外面とも黒色處理。 使用瓶: 一備考: -
- 26 台帳:P13・No13 材質: 土師器 器種: 潟 残存: 20% 法量: 口径 12.7, 器高 4.2 色調: 内外面とも暗褐色~黒褐色。 脱土: 砂(白少, 透少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ, 体部收斎状にヘラミガキ。 内外面とも黒色處理。 使用瓶: 一備考: -
- 27 台帳:P14・No14 材質: 土師器 器種: 潟 残存: 100% 法量: 口径 14.0, 器高 4.5 色調: 外面桜~ぶい黄橙~暗褐色。 内面にぶい黄橙~暗褐色。 脱土: 砂(白多, 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ, 体部收斎状にヘラミガキ。 内外面とも黒色處理。 使用瓶: 一備考: -
- 28 台帳:P15・No15 材質: 土師器 器種: 潟 残存: 40% 法量: 口径 16.0, 器高 4.2 色調: 内外面とも黒褐色。 脱土: 砂(白少, 透少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り後ヘラナダ。 内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラミガキ。 内外面とも黒色處理。 使用瓶: 一備考: -
- 29 台帳:P16・No16 材質: 土師器 器種: 潟 残存: 100% 法量: 口径 16.0, 器高 4.2 色調: 内外面とも黒褐色。 脱土: 砂(白少, 透少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り後ヘラナダ。 内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラミガキ。 内外面とも黒色處理。 使用瓶: 一備考: -
- 30 台帳:P17・No17 材質: 土師器 器種: 潟 残存: 100% 法量: 口径 14.0, 器高 4.5 色調: 外面桜~ぶい黄橙~暗褐色。 内面にぶい黄橙~暗褐色。 脱土: 砂(白多, 透多) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ, 体部收斎状にヘラミガキ。 内外面とも黒色處理。 使用瓶: 一備考: -
- 31 台帳:P18・No18 材質: 土師器 器種: 潟 残存: 100% 法量: 口径 15.8, 器高 7.0 色調: 外面桜~ぶい黄橙~暗褐色。 内面黄橙~黒褐色。 脱土: 砂(白少, 透少, 黑微) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラミガキ。 内外面とも黒色處理か? 使用瓶: 内外面が壊滅している。 備考: 外面が二次焼成をうけている。
- 32 台帳:P19・No19 材質: 土師器 器種: 潟 残存: 100% 法量: 長 13.0, � 径 6.0, 孔径 0.8 色調: 黄桜~暗褐色~黒褐色。 技法等: ナダ。 中心に孔あり。 使用瓶: 二次焼成をうけている。 備考: -

## 遺構に伴わない古墳時代の遺物(SD3)

- 1 台帳:P45-49-50, №20 材質: 土師器 器種: 潟 残存: 口縁~胴部 30% 法量: 口径 20.0, 器高 21.7 色調: 外面赤~赤褐色~暗褐色~黒褐色。 内面黄黃~暗褐色。 脱土: 小石(白微), 砂(白少, 透多, 黑少, 黑多, 黑少) 燃成: 良好 技法等: 外面口縁部ヨコナデ, 脊部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り後ヘラナダ。 内面口縁部ヨコナデ, 脊部ヘラナダ。 使用瓶: 一備考: -
- 2 台帳:P62 材質: 土師器 器種: 潟 残存: 100% 法量: 口径 17.8, 器高

#### IV 古墳時代の遺構と遺物

- (38). 底径 12.0 色調:外側にぶい赤褐色。内面橙色。胎土:礫(白少), 砂(白多, 透少, 黒少) 焼成:良好 技法等:外側ヘラ削り。内面ヘラナダ。 使用痕:— 備考:—
- 3 台帳:P26 材質:土師器 器種:甕 残存:底部 70% 法量:器高(4.2), 底径(6.6) 色調:外側黄褐色~黒褐色。 内面黄褐色。 胎土:砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:外側ヘラ削り, 底面木葉瓶, 内面ヘラナダ。 使用痕:— 備考:—
- 4 台帳:P44 材質:土師器 器種:甕 残存:底部 100% 法量:器高(2.5), 底径 6.8 色調:外側にぶい橙~黒褐色。 内面にぶい橙色。 胎土:礫(白少), 砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:外側ヘラ削り, 底面木葉瓶, 内面ヘラナダ。 使用痕:— 備考:—
- 5 台帳:P70 材質:土師器 器種:甕 残存:底部 100% 法量:器高(3.0), 底径 9.3 色調:外側橙~黒褐色。 内面黒褐色。 胎土:小石(白微), 磨(白微), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外側ヘラ削り?。 内面ヘラナダ。 使用痕:外側器面が摩滅している。 備考:—
- 6 台帳:P40 材質:土師器 器種:甕 残存:底部 20% 法量:器高(2.2), 底径(8.2) 色調:外側にぶい黄橙色。 内面黒褐色。 胎土:砂(白少, 透多, 赤微) 焼成:良好 技法等:外側ヘラ削り。 内面ヘラナダ。 使用痕:— 備考:—
- 7 台帳:P33 材質:土師器 器種:甕 残存:底部 100% 法量:器高(2.5), 底径 8.0 色調:外側橙色。 内面浅黄~灰色。 胎土:小石(灰微), 砂(白多, 透多, 黑少, 赤少) 焼成:良好 技法等:外側ヘラ削り。 内面ヘラナダ。 使用痕:— 備考:—
- 8 台帳:P63 材質:土師器 器種:甕 残存:底部 40% 法量:器高(2.5), 底径(8.6) 色調:外側黄橙色。 内面にぶい橙色。 胎土:礫(白微), 砂(白少, 透多, 黑少) 焼成:良好 技法等:外側ヘラ削り。 内面ヘラナダ。 使用痕:— 備考:—
- 9 台帳:P39, №18 材質:土師器 器種:高杯 残存:杯部 20% 法量:口径(18.0), 器高(4.0) 色調:内外面とも橙色。 胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多, 灰少) 焼成:良好 技法等:外側口縁部ヨコナダ, 体部ヘラ削り。 内面ヘラナダ。 使用痕:— 備考:—
- 10 台帳:P34 材質:土師器 器種:高杯 残存:脚部 50% 法量:器高(9.7) 色調:外側面とも浅黄色。 胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外側ヘラ削り?。 内面ヘラナダ。 使用痕:— 備考:外側器面が摩滅している。
- 11 台帳:P56, №20 材質:土師器 器種:高杯 残存:脚部 70% 法量:器高(8.5) 色調:外側赤~橙色。 内面橙色。 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外側ヘラ削り。 内面ヘラナダ。 外面が赤彩されている。 使用痕:— 備考:外側器面が摩滅している。
- 12 台帳:P41 材質:土師器 器種:高坏 残存:脚部 50% 法量:器高(6.2) 色調:外側赤~浅黄色。 内面赤色。 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外側ヘラ削り。 内面ヘラナダ。 内外面とも赤彩されている。 使用痕:— 備考:—
- 13 台帳:№18 材質:土師器 器種:杯 残存:10% 法量:口径(12.0), 器高(3.3) 色調:内外面とも赤~橙色。 胎土:砂(白少, 透少, 黒微) 焼成:良好 技法等:外側口縁部ヨコナダ, 体部ヘラ削り。 内面口縁部ヨコナダ, 体部ヘラナダ。 外側口縁部と内面に赤彩されている。 使用痕:— 備考:—
- 14 台帳:№21 材質:土師器 器種:手づくね土器 残存:底部 100% 法量:器高(3.8), 底径 7.7 ~ 8.2 色調:外側浅黄橙色。 内面橙色。 胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多, 黑少) 焼成:良好 技法等:外側ヘラ削り, 底面木葉瓶。 内面ヘラ削り。 使用痕:— 備考:—
- 15 台帳:P23 材質:土師器 器種:手づくね土器 残存:底部 100% 法量:器高(3.3), 底径 5.2 ~ 6.5 色調:外側面とも浅黄褐色~黒色。 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外側ヘラナダ。 ナダ。 内面ヘラナダ。 使用痕:— 備考:—
- 16 台帳:P60 材質:土師質 器種:支脚? 残存:— 法量:長 127, 幅 4.1, 厚 3.9 色調:橙~ぶい橙色。 技法等:ナダ 使用痕:— 備考:—
- 17 台帳:P47 材質:土師質 器種:支脚? 残存:— 法量:長 11.2, 幅 4.1 色調:橙~ぶい橙色。 技法等:ナダ 使用痕:二次焼成をうけている。 備考:—
- 18 台帳:№16 材質:須恵器 器種:甕 残存:— 法量:— 色調:内外面とも青灰色。 胎土:礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成:硬質 技法等:沈殿 2 层, 波状文。 使用痕:— 備考:—
- 19 台帳:№23 材質:石炭 種類:不明 法量:長 4.1, 幅 2.8, 厚 1.7, 重量 14.13 g 備考:—

## V 奈良・平安時代の遺構と遺物

### 1 調査の概要

鷺ノ巣遺跡では、奈良・平安時代の遺構として、住居跡を 27 基、土坑 1 基、溝状遺構 1 条を検出した。

**住居跡の時期** 出土した遺物から推定すると、以下のようなになる。

- ・8世紀第1四半期(3基): 第29・38・44号住居跡
- ・8世紀第2四半期(5基): 第3・14・32・34A・84号住居跡
- ・8世紀第3四半期(4基): 第33・63・65・67号住居跡
- ・8世紀第4四半期(5基): 第1・61・78・80・81号住居跡
- ・8世紀前半(1基): 第70号住居跡
- ・8世紀後半? (2基): 第31A・72号住居跡
- ・9世紀第2四半期(1基): 第57号住居跡
- ・9世紀前半(1基): 第82号住居跡
- ・9世紀中葉(2基): 第58・66号住居跡
- ・9世紀第3四半期(3基): 第27・54・56号住居跡

**住居跡の分布** 8世紀第2～4四半期の住居跡は調査区北側の台地の比較的平坦な位置に分布するのに対し、8世紀第1四半期と9世紀の住居跡は、調査区南側

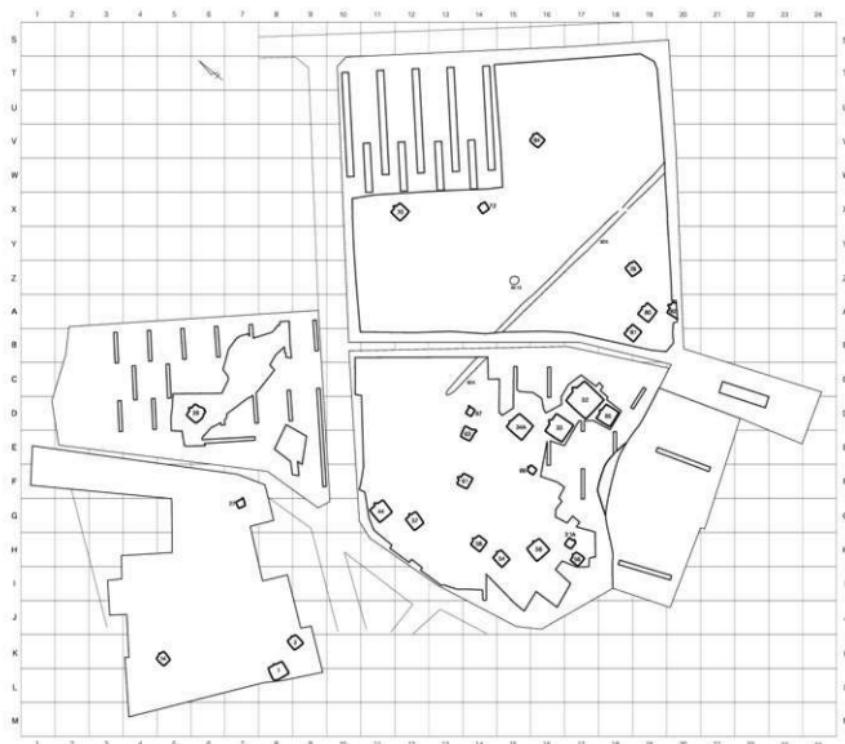
のやや傾斜地に分布する。

**住居跡の規模** 主軸長で比較すると、最大が第32号住居跡の8.61mで、最小が第27号住居跡の2.2mである。8mを超える大型住居跡と2m強の小型住居跡の存在が、鷺ノ巣遺跡の特徴の一つである。

**竈** 設置される壁の位置は、大半が北壁で、第31A号住居跡が東壁、第27号住居跡が東隅、第63号住居跡が南東隅、第67号住居跡が北東隅となる。

第6表 奈良・平安時代住居跡一覧表

住居跡番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	主軸	備考
1	K・L・8	4.6	4.25	N-25°E	第1次調査
3	K-N・9	3.9	3.5	N-4°E	第1次調査
14	K-5	3.0	3.0	N-19°E	第1次調査
27	G-7	2.2	2.2	N-36°E	第1次調査
29	D-5・6	4.27	3.86	N-7°E	第3次調査
31A	H-17	2.40	2.38	N-83°E	第2次調査
32	C-D-17・18	8.61	8.15	N	第2次調査
33	D-E-16・17	6.26	6.19	N-8°W	第2次調査
34A	D-E-15・16	6.08～5.76	5.67	N-3°E	第2次調査
38	H-15・16	4.96	4.87	N-12°E	第2次調査
44	G-11	5.02	4.80	N-12°E	第2次調査
54	H-I-14・15	3.82	3.44	N-5°E	第2次調査
56	H-17	3.08	3.04	N-3°E	第2次調査
57	G-12	4.26	3.88	N-14°E	第2次調査
58	H-14	3.62	3.52	N-3°W	第2次調査
61	F-13・14	3.52～3.22	3.52	N-20°W	第2次調査
63	D-E-13・14	3.36	3.33	N-75°E	第2次調査
65	D-17・18	5.26	4.79	N-11°W	第2次調査
66	F-15・16	2.28～2.14	1.96	N-3°E	第2次調査
67	D-14	2.26	1.86	N-6°W	第2次調査
70	X-11・12	3.90	3.82	N-1°W	第4次調査
72	X-14	2.45	(245)	N-13°E	第4次調査
78	Z-18・19	3.52	3.49	N-10°E	第4次調査
80	A-19	4.24	3.94	N-2°W	第4次調査
81	A-B-18・19	3.81	3.68	N-1°W	第4次調査
82	A-20	3.76	(340)	N-12°W	第4次調査
84	V-16	3.45	3.26	N-2°E	第4次調査



第83図 奈良・平安時代遺構分布図(グリッドは1辺10 m)



第2次調査区第32号住跡周辺

## 2 住居跡の調査

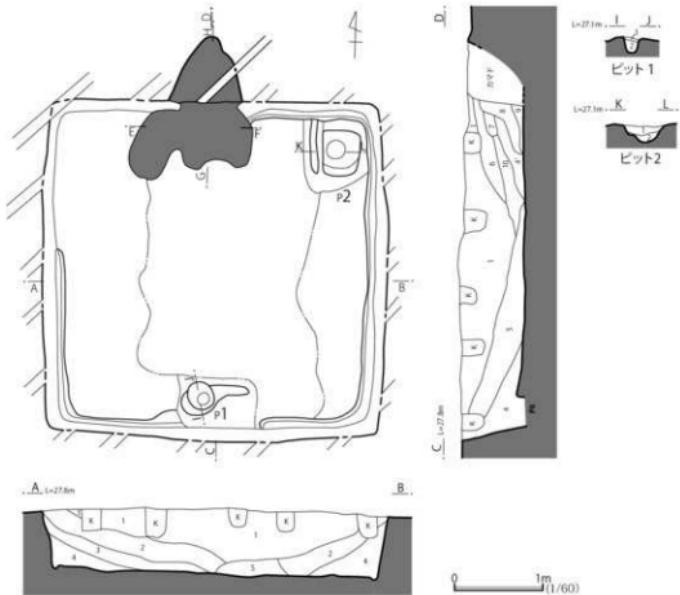
### 第70号住居跡

**遺構** X-11-12区に位置する。ゴボウ耕作による擾乱の影響を受けているが、床面までは掘り込まれていない。平面形は、ほぼ方形を呈する。堅穴部の規模は3.82×3.90m。壁高は東壁75cm、西壁67cm、南壁68cm、北壁60cm。主軸方向はN-1°-Wを指す。堅周溝は、竈周辺と出入り口部分、堅穴部北西隅を除いてみられ、幅6~10cm、床面からの深さ3~6cmを測る。床面は、竈前から南壁にかけて帯状に硬化している。ピット1と

2には、床面から約3cmの土手状の高まりがある。

堅穴部覆土は、下層に人為的に埋め戻されたと思われるロームブロックを含む褐色土が堆積し、その上に自然堆積と思われる第1層の黒色土がみられる。黒色土とロームブロックの混合層である第5層は、堆積状況から住居跡南側から投入されたと考えられる。

竈は北壁のほぼ中央に位置する。残存状況は燃焼部から焚口にかけては悪いが、煙道部の一部が残っていた。竈の構築材として黄白色粘土が使用されている。壁面へ



第70号住居跡堆積覆土

- 第1層 黒色土層(ローム粒少量含む 灰化粒微量含む 繩まり強く有り)
- 第2層 黑褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック少量含む 人為的埋土 繩まり強く有り)
- 第3層 褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック多量含む 人為的埋土 繩まり強く有り)
- 第4層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック少量含む 人為的埋土 繩まり強く有り)
- 第4'層 第4層に粘土粒が少量混じる層
- 第5層 黒色土とロームブロックの混合層(径1~3cmロームブロック多量含む 人為的埋土ローム粒少量含む 繩まり強く有り)

第6層 黒色土層(ローム粒少量含む 白色粘土少量含む 灰化粒微量含む 繩まり有り)

第7層 白色粘土ブロック (人為的埋土 繩まり有り)

第8層 褐色土層(ローム粒・粘土粒多量含む 人為的埋土 繩まりやや無し)

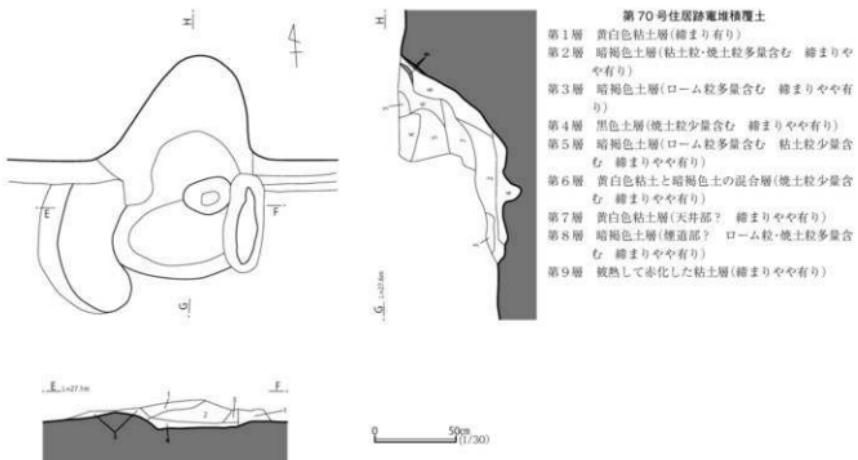
第9層 白色粘土と燒土層 (人為的埋土 繩まり有り)

第10層 黑褐色土とロームブロックと粘土ブロックの混合層 (人為的埋土 繩まり有り)

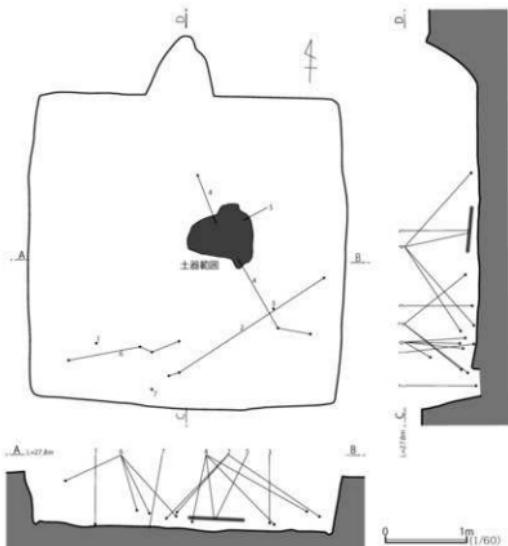
第70号住居跡ピット1-2堆積覆土

- 第1層 黑褐色土層(ローム粒多量含む 繩まり有り)
- 第2層 明褐色土層(ローム土主体 繩まり有り)

第84図 第70号住居跡・遺物出土(淡綱:粘土)



第85図 第70号住居跡竪



第86図 第70号住居跡遺物出土状況

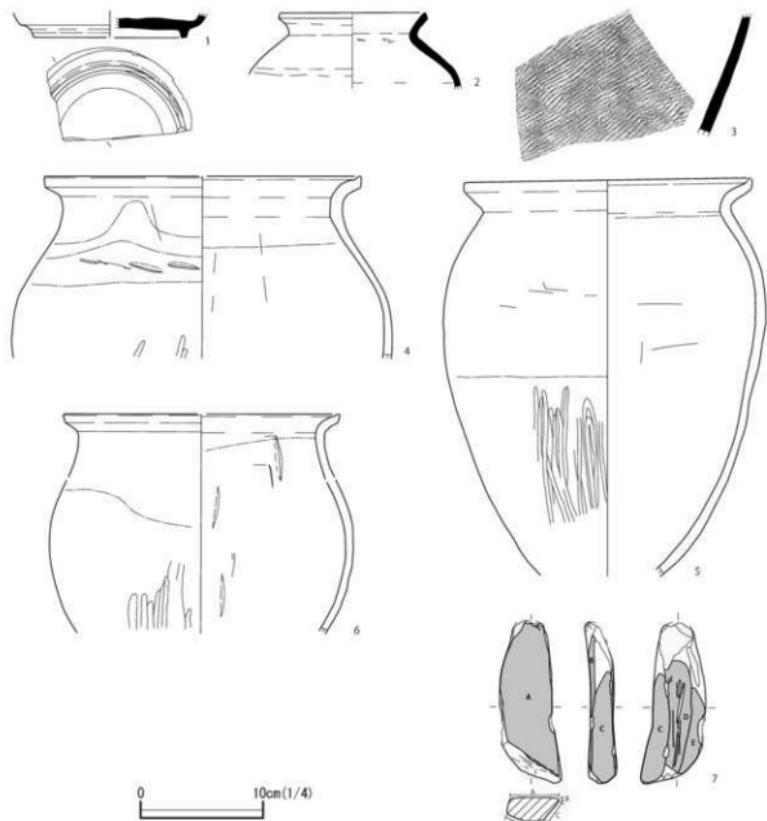
の掘り込みは、63cm程突出する。両袖部先端は堅穴部の壁近くにあると思われ、堅穴内部への竪の張り出しは大きくはない。煙道部は、壁面に粘土を張って煙突とし、

その粘土が被熱していた(第9層)。

ピットは2基検出された。ピット1は出入り口施設に伴うもの、ピット2は「貯藏穴」と思われる。主柱穴は確認されない。床面からの深さは、ピット1が20cm、ピット2が18cmである。

**遺物の出土状況** 出土した遺物は少なく完形品はない。平面分布では住居跡中央から南側に多く、接合関係がみられる。垂直分布は、壁際では覆土上層から、中央部では覆土下層から出土していることから、住居跡が埋没していく段階に投棄された遺物と考えられる。

**遺物** 第87図1の須恵器有台杯は胎土から木葉下窓産と思われる。高台が低い古手の形状を持つので8世紀前半頃と思われるが、木葉下窓群では当該期の有台杯の生産様相はいまだ不明瞭である。なお底部外面が研磨されているので、転用碗として用いられたものであろう。2は胎土から木葉下窓産と思われる須恵器小型甕である。同様の甕は木葉下窓ではTA4段階からTB2段階にみられるので、8世紀第1四半期頃に位置付けられる。4~6は外面副部下半にヘラ



第 87 図 第 70 号住居跡出土遺物(淡網: 砥面)

磨きを持つ常陸型甕である。胎土中に白雲母を含んでおり新治窯付近産である。7は珪質片岩製の砥石である。石質からみて日立産と思われる。

遺物群の時期は、8世紀前半頃に位置付けられる。

#### 第 72 号住居跡

**遺構** X-14 区に位置する。南側を第 1 号溝状遺構が掘り込んでおり、また耕作による擾乱も受けているため、残存状況はわるい。平面形は方形を呈する。堅穴部の規模は  $2.45 \times 2.45$  (推定) m。壁高は  $26 \sim 28$  cm と浅い。主軸方向は N- $13^{\circ}$ -E を指す。壁周溝は確

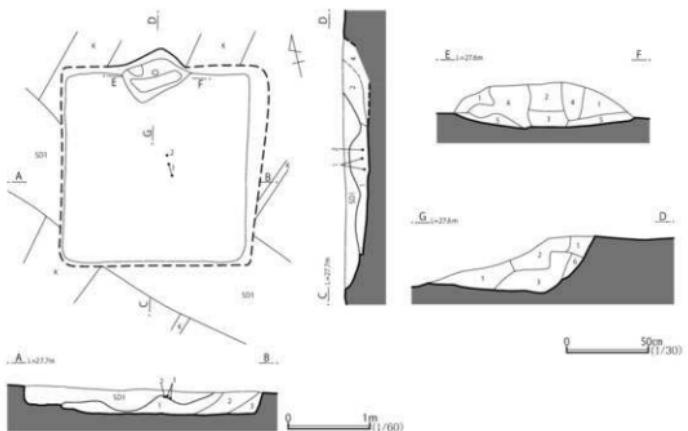
認できない。床面は、全体的に軟質である。

堅穴部覆土は、黒褐色土と黒色土が主体に堆積する。竈は北壁のほぼ中央に位置する。残存状況は非常にわるく、灰白色粘土がみられるだけで、竈の構造はよくわからない。

ピットは、確認できない。

**遺物の出土状況** 遺物は非常に少ない。固化できた遺物は覆土中から出土している。

**遺物** 第 89 図 1 は二次底部面を若干残す回転ペラ切り未調整の杯である。底部外面にヘラ記号を持つ。2 は両面糸切り痕を残す瓦片である。遺物群の時期は 8



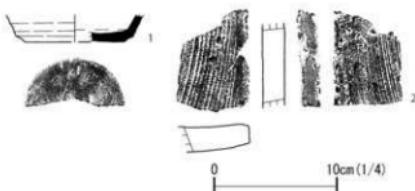
第 72 号住居跡堆積層土

- 第1層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 繊まり有り)  
 第2層 黒色土層(ローム粒少量含む 繊まり有り)  
 第3層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 繊まり有り)  
 第4層 灰白色粘土層(焼土粒少量含む 繊まり有り)

第 72 号住居跡堆積層土

- 第1層 黒色土層(白色粘土ブロック・白色粘土粒・燒土少量含む 繊まりやや有り)  
 第2層 黒色土層(黒色のみ 繊まりやや有り)  
 第3層 灰白色粘土層(燒土ブロック少量含む 繊まりやや有り)  
 第4層 暗褐色土層(ローム粒・白色粘土粒多量含む 繊まりやや有り)  
 第5層 黒色土層(ローム粒少量含む 繊まりやや有り)  
 第6層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 繊まりやや有り)

第 88 図 第 72 号住居跡・遺物出土状況



第 89 図 第 72 号住居跡出土遺物

世紀に位置付けられる。

第 78 号住居跡

**遺構** Z-18-19 区に位置する。ゴボウ耕作による溝状の搅乱を受けており、一部は床面まで掘り込んでいる。また、住居跡に伴わないビットにも掘り込まれている。平面形は、方形を呈する。堅穴部の規模は 3.49 × 3.52m。壁高は東壁 31cm、西壁 24cm、南壁 23cm、北壁 29cm。主軸方向は N-10°-E を指す。壁周溝は確

認できない。床面は、竈前から南壁にかけて帯状に硬化しているが、それ以外の場所の床面は、非常に軟質である。

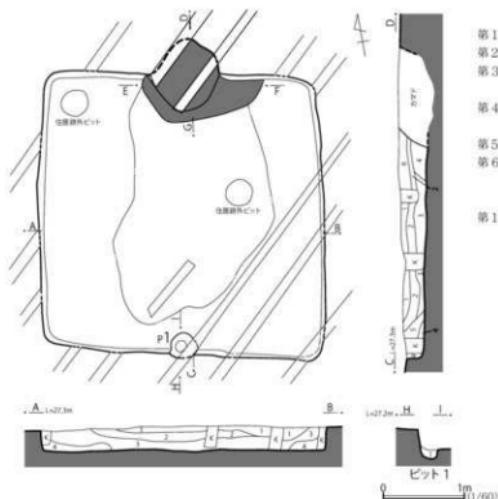
堅穴部覆土は、暗褐色土と黒褐色土が堆積する。

竈は北壁のほぼ中央に位置する。残存状況は、天井部が崩れているが、両袖部と燃焼部は比較的よく残っている。竈の構築材として白色粘土が使用されている。壁面への掘り込みは、40cm 程突き出る。両袖部先端は堅穴部の壁からやや張り出す。

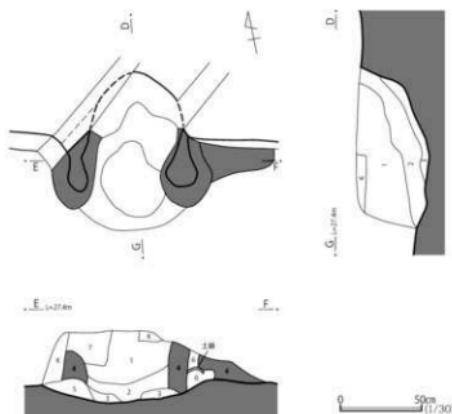
ビットは 1 基検出され、出入り口施設に伴うものと思われる。床面からの深さは 10cm である。

**遺物の出土状況** 遺物は、出土量が少なくすべて破損品である。回化できた遺物は覆土上層から中層で出土しているものが多い。遺物の出土位置による時期差はほとんどみられないため、短期間に住居が埋没していると思われる。第 93 図 2 の杯形土器は、壊された状態でまとめて置かれていた。

**遺物** 1 の杯は底部のみであるが、回転ヘラ切り



第90図 第78号住居跡(淡網:粘土)



第91図 第78号住居跡竈(淡網:粘土)

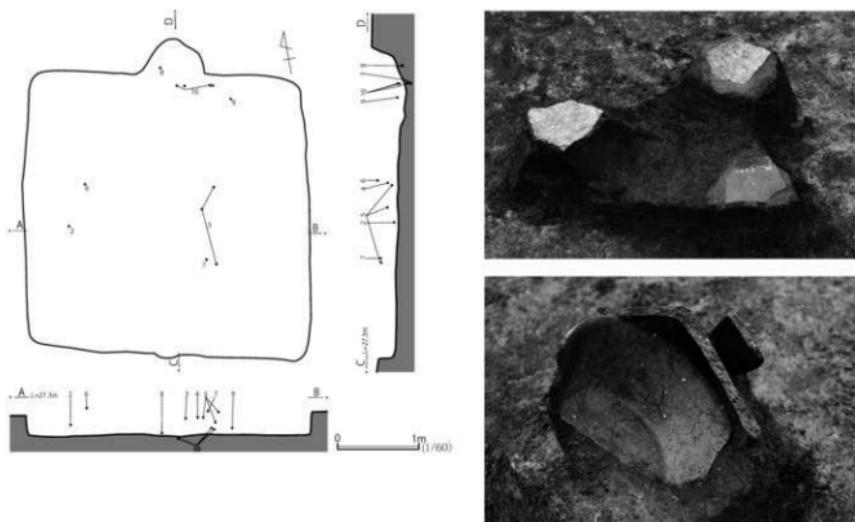
未調整であることや、二次底部面を若干残すことなどからみて、8世紀第4四半期頃に位置付けられる。2の小型杯は底部外面回転ヘラ削りであり、形状からみて8世紀第4四半期頃に位置付けられる。3は新治窯産の杯もしくは有台杯の体部片である。4～7は須恵器窓の胸部片である。同一個体の可能性がある。8～10は常陸型窓ではない点が注意される。10の小型窓は全体的に

火を受けている。

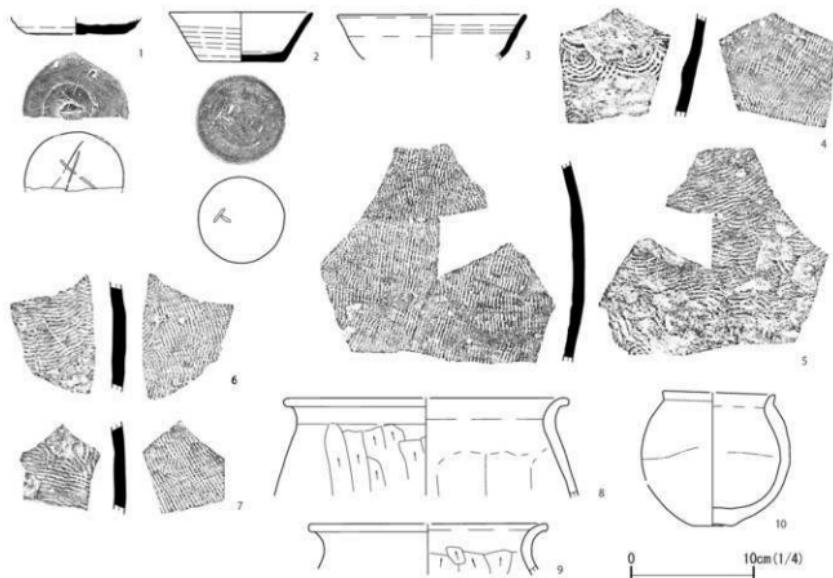
遺物群の時期は須恵器窓からみて8世紀第4四半期頃に位置付けられるのであろう。

#### 第80号住居跡

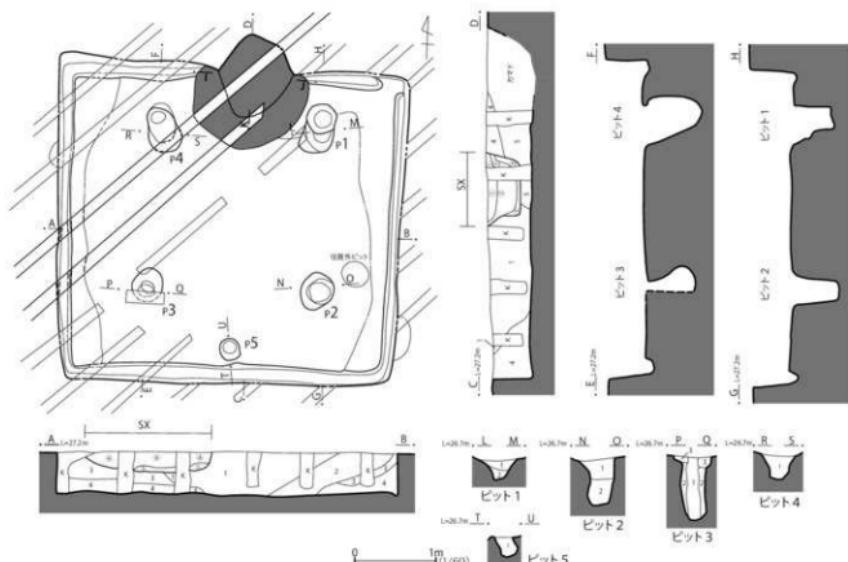
遺構 A-19区に位置する。ゴボウ耕作による



第92図 第78号住居跡出土状況



第93図 第78号住居跡出土遺物



第 80 号住居跡堆積覆土

- 第1層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 緋まり有り)  
 第2層 褐色土層(径1~5cmロームブロック・ローム粒多量含む 緋まり有り)  
 第3層 暗褐色土層(ローム粒少量含む 緋まり有り)  
 第4層 暗褐色土層(第1・3層より明るい色調 ローム粒多量含む 緋まり有り)  
 第5層 暗褐色土層(ローム粒・白色粘土少量含む カマド材含む 緋まり有り)  
 第6層 黄色粘土層(SX 覆土 緋まり強く有り)  
 第7層 灰色粘土層(SX 覆土 緋まり強く有り)  
 第8層 白色粘土層(SX 覆土 緋まり強く有り)  
 第9層 黒褐色(SX 覆土 ローム粒微量含む 緋まり有り)  
 第10層 黄色粘土層(SX 覆土 緋まり有り)

第 80 号住居跡ピット 1 堆積覆土

- 第1層 黒色(白色粘土ブロック多量含む 緋まり有り)  
 第2層 褐色(ローム粒多量含む 緋まりやや有り)  
 第 80 号住居跡ピット 2 堆積覆土  
 第1層 黒色土層(ローム粒少量含む 緋まりやや有り)  
 第2層 褐色土層(ローム粒多量含む 緋まりやや有り)  
 第 80 号住居跡ピット 3 堆積覆土  
 第1層 暗褐色土層(ローム粒少量含む 緋まりやや無し)  
 第2層 褐色土層(掘形 ローム粒多量含む 緋まりやや有り)  
 第3層 褐色土層(床面 ローム粒多量含む 緋まり有り)  
 第 80 号住居跡ピット 4 堆積覆土  
 第1層 暗褐色土層(ローム粒少量含む 緋まりやや無し)  
 第 80 号住居跡ピット 5 堆積覆土  
 第1層 暗褐色土層(ローム粒微量含む 緋まりやや有り)

第 94 図 第 80 号住居跡(淡綱:粘土)

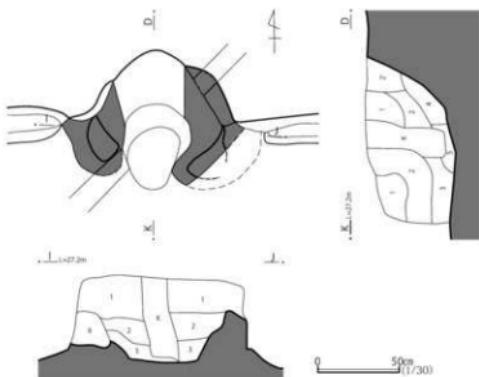
溝状の搅乱を受けており、一部は床面まで掘り込まれている。また、住居跡に伴わないピットや土坑にも掘り込まれている。平面形は、方形を呈する。堅穴部の規模は3.94×4.24m。壁高は東壁51cm、西壁と南壁54cm、北壁51cm。主軸方向はN-2°-Wを指す。壁周溝はほぼ全周する。幅10~15cm、床面からの深さ4~6cmを測る。床面は東西の壁沿いを除いて硬化しており、凸凹している。

堅穴部覆土は、暗褐色土を主体に堆積する。第2層はロームブロックを多く含む褐色土で、人為的に埋め戻さ

れたものと思われる。

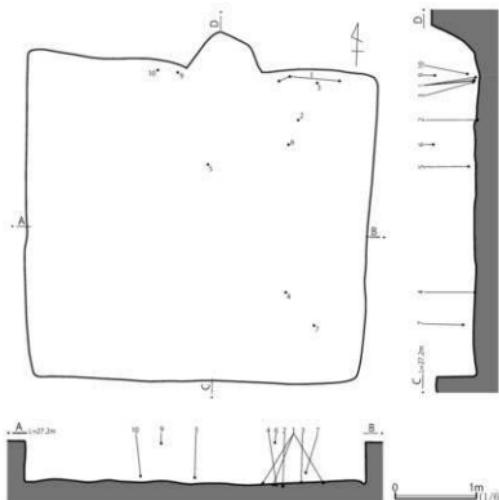
竈は北壁のほぼ中央に位置する。残存状況は、天井部が崩れているが、両袖部と燃焼部は比較的よく残っている。竈の構築材として白色粘土が使用されている。壁面への掘り込みは、45cm程突出する。東側の袖部は粘土等を芯として構築したものではなく、堅穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残して、その上に白色粘土を貼って袖部としている。

ピットは5基検出された。ピット1~4は主柱穴、ピット5は出入り口施設に伴うものと思われる。床面からの



第95図 第80号住居跡(淡網:粘土)

第80号住居跡堆積覆土  
 第1層 黒褐色土層(粘土粒少量含む 繼まり有り)  
 第2層 黒色土と白色粘土の混合層(井戸部 繼まり有り)  
 第2'層 第2層よりも粘土の多い土層(被熱した粘土を多量に含む 繼まり有り)  
 第3層 黒色土層(粘土粒・ローム粒少量含む 焼土粒少量含む 繼まり有り)  
 第4層 黒褐色土層(焼土粒少量含む 繼まり有り)  
 第5層 閑色土層(焼土粒少量含む 繼まりやや有り)  
 第6層 灰白色粘土層(繫まり有り)



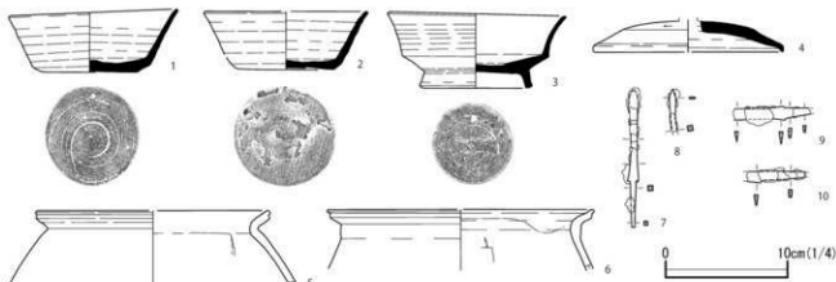
第96図 第80号住居跡遺物出土状況

深さは、ピット1が55cm、ピット2・3が58cm、ピット4が70cm、ピット5が27cmである。主柱穴のピット3・4は、覆土の堆積状況から住居の床面を張る前に柱を立てていることが分かる。また、ピット3のみ住居廃絶時に柱を引き抜いていない状況が確認できた。

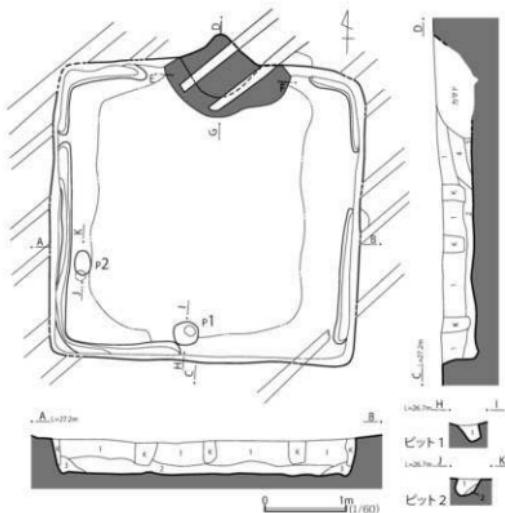
**遺物の出土状況** 出土した遺物は少ない。平面分布では、竪穴部中央から東寄りに分布する。須恵器杯形土器は、第97図1・2・3は正位の状態で床面直上から出

土した。土師器甕形土器は5が覆土下層、6が覆土上層から出土した。鉄製品は、7と10が覆土下層、9が覆土上層から出土した。

**遺物** 須恵器は胎土からみて全て木葉下窯産と思われる。1・2の杯は、底部周縁に若干二次底部面を残すことや形状からみて8世紀後半期に位置付けられる。3の有台杯は、体部が開き底部外周が大きく立ち上がる形状であり、8世紀後半期から9世紀前半



第97図 第80号住居跡出土遺物



第98図 第81号住居跡(淡網:粘土)

半期頃に位置付けられる。4の蓋は鉢径からみて有台杯蓋と思われる。3の有台杯に伴うものであろうか。5・6はいずれも小破片であるが、胎土中に白雲母を含むことから新治窯付近産である。おそらく常陸型窯になるのであろう。7は整筋式鉄釘の完形品である。

遺物群の時期は8世紀後半期頃に位置付けられる。

### 第81号住居跡

**遺構** A・B - 18・19区に位置する。ゴボウ耕作による溝状の擾乱を受けており、一部は床面まで掘り込

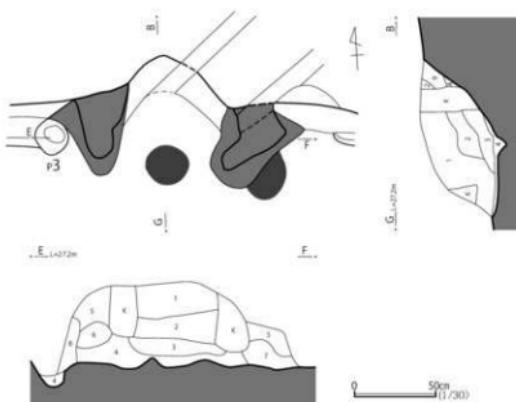
### 第81号住居跡堆積覆土

- 第1層 暗褐色土層(ローム粒少量含む 織まりやや有り)
- 第2層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 徑1cmロームブロック少量含む 織まりやや有り)
- 第3層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 織まりやや有り)
- 第4層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 白色粘土少量含む 織まりやや有り)
- 第5層 暗褐色土層(ローム粒微量含む 織まりやや有り)
  - 第81号住居跡ピット1堆積覆土
- 第1層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 織まりやや有り)
  - 第81号住居跡ピット2堆積覆土
- 第1層 黒褐色土層(ローム粒少量含む 織まりやや有り)
- 第2層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 織まりやや有り)

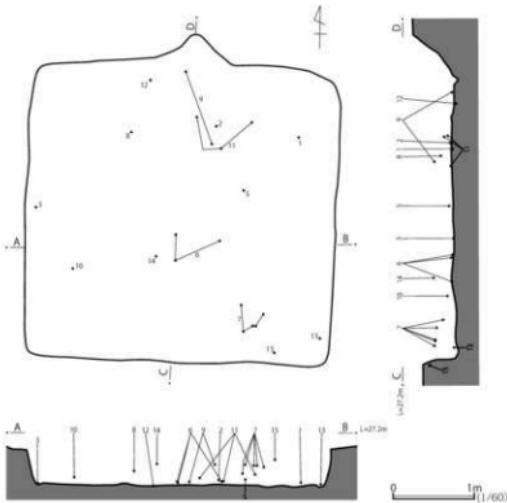
んでいる。平面形は、方形を呈する。竪穴部の規模は3.68×3.81m。壁高は東壁49cm、西壁54cm、南壁39cm、北壁50cm。主軸方向はN-1°-Wを指す。壁周溝は所々にみられる。幅10~15cm、床面からの深さ2~8cmを測る。床面は東西の壁沿いを除いて硬化しており、凸凹している。

竪穴部覆土は、暗褐色土を主体に堆積する。

竪穴は北壁のほぼ中央に位置する。残存状況は、耕作による擾乱を受け残りはよくないが、両袖部の先端と火床面は残っている。竪穴構築材として白色粘土が使用され



第99図 第81号住居跡竈(漆網:焼土・淡網:粘土)



第100図 第81号住居跡遺物出土状況

ている。壁面への掘り込みは、32cm程突出する。火床面には2cm程の厚さの焼土が堆積していた。袖部東側の下面で、1cm程堆積した焼土の広がりを確認した。この焼土の北側壁では掘り込まれた痕跡がないことから、竈の造り替えとは考えにくい。第82号住居跡でも同じような例がみられる。

ピットは3基検出された。ピット1は出入り口施設に

## 第81号住居跡竈堆積層土

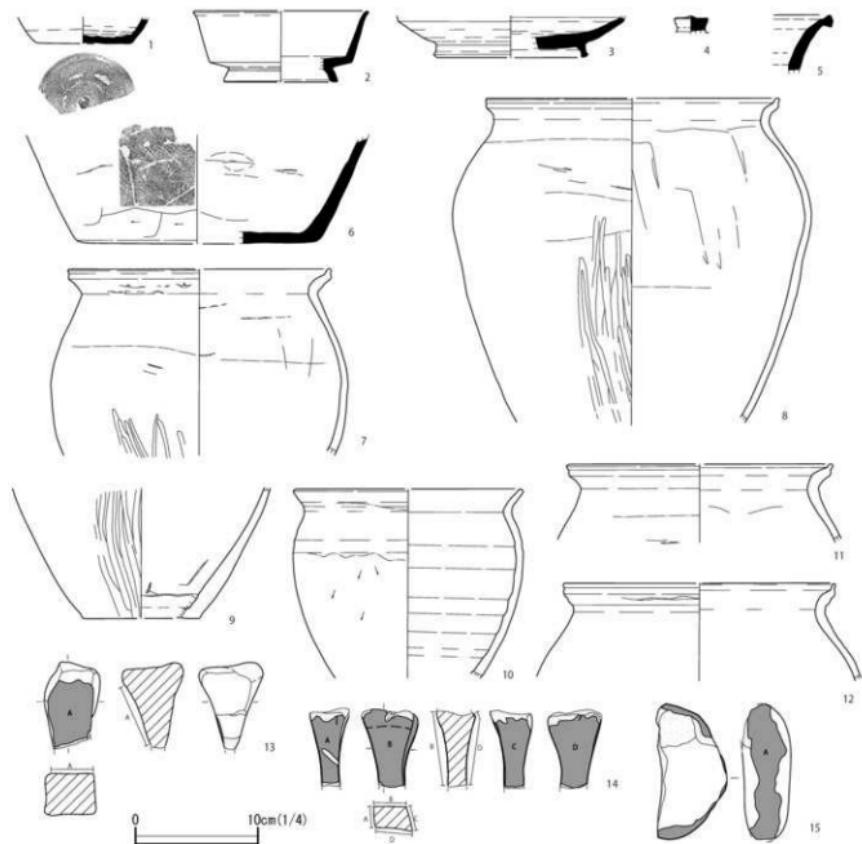
- |     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| 第1層 | 黒褐色土層(ローム粒・白色粘土粒少量含む 締まりやや有り)      |
| 第2層 | 暗褐色土層(ローム粒・白色粘土粒多量含む 締まりやや有り)      |
| 第3層 | 灰色土層(焼土粒少量含む 締まり無し)                |
| 第4層 | 褐色土層(径1cmロームブロック・ローム粒多量含む 締まりやや有り) |
| 第5層 | 白色粘土層(粘土主体だが、一部黒色土が混じる 締まり有り)      |
| 第6層 | 褐色ローム土(ローム土主体 締まり有り)               |
| 第7層 | 暗褐色土層(ローム粒多量含む 焼土粒少く含む 締まりやや有り)    |
| 第8層 | 褐色土層(ローム粒・粘土粒・焼土粒少量含む 締まりやや有り)     |
| 第9層 | 褐色土層(ローム粒・粘土粒・焼土粒少量含む 締まりやや有り)     |

伴うものと思われる。床面からの深さは、ピット1が21cm、ピット2が25cm、ピット3が19cmである。

**遺物の出土状況** 完形で出土した遺物はない。平面分布では、竪穴部全体から出土している。垂直分布では、壁側の遺物が覆土中層で、竪穴部中央部が覆土下層から出土しており、住居が埋没していく段階で投棄された様相を呈する。

**遺物** 第101図1の杯は形状から9世紀第1四半期頃であろうか。2の有台杯は底部周辺が立ち上がり水平であることからみて8世紀第3四半期頃と思われる。3の有台盤も小さな高台などからみて有台杯と同じ頃かもしれない。6は新治窯産の胴部斜位平行線文叩きをもつ平底甕である。8世紀後半から9世紀前半のころに位置付けられる遺物である。7~9は新治窯付近産の常陸型甕である。10~12の土師器甕は胎土からみて新治窯付近産ではない。13~14は白色流紋岩質砥石である。ふたつとも中央部が薄くなり折れて廃棄されたものだろう。15は扁平な円錐の側面に敲打痕がめぐる、砂岩製の敲石である。

遺物群の時期は、8世紀第3四半期から9世紀第1四半期頃と、幅をもつ年代推定となった。遺物からみると住居跡の廃絶年代は8世紀第4四半期頃になるだろう。



第101図 第81号住居跡出土遺物(淡綱:底面)

か。

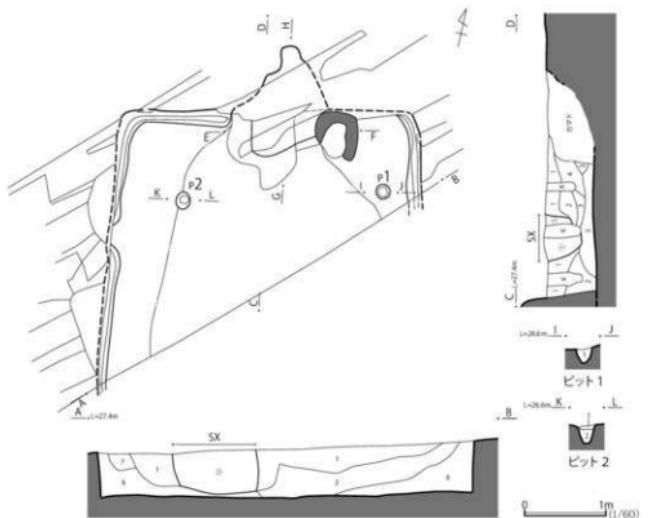
## 第82号住居跡

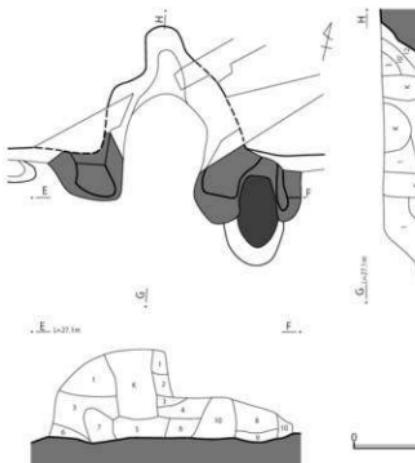
**遺構** A-20区に位置する住居跡南側が調査区分外のため、全体の調査は実施できない。ゴボウ耕作による溝状の搅乱を受けているが、床面までは掘り込まれてはいない。また、中世と思われる土坑にも掘り込まれている。平面形は、方形を呈すと思われる。堅穴部の規模は $(3.40) \times 3.76\text{m}$ 。壁高は東壁 $68\text{cm}$ 、西壁と北壁が $59\text{cm}$ 。主軸方向は $N - 12^\circ - W$ を指す。壁周溝は、調査した範囲ではほぼみられる。幅約 $10\text{cm}$ 、床面からの

深さ $1 \sim 5\text{cm}$ を測る。床面は東西の壁沿いを除いて硬化しており、凸凹している。

堅穴部覆土は、黒褐色土と暗褐色土が主体に堆積する。

竈は北壁のはば中央に位置する。残存状況は、耕作による搅乱を受け残りはよくないが、両袖部の先端と火床面は残っている。竈の構築材として白色粘土が使用されている。壁面への掘り込みは、 $76\text{cm}$ 程突出する。竈の東側に、袖を共有して、小型の竈を確認した。白色粘土で袖部を構築し、燃焼部の床面は被熱していた。壁面への掘り込みはみられないことから、竈の造り替えとは考えられず、併用して使用していた可能性が考えられる。





第103図 第82号住居跡竈(濃網・焼土・淡網・粘土)



第82号住居跡竈

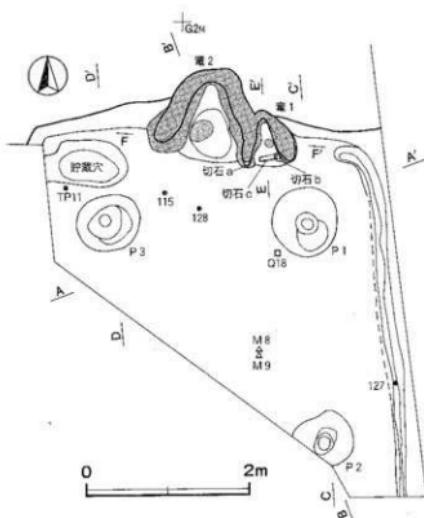
合層である第1層は、人為的に埋め戻された土層と考えられる。

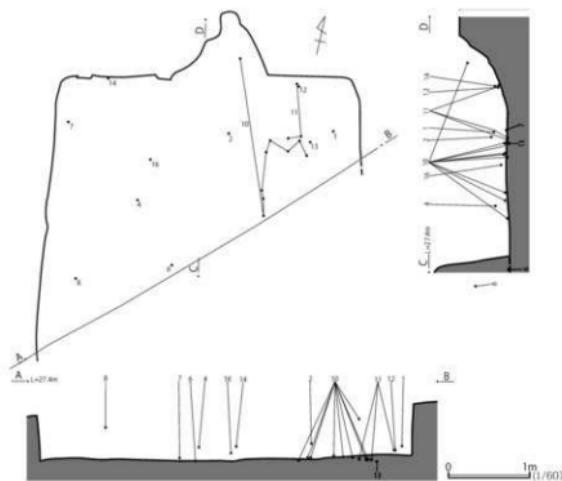
竈は北壁の中央よりやや東側に位置する。残存状況は、天井部は崩れていますが、燃焼部から焚口にかけては比較的よく残っています。竈の構築材として白色粘土が使用されている。壁面への掘り込みは、50cm程突出する。煙道部は住居跡確認面で確認でき、その直径は20cmを測る。竈掘形は、壁を横断面でみると階段状に掘り込みそこに粘土を張って構築している。

ピットは2基検出され、出入り口施設に伴うものと思われる。主柱穴は確認されない。床面からの深さは、ピット1が9cm、ピット2が22cmである。

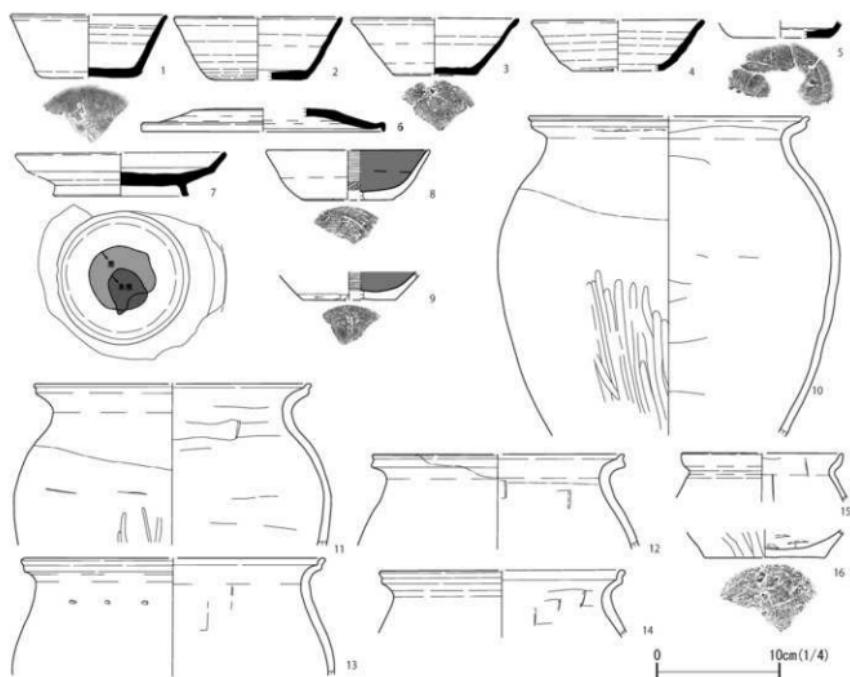
#### 第82号住居跡竈堆積覆土

- 第1層 塗褐色土層(ローム粒多量含む 締まり有り)
- 第2層 塗褐色土層(ローム粒多量含む 白色粘土少量含む 締まり有り)
- 第3層 塗褐色土層(ローム粒多量含む 白色粘土斑状に混じる 締まり有り)
- 第4層 塗褐色土層(ローム粒・燒土粒多量含む 締まり有り)
- 第5層 塗褐色土層(ローム粒・燒土粒多量含む 締まりやや有り)
- 第6層 塗褐色土層(ローム粒・燒土粒少量含む 黒色土混じる 締まり有り)
- 第7層 白色粘土と塗褐色土の混合層(燒土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第8層 塗褐色土層(燒土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第9層 塗褐色土層(燒土粒多量含む 締まりやや有り)
- 第10層 貫白色粘土層
- 第10層 天井部粘土
- 第11層 塗褐色土層(ローム粒微量含む 締まりやや有り)
- 第12層 塗褐色土層(ローム粒微量含む 締まりやや有り)

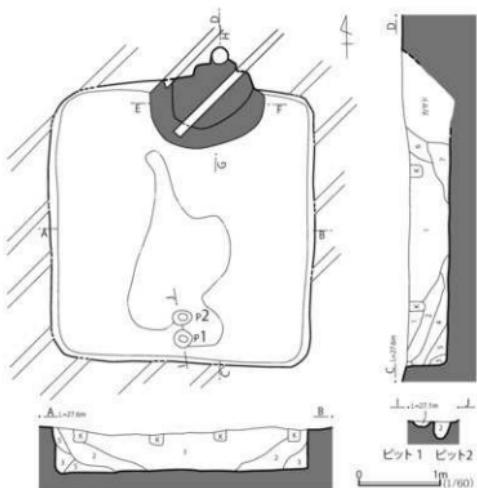




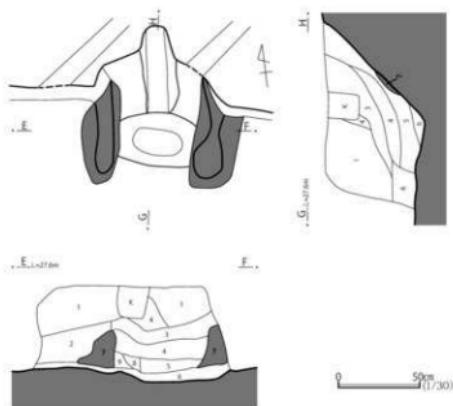
第105図 第82号住居跡遺物出土状況



第106図 第82号住居跡竈(淡網:黒色処理)



第107図 第84号住居跡・出土遺物(淡網:粘土)



第108図 第84号住居跡竪(淡網:粘土)

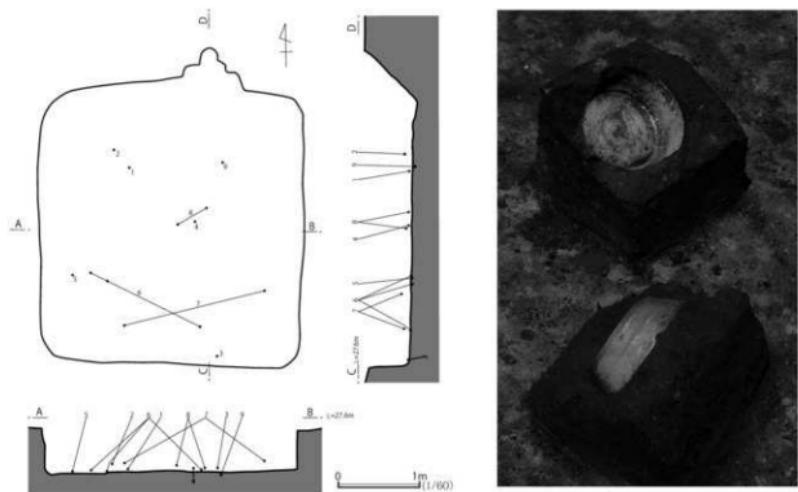
は床面直上で南側壁に立て掛けのように出土した。1・2・4は覆土下層で、2が正位、1が倒位の状態で出土した。蓋形土器の5は、床面直上で、逆位の状態で出土した。

**遺物** 1～4の木葉下窓須恵器杯は大型品(1・2)と小型品(3・4)がある。いずれも底部回転ヘラ削りであり、形状から8世紀中葉頃に位置付けられよう。6

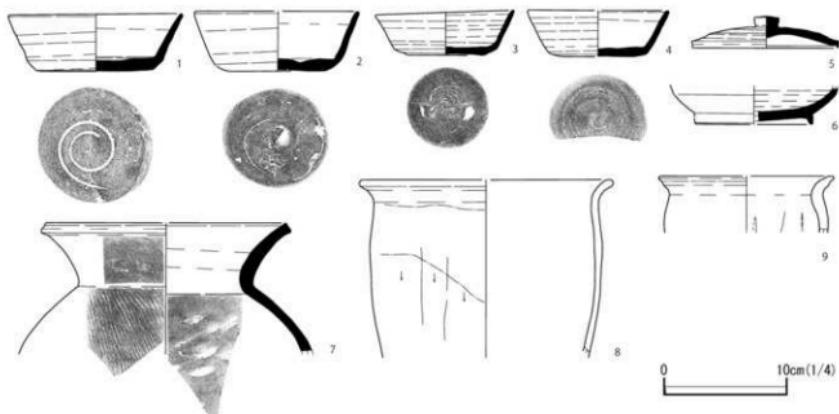
は木葉下窓の稜輪形の有台杯であり、8世紀後半期後葉頃の生産年代が与えられる。5は木葉下窓の有台杯蓋であるが、口径からみて小型品の蓋になろう。7は木葉下窓と思われる須恵器壺である。肩部の形状から丸底になるものと思われ、8世紀後半期まででの生産年代となるだろう。8は口唇部の形状が丸く、胴部に外面縱方向ヘラ削りを加えるという、古墳時代後期以

## 第84号住居跡堆積覆土

- 第1層 褐色土・黒褐色土の混合層(径1～3cmロームブロック・ローム粒多量含む・締まり有り)
  - 第2層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 径1～3cmロームブロック微量含む 締まり有り)
  - 第3層 褐色土層(径1～3cmロームブロック・ローム粒多量含む 締まりやや有り)
  - 第4層 褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
  - 第5層 黒褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
  - 第6層 褐色土層(ローム粒多量含む 粘土少量含む 締まりやや有り)
  - 第7層 褐色土層(第1層にカマドの粘土が混じった土層 締まりやや有り)
- 第84号住居跡ピット1・2堆積覆土
- 第1層 黒褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
  - 第2層 暗褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)



第109図 第84号住居跡遺物出土状況



第110図 第84号住居跡出土遺物

来の伝統を引く土師器壺である。9は新治窯産の小型壺であり、おそらく常陸型壺の小型品なのであろう。

遺物群の時期は、8世紀第2四半期後葉ぐらいとみてよいと思われる。

#### 引用文献

大久保隆史 2012 『宮後道路 郡田野西原道路 一般国道245号道路  
拡幅事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財團文化財調査報告  
第354集 財団法人茨城県教育財團

### 3 土坑・溝状遺構の調査

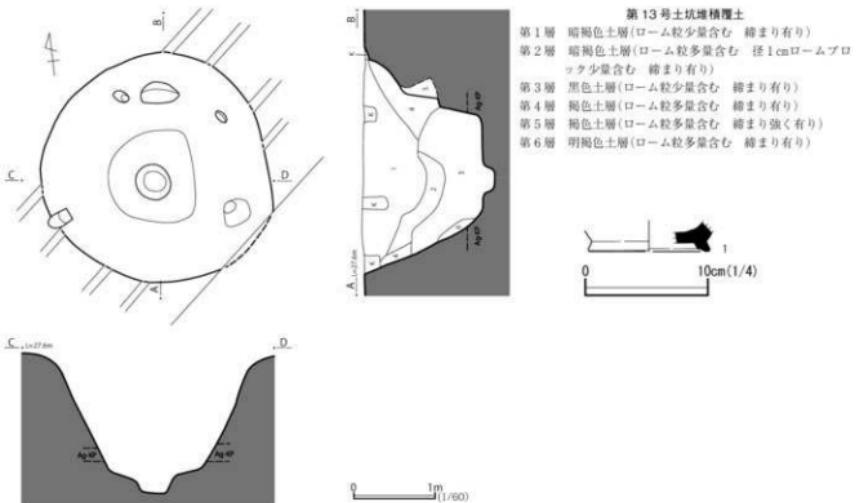
#### 第13号土坑

Z-15区に位置する。平面形は円形を呈し、底面には円形の掘り込みがある。直径は280cm、確認面からの深さ170cmを測る。底面の掘り込みは直径45cm、深さ20cmを測る。底面は鹿沼軽石堆積層の下に構築している。壁面には、5つのピット状の掘り込みがみられる。覆土は上層に暗褐色土、下層に黒色土が堆積する。

遺物は須恵器の瓶片1点が図化出来た。この他には、底面近くから奈良・平安時代に推定できる変形土器片が出土している。よって、当土坑の時期も奈良・平安時代と思われる。

#### 第3号溝状遺構

**遺構** W-B-15~19区に位置する。第1号溝状遺構に掘り込まれている。溝はほぼ東西を軸に延びており、第2次調査区から続いている。この主軸は、第70-80-81-84号住居跡とほぼ直交する。確認できた長さ約69m、最大幅約2.2m、深さA-B断面で90cmである。溝の断面はY字状を呈する。覆土は、上層に暗褐色土、下層に褐色土が堆積する。

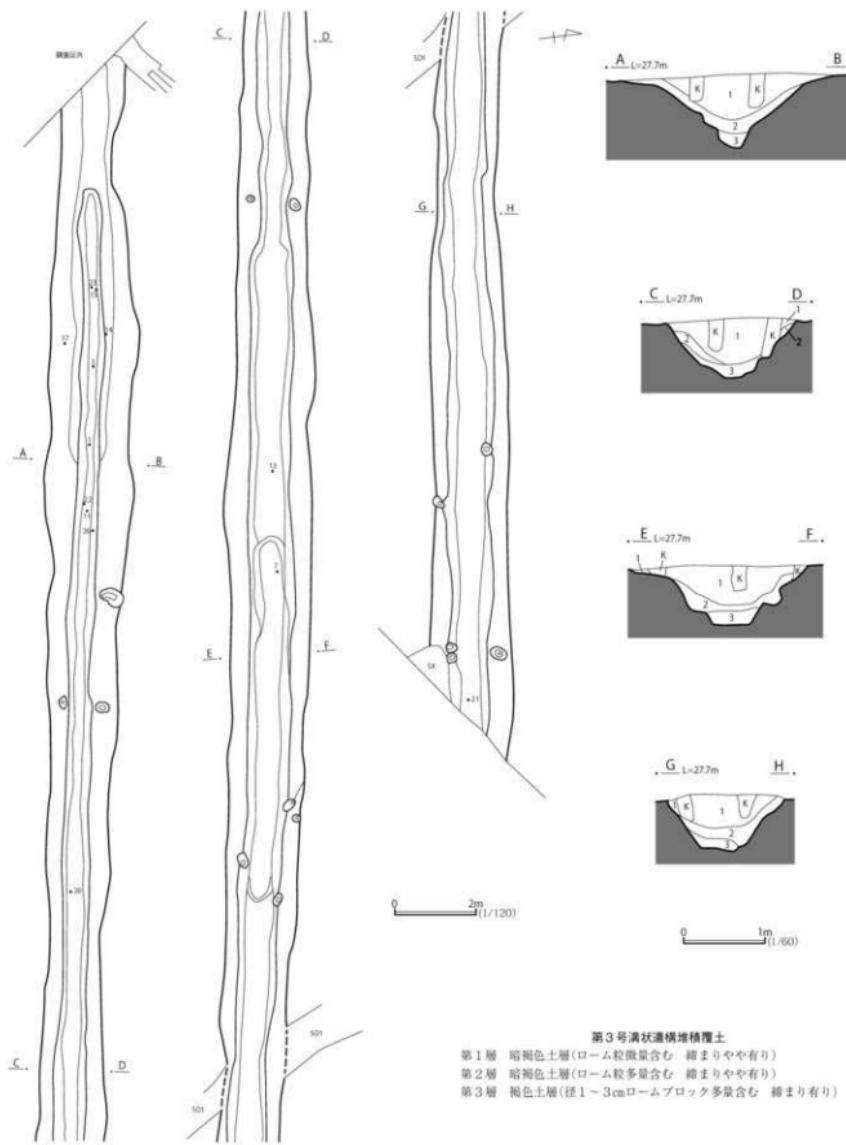


第111図 第13号土坑・出土遺物

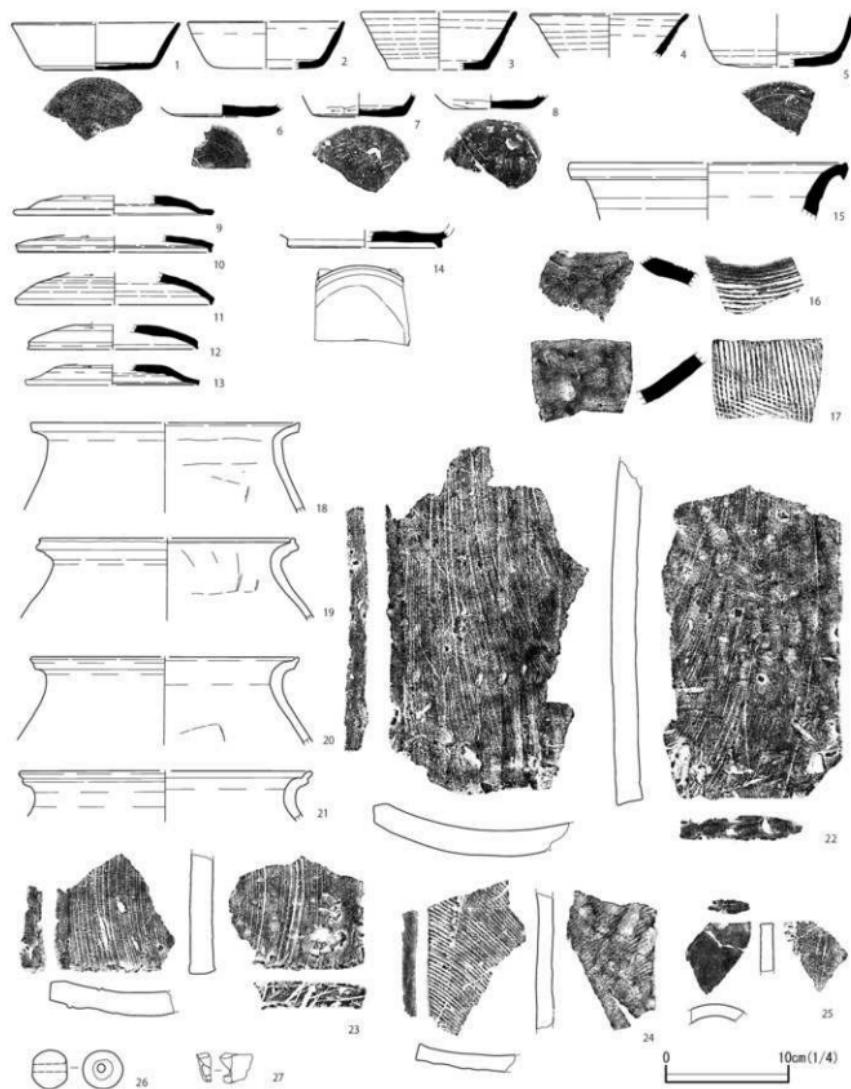
**遺物の出土状況** 図化できた遺物は少ない。すべて覆土上層から出土しているため、すべて廃棄品と思われる。

**遺物** 原の寺瓦窯と思われる瓦類が出土する点が注目されるが、8世紀前半の須恵器杯第113号1・2や蓋10も、胎土や焼成の特徴からみて原の寺瓦窯周辺産の可能性がある。原の寺瓦窯と当遺跡のつながりを示す資料といえる。8世紀前半は須恵器有台杯の転用鏡14も認められ、瓦類と合わせて注目される。9世紀に入ると、須恵器杯4・7・8や蓋13など、新治窯産の資料が目立つ点も指摘できる。このほか、27は焼けた穿孔貝果穴痕跡軟質泥岩と思われる。なぜ海岸にある石が遺跡にもたらされたのであろうか。焼けている理由と合わせて今後の課題である。

遺物群の時期は、8世紀前半から9世紀後半までと幅を有している。遺物からみて、8世紀前半に掘削された溝は、9世紀後半ごろにほとんど埋没していたのであろう。



第112図 第3号溝状焼構・遺物出土状況



第113図 第3号溝状造構出土遺物

## 4 奈良・平安時代遺物観察表

**凡例** 法量に記載した部位の計測値の単位は「cm」である。括弧内の数値は、復元された口径や底径、最大径、または残存高を示す。

### 第 70 号住居跡

- 1 台帳:P20 材質:須恵器 器種:有台杯 残存:底部 40% 法量:高台径(12.4) 色調:暗灰色 脱土:礫(白, 灰少). 骨針 特徵:燒成硬質。底外部外圓軸へ割り。底部外圓中央が研磨されているので軸用便とみられる。底部内面中央が削減する。現として使われた際の跡跡か。 備考:木葉下廻座か
- 2 台帳:P5-10-15 材質:須恵器 器種:甕 残存:上半部(口縁部 30%欠失) 法量:口径11.8 色調:灰色 脱土:礫(白, 灰少). 骨針 特徵:口唇成形。外側底部以下浅く回転へ割り。 備考:木葉下廻座か
- 3 台帳:P6 材質:須恵器 器種:甕 残存:胴部片 法量:一 色調:灰色 外面暗紅色が薄くかかる。 脱土:礫(白), 砂(白, 白透). 特徵:外側面縁に鉛印。内面無釉。燒成硬質。
- 4 台帳:P14-7-8, №2-3-5 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部 70% 法量:口径(25.8) 色調:深褐色。肩部外側が黒化色。胴部内面汚染され暗褐色。 脱土:礫(白, 白透), 白雲母多 特徵:肩部外側に竜方向へナナダ。外側底部半周方向へラミガキ若干残る。胴部内面横方向へナナダ。 口縁部ヨコナダ。 備考:新治窯付近座
- 5 台帳:P4-№2-3 材質:土師器 器種:甕 残存:底部欠失。全体的に小破片が接合するが部分的に欠失。 法量:口径 23.2 色調:褐色。外側胴部下半周へ煤ける。内面周辺部以下は汚染により暗褐色となる。 口縁部は部分的に焼ける。 脱土:礫(白多, 白透多), 白雲母 特徵:胴部外側ナナダの後、下半部横方向へラミガキ。外側肩部にヘリ狂削られる。胴部内面横方向へナナダ。 口縁部ヨコナダ。 備考:新治窯付近座
- 6 台帳:P9-16-17-19, №1-2-5 材質:土師器 器種:甕 残存:上半部 30% 法量:口径(22.4) 色調:褐色。胴部外側やや焼ける。胴部内面暗褐色。 脱土:礫(白透多, 白). 白雲母多 特徵:胴部外側ナナダの後、下半部横方向へラミガキ。胴部内面横方向へナナダ。 口縁部ヨコナダ。 備考:新治窯付近座
- 7 台帳:S2 材質:石(珪質片岩) 器種:砥石 残存:部分的に欠失 法量:残存長 13.2, 幅 4.3, 厚さ 1.9, 重量 198.1g 色調:明褐色 特徵:使用面5面(A~E面) D-F面に削線多くみられる。

### 第 72 号住居跡

- 1 台帳:P1-2 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部 50% 法量:底径(8.0) 色調:灰色 脱土:礫(灰少), 砂(白), 骨針微量 特徵:燒成硬質。回転へラ切り。底部外圓へラ記号。底部周縁やや削減。 備考:木葉下廻座か
- 2 台帳:P3 材質:瓦 瓦類:平瓦 残存:口縁部片 法量:厚1.9, 重量 130.1g 色調:灰色 脱土:礫(白透, 白), 骨針微量 特徵:両面糸切机。四面刃目痕および側縁部へラ割り。側縁部へラ切り。

### 第 78 号住居跡

- 1 台帳:№1 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部 55% 法量:底径(8.2) 色調:灰色 脱土:礫(白), 骨針少 特徵:回転へラ切り。内外面やや削減。底部外圓へラ記号。 備考:木葉下廻座か
- 2 台帳:P7 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部下半 10%欠失. 口唇部若干欠失 法量:口径11.6, 高径 4.0, 底径 6.8 色調:灰色 脱土:礫(白多, 灰), 骨針微量 特徵:底部外側回転へラ割り。底部外側へラ記号「人」。使用による磨滅がみられない。 備考:木葉下廻座か
- 3 台帳:P11 材質:須恵器 器種:杯(もしくは有台杯) 残存:口縁部 20% 法量:口径(15.2) 色調:明灰色 脱土:砂(白多, 白透少). 白雲母多 特徵:口縁部内面および外側底部若干削減。 備考:新治窯付
- 4 台帳:P3 材質:須恵器 器種:甕 残存:胴部片 法量:一 色調:外側灰色、内面・破面白褐褐色 脱土:礫(白少) 特徵:外側面平行叩き。内面

同心円文叩き。燒成軟質。

- 5 台帳:P2-4-5 材質:須恵器 器種:甕 残存:胴部片 法量:一 色調:外側灰色。内面・破面白褐褐色 脱土:礫(白, 白透). 特徵:外側面平行叩き。内面同心円文叩き。燒成軟質。
- 6 台帳:P8 材質:須恵器 器種:甕 残存:胴部片 法量:一 色調:外側灰色。内面・破面白褐褐色 脱土:礫(白, 白透少, 灰少) 特徵:外側面平行叩き。内面同心円文叩き。燒成軟質。
- 7 台帳:P1 材質:須恵器 器種:甕 残存:胴部片 法量:一 色調:外側灰色。内面・破面白褐褐色 脱土:礫(白, 白透). 特徵:外側面平行叩き。内面同心円文叩き。燒成軟質。
- 8 台帳:P15 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部 35% 法量:口径(22.4) 色調:褐褐色。外側煤けて黒色味を帯びる。 脱土:小石(白褐), 砂(白, 白透), 砂(白多, 白透, 透) 特徵:口縁部ヨコナダ。胴部外側縁方向へラ割り。胴部内面横方向ナナダ。
- 9 台帳:P1 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部 45% 法量:口径(19.2) 色調:明褐色。部分的に黒褐色 脱土:礫(白, 灰少), 砂(白, 透), 骨針微量 特徵:口縁部ヨコナダ。胴部内面横方向へナナダ。
- 10 台帳:P10-12-13, №6-7 材質:土師器 器種:甕 残存:上半部 80% 欠失 法量:口径(9.0), 高径 10.9, 底径 3.2 色調:外側褐色、内面赤褐色 脱土:礫(白褐多, 白透多, 灰少, 透) 特徵:口縁部ヨコナダ。胴部外側へラ割り。胴部内面横方向ナナダ。外面上部半周煤ける。内面上半周汚染により暗化色。全体的に火を受けており。器皿表面荒れている。

### 第 80 号住居跡

- 1 台帳:P1-14-15, №1-8-10-11 材質:須恵器 器種:杯 残存:口縁部 40%欠失 法量:口径 13.7, 高径 9.9, 底径 7.9 色調:灰色 脱土:礫(白, 灰), 骨針多 特徵:底部外側回転へラ割り。口縁部内面および外側底部周縁やや削減。 備考:木葉下廻座か
- 2 台帳:P3, №1 材質:須恵器 器種:杯 残存:体部 80%欠失 法量:口径(13.2), 高径 4.8, 底径 8.0 色調:暗灰色 脱土:礫(白, 透少, 灰少), 骨針少 特徵:回転へラ切り。口縁部内面やや削減。 備考:木葉下廻座か
- 3 台帳:P2 材質:須恵器 器種:有台杯 残存:口縁部 65%欠失。体部下半 35%欠失 法量:口径 14.4, 高径 6.1, 底径 8.8 色調:灰色 脱土:礫(白, 灰) 特徵:底部外側回転へラ割り後へラ記号「」。燒成硬質。外側の一部に自然縫。底部内面高台沿着痕(同器種正位のねね焼き)。口縁部内面および高台接地面やや削減。 備考:木葉下廻座か
- 4 台帳:P5 材質:須恵器 器種:有台杯 残存:天井部 20% 口縁部若干 法量:口径(15.4) 色調:灰色。口縁部外側暗褐色 脱土:砂(白, 灰色), 骨針微量 特徵:天井部外側回転へラ割り。 備考:木葉下廻座か
- 5 台帳:P11 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部 20% 法量:口径(18.9) 色調:褐色 脱土:礫(白透多, 白多), 白雲母多 特徵:口縁部ヨコナダ。胴部内面横方向へナナダ。 備考:新治窯付近座
- 6 台帳:P4 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部 15% 法量:口径(21.6) 色調:褐色 脱土:砂(白多, 白透多), 白雲母多 特徵:口縁部ヨコナダ。胴部内面横方向ナナダ。 備考:新治窯付近座
- 7 台帳:II 材質:鐵 器種:甕 残存:完形 法量:長 11.3, 重量 10.0 g
- 8 台帳:№2 材質:鐵 器種:甕 残存:肩部付近 法量:残存長 3.5, 重量 3.0 g
- 9 台帳:III, №4 材質:鐵 器種:刀子 残存:両端部欠失 法量:残存長 6.4, 重量 6.4 g
- 10 台帳:II 材質:鐵 器種:刀子 残存:両端部欠失 法量:残存長 4.8, 重量 4.5 g

## 第 81 号住居跡

- 1 台帳:P2 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部 45% 法量:口徑(7.9) 色調:灰色 脱土:繩(白) 特徵:回転ヘラ切り。底部外面ヘナナデ。底部周縁が磨滅。
- 2 台帳:P25, №1 材質:須恵器 器種:有台杯 残存:10% (口縁部若干) 法量:口徑(14.1), 器高 5.8, 高台径(9.0) 色調:灰色 脱土:繩(白, 灰少), 骨針微量 特徵:口縁部内面・高台接地面やや磨滅。備考:木業下窓産か
- 3 台帳:P 18, №5 材質:須恵器 器種:有台盤 残存:底部外周 25% 法量:高台径(11.9) 色調:底部中央灰色。底部外周茶色 脱土:繩(白, 灰少), 骨針 特徵:底部外周回転ヘラ削り。同器種正位の重ね焼き。高台接地面および底部内面やや磨滅。 備考:木業下窓産か
- 4 台帳:S 3 材質:須恵器 器種:有台盤 残存:口縁部(周縁若干欠失) 法量:鉢径 27, 鉢高 13 色調:灰褐色 脱土:一 特徵:鉢上面の中央と周縁が磨滅する。
- 5 台帳:P 6 材質:須恵器 器種:甕 残存:口縁部若干 法量:一 色調:外面・破面明灰色。内面暗灰色 脱土:繩(白少), 骨針微量 特徵:内面に薄く自然釉 備考:木業下窓産か
- 6 台帳:P8-9-28, №4-5 材質:須恵器 器種:甕(もしくは深鉢) 残存:底部 20%, 腹部下端 20% 法量:底径(19.8) 色調:底部灰色。腹部明褐色・暗褐色 脱土:繩(白透多, 白少), 白雲母多 特徵:胸部外腹斜位平行線文印。外腹内下端横方向ヘラ削り。胴部内腹横方向ナダ。胴部に粘土粗接合痕が部分的にみられる。 備考:新治窯産
- 7 台帳:P10-13 - 15-27, №2 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部 30%, 腹部上半 10% 法量:口徑(21.2) 色調:褐色 暗褐色 脱土:繩(白透多), 白雲母多 特徵:口縁部ヨコナデ。肩部外腹面横方向ヘナナデ。外腹内腹下半端横方向ヘラミガキ。胴部内腹横方向ヘナナデ。口縁部外面・内腹頭部から肩部にかけて粘土粗接合痕。胴部外面焼ける。胴部内腹汚染により暗褐色化。 備考:新治窯付近産
- 8 台帳:P21, №4-7 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部 20%, 肩部 40%, 腹部下半 10% 法量:口徑(23.7) 色調:外面暗褐色, 内面褐色 脱土:繩(白透多), 白雲母多 特徵:口縁部ヨコナデ。肩部外腹面横方向ヘナナデ。胴部外腹面横方向ヘラミガキ。胴部内腹上半部横方向ヘナナデ。外腹内腹保ける。外腹内腹面に燒けた土斑。内腹上半部汚染により暗褐色化。内腹下半部表面荒れる。 備考:新治窯付近産
- 9 台帳:P24-36, №3-7 材質:土師器 器種:甕 残存:底部外周 40%, 腹部下端 35% 法量:底径(9.6) 色調:暗褐色, 褐色, 暗褐色 脱土:繩(白透多), 白雲母多 特徵:底部外面本素焼。胴部外腹面横方向ヘナミガキ。胴部内腹横方向ヘナナデ。 備考:新治窯付近産
- 10 台帳:P17, №5-6 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部 20%, 腹部上半 30% 法量:口徑(18.2) 色調:暗褐色 脱土:繩(白透多, 透少, 白), 特徵:ロクロ成形。胴部外腹面ヘラミガキ。外腹内腹以下が保ける。内腹は全体的に汚染し、暗褐色化している。
- 11 台帳:P4-23-33, №1-4 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部 20% 法量:口徑(21.4) 色調:褐色 脱土:繩(白透多, 白), 白雲母 特徵:口縁部ヨコナデ。胴部内腹横方向のヘナナデ。胴部外腹保ける。 備考:新治窯付近産
- 12 台帳:P23 - 25-35-36-38-39-45-47, №2-4 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部 35% 腹部 20% 法量:口徑(22.6) 色調:褐色, 暗褐色 脱土:砂(白透多), 白雲母 特徵:口縁部ヨコナデ。胴部内腹横方向ヘナナデ。外腹保ける。内腹頭部以下、汚染により黒褐色化。 備考:新治窯付近産
- 13 台帳:S 2 材質:石(流紋岩) 器種:砥石 残存:50%か 法量:残存長 6.6, 幅 4.0, 厚 3.3, 重量 155.1 g 色調:白色, 暗褐色斑紋 特徵:使用面 1 面(A 面)。中央で折れたものか。
- 14 台帳:S 4 材質:石(流紋岩) 器種:砥石 残存:50%か 法量:残存長 6.2, 幅 4.5, 厚 3.1, 重量 86.9 g 色調:白色, 暗褐色斑紋 特徵:使用面 4 面(A - D 面)。中央で折れたものか。
- 15 台帳:S 3 材質:石(含隕鐵中粒砂岩) 器種:敲石 残存:50%か 法量:残存幅 11.1, 厚 4.0, 重量 321.4 g 色調:明灰色 特徵:

前面に敲打痕が認る。

## 第 82 号住居跡

- 1 台帳:P31, №2 材質:須恵器 器種:杯 残存:20% 法量:口徑(12.6), 器高 5.2, 底径(7.7) 色調:明灰色, 体部外面自然釉がかかり暗灰色・緑褐色 脱土:砂(白), 黒色吹き出し多 特徵:底部外腹ナデ。口縁部内面および外腹底部周縁磨滅。
- 2 台帳:P42, №2 材質:須恵器 器種:杯 残存:20% 法量:口徑(13.5), 器高 5.2, 底径(8.1) 色調:灰色 脱土:繩(白, 灰少), 骨針少 特徵:底部外腹中央部 1 方向ヘラ削り。口縁部内面および外腹底部周縁やや磨滅。体部外腹に自然釉薄くかかる。 備考:木業下窓産か
- 3 台帳:N 1-3 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部 30%, 体部若干 法量:口徑(13.5), 器高 4.7, 底径(6.6) 色調:灰色 脱土:繩(白) 特徵:回転ヘラ切り削り。外腹内面ナデ。外腹底部中央ヘナナデ。内面底部中央ナデ。摩滅痕はみられない。
- 4 台帳:P20, №3 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部 30% 法量:口徑(13.8), 器高 4.2, 底径(7.4) 色調:上半部黑色, 下半部灰褐色 脱土:繩(白透多, 白), 砂(白透多, 白)。白雲母多 特徵:外腹底部下端手持ちヘラ削り。 備考:新治窯産
- 5 台帳:N 2 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部外周 50% 法量:底径(8.0) 色調:白色 脱土:繩(白少, 灰少) 特徵:回転ヘラ切り。外腹底部中央手持ちナダ。燒成秋質。
- 6 台帳:P21 材質:須恵器 器種:蓋 残存:口縁部 10% 法量:口徑(19.7) 色調:灰色 脱土:(白多) 特徵:天井部外腹回転ヘラ削り。外腹自然釉薄く付着。 備考:新治窯産
- 7 台帳:P10 材質:須恵器 器種:有台盤 残存:底部, 口縁部 10% 法量:口徑(16.9), 器高 3.5, 高台径 10.7 色調:灰色 脱土:繩(白, 白透少, 透少, 灰少), 骨針微量 特徵:底部外腹回転ヘラ削り。高台接地面磨滅。底部内面やや磨滅。外腹底部中央墨痕と朱墨痕。高台内側は墨痕薄ぐみられる。 備考:木業下窓産か
- 8 台帳:P6, №3 材質:土師器 器種:杯 残存:口縁部 15% 法量:口徑(13.2), 器高 4.1, 底径(7.1) 色調:外腹暗褐色, 内面暗色 脱土:繩(白透少), 砂(透, 白), 骨針少 特徵:外腹底部および底部外腹回転ヘラ削り。内面ヘリミガキ(底部不定方向)・黒色処理。口縁部内面磨滅。
- 9 台帳:N 3 材質:土師器 器種:杯 残存:底部 20% 法量:底径(7.5) 色調:外面褐色, 底部中央黑色。内面黑色。 脱土:繩(砂透), 白, 骨針少 特徵:外腹底部下端手持ちヘラ削り。内面ヘリミガキ(底部 1 方向)・黒色処理。
- 10 台帳:P23 - 25-35-36-38-39-45-47, №2-4 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部 35% 腹部 20% 法量:口徑(22.6) 色調:褐色, 暗褐色 脱土:砂(白透多), 白雲母 特徵:口縁部ヨコナデ。胴部内腹横方向ナダ。胴部外腹保ける。内腹頭部以下、汚染により黒褐色化。 備考:新治窯付近産
- 11 台帳:P29-37-45, №2 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部 20%, 腹部 30% 法量:口徑(22.3) 色調:褐色, 外腹肩部以下暗褐色。内面一面黒褐色。 脱土:砂(透, 白透, 白少), 白雲母 特徵:口縁部ヨコナデ。胴部内腹ヘナナデ。胴部外腹横方向ヘラミガキ。胴部内腹横方向ヘナナデ。胴部内腹横方向ナダ。 備考:新治窯付近産
- 12 台帳:P29 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部 20% 法量:口徑(20.3) 色調:暗褐色, 褐色 脱土:繩(白透多), 白雲母多 特徵:口縁部ヨコナデ。胴部内腹横方向ヘナナデ。外腹保ける。口縁部内面褐色。 備考:新治窯付近産
- 13 台帳:P33 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部 20% 法量:口徑(24.2) 色調:褐色 脱土:繩(白透), 白雲母 特徵:口縁部ヨコナデ。胴部内腹横方向ヘナナデ。外腹保れる。内腹頭部以下褐色。 脱土:砂(白透多), 白雲母多 特徵:口縁部ヨコナデ。内腹頭部以下横方向ヘナナデ。 備考:新治窯付近産
- 14 台帳:P13 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部 10% 法量:口徑(19.6) 色調:外面褐色。口縁部内面褐色。内腹頭部以下褐色。 脱土:砂(白透多), 白雲母多 特徵:口縁部ヨコナデ。内腹頭部以下横方向ヘナナデ。 備考:新治窯付近産

## V 奈良・平安時代の遺構と遺物

- 15 台帳:№3 材質:土器器 器種:甕 残存:口縁部 15% 法量:口径(13.0) 色調:内面から口縁部外側にかけて墨褐色。頭部外側褐色・明褐色。 脱土:砂(透多) 特徴:口縁部ヨコナデ。内面横方向へラテダ。
- 16 台帳:P19 材質:土器器 器種:甕 残存:底部 35% 法量:底径(9.8) 色調:外側暗褐色、底部中央黒色。内面明褐色。 脱土:砂(白透多、透少、白)、白雲母 特徴:底部外側木葉痕。外側底部下端斜方向へラミガキ。底部内面へラナデ痕。 備考:新治窯付近産

### 第 84 号住居跡

- 1 台帳:P14 材質:須恵器 器種:杯 残存:口縁部 30%欠失 法量:口径(14.0)、器高 4.7、底径 9.6 色調:灰色 脱土:砂(白、灰少、透少)、骨針少 特徴:底部外側回転へラ削り。外側底部周縁に円周方向の割れあり(内面まで達していない)。口唇部崩壊。 備考:木葉下窯産か
- 2 台帳:P15、№4 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部(周縁 40%欠失)、体部 50% 法量:口径(13.2)、器高 4.9、底径(10.3) 色調:灰色 脱土:砂(白、灰少) 特徴:回転へラ切り。底部外側回転へラ削り。内面や汚染、口唇部および底部周縁崩壊。 備考:木葉下窯産か
- 3 台帳:P1 材質:須恵器 器種:甕 残存:完形 法量:口径 11.2、器高 3.5、底径 8.4 色調:灰色 脱土:砂(白、白透少、灰少) 特徴:基本的底部面回転へラ削り。底部外側ヨコ記号「一」。口唇部崩壊し所々欠失する。外側底部重ね縞および底部内面やや崩壊。口縁部外側暗褐色化しており、同器種正の重ね縞かと思われる。 備考:木葉下窯産か
- 4 台帳:P11 材質:須恵器 器種:杯 残存:60% (口縁部には欠失) 法量:口径(11.4)、器高 3.8、底径(7.5) 色調:明灰色 脱土:砂(白少、白透少、灰少)、砂(白、透、灰少)、骨針少 特徴:底部外側回転へラ削り。口唇部崩壊。外側底部外周および底部内面やや崩壊。 備考:新治窯付近産か
- 5 台帳:P7 材質:須恵器 器種:有台杯 残存:完形 法量:口径 11.9、器高 2.6、底径 2.0、器高 0.9 色調:灰色 脱土:砂(白、白透少)、骨針少 特徴:天井部外側回転へラ削り。口唇部残かく欠失。内面中央部周辺崩壊。 備考:木葉下窯産か
- 6 台帳:P5-8-1 材質:須恵器 器種:有台杯 残存:底部(高台部 30%欠失、底部中央若干欠失) 法量:口径(9.4) 色調:暗灰色、破面茶褐色 脱土:砂(白、透少、灰少)、骨針 特徴:天井部外側回転へラ削り。焼成硬質。高台接地面および底部内面崩壊。 備考:木葉下窯産か
- 7 台帳:P4-6 材質:須恵器 器種:甕 残存:口縁部 15% 法量:口径(19.6) 色調:灰色 脱土:砂(白、白透少)、骨針 特徴:外平面線文叩き瓶。口縁部外側ヨコナデ。内面の頭部と胴部の境界に横方向のナデ。胴部内面無文彫形凸出具板。 備考:木葉下窯産か
- 8 台帳:P10-12 材質:土器器 器種:甕 残存:口縁部 40%、胴部上半 20% 法量:口径(20.0) 色調:暗褐色、褐色 脱土:砂(白、透、灰) 特徴:口縁部ヨコナデ。胴部外側回転へラ削り。胴部内面ナデ。外側胴上部に焼土付着。内面は全体的に焼けている。
- 9 台帳:P13 材質:土器器 器種:甕 残存:口縁部 20% 法量:口径(13.8) 色調:暗褐色、赤橙色 脱土:砂(白透多)、白雲母多 特徴:口縁部ヨコナデ。胴部内面横方向ヘナナデ。外側面焼ける。 備考:新治窯付近産

### 第 13 号土坑

- 1 台帳:№6 材質:須恵器 器種:瓶 残存:高台部 15% 法量:高台径(9.4) 色調:外側自然釉がかかり暗灰色。内面・破面灰色 脱土:砂(白)、骨針微量、黒色吹き出しだ 特徴:底部外面にナデ。高台接地面崩壊。

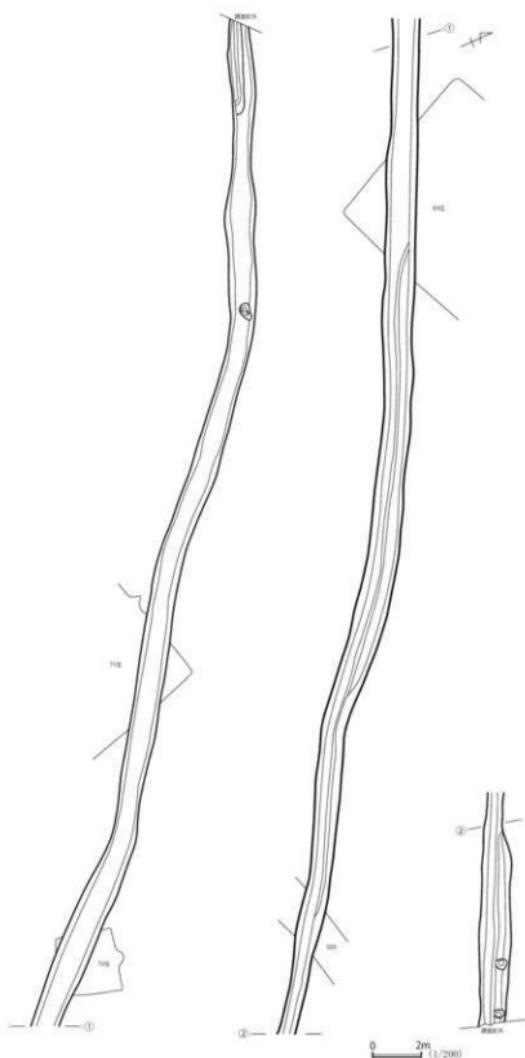
### 第 3 号溝状遺構

- 1 台帳:P36 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部 40%、体部 25% 法量:口径(13.5)、器高 3.9、底径(8.9) 色調:明褐色 脱土:砂(白透少、灰少)、砂(透多、白) 特徴:底部外側回転へラ削り。底部内面の一部にハケ日。底部内面の外側に沈線。 備考:原の寺瓦窯周辺産か
- 2 台帳:№15 材質:須恵器 器種:杯 残存:10% 法量:口径(12.6)、

- 器高 3.8、底径(8.8) 色調:明褐色 脱土:砂(白透、透、白少) 特徴:底部外側回転へラ削り。 備考:原の寺瓦窯周辺産か
- 3 台帳:№19 ② 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部外周 20%、体部 10% 法量:口径(12.5)、器高 4.7、底径(7.9) 色調:明灰褐色 脱土:砂(灰少)、砂(白透、灰少、白少) 特徴:底部外側白面。口縁部やや崩壊。外側底部周縁崩壊。 備考:木葉下窯産か
- 4 台帳:№20 材質:須恵器 器種:杯 残存:体部 20% 法量:口径(12.7) 色調:明灰褐色、灰褐色 脱土:砂(白透多)、白雲母多 特徴:口唇部崩壊。内面やや崩壊。 備考:新治窯産
- 5 台帳:P32、№18 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部 20% 法量:底径(9.0) 色調:明灰褐色 脱土:砂(白透少、灰少) 特徴:底部外側回転へラ削り。外側底部周縁崩壊。
- 6 台帳:№21 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部 20% 法量:底径(8.6) 色調:灰褐色 脱土:砂(白、灰少、白透少) 特徴:底部外側回転へラ記号。 備考:新治窯産
- 7 台帳:P4 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部 50% 法量:底径(7.2) 色調:外側底部明灰褐色、底部灰色、内面灰色 脱土:砂(白、白透多)、白雲母多 特徴:外側底部下端・底部手持ちへラ削り。外側底部周縁および底部内面やや崩壊。 備考:新治窯産
- 8 台帳:№19 ① 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部 60% 法量:底径(6.7) 色調:明灰色 脱土:砂(透、白少)、白雲母多 特徴:回転へラ切り。外側底部内面手持ちへラ削り。底部内面および外側底部周縁やや崩壊。 備考:新治窯産
- 9 台帳:№18 ① 材質:須恵器 器種:甕 残存:口縁部 10% 法量:口径(15.9) 色調:明灰色 脱土:砂(白、白透)、白雲母多 特徴:天井部外側回転へラ削り。 備考:天井部外側周縁崩壊
- 10 台帳:№18 材質:須恵器 器種:甕 残存:口縁部 15% 法量:口径(15.7) 色調:明褐色 脱土:砂(白)、砂(透、白透)、骨針微量 特徴:天井部外側回転へラ削り。 備考:原の寺瓦窯周辺産か
- 11 台帳:P65 材質:須恵器 器種:甕 残存:口縁部 20% 法量:口径(15.8) 色調:灰色 脱土:砂(白、透微量)、骨針 特徴:天井部外側回転へラ削り。 備考:木葉下窯産か
- 12 台帳:№18 ② 材質:須恵器 器種:甕(無口杯蓋) 残存:15% (器底欠失) 法量:口径(13.8) 色調:灰色 脱土:砂(灰少、白少)、骨針微量 特徴:天井部外側回転へラ削り。口唇部残かく欠失する。 備考:木葉下窯産か
- 13 台帳:P48 材質:須恵器 器種:甕 残存:口縁部 10%、天井部 20% 法量:口径(14.0) 色調:灰色、白雲母多、黒色パミス粒。特徴:天井部外側回転へラ削り。内面から正位有台杯と逆位蓋が組み合は重ね焼きか。口唇部周縁崩壊。 備考:新治窯産
- 14 台帳:P29 材質:須恵器 器種:有台杯 残存:底部 30% 法量:高台径(12.1) 色調:暗褐色 脱土:砂(白、灰少)、骨針少 特徴:焼成硬質。底部外側回転へラ削り。底部外側中央部に研磨痕。底部内面崩壊する。 備考:木葉下窯産か
- 15 台帳:P24 材質:須恵器 器種:甕 残存:口縁部 10% 法量:口径(22.5) 色調:暗灰色、頭部外側灰褐色 脱土:砂(白)、骨針少 特徴:頭部外側薄く自然釉。 備考:木葉下窯産か
- 16 台帳:№18 ④ 材質:須恵器 器種:甕 残存:肩部片 法量:— 色調:外側青色地。内面赤灰色。 脱土:砂(白、白透少)、骨針多 特徴:外側横段平行線文叩き瓶。内面無文凸出具板。 備考:木葉下窯産か
- 17 台帳:P30 材質:須恵器 器種:甕 残存:破片 法量:— 色調:外側黒灰色。内面灰色。 脱土:砂(白)、骨針多 特徴:外側平行線文叩き瓶。内面凹凸がみられる。外側薄く自然釉。 備考:木葉下窯産か
- 18 台帳:№18 ③ 材質:土器器 器種:甕 残存:口縁部 15% 法量:口径(21.8) 色調:外側黒褐色、暗褐色。内面褐色 脱土:砂(白透多、白)、白雲母多 特徴:口縁部ヨコナデ。頭部内面へラナデ。 備考:新治窯付近産
- 19 台帳:№22 材質:土器器 器種:甕 残存:口縁部 20% 色調:口縁部橙褐色。胴部褐色。 脱土:砂(白透多、白)、白雲母 特徴:口縁部ヨコ

- ナデ。頭部以下横方向ヘラナデ。 備考:新治廻付近産
- 20 台帳:P42 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20% 法量:口径(21.7) 色調:褐色、暗褐色。胎土:砂(白透多、白)、白雲母多 特徴:口縁部ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ。 備考:新治廻付近産
- 21 台帳:P66 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部10% 法量:口径(23.6) 色調:橙褐色 胎土:砂(白透多、白)、白雲母多 特徴:口縁部ヨコナデ 備考:新治廻付近産
- 22 台帳:P64 材質:瓦 種類:平瓦 残存:隅部 法量:厚2.1 色調:灰色 胎土:裸(白、白透、透、灰少) 特徴:凹面系切り後布目痕。凹面側縁部ヘラ削り。凸面系切り痕。端面部ヘラ削り。 備考:原の寺瓦窯産か
- 23 台帳:P19 材質:瓦 種類:平瓦 残存:隅部 法量:厚1.9 色調:明灰色 胎土:裸(白、白透、透、灰少) 特徴:凹面系切り後布目痕。凹面側縁部ヘラ削り。凸面系切り痕。扶縁面にワタ状の圧痕が多数みられる。 備考:原の寺瓦窯産か
- 24 台帳:Nu 22 材質:瓦 種類:平瓦 残存:側縁部片 法量:厚1.2 色調:褐色 胎土:裸(白少、灰少)、砂(白、透、灰少、角閃石・輝石類) 特徴:凹面系切り後。布目痕。凸面系切り後。指頭压痕。 備考:原の寺瓦窯産か
- 25 台帳:Nu 15-19③ 材質:瓦 種類:丸瓦 残存:玉縁部破片 法量:厚0.9~1.0 色調:外面黒褐色。内面橙褐色・褐色。破面橙褐色。 胎土:砂(白、白透) 特徴:凹面ナデ。凹面布目痕。
- 26 台帳:P66 材質:土師質 種類:球状土器 残存:完形 法量:長2.8、幅3.2、孔径0.6、重量298 g 色調:褐色。橙褐色 胎土:- 特徴:-
- 27 台帳:Nu 16 材質:石 種類:不明 残存:破片 法量:2.7×2.4×1.0 色調:赤味を帯びた褐色。 特徴:火を受けた穿孔貝巣穴痕跡軟質泥岩と思われる。

## VI その他の遺構と遺物



第114図 第1号溝状遺構

ここでは、その他の遺構として溝状遺構と性格不明遺構を報告する。また、遺構に伴わない遺物も掲載する。

## 1 溝状遺構

溝状遺構は2基検出した。その内、第3号溝状遺構は出土遺物から奈良・平安時代の遺構とし、第V章で報告を行っている。

**第1号溝状遺構** X-Y-10~19区に位置する。当遺構は、第3次調査区から続いている。調査区の北西から南東に伸びている。第71·72·83号住居跡と第3号溝状遺構を掘り込んでいる。確認できた長さは約100m、幅は80~140cm、深さは確認面から5~40cmを測る。深さは、調査区北西側が浅く、南東側が深い。覆土は黒褐色土を主体とする。

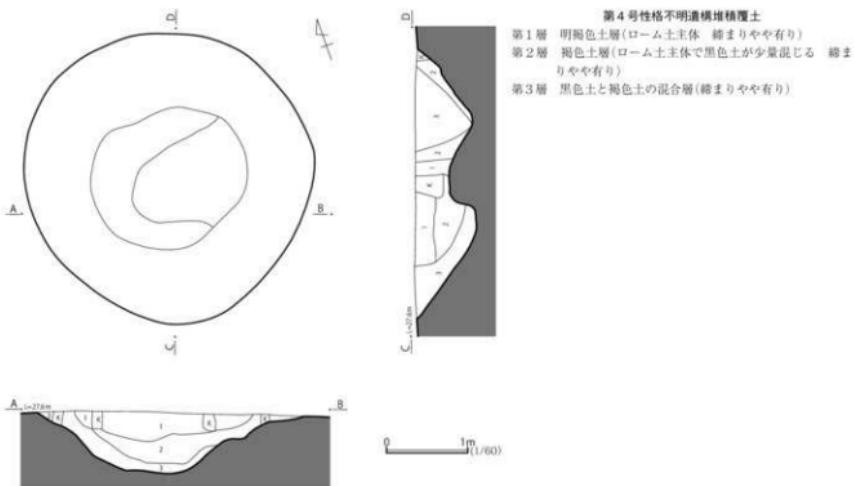
遺物は少なく、陶器の徳利1点が出土した(第116図1)。遺構の時期は、中世以降と思われる。

## 2 性格不明遺構

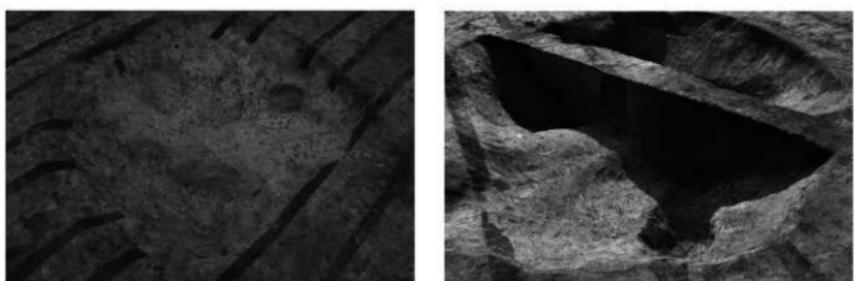
**第4号性格不明遺構** Z-15区に位置する。平面形は不整形円形で、底面は凸凹している。規模は、直径約3.5m、深さ70cmを測る。覆土は外側に黑色土、内側に褐色土が堆積する。遺構の形態から、風倒木痕と思われる。



第1号溝状遺構

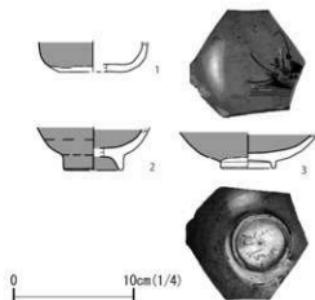


第115図 第4号性格不明遺構



第4号性格不明遺構

第4号性格不明遺構覆土堆積状況



第116図 第1号溝状遺構・その他の遺構出土遺物

#### 第1号溝状遺構・その他の遺構出土遺物観察表

- 1 遺構: 第1号溝状遺構 台帳: №4 材質: 陶器 器種: 瓶利 残存: 底部 15% 法量: 底径(5.6) 色調: 素地褐色 技法等: 脚部外側に鉄輪を施す。底部外側に素切り痕が薄く残る。
- 2 遺構: 第82号住居跡 台帳: №3 材質: 陶器 器種: 瓶 残存: 底部 25% 法量: 高台径(4.6) 色調: 素地褐色 技法等: 内外透明釉、貫入あり。高台接地面露胎。参考: 肥前産。豊島区分類似器手石瓶(1650年代～1740年代)。
- 3 遺構: 第82号住居跡 台帳: P 2 材質: 陶器 器種: 石瓶 残存: 底部 法量: 高台径 4.4 色調: 素地白褐色 技法等: 見込部に舟彫紋で山水模様文を描く。内面及び外部に透明釉、細かな貫入あり。底部外側に刻印「口(當?)水」。底部外側に墨書きあり(文字不明)。参考: 肥前産。豊島区分類似茶碗(1690年代～1770年代)。

## VII 自然科学的分析

## 鷹ノ巣遺跡から出土した炭化材の樹種および炭化種実

**はじめに** 鷹ノ巣遺跡は、那珂川水系の中丸川の支流である本郷川左岸(東岸)の那珂台地上に位置する。これまでの調査により、旧石器時代の石器、縄文時代の土器および石器、弥生時代の住居跡と土器、石器、ガラス玉等の遺物、古墳時代の住居跡と土器、須恵器、石製模造品、ベンガラ等の遺物、奈良・平安時代の住居跡、溝状遺構と土器、須恵器、文字瓦等の遺物が確認されている(鈴木ほか, 2013)。

本報告では、古墳時代後期の焼失住居跡から出土した炭化材を対象として、木材利用を確認するための樹種同定を実施する。また、弥生時代後期および古墳時代後期の住居跡から出土した炭化種実を対象として、植物利用を検討するための種実同定を実施する。

## 炭化材の樹種同定

## (1) 試料

試料は、第71号住居跡の炭化材10点、第73号住居跡の炭化材3点、第77号住居跡の炭化材20点、第85号住居跡の炭化材2点の合計35点である。

## (2) 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柵目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、鳥地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

## (3) 結果

樹種同定結果を第7表に示す。炭化材は、広葉樹3分類群(コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属

コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・アカメガシワ)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節(*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1-2列、孔圈外で急激に径を減じたのち、單独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-20細胞高のものと複合放射組織がある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1-2列、孔圈外で急激に径を減じたのち、多数が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-20細胞高のものと複合放射組織がある。

・コナラ属アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、道管は単独で放射方向に配列する。道管の接線方向の直径は、最大で約120 μm。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-20細胞高のものと複合放射組織がある。

・アカメガシワ(*Mallotus japonicus* (Thunb.) Mueller-Arg.) トウダイグサ科アカメガシワ属

環孔材で、孔圈部は1-5列、孔圈外への移行は緩やかで、小道管は単独または2-4個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、單列、1-30細胞高。

## (4) 考察

古墳時代後期の住居跡から出土した炭化材には、合計4種類が確認された。各種類の材質等についてみると、常緑広葉樹のアカガシ亜属は、暖温帶性常緑広葉樹林の主要な構成種となる高木で、木材は重硬で強度が高い。

第7表 樹種同定結果

住居跡	時代	遺物番号	形状	種類
第71号住居跡	古墳時代後期	C18	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C34	破片	アカメガシワ
		C51	破片	アカメガシワ
		C56	破片	アカメガシワ
		C60	破片	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C62	破片	アカメガシワ
		C74	破片	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C80	破片	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C89	破片	アカメガシワ
		C117	破片	アカメガシワ
第73号住居跡	古墳時代後期	C7	破片	コナラ属アカガシ亜属
		C14	破片	コナラ属アカガシ亜属
		C19	破片	コナラ属アカガシ亜属
第77号住居跡	古墳時代後期	C24	極目状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C36	極目状	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C40	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C41	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C74	極目状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C126	極目状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C155	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C156	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C157	破片	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C158	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C159	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C161	極目状	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C165	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C166	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C167	極目状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C168	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C171	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C173	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C179	破片	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C180	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属コナラ節
第85号住居跡	古墳時代後期	C50	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C68	分割状	コナラ属コナラ亜属コナラ節

落葉広葉樹のコナラ節は、二次林の主要な構成種となる高木で、木材は重硬で強度が高い。クヌギ節は、コナラ節と共に二次林を構成する他、より湿った環境を好み、後背湿地や河畔等にも生育する高木であり、木材は重硬で強度が高い。アカメガシワは、伐採跡や林縁部等の明るく開けた場所に生育する高木である。木材は軽軟で強度は低い。

住居別に種類構成をみると、第71号住居跡ではクヌギ節とアカメガシワ、第73号住居跡はアカガシ亜属、第77号住居跡と第85号住居跡はクヌギ節とコナラ節で構成される。第73号住居跡では資料数は少ないが、全てがアカガシ亜属であり、クヌギ節やコナラ節が全く確認できないなど、他の住居とは異なる組成を示す。また、

第71号住居跡もクヌギ節は確認できるが、全体ではアカメガシワの占める量が多い。

住居の出土状況と樹種を細かく見ると、第71号住居跡は、住居の中央に「コ」の字状に大型の部材が並び、そこから縁辺部に向かって放射状に部材が配置する。樹種をみると、中央の「コ」の字状に並ぶ大型の部材3点と住居北東隅から中央部に延びる放射状の部材1点の4点がクヌギ節、その他の放射状の部材がアカメガシワである。「コ」の字状に並ぶ部材は、出土位置等から染の可能性があり、重要な部材を中心に強度の高いクヌギ節を利用し、その他の垂木などにアカメガシワを多用したことが推定される。アカメガシワは軽軟であるが、人が乗って簡単に折れるほど脆くもない。住居の構造を検討する必要は

あるが、今回の結果から第71号住居跡ではアカメガシワの垂木でも必要な強度は得られた可能性がある。

第73号住居跡は、住居の中央付近に大型の棒状の部材(C14)が北西から南東方向に伸びるように出土し、その周囲からC14に直交する方向のやや大きい部材(C7,C19)、その他小片が出土している。同定した3点は、いずれも垂木などと考えられ、強度の高いアカガシ亜属の利用が推定される。

第77号住居跡は、住居の中央から外側にむかって放射状に配置した炭化材が多く、一部に放射状の部材に直交する方向の部材も認められる。この出土状況から、炭化材の多くは垂木に由来すると考えられ、垂木に直交する部材(C126)は梁等の部材に由来する可能性がある。選択された20点の炭化材は、クヌギ節12点、コナラ節8点であり、強度の高い木材を利用したことが推定される。出土状況と照合した範囲では、樹種による部位の違いはみられない。

第85号住居跡は、住居の南西床面上付近を中心炭化材が出土している。比較的大きい部材では、住居の中央から外側に向かって放射状に出土しており、垂木などと考えられる。選択された2点はクヌギ節とコナラ節に同定された。

出土状況を比較すると、資料数は少ないが、第85号住居跡の利用状況は第77号住居跡に似ている。一方、同じく垂木と考えられる第73号住居跡は全てアカガシ亜属であり、異なる樹種が利用されている。また、第71号住居跡は、強度を要する部位を中心にクヌギ節が利用されるが、垂木と考えられる部材に強度の低いアカメガシワが利用されており、他の住居とは木材利用傾向が異なる。この違いについては、住居の構造の比較なども考慮した検証が必要である。

本遺跡では、これまでにも弥生時代後期や古墳時代後期の住居址から出土した建築部材と考えられる炭化材の樹種同定が実施され、弥生時代後期ではクリやエノキ属を中心にエゴノキ属とトネリコ属が混じる組成。古墳時代後期ではクヌギ節を中心にコナラ節、クリ、モクレン属等が利用される結果が確認されている(パリノ・サー・ヴェイ株式会社,2013)。今回の結果では、第77号住居跡や第85号住居跡の結果は、これまでの結果と整合する結果といえる。第71号住居跡の結果も強度を要する

部材にクヌギ節が利用されていると考えれば、これまでの結果に近い結果である。一方、アカガシ亜属は、これまでの調査では、本遺跡では確認されていない。

伊東・山田(2012)のデータベースを用いて、ひたちなか市内で古墳時代後期の住居跡出土炭化材について樹種同定を実施した例をみると、本遺跡よりも海に近い船窓遺跡群や半分山遺跡では、アカガシ亜属、コナラ節、エゴノキ属、イヌシテ節、ムラサキシキブ属など多くの樹種が混在する種類構成が見られる。また、本遺跡よりも那珂川沿いにやや内陸に入った武田西塙遺跡では資料数が少ないので、アカガシ亜属とモミ属が確認されている。これらの報告を考慮すれば、本遺跡周辺でもアカガシ亜属の木材は入手可能であったと考えられる。第73号住居跡については、出土した中で比較的大型の部材3点がアカガシ亜属に同定されたが、他にも小片が多数出土していることから、今後これらの樹種についても調査し、全体の種類構成についても明らかにすることが期待される。

### 種実遺体の同定

#### (1) 試料

試料は、弥生時代後期とされる第68号住居跡から5試料(覆土No.16~18,20,22)と、古墳時代後期とされる第71号住居跡から2試料(土器内P17,18)、第76号住居跡から1試料(土器内P1)、第77号住居跡から1試料(土器内P18)、第85号住居跡から1試料(土器内P44)、第86号住居跡から1試料(覆土No.2)より出土した炭化種実であり、合計で6遺構11点である。試料は全て乾燥した状態で容器内に入っている。炭化材や菌核、土粒等も確認される。

#### (2) 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実を拾い出す。

炭化種実の同定は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2010)、鈴木ほか(2012)等を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示し、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。また、保存状態が良好な一部の栽培種を対象として、デジタルノギスを用いて炭化種実の大きさを計測し、結果を一覧表に併記する。次

損等で完全な計測値を得られない場合は、残存値にプラス「+」で表示する。

分析後は、炭化種実を分類群別に容器に入れ、炭化種実以外の分析残渣を容器に戻して返却する。

### (3) 結果

結果を第8表に示す。また、炭化種実各分類群の写真を第118図に、主な炭化種実の計測値等を第8表に示して同定根拠とする。全11試料を通じて、被子植物6分類群(モモ、サンショウ、イネ、オオムギ、コムギ、オナモミ属)13個の炭化種実が同定された。16個(85住、86住)は分類群・部位ともに不明で同定できなかった。

炭化種実以外は、炭化していない草本4分類群(ヒゴクサ節、エノキグサ、アカザ属、ゴマ)の種実が22個、炭化材が15個、菌核が31個、貝殻片が1個、岩片が1個、土粒19個の、計89個が確認された。なお、栽培種のゴマ(71住)、中生草本のヒゴクサ節(68住)、エノキグサ(68住)、アカザ属(71住)は、混入の可能性が高いため、考察より除外している。

炭化種実群は、木本2分類群(落葉広葉樹のモモ、サンショウ)3個、草本5分類群(イネ、オオムギ、コムギ、オナモミ属)10個から成る。栽培種は、第6号住居跡(土器内P1)よりモモの核が1個と、第68号住居跡よりイネの胚乳の破片が2個(覆土No.18)、オオムギの胚乳が1個(覆土No.22)、コムギの胚乳の破片が1個(覆土No.20)の、計5個が確認された。モモ核は、長さ17.6mm、残存幅14.0mm、厚さ12.2mmを測り、背面にネズミ類による食痕と考えられる円状の欠損がある。オオムギ胚乳は両端を欠損し、残存長3.8mm、幅2.0mm、厚さ1.7mmを測る。

栽培種を除いた分類群は、第68号住居跡(覆土No.18)より低木のサンショウの種子の破片が2個と、第77号住居跡(土器内P18)より一年草のオナモミ属の総苞の破片が6個の、計8個が確認された。

### (4) 考察

各住居跡より出土した炭化種実は、栽培種のモモ、イネ、オオムギ、コムギと、落葉広葉樹のサンショウ、草本のオナモミ属に同定された。弥生時代後期とされる第68号住居跡より確認された穀類のイネ、オオムギ、コ

ムギと、古墳時代後期とされる第76号住居跡より確認された果樹のモモは、本遺跡周辺で栽培されていたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時の住居内で利用された植物質食料と示唆され、火を受けたとみなされる。イネ、オオムギ、コムギは、本遺跡の弥生時代後期(東中根式)とされる第55号住居跡からも確認されている(パリノ・サーヴェイ株式会社, 2013)。

栽培種を除いた分類群は、第68号住居跡より、やや湿り気の多い林縁などに生育する落葉低木のサンショウと、第77号住居跡より、明るく開けた場所に生育する一年草のオナモミ属が確認された。当時の調査区周辺の林縁や草地などに生育していたと考えられる。サンショウ、オナモミ属は、本遺跡の弥生時代後期(東中根式)とされる第55号住居跡からも確認されている(パリノ・サーヴェイ株式会社, 2013)。なお、サンショウは、果実や葉が香辛料等に利用可能である。出土種子に利用の痕跡は認められないが、当時利用された可能性は充分に考えられる。

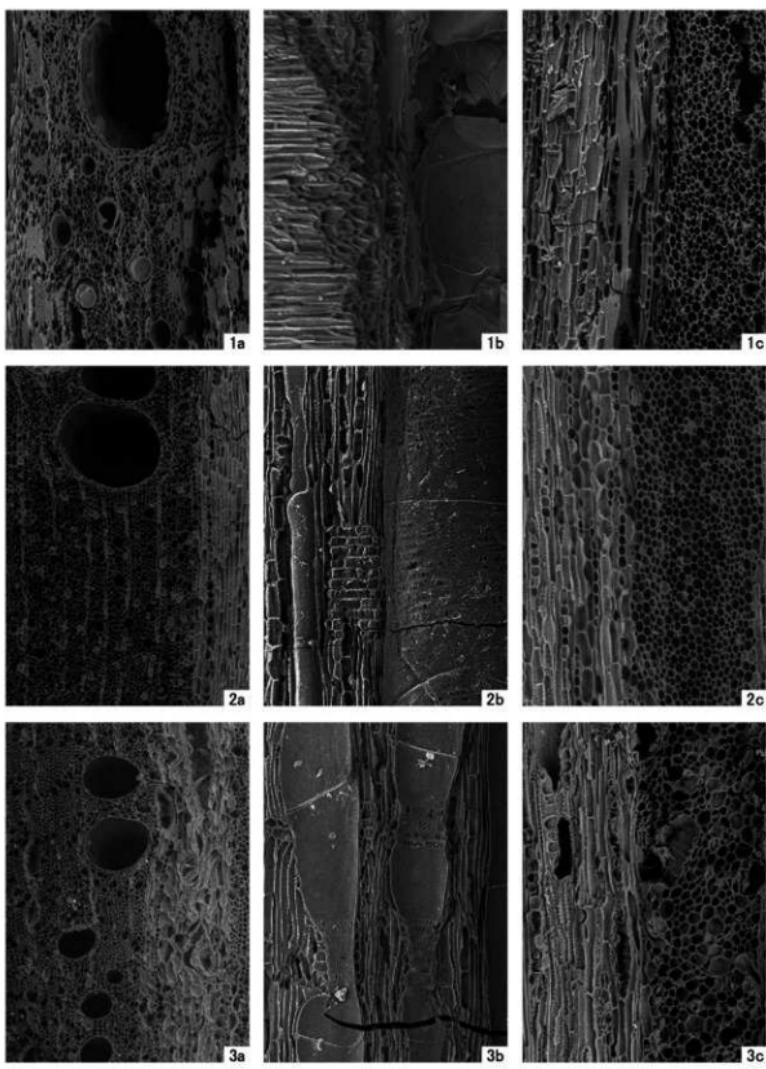
### 引用文献

- 林昭三, 1991. 日本産木材 跡微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.
- 石川茂雄, 1994. 原色日本植物種子万葉図鑑, 石川茂雄図鑑刊行委員会, 228p.
- 伊東隆夫, 1995. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料 33, 京都大学木質科学研究所, 93-201.
- 伊東隆夫, 1998. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編), 2012. 木の考古学 出土木製品用材データベース, 海青社, 449p.
- 中山至大・井口ひ舟希・南谷忠志, 2010. 日本植物種子図鑑(2010年改訂版) 東北大出版社版, 678p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2013. 幹ノ葉遺跡から出土した炭化材の樹種と炭化種実「蘿ノ葉Ⅱ - 第2-3次調査の成果」, 財團法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査報告第41集, 財團法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社, 110-122.
- 鳥地 謙・伊東隆夫, 1982. 国説木材組織, 地球社, 176p.
- 鈴木素行・窪田恵一・色川順子・小松崎恵子・福田健一, 2013. 鷹ノ巣Ⅱ - 第2-3次調査の成果・財團法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査報告第41集, 財團法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社, 126p.
- 鈴木康夫・高橋 安・安延尚文, 2012. ネイチャーウォッティングガイドブック 草木の種子と果実 - 形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実 632種 - , 講文堂新光社, 272p.
- Wheeler E.A.Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998. 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 滉(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A.Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第8表 炭化種実同定結果

住居跡	遺物番号	時代	分類群・部位・状態	個数		計測値(mm)			図版 番号	備考
				種実	他	長さ	幅	厚さ		
第68号住居跡	覆土 No.16	弥生時代後期	炭化材	-	1	-	-	-	-	-
			菌核	-	3	-	-	-	-	-
			土粒	-	4	-	-	-	-	-
第68号住居跡	覆土 No.17	弥生時代後期	菌核	-	1	-	-	-	-	-
			サンショウウイネ	種子	炭化 胚乳	破片	2	-	3.1	2.2
			ヒゴクサ節	果実	炭化	破片	2	-	2.7	+ 2.2
第68号住居跡	覆土 No.18	弥生時代後期	エノキグサ	種子	完形	1	-	-	-	-
			炭化材	種子	完形	4	-	-	-	-
			菌核	-	5	-	-	-	-	-
第68号住居跡	覆土 No.20	弥生時代後期	土粒	-	13	-	-	-	-	-
			コムギ	胚乳	炭化	破片	1	-	2.9	+ -
			エノキグサ	種子	完形	2	-	-	-	-
第68号住居跡	覆土 No.22	弥生時代後期	炭化材	-	4	-	-	-	-	-
			菌核	-	11	-	-	-	-	-
			貝殻片	-	1	-	-	-	-	二枚貝類?
第71号住居跡	土器内 P17	古墳時代後期	岩片	-	1	-	-	-	-	-
			土粒	-	8	-	-	-	-	-
			オオムギ	胚乳	炭化	完形	1	-	3.8	+ 2.0
第71号住居跡	土器内 P18	古墳時代後期	炭化材	-	4	-	-	-	-	-
			菌核	-	3	-	-	-	-	-
			土粒	-	1	-	-	-	-	-
第76号住居跡	土器内 P1	古墳時代後期	ゴマ	種子	完形	1	-	3.1	1.6	0.9
			土粒	-	1	-	-	-	-	-
			アカザ属	種子	完形	13	-	-	-	-
第77号住居跡	土器内 P18	古墳時代後期	炭化材	-	1	-	-	-	-	-
			モモ	核(食痕)	炭化	完形	1	-	17.6	14.0 + 12.2
			オナモミ属	総苞	炭化	破片	6	-	6.1	+ 5.5 + 4.4 +
第85号住居跡	土器内 P44	古墳時代後期	不明		炭化	完形	-	2	1.2	1.1
					破片	-	3	-	-	-
			不明	果皮?	炭化	破片	-	1	28.0	+ 19.4 + 8.5 +
第86号住居跡	覆土 No.2	古墳時代後期	不明	炭化	破片	-	10	33.8	+ 23.9 + 6.5 +	- 木質
			不明(茎?虫 えい?)	炭化	破片	-	-	-	-	-
合計				35		83				

注)計測はデジタルノギスを使用し、欠損等は残存値に「+」で示す。



1.コナラ属コナラ亜属クヌギ節(77住:C168)

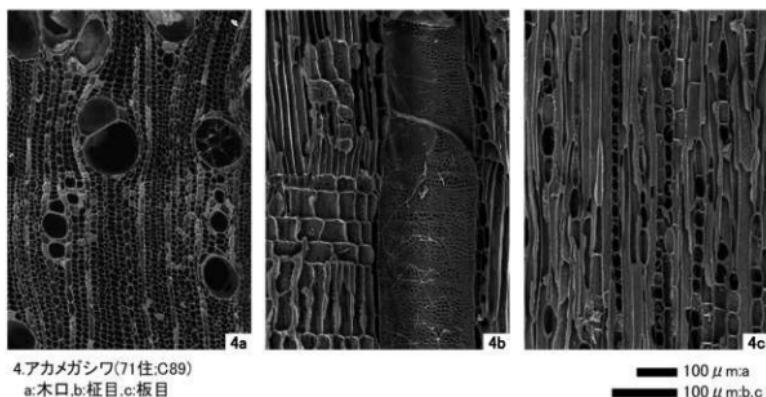
2.コナラ属コナラ亜属コナラ節(85住:C68)

3.コナラ属アカガシ亜属(73住:C7)

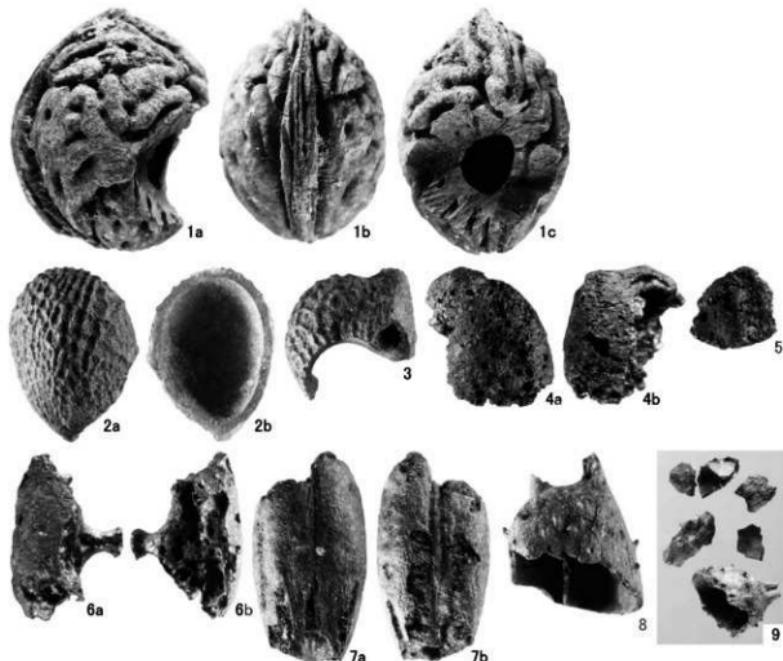
a:木口,b:柾目,c:板目

— 100  $\mu$ m:a  
— 100  $\mu$ m:b,c

第117図 炭化材(1)



第118図 炭化材(2)



- 1.モモ 核(食痕)(76住:土器内P1)
- 2.サンショウ 種子(68住:覆土No.18)
- 3.サンショウ 種子(68住:覆土No.18)
- 4.イネ 胚乳(68住:覆土No.18)
- 5.コムギ 胚乳(68住:覆土No.20)
- 6.オオムギ 胚乳(68住:覆土No.22)
- 7.オナモミ属 総苞(77住:土器内P18)
- 8.オナモミ属 総苞(77住:土器内P18)

2mm  
(1,9)  
(8)  
(2-7)  
2mm  
1mm

第119図 炭化種実

写 真 図 版





1 全景(真上から)



2 全景(西から)

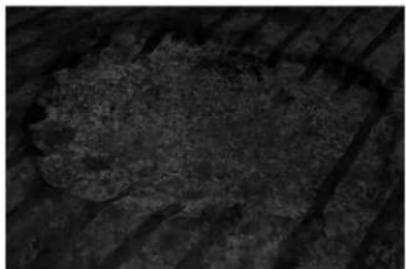
図版2 全景



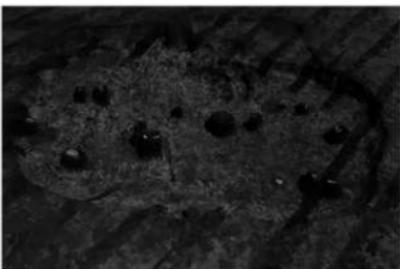
1 全景(東から)



2 全景(南東から)



1 第68号住居跡



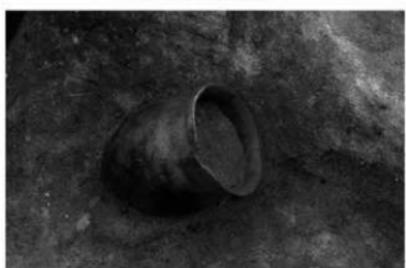
2 第68号住居跡遺物出土状況



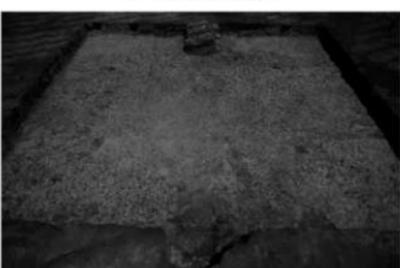
3 第69号住居跡



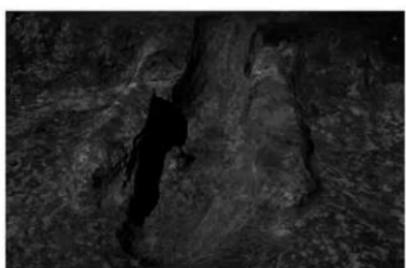
4 第69号住居跡竈



5 第69号住居跡遺物出土状況



6 第71号住居跡



7 第71号住居跡竈



8 第71号住居跡炭化材出土状況

図版4 住居跡 古墳時代



1 第71号住居跡遺物出土状況



2 第73号住居跡



3 第73号住居跡竈



4 第73号住居跡遺物・炭化材出土状況



5 第76号住居跡



6 第76号住居跡竈



7 第76号住居跡遺物出土状況1



8 第76号住居跡遺物出土状況2



1 第76号住居跡竪遺物出土状況



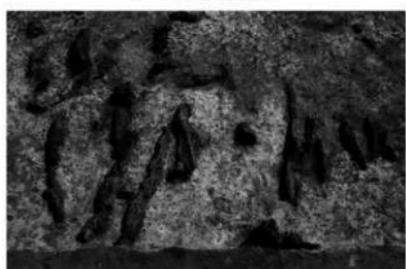
2 第77号住居跡



3 第77号住居跡竪



4 第77号住居跡遺物・炭化材出土状況



5 第77号住居跡炭化材出土状況(住居西側)



6 第77号住居跡出入口付近遺物出土状況1



7 第77号住居跡出入口付近遺物出土状況2



8 第83号住居跡

図版6 住居跡 古墳時代



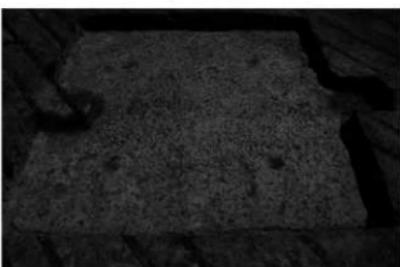
1 第83号住居跡竈



2 第83号住居跡遺物出土状況



3 第83号住居跡竈周辺遺物出土状況



4 第85号住居跡



5 第85号住居跡竈



6 第85号住居跡遺物・炭化材出土状況



7 第85号住居跡遺物出土状況



8 第85号住居跡竈遺物出土状況

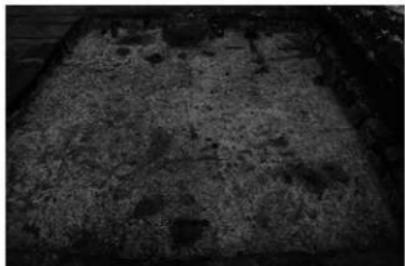
図版 7 住居跡 古墳時代 奈良・平安時代



1 第 86 号住居跡



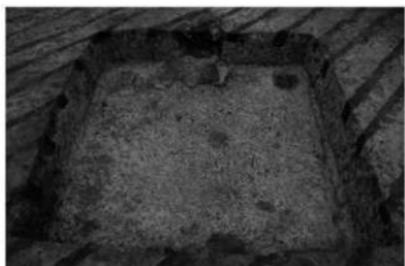
2 第 86 号住居跡竪



3 第 86 号住居跡遺物出土状況



4 第 86 号住居跡竪周辺遺物出土状況



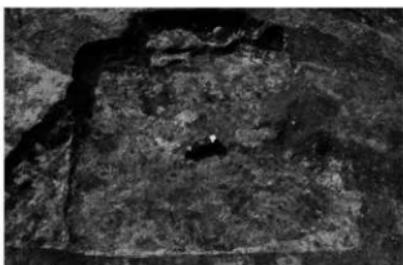
5 第 70 号住居跡



6 第 70 号住居跡竪



7 第 70 号住居跡遺物出土状況

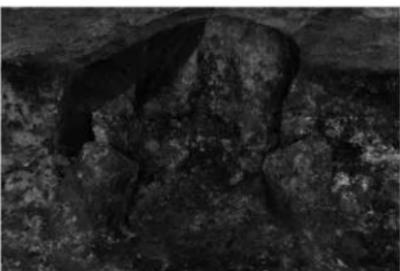


8 第 72 号住居跡

図版 8 住居跡 奈良・平安時代



1 第 78 号住居跡



2 第 78 号住居跡竪



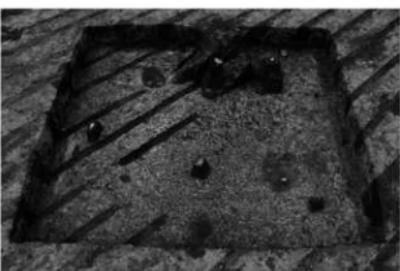
3 第 78 号住居跡遺物出土状況



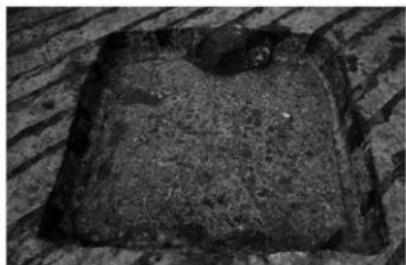
4 第 80 号住居跡



5 第 80 号住居跡竪



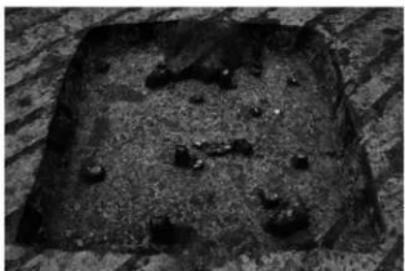
6 第 80 号住居跡遺物出土状況



7 第 81 号住居跡



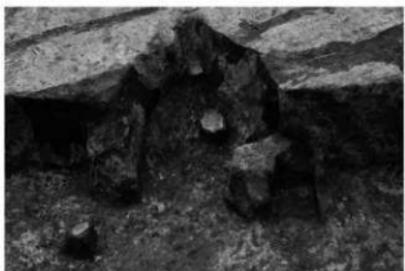
8 第 81 号住居跡竪



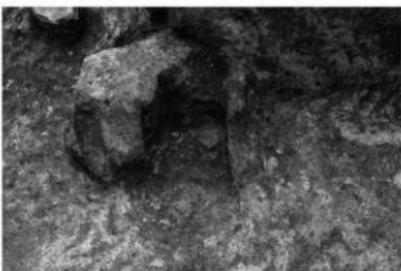
1 第81号住居跡遺物出土状況



2 第82号住居跡



3 第82号住居跡竈1



4 第82号住居跡竈2



5 第82号住居跡遺物出土状況



6 第84号住居跡竈



7 第84号住居跡竈



8 第84号住居跡遺物出土状況1

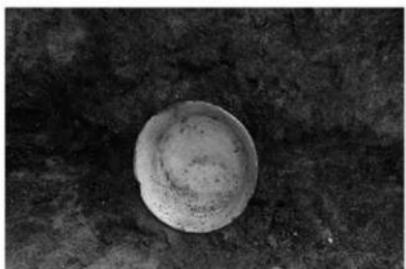
図 10 住居跡 奈良・平安時代



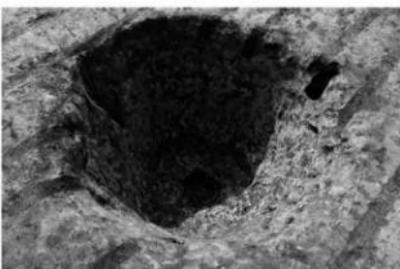
1 第 84 号住居跡遺物出土状況 2



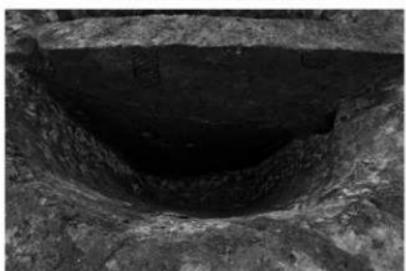
2 第 84 号住居跡遺物出土状況 3



3 第 84 号住居跡遺物出土状況 4



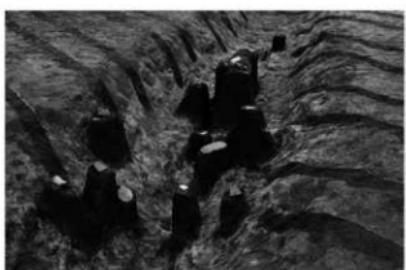
4 第 13 号土坑



5 第 13 号土坑覆土



6 第 3 号溝状遺構

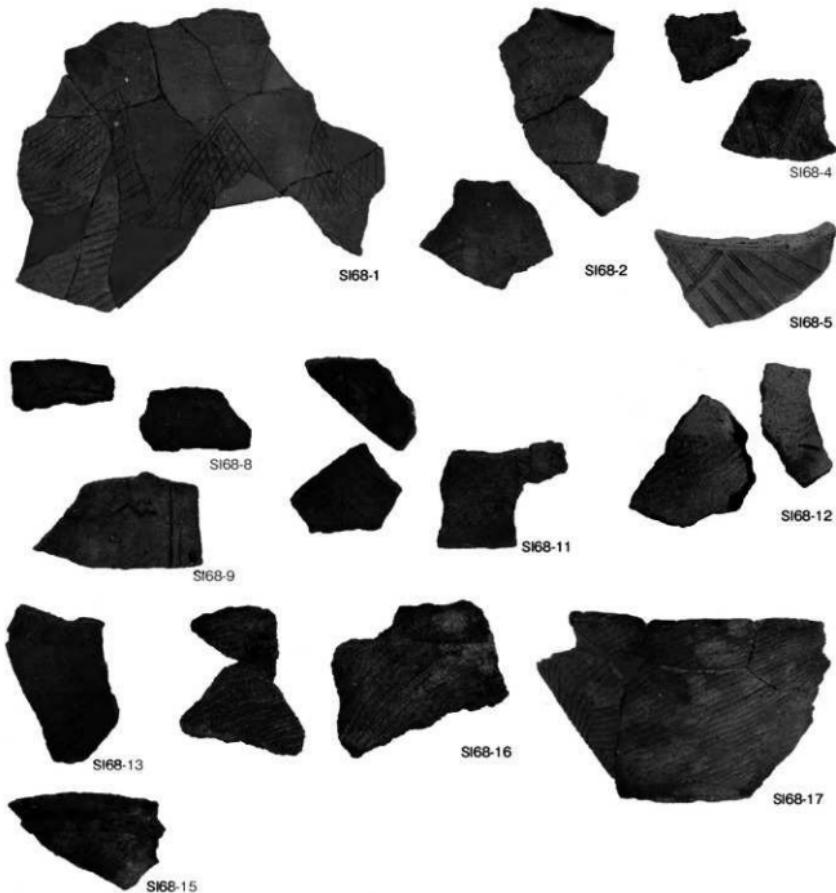


7 第 3 号溝状遺構遺物出土状況 1



8 第 3 号溝状遺構遺物出土状況 2

図版 11 遺物 弥生時代



1 第 68 号住居跡出土遺物



第 13 図-1

2 弥生時代出土遺物

図版 12 遺物 古墳時代



1 第 76 号住居跡出土遺物



2 第 77 号住居跡出土遺物



3 第 85 号住居跡出土遺物



1 第 86 号住居跡出土遺物



2 古墳時代住居跡出土土製品・石製品・鉄製品

図版 14 遺物 奈良・平安時代



1 第 80 号住居跡出土遺物



2 第 84 号住居跡出土遺物



3 奈良・平安時代遺構出土瓦・石製品・鉄製品

# 報告書抄録

フリガナ	タカノス サン
書名	鷹ノ巣Ⅲ
副書名	第4次調査の成果
シリーズ名	(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査報告
シリーズ番号	第43集
編集者名	福田健一
著者名	鈴木素行、佐々木義則、福田健一、パリメ・サーヴェイ株式会社
編集機関	公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社
発行機関	公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社
発行機関所在地	茨城県ひたちなか市大字中横3499 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター内
発行年月日	2018年1月19日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	標高	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号						
鷹ノ巣遺跡	ひたちなか市宇部田野 宮後・西原	08221	204	36° 22' 15"	140° 34' 32"	25.0 ~ 28.0 m	2016.05.18 ~ 1130	8,574 m <sup>2</sup>	市営墓地の 拡張事業に 伴う記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な出土遺物	特記事項	
鷹ノ巣遺跡	散落 遺物包蔵地	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 中世 近世	住居跡 溝状遺構 土坑	16基 2条 1基	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 瓦 ガラス小玉 等	炭化材樹種・炭化種子の同定

要約	古墳時代の住居跡は、すべて6世紀の時期と考えられる。内4基は、一辺が7mを越える大型の住居跡で、1遺跡の1時期に4基もの大型住居跡が確認されるのは市内で初めての事例である。
----	--



2016年度 調査員一同

---

(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査報告 第43集

### 鷹ノ巣Ⅲ -第4次調査の成果-

2018年1月19日発行

編 集 公益財団法人 ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

発 行 公益財団法人 ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

(〒312-0011)茨城県ひたちなか市中根3499

TEL 029-276-8311

印 刷 株式会社高野高速印刷 (〒310-0035) 茨城県水戸市東原2-8-1

---

